（財）大阪府文化財センター　調査報告書　第144集

大阪市

大坂城址 Ⅲ

大阪府警察本部棟新築2期工事に伴う発掘調査報告書

本文編

2006年3月

財団法人　大阪府文化財センター

財団法人大阪府文化財センター
蔵書
登録番号

（財）大阪府文化財センター　調査報告書　第144集

大阪市

大坂城址 Ⅲ

大阪府警察本部棟新築2期工事に伴う発掘調査報告書

本文編

2006年3月

財団法人　大阪府文化財センター

堀 83 出土瓦

（財）大阪府文化財センター　調査報告書　第144集

大阪市

大坂城址 Ⅲ

大阪府警察本部棟新築２期工事に伴う発掘調査報告書

本文編

財団法人　大阪府文化財センター

序　文

今回の調査地は、東に大阪平野、西に大阪湾を望む上町台地の北端に位置しています。

当地は「難波の堀江」に比定される大川からも近く、古くから水上交通の拠点として瀬戸内海を通じて広く大陸ともつながっていました。

本書は平成15・16年度に実施した大阪府警察本部棟新築2期工事に伴う大坂城跡の発掘調査報告書です。

平成10・11年度に調査を実施した西側の1期工事に伴う調査地では、古代の谷から難波宮関連の木簡がまとまって出土しました。その中に西暦648年に該当すると考えられる「戊申年」と書かれた木簡が含まれていたことによって、前期難波宮の造営年代を考える上で、きわめて重要な資料となりました。

今回の調査でも、1期工事の調査で検出した谷の続きが検出されることは確実であり、さらなる木簡の出土が期待されるところでもありました。しかしながら、今回の調査では、意に反して「戊申年」木簡を出土していた谷は北側にそれていくことが判明しました。ところが、調査地の東側では新たな谷が埋没していることが明らかとなり、ここからは飛鳥時代の漆容器が大量に出土し、奈良時代の土層からは30点を超える絵馬が出土するという成果をあげました。さらに、この谷の南側では東西方向の柱穴列を検出し、難波宮の北限を検討する上においてきわめて重要な成果を提示することとなりました。

また、その上層では調査地の中にぴったりとおさまるように豊臣期の大坂城の堀が検出されました。この堀は二の丸大手口を逆コの字形に囲むものであり、素掘りではありましたが、堀底を堀障子にしていることなど、重要な調査所見がもたらされました。

この堀を埋め戻した土砂の中からは、文献史料に慶長19年12月26日に当地で切腹したという記録が残る「菅平右衛門」なる武将に宛てた荷札木簡が出土しました。菅平右衛門は藤堂高虎軍の一員として陣し、堀の埋め戻しにも関わっていました。この木簡の出土によって、この堀の埋め戻しは大坂冬の陣直後に行われたことが明らかとなり、文献史料とも整合することが判明しました。文献史料にみられる記載を考古学的に裏付けることとも可能となりました。

出土した遺物は膨大であり、本書においてそのすべて網羅的に報告することはできませんでしたが、これらの調査成果は、向後の難波宮跡および大坂城跡の研究においてきわめて重要な一頁を加えたものであると確信しております。

最後に、調査にあたっては大阪府教育委員会文化財保護課・大阪府警察本部をはじめ、大阪府関係各位に多大なるご指導とご協力を賜っていることを明記しておきます。記して感謝するとともに、今後とも当センターの事業に一層のご支援を賜るよう切にお願いいたします。

平成18年3月

財団法人　大阪府文化財センター
理事長　水野正好

例　言

1．本書は、大阪府警察本部棟の新築２期工事に伴う大坂城跡の埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．調査は、大阪府警察本部より財団法人大阪府文化財センターが委託を受け、調査部長玉井　功・中部調査事務所長小野久隆・調査第一係長辻本　武の下、調査第一係班長江浦　洋・同専門調査員島内洋二を担当者として実施した。また、専門調査員永井晃子・仁田恵子の協力を得た。写真は中部調査事務所主査片山彰一、保存処理関係は同主査山口誠治の協力を得た。

3．本報告書作成に伴う整理作業は、平成16年度は調査部長赤木克視・南部調査事務所長藤田憲司・調査第一係長岡本敏行の下、調査第一係班長江浦　洋・同専門調査員島内洋二を担当として実施した。平成17年度は調査部長赤木克視・南部調査事務所長藤田憲司の下、調査第二係長江浦　洋・同主査村上富貴子・同専門調査員福佐美智子（平成17年7月まで）を担当として実施した。なお、出土した瓦類の整理に関しては南部調査事務所調査第１係主査黒田慶一、貝類に関しては同技師池田　研がこれを補助した。

4．現地調査は、平成15（2003）年６月から平成16（2004）年３月までの期間で実施した。整理作業は、平成16（2004）年４月から平成18（2006）年３月までの期間で行い、平成18（2006）年３月31日をもって本報告書を刊行した。

5．発掘調査および遺物整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏にご指導、ご教示を賜った。謹して感謝の意を表する次第である（敬称略、五十音順）。

跡部　信・安部みき子・池田裕英・池田　誠・伊藤幸司・伊藤　純・井上智勝・岩田重雄・宇田川武久・内田九州男・梅崎惠司・大谷治孝・小笠原清・尾野善裕・笠原　潔・片山まび・加藤理文・釜井俊孝・北川　央・北野隆亮・京嶋　覚・河野通明・後藤健一・栄原永遠男・佐藤　隆・鈴木敏中・積山　洋・千田嘉博・高桑いづみ・高田　徹・竹間芳明・田中清美・次山　淳・角田　誠・東野治之・島崎信子・豊田裕章・中井　均・中尾芳治・永島明子・永田誠齊・中村博司・長山雅一・難波洋三・西山要一・野川美穂子・秤屋健蔵・林　義久・古市　晃・松井　章・松井一明・松尾信裕・豆谷浩之・丸山真史・三浦正幸・宮本佐知子・宮本裕次・森　毅・森岡秀人・森田克行・森村健一・八木　滋・八巻孝夫・渡辺　武・渡辺博人

6．発掘調査および遺物整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加と協力を得た（五十音順）。

井上幸子・大本　隆・小川佐起子・小原睦子・寛真理栄・久保洋子・久禮孝志・黒川敦美・近藤梨恵子・齋藤あや・甲　百代・白井友樹・瀬戸直子・森橋由利子・立石京子・辻田多江・辻田有美・中平三紀子・中山武代・中山由佳理・西门桂子・二宮サキ子・林　聡・樋口順子・樋口玲子・本多ひろみ・松村より子・三島けい子・元木和歌子・若井キヨ子

7．出土した人骨および動物骨については大阪市立大学の安部みき子氏ならびに聖マリアンナ医科大学の長岡朋人氏に鑑定および同定をお願いし、玉稿を賜った。

8．魚骨に関しては奈良文化財研究所松井　章氏ならびに京都大学大学院丸山真史氏に同定および分析をお願いし、玉稿を賜った。

9．コト柱に関しては放送大学笠原　潔氏、東京文化財研究所の高桑いづみ氏・野川美穂子氏にご教示を賜り、野川氏から玉稿を賜った。

10．豊臣期の出土瓦の胎土分析に関しては、岡山理科大学の白石　純氏に分析を依頼し、玉稿を賜った。

11．絵馬等の年輪年代測定は、奈良文化財研究所の光谷拓実氏のご厚意により、測定を行ったものである。

12．古代木簡の判読にあたっては、奈良大学東野治之氏、大阪市立大学栄原永遠男、大阪歴史博物館吉市　晃

氏のご教示を得た。

13. 豊臣期木簡の判読にあたっては、大阪城天守閣北川　央氏・跡部　信氏、大阪歴史博物館井上智勝氏・豊谷浩之氏・八木　滋氏のご協力を得た。

14. 出土した建築部材などに関しては広島大学三浦正幸氏に調査指導をお願いし、ご教示を賜った。

15. 脆弱遺物の取り上げならびに保存処理に関しては（財）大阪市文化財協会の伊藤幸司氏ならびに鳥居信子氏にご協力を賜った。また、一部の出土遺物に関しては（株）東都文化財保存研究所の協力を得て保存処理を行った。

16. 金属製品などの成分分析に関しては、奈良大学西山要一氏のご厚意によって、奈良大学の蛍光X線分析装置を用いて行った。

17. 遺物の計測に関しては、小型品に関してはミツトヨ製デジタルキャリパー（CD-20CP）を用いて計測を行った。また、質量に関してはザルトリウス電子天びん（U4600）を使用した。

18. 調査の実施にあたっては、以下の自然科学分析を委託した。

放射性炭素年代測定（AMS法）	パリノ・サーヴェイ株式会社
種実同定	株式会社 古環境研究所
昆虫化石同定	株式会社 パレオ・ラボ
珪藻・花粉分析	パリノ・サーヴェイ株式会社

19. 陶磁器および漆器の一部については、実測およびデジタル画像撮影、編集に関わる業務を（株）文化財サービスに委託した。また、墓107に関しては、遺構切り取りと保存処理を（株）京都科学に委託して実施した。

20. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は（財）大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

21. 本報告の題字は当センター理事長水野正好の揮毫による。

凡　例

1．挿図の縮尺については、統一していないが、各図に明記している。遺構および断面図中の標高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。なお、本文中における標高の表記もとくに記さない場合はすべてT.P.値である。

2．発掘調査に伴う地区割りに関しては、平成14(2002)年4月、旧国土座標系から世界測地系への変換があり、今回の調査も航空測量や遺構図の作成などに関しては世界測地系の座標を用いている。本書で用いた北は、いずれも座標北を基準としている。

3．遺物の取り上げに関しては、西に隣接する1期工事に伴う発掘調査時との整合を図るために、旧国土座標系による地区割りを用いている。

4．遺構図における断面位置は任意に行い、図面上に「L」形を記し、その位置を明示した。

5．挿図における遺物番号は、通し番号とし、これは写真図版および本文中においても同様である。ただし、絵馬や銭貨などについては調査時に固有番号を付与して整理作業を行ったものもあり、これらについては、一覧表に旧番号を併記している。

6．各遺物一覧表に掲げた遺物はとくに記さない場合、法量はcm、質量についてはgを単位とする。

7．出土木製品の樹種鑑定は一部を除いて、当センターの山口誠治が行った。

8．本書の執筆分担については目次に記したとおりである。また、編集は江浦が行った。

本文目次

序　文
例　言
凡　例

第1章　調査に至る経過と調査方法（江浦）1
　第1節　調査の経緯と経過　1
　第2節　調査の方法　3
　第3節　報告書の作成　5
第2章　位置と環境　（江浦）6
第3章　調査の概要と層序　（江浦）10
　第1節　調査の概要　10
　第2節　基本層序　11
第4章　古墳時代以前の遺構と遺物（江浦）15
　第1節　遺　構　15
　第2節　遺　物　16
　　1．石器　16
　　2．土器　16
　　3．木製品　16
第5章　飛鳥・奈良時代の遺構と遺物（江浦）19
　第1節　遺　構　19
　　1．前提　19
　　2．谷　19
　　（1）谷1　19
　　（2）谷2　20
　　3．柱穴列　23
　　（1）柱穴列190　23
　　4．集石遺構　25
　　（1）集石遺構160　25
　　5．護岸遺構　26
　　（1）護岸遺構188　26
　第2節　遺　物　27
　　1．土器　27
　　（1）13層出土土器　27
　　（2）11c層出土土器・土製品　30
　　（3）11a層・11b層出土土器・土製品　32
　　（4）3調査区出土土器　32
　　2．漆容器　33
　　3．漆関連遺物　50
　　（1）木製品　50
　　（2）漉し布　51
　　4．瓦塼類　（黒田）52
　　（1）軒丸瓦　52
　　（2）軒平瓦　52
　　（3）その他　52
　　（4）小結　55
　　5．木製品　（江浦）56
　　（1）木簡　56
　　（2）絵馬　60
　　（3）斎串　87
　　（4）人形　87
　　（5）箏柱　87
　　（6）斎串状木製品・棒状木製品　90
　　（7）その他の木製品　92
　　（8）柱根　97
　　（9）護岸板材　98
　　6．その他の遺物　98
第6章　中世の遺構と遺物　（江浦）99
　第1節　遺　構　99
　　1．杭列　99
　　（1）杭列159　99
　第2節　遺　物　99
第7章　豊臣前期の遺構と遺物　（江浦）100
　第1節　遺　構　100
　　1．前提　100
　　2．3調査区　102
　　（1）第6面　102
　　（2）第7面　104
　　（3）第8面　106
　　3．井戸　108
　　（1）井戸102　108
　　（2）井戸147　108
　　（3）井戸155　109
　　（4）井戸166　109
　　4．堰・溝　110
　　（1）堰45　110
　　（2）溝46　110
　　（3）溝47　111
　第2節　遺　物　112
　　1．前提　112
　　2．3調査区の出土遺物　112
　　（1）土器・陶磁器・土製品　（江浦）112
　　（2）木製品　114
　　①木簡　114
　　②漆器　116
　　③箸　（福佐）118
　　④棒状木製品・楊枝　118
　　⑤火付け棒　118
　　⑥益・曲物・桶杓　118
　　⑦へら・しゃもじ　118
　　⑧折敷・脚部　120
　　⑨灯明台　120
　　⑩その他の木製品　120
　　⑪櫛　122
　　⑫下駄　123
　　（3）銭貨　（江浦）126

① 出土銭貨の種別 126
② さし銭 126
③ 府警１期調査地点出土銭貨との比較 126
（4）金属製品 130
（5）骨製品 130
（6）石製品 133
（7）その他の遺物 133
3．1・2調査区の出土遺物 134
（1）陶磁器 134
（2）木製品 134
① 漆器 134
② その他の木製品 134
4．豊臣前期の瓦類 （黒田） 136
第8章　豊臣後期の遺構と遺物 138
第1節　堀83とその関連遺構 （江浦） 138
1．前提 138
2．堀83 138
（1）前提 138
（2）方向 138
（3）規模 138
（4）構造 140
（5）埋除了 140
（6）埋機能時の堆積環境 148
3．護岸遺構 149
（1）遺構141 149
① 概要 149
② 平面構造 149
③ 骨組み構造 156
④ 土量 157
⑤ 順序 158
⑥ 埋没状況 159
（2）遺構154 162
① 概要 162
② 平面構造 162
③ 骨組み構造 162
④ 暗渠 162
⑤ 性格 164
⑥ 出土遺物 164
4．杭列 165
（1）杭列165 165
第2節　堀83埋め戻し関連の遺構 （江浦） 165
1．前提 165
2．堀83埋め戻しの状況 166
（1）埋め戻しの単位と様相 166
① 南北堀（北半部） 166
② 南北堀（中央部） 166
③ 南北堀（南半部） 170
④ 東西堀 170
（2）礫群 173
①礫群195 173
②礫群91 173
③礫群197 173
④礫群198 173
（3）足場状遺構 176
① 足場状遺構97 177
② 足場状遺構98 178
③ 足場状遺構104 178
④ 足場状遺構106 178
⑤ 足場状遺構108 180
⑥ 足場状遺構109 180
⑦ 足場状遺構113 180
⑧ 足場状遺構114 182
⑨ 足場状遺構142 183
（4）埋葬施設 183
① 墓107 183
② 墓112 186
（4）人骨・獣骨の出土状況 188
① 人骨・獣骨集積遺構86 188
② 人骨99 188
③ 馬骨101 190
④ 獣骨集積遺構115 190
⑤ 獣骨集積遺構119 190
⑥ 獣骨集積遺構120 190
⑦ 獣骨集積遺構122 190
⑧ 獣骨123 190
⑨ 獣骨124 190
⑩ 獣骨125 190
⑪ 獣骨集積遺構126 190
⑫ 獣骨集積遺構129 191
⑬ 獣骨131 191
⑭ 獣骨132 191
⑮ 獣骨134 191
⑯ 獣骨135 191
⑰ 獣骨143 191
⑱ 獣骨集積遺構148 192
⑲ 人骨149 192
⑳ 獣骨150 192
㉑ 獣骨198 192
（5）上要遺物の出土状況 192
① 遺物集積遺構111 192
② 遺物集積遺構127 192
③ 主要遺物の出土状況 192
第3節　その他の遺構 （江浦） 193
1．井戸 193
（1）井戸88 193
（2）井戸103 194
第4節　堀83の出土遺物 （江浦） 195
1．前提 195
2．堀83の出土遺物 195
（1）土器・陶磁器・土製品 195
（2）木製品 （福佐） 222
① 木簡 222
② 経木 224
③ 漆器 232
④ 掛矢 239
⑤ 漆器 239
⑥ 容器 239
⑦ 箸 242
⑧ 棒状木製品・楊枝 242
⑨ 火付け棒 242
⑩ 折敷 245
⑪ 匙・へら・しゃもじ 251

⑬ 蓋 251
⑭ 箱物 254
⑮ 用途不明品 256
⑯ 灯明台 258
⑯ 茶筅・柄杓 258
⑰ 曲物容器 260
⑱ 桶・樽 265
⑲ 刷毛・ヘラ・漆容器 266
⑳ 工具等 267
㉑ 不明部材 270
㉒ 装飾具・玩具 274
㉓ 人形 276
㉔ 柄・鞘 279
㉕ 帯 280
㉖ 下駄 280
（3）銭貨 （江浦）302
（4）金属製品 303
（5）石製品 306
（6）金属加工関連遺物 309
（7）その他の遺物 311
（8）瓦塼類 （黒田）313
① 軒丸瓦の分類と凡例 313
② 金箔押軒丸瓦 313
③ 軒丸瓦 317
④ 軒平瓦の分類と凡例 322
⑤ 金箔押軒平瓦 324
⑥ 軒平瓦 324
⑦ 鬼瓦 333
⑧ 飾瓦と釘穴を有する平瓦 333
⑨ 差し瓦（菊丸瓦を含む） 333
⑩ 鬼瓦 334
⑪ 丸瓦 348
⑫ 平瓦 349
⑬ その他 349
（9）部材 （村上）349
① 木樋 349
② 板材 351
③ 杙 352
④ 柵・杭 353
3．井戸出土の遺物 （江浦）375
（1）土器・陶磁器 375
（2）銭貨 375
4．墓出土の遺物 377
（1）墓 107 の出土遺物 377
（2）墓 112 の出土遺物 377

第9章　江戸時代の遺構と遺物 379

第1節　遺　構 （江浦）379
1．前提 379
2．1調査区 379
（1）溝 379
3．2調査区 381
（1）柱穴列 381
（2）土坑 383
（3）井戸 383
第2節　遺物 384
1．土坑5の出土遺物 384
（1）前提 384
（2）土器・陶磁器 384
（3）土製玩具ほか （島内）391
（4）銭貨 （江浦）395
（5）金属製品 397
（6）石製品 398
① 硯 398
② 玉類・碁石 398
③ 火打石 398
④ 軽石 402
⑤ 砥石 402
⑥ 石臼 402
（7）金属加工関連遺物 402
（8）瓦類 402
2．その他の遺構・包含層出土遺物 405
（1）土坑31出土遺物 405
（2）井戸117出土遺物 405
（3）包含層出土遺物 407
①銭貨・煙管 407
②瓦類 （黒田）407

第10章　近現代の遺構と遺物 （江浦）409

第1節　遺　構 409
1．前提 409
2．明治時代の遺構 409
（1）陸軍建物跡 200 409
（2）土坑18 409
3．大正～昭和時代の遺構 412
（1）1調査区 412
（2）2調査区 412
第2節　遺　物 415
1．土坑18出土遺物 415
（1）木簡 415
（2）漆器 415
2．近現代遺構・包含層出土遺物 415
3．近現代層出土の刻印瓦 （黒田）416

第11章　分　析 419

第1節　各種分析とその目的 （江浦）419
第2節　柱穴列190検出柱材の放射性炭素年代測定（AMS法）（パリノ・サーヴェイ株式会社）420
1．はじめに 420
2．試料 420
3．分析方法 420
4．結果 421
第3節　谷2出土の種実同定（株式会社　古環境研究所）421
1．はじめに 421
2．試料 421
3．方法 421
4．結果 421
（1）分類群 421
（2）種実群集の特徴 423
5．考察 423

第4節　昆虫化石群集について
（株式会社　パレオ・ラボ）425
1．はじめに　425
2．分析試料および方法　425
3．結　果　425
4．考　察　426
第5節　堀83埋土の珪藻・花粉分析
（パリノ・サーヴェイ株式会社）428
1．はじめに　428
2．試料　428
3．分析方法　428
（1）珪藻分析　428
（2）花粉分析　429
4．結果　429
（1）珪藻分析　429
（2）花粉分析　433
5．考察　433
第6節　大坂城出土瓦の生産地推定
（白石　純）438
1．分析の目的　438
2．分析試料　438
3．分析結果　438
4．まとめ　439
第7節　大坂城跡出土の魚類遺存体
（丸山真史・松井　章）445
1．概要　445
2．種類ごとの特徴　445
（1）軟骨魚綱　445
（2）硬骨魚綱　445
3．考察　449
4．まとめ　450
第8節　大坂城跡出土の動物遺存体について
（補遺）（丸山真史・松井　章）464
1．概要　464
2．シカ科遺存体　464
3．輸入された鹿素材　464
第9節　堀83出土の人骨
（安部みき子・長岡朋人）467
1．人骨99　467
2．墓112埋葬人骨　467
3．墓107埋葬人骨　468
4．その他の人骨　468
第10節　大坂城跡03－1調査区
出土の獣骨（安部）470
1．はじめに　470
2．出土状況　470
3．結果および考察　471
4．その他の人骨　484
第12章　考　察　505
第1節　難波宮跡出土のコト柱について
（野川美穂子）505
1．遺物の史料的価値　505
2．他のコト柱との比較　505
（1）難波宮跡のコト柱の特徴　505
（2）他の出土品との比較　506
（3）伝世品との比較　506
3．難波宮跡のコト柱に関する推測　508
第2節　難波宮跡北西部出土の絵馬
（江浦）510
1．序　510
2．難波宮跡出土絵馬概観　511
3．難波宮跡出土絵馬細見　512
（1）絵馬3と絵馬5　512
（2）絵馬10と絵馬11　513
4．絵画資料にみる絵馬　515
5．向かい合う絵馬　516
第3節　難波宮跡出土の漆容器に関する予察
（江浦）520
1．序　510
2．漆容器の特徴　520
（1）出土状況　520
（2）器種構成　520
（3）破損状況　521
（4）ヘラ・塗し布　521
3．漆容器の産地推定　521
（1）東海系の須恵器　521
（2）その他の漆容器　521
4．文献資料にみる漆　522
（1）漆部司　522
（2）延喜式　522
（3）正倉院文書　522
5．内裏西方倉庫群と漆容器　524
第4節　堀83をめぐる諸問題（江浦）526
1．はじめに　526
2．堀83の諸問題　526
（1）既往の調査　526
（2）絵図との対比　527
（3）堀の掘削年代　529
（4）遺構141・遺構154の再検討　531
3．大坂冬の陣前夜　531
（1）急造された堀と木柵　531
（2）整備された堀　532
（3）堀陣子　532
4．大坂冬の陣　534
5．大坂冬の陣直後　534
（1）堀の埋め戻しの具体相　534
（2）「菅平右衛門」木簡　536
6．まとめにかえて　540
第5節　大坂城跡（03-1・OSK99）
出土の貝類（池田）543
1．03-1調査区　543
2．OKS99調査区　546
3．アカニシ・サザエ・ツメタガイ・バイに見られる人為的損傷について　546
4．柄付きアカニシについて　549
第13章　総　括（江浦）553
1．難波宮跡　553
2．豊臣期大坂城以前　553
3．豊臣期大坂城　554
4．江戸時代　555
5．近代以降　555

挿図目次

図1　調査地の位置　1
図2　大阪府警察本部地点の調査区　2
図3　トレンチ配置図　2
図4　遺物の取り上げ区画　3
図5　大阪府警察本部地点の調査区　3
図6　既往の調査地　4
図7　周辺遺跡分布図　7
図8　層序模式図　12
図9　谷1断面図　13
図10　谷2断面図　14
図11　谷2平面図　15
図12　石器　16
図13　須恵器　16
図14　土師器・須恵器　17
図15　木製品　18
図16　谷1平面図　19
図17　谷2平面図　21
図18　谷2遺物出土分布図　22
図19　柱穴列190平面・断面図　24
図20　柱穴列190下層断面図　24
図21　柱穴列190と集石遺構160　25
図22　護岸遺構188　26
図23　谷2（13層）出土土器　28
図24　谷2（11c層）出土土器（1）　29
図25　谷2（11c層）出土土器（2）　30
図26　谷1・2（11a層・11b層）出土土器・土製品　31
図27　3調査区出土土器　32
図28　谷2出土漆容器（1）　37
図29　谷2出土漆容器（2）　39
図30　谷2出土漆容器（3）　43
図31　谷2出土漆容器（4）　47
図32　谷2出土漆容器（5）　49
図33　谷2（11・13層）出土漆関連遺物　51
図34　古代軒丸瓦　53
図35　古代軒平瓦・平瓦　54
図36　平瓦・塼　55
図37　木簡　57
図38　木簡・木簡状木製品　59
図39　絵馬（1）　62
図40　絵馬（2）　63
図41　絵馬（3）　65
図42　絵馬（4）　67
図43　絵馬（5）　69
図44　絵馬（6）　71
図45　絵馬（7）　73
図46　絵馬（8）　75
図47　絵馬（9）　77
図48　絵馬（10）　79
図49　絵馬（11）　81
図50　絵馬（12）　83
図51　絵馬・絵馬状木製品　85
図52　斎串　88
図53　斎串・人形・挌柱　89
図54　斎串状木製品・棒状木製品　91
図55　その他の木製品（1）　93
図56　その他の木製品（2）　95
図57　柱根　97
図58　護岸板材　98
図59　鉄製品・土製品・石製品　98
図60　谷1中世遺構面　99
図61　谷2（9層）出土遺物　99
図62　3調査区南壁断面図　100
図63　豊臣前期遺構分布図　101
図64　3調査区第6面　103
図65　礎石建物跡163断面図　103
図66　3調査区第7面　105
図67　礎石建物跡192断面図　105
図68　3調査区第8面　107
図69　遺構断面図　107
図70　井戸102　108
図71　井戸147　108
図72　井戸155・166　109
図73　堀45・溝46・溝47　111
図74　3調査区出土土器・陶磁器・土製品　113
図75　遺構162出土木簡　115
図76　3調査区出土漆器　117
図77　3調査区出土木製品（1）　119
図78　3調査区出土木製品（2）　121
図79　3調査区出土木製品（3）　123
図80　遺構162出土櫛　124
図81　遺構162・溝171出土下駄　125
図82　遺構162ほか出土銭貨（1）　128
図83　遺構162ほか出土銭貨（2）　129
図84　豊臣前期出土銭貨の出土順位・比率　129
図85　3調査区出土金属・骨製品　131
図86　3調査区出土石製品　132
図87　3調査区出土鏡　133
図88　1・2調査区 豊臣前期遺構 出土遺物　135
図89　豊臣前期遺構出土瓦　137
図90　豊臣後期遺構分布図　139
図91　堀83北半部　141
図92　堀83南半部　142
図93　堀83中央部　143
図94　堀障子の単位　145

図95　堀83南半部の堀障子区画　147
図96　遺構141　150
図97　遺構141下層　151
図98　遺構141（北半）　152
図99　遺構141（南半）　153
図100　遺構141断面図（1）　154
図101　遺構141断面図（2）　155
図102　遺構141復元断面図　156
図103　遺構141暗渠立面図　158
図104　堀83・遺構141断面図　161
図105　遺構154　163
図106　遺構154断面図　164
図107　杭列165　165
図108　堀83断面図（1）　167
図109　堀83断面図（2）東半部　168
図110　堀83断面図（2）西半部　169
図111　堀83断面図（3）　170
図112　堀83断面図（4）　171
図113　堀83礫群検出状況　174
図114　礫群91・遺構141　175
図115　足場状遺構等分布図　176
図116　足場状遺構97　177
図117　足場状遺構98　178
図118　足場状遺構104　178
図119　足場状遺構106　179
図120　足場状遺構108　181
図121　足場状遺構114　182
図122　埋葬施設分布状況　184
図123　墓107　185
図124　墓107　断面投影図　185
図125　墓112　187
図126　墓112　断面投影図　187
図127　人骨・獣骨集積遺構86　188
図128　主要人骨・獣骨出土分布　189
図129　獣骨集積遺構126　191
図130　主要遺物出土分布図　193
図131　豊臣後期井戸分布図　194
図132　井戸88　194
図133　井戸103　194
図134　堀83出土土器・陶磁器（1）　197
図135　堀83出土土器・陶磁器（2）　198
図136　堀83出土土器・陶磁器（3）　199
図137　堀83出土土器・陶磁器（4）　202
図138　堀83出土土器・陶磁器（5）　203
図139　堀83出土土器・陶磁器（6）　204
図140　堀83出土土器・陶磁器（7）　206
図141　堀83出土土器・陶磁器（8）　207
図142　堀83出土土器・陶磁器（9）　208
図143　堀83出土土器・陶磁器（10）　209
図144　堀83出土土器・陶磁器（11）　211
図145　堀83出土土器・陶磁器（12）　212
図146　堀83出土土器・陶磁器（13）　213
図147　堀83出土土器・陶磁器（14）　214
図148　堀83出土土器・陶磁器（15）　215
図149　堀83出土土器・陶磁器（16）　216
図150　堀83出土土器・陶磁器（17）　217
図151　堀83出土土器・陶磁器（18）　219
図152　堀83出土土器・陶磁器（19）　220
図153　堀83出土土器・陶磁器（20）　221
図154　犬形土製品　221
図155　堀83出土木簡（1）　226
図156　堀83出土木簡（2）　227
図157　堀83出土木簡（3）　228
図158　堀83出土木簡（4）　229
図159　堀83出土木簡（5）　230
図160　堀83出土絵木　231
図161　堀83出土漆器（1）　233
図162　堀83出土漆器（2）　235
図163　堀83出土漆器（3）　237
図164　堀83出土漆器極線刻拓影　238
図165　堀83出土漆器（4）　238
図166　堀83出土木製品（1）　240
図167　堀83出土木製品（2）　241
図168　堀83出土木製品（3）　243
図169　堀83出土木製品（4）　244
図170　堀83出土木製品（5）　245
図171　堀83出土木製品（6）　246
図172　堀83出土木製品（7）　247
図173　堀83出土木製品（8）　248
図174　堀83出土木製品（9）　249
図175　堀83出土木製品（10）　250
図176　堀83出土木製品（11）　252
図177　堀83出土木製品（12）　253
図178　堀83出土木製品（13）　255
図179　堀83出土木製品（14）　257
図180　堀83出土木製品（15）　259
図181　堀83出土木製品（16）　261
図182　堀83出土木製品（17）　262
図183　堀83出土木製品（18）　263
図184　堀83出土木製品（19）　264
図185　堀83出土木製品（20）　265
図186　堀83出土木製品（21）　266
図187　堀83出土木製品（22）　268
図188　堀83出土木製品（23）　269
図189　堀83出土木製品（24）　271
図190　堀83出土木製品（25）　272
図191　堀83出土木製品（26）　273
図192　堀83出土木製品（27）　275

図 193　堀 83 出土木製品（28）　277
図 194　堀 83 出土木製品（29）　278
図 195　堀 83 出土下駄観察・計測凡例　281
図 196　堀 83 出土木製品（30）　282
図 197　堀 83 出土木製品（31）　283
図 198　堀 83 出土木製品（32）　284
図 199　堀 83 出土木製品（33）　285
図 200　堀 83 出土木製品（34）　286
図 201　堀 83 出土木製品（35）　287
図 202　堀 83 出土木製品（36）　288
図 203　堀 83 出土木製品（37）　289
図 204　堀 83 出土木製品（38）　290
図 205　堀 83 出土木製品（39）　291
図 206　堀 83 出土木製品（40）　292
図 207　堀 83 出土木製品（41）　293
図 208　堀 83 出土木製品（42）　294
図 209　堀 83 出土木製品（43）　295
図 210　堀 83 出土木製品（44）　296
図 211　堀 83 出土木製品（45）　297
図 212　堀 83 出土下駄刻印拓影　298
図 213　堀 83 出土銭貨　302
図 214　堀 83 出土金属製品（1）　304
図 215　堀 83 出土金属製品（2）　305
図 216　堀 83 出土石製品（1）　307
図 217　堀 83 出土石製品（2）　308
図 218　堀 83 出土鞴羽口・鋳型　309
図 219　堀 83 出土鞴羽口　310
図 220　堀 83 出土帯・縄等　312
図 221　堀 83 出土 金箔押軒丸瓦　314
図 222　堀 83 出土 軒丸瓦（1）　315
図 223　堀 83 出土 軒丸瓦（2）　316
図 224　堀 83 出土 軒丸瓦（3）　318
図 225　堀 83 出土 軒丸瓦（4）　319
図 226　堀 83 出土 軒丸瓦（5）　320
図 227　堀 83 出土 金箔押軒平瓦　323
図 228　堀 83 出土 軒平瓦（1）　325
図 229　堀 83 出土 軒平瓦（2）　327
図 230　堀 83 出土 軒平瓦（3）　328
図 231　堀 83 出土 鯱瓦・飾瓦　331
図 232　堀 83 出土 飾瓦　332
図 233　堀 83 出土 飾瓦・差し瓦　334
図 234　堀 83 出土 鬼瓦（1）　335
図 235　堀 83 出土 鬼瓦（2）　336
図 236　堀 83 出土 丸瓦（1）　337
図 237　堀 83 出土 丸瓦（2）　338
図 238　堀 83 出土 丸瓦（3）　339
図 239　堀 83 出土 丸瓦（4）　340
図 240　堀 83 出土 丸瓦（5）　341
図 241　堀 83 出土 丸瓦（6）　342
図 242　堀 83 出土 丸瓦（7）　343
図 243　堀 83 出土 丸瓦（8）　344
図 244　堀 83 出土 平瓦など　345
図 245　堀 83 出土 雁振瓦など　346
図 246　堀 83 出土 面戸瓦　347
図 247　堀 83 出土大型木製品（1）　354
図 248　堀 83 出土大型木製品（2）　355
図 249　堀 83 出土大型木製品（3）　356
図 250　堀 83 出土大型木製品（4）　357
図 251　堀 83 出土大型木製品（5）　358
図 252　堀 83 出土大型木製品（6）　359
図 253　堀 83 出土大型木製品（7）　360
図 254　堀 83 出土大型木製品（8）　361
図 255　堀 83 出土大型木製品（9）　362
図 256　堀 83 出土大型木製品（10）　363
図 257　堀 83 出土大型木製品（11）　364
図 258　堀 83 出土大型木製品（12）　365
図 259　堀 83 出土大型木製品（13）　366
図 260　堀 83 出土大型木製品（14）　367
図 261　堀 83 出土大型木製品（15）　368
図 262　堀 83 出土大型木製品（16）　369
図 263　堀 83 出土大型木製品（17）　370
図 264　堀 83 出土大型木製品（18）　371
図 265　堀 83 出土大型木製品（19）　372
図 266　堀 83 出土大型木製品（20）　373
図 267　井戸出土土器・陶磁器　376
図 268　井戸 88 出土銭貨　376
図 269　墓 107 出土遺物　377
図 270　墓 112 出土遺物　378
図 271　溝 12・溝 13・溝 16・溝 17 断面図　379
図 272　江戸時代遺構面（1 調査区）　380
図 273　江戸時代遺構面（2 調査区）　382
図 274　土坑 5 断面図　383
図 275　土坑 5 出土土器・陶磁器（1）　385
図 276　土坑 5 出土土器・陶磁器（2）　386
図 277　土坑 5 出土土器・陶磁器（3）　387
図 278　土坑 5 出土土器・陶磁器（4）　388
図 279　土坑 5 出土土器・陶磁器（5）　389
図 280　土坑 5 出土土器・陶磁器（6）　390
図 281　土坑 5 出土土製品ほか（1）　392
図 282　土坑 5 出土土製品ほか（2）　393
図 283　土坑 5 出土銭貨（1）　394
図 284　土坑 5 出土銭貨（2）　395
図 285　土坑 5 出土金属製品　397
図 286　土坑 5 出土石製品（1）　399
図 287　サヌカイト製火打石の質量分布　400
図 288　土坑 5 出土石製品（2）　401
図 289　土坑 5 出土トリベ・鞴羽口　402
図 290　土坑 5 出土瓦　403

図 291　上坑 5・土坑 31 出土瓦　404
図 292　井戸 117 出土遺物　406
図 293　包含層出土煙管　407
図 294　江戸時代遺構・包含層出土銭貨　407
図 295　近代包含層出土 江戸時代瓦　408
図 296　明治～昭和時代遺構全体図　410
図 297　明治時代遺構面（1 調査区）　411
図 298　礎石 7 断面図　412
図 299　溝 1 断面図　412
図 300　ピット 20 ～ 30 断面図　412
図 301　大正～昭和時代遺構面（1 調査区）　413
図 302　防空壕 32　414
図 303　上坑 18 出土遺物　416
図 304　近現代遺構・包含層出土遺物　417
図 305　近現代刻印瓦拓本（1/3）　418
図 306　分析試料採取地点　428
図 307　堀 83 土層断面における分析試料採取位置　428
図 308　上要珪藻化石群集の層位分布　433
図 309　花粉化石群集の層位分布　435
図 310　遠磨窯内での比較（K-Ca 散布図）　439
図 311　遠磨窯と A 群（大坂産）の比較（K-Ca 散布図）　439
図 312　堀 83 と A 群（大坂産）と遠磨窯の比較　439
図 313　堀 83 出土瓦と A 群・遠磨窯の比較　440
図 314　堀 83 出土瓦と A 群・遠磨窯の比較　440
図 315　出土魚類の組成　452
図 316　破片数比と最小個体数比　453
図 317　南丁甲山海見立角力　454
図 318　谷 2 における絵馬の出土分布　510
図 319　出土絵馬の法量分布　511
図 320　絵馬 3 と絵馬 5　512
図 321　絵馬 10 と絵馬 11　514
図 322　平城京出土の絵馬　516
図 323　加美遺跡出土の絵馬　517
図 324　讃良郡条里遺跡出土の絵馬　517
図 325　漆容器の器種構成　520
図 326　「延喜式」にみえる漆貢納国　523
図 327　正倉院文書にみえる漆生産国　523
図 328　前期難波宮跡と調査地　524
図 329　平安京宮城図　525
図 330　堀 83 の位置　526
図 331　大坂冬の陣配陣図　527
図 332　櫻井氏による豊臣大坂城図　528
図 333　大坂城慶長年間之図　528
図 334「申年」木簡　530
図 335　豊臣期大坂城推定復元図　540
図 336　アカニシ殻高計測値分布　545
図 337　損傷パターン模式図　546
図 338　堀 83 出土柄付きアカニシ　549

表目次

表 1　大坂城関連年表　8
表 2　層序対照表　11
表 3　残存柱の座標値　24
表 4　重圏文軒丸瓦計測表　53
表 5　重圏文軒平瓦計測表　54
表 6　木簡釈文 一覧　56
表 7　出土絵馬一覧表　86
表 8　木簡釈文一覧　114
表 9　豊臣前期出土銭貨一覧　127
表 10　塀障子規模一覧　144
表 11　堀 83 出土木簡釈文一覧　225
表 12　堀 83 出土下駄計測表（1）　299
表 13　堀 83 出土下駄計測表（2）　300
表 14　堀 83 出土下駄計測表（3）　301
表 15　堀 83 出土銭貨一覧　302
表 16　堀 83 出土鞠羽口計測表　311
表 17　堀 83 出土軒丸瓦計測表（1）　321
表 18　堀 83 出土軒丸瓦計測表（2）　322
表 19　堀 83 出土軒平瓦計測表（1）　329
表 20　堀 83 出土軒平瓦計測表（2）　330
表 21　堀 83 出土丸瓦計測表　348
表 22　堀 83 出土大型木製品一覧　374
表 23　井戸 88 出土銭貨一覧　376
表 24　墓 107・112 出土銭貨一覧　377
表 25　土坑 5 出土銭貨一覧　396
表 26　土坑 5 出土鉄釘集計　398
表 27　サヌカイト製火打石一覧　400
表 28　チャート・水晶・瑪瑙製火打石一覧　400
表 29　江戸時代遺構・包含層出土銭貨一覧　407
表 30　放射性炭素年代測定結果　420
表 31　暦年代較正結果　421
表 32　大坂城跡 03-1 における種実同定結果　423
表 33　珪藻分析結果（1）　430
表 34　珪藻分析結果（2）　431
表 35　珪藻分析結果（3）　432
表 36　花粉分析結果　434
表 37　瓦胎土分析値一覧表（1）　440
表 38　瓦胎土分析値一覧表（2）　441
表 39　魚類遺存体種名表　452
表 40　遺構 162 出土魚類一覧表　453
表 41　出土魚骨同定一覧表（1）　455
表 42　出土魚骨同定一覧表（2）　456
表 43　出土魚骨同定一覧表（3）　457
表 44　出土魚骨同定一覧表（4）　458

表45　出土魚骨同定一覧表（5）　459
表46　出土魚骨同定一覧表（6）　460
表47　出土魚骨同定一覧表（7）　461
表48　種名表　465
表49　計測表　465
表50　頭蓋計測値　468
表51　歯冠計測値　468
表52　動物遺存体の同定表（1）　472
表53　動物遺存体の同定表（2）　473
表54　動物遺存体の同定表（3）　474
表55　動物遺存体の同定表（4）　475
表56　動物遺存体の同定表（5）　476
表57　動物遺存体の同定表（6）　477
表58　動物遺存体の同定表（7）　478
表59　動物遺存体の同定表（8）　479
表60　動物遺存体の同定表（9）　480
表61　動物遺存体の同定表（10）　481
表62　動物遺存体の出現頻度と最小個体数　482
表63　頭蓋骨の計測値表　482
表64　下顎骨の計測値表　483
表65　環椎と軸椎の計測値表　483
表66　上肢の計測値表　484
表67　下肢の計測値表　484
表68　イルカの椎骨の計測値表　484
表69　正倉院と法隆寺献納宝物のコト柱と
　　難波宮跡出土のコト柱の比較　507
表70　皆平右衛門関連年表　535
表71　出土貝類種名一覧　543
表72　出土遺構・層別貝類一覧　544
表73　アカニシ損傷パターン　547
表74　アカニシ損傷パターン　547
表75　サザエ・ツメタガイ・バイ損傷パターン　547

写真目次

写真1　文化庁調査官の視察　2
写真2　今宮高校生の体験発掘　2
写真3　調査風景　3
写真4　広島大学三浦正幸教授の調査指導　4
写真5　京都大学防災研究所による地震計を用いた地中探査　4
写真6　傘の取り上げ状況　5
写真7　墓112の取り上げ状況　5
写真8　遺物のデジタルトレース作業　5
写真9　調査地と大阪城　9
写真10　さし銭（遺構162）　126
写真11　遺構141土層断面　160
写真12　堀83東西堰　埋め戻し作業痕跡　172
写真13　欠穴をもつ石材　173
写真14　種実写真　424
写真15　昆虫遺体のマイクロスコープ写真　427
写真16　珪藻化石写真　436
写真17　花粉化石写真　437
写真18　堀83出土瓦の胎土の様相（1）　442
写真19　堀83出土瓦の胎土の様相（2）　443
写真20　中央区和泉町達磨窯出土瓦の胎土の様相　444
写真21　遺構162出土の魚骨遺存体　462
写真22　堀83出土の魚骨遺存体　462
写真23　動物遺存体（シカ科を除く）　466
写真24　シカ科の遺存体　466
写真25　人骨99　485
写真26　人骨99細部　486
写真27　人骨　486
写真28　人骨　486
写真29　墓112人骨　487
写真30　ウマ　488
写真31　ウマ　489
写真32　ウマ　490
写真33　ウマ　490
写真34　ウマ　491
写真35　ウシ　492
写真36　ウシ　493
写真37　ウシ　494
写真38　ウシ　495
写真39　シカ　496
写真40　シカ　497
写真41　イノシシ　498
写真42　イヌ　499
写真43　ネコ　500
写真44　サル　501
写真45　ネズミ　501
写真46　イルカ　501
写真47　キジまたはニワトリ　502
写真48　ウ　502
写真49　カモ　503
写真50　アビもしくはオオハム　503
写真51　ハトおよびスズメ目　504
写真52　ウシ　504
写真53　カメ・スッポン　504
写真54　難波宮跡出土のコト柱　505
写真55　正倉院のコト柱（箏用）　506
写真56　正倉院のコト柱（金泥絵新羅琴用）　506
写真57　正倉院のコト柱（金箔押新羅琴用）　506
写真58　東京国立博物館法隆寺献納宝物のコト柱　507
写真59　三の丸尚蔵館所蔵のコト柱（和琴「新河嶋」用）508
写真60　三の丸尚蔵館所蔵のコト柱（箏「子の日」用）　508
写真61　動物遺体（貝類・貝製品）　552
写真62　動物遺体（人為的損傷のある貝類・穿付きアカニシ）　552

原色図版目次

原色図版 1
大阪城遠景（西から：2004 年 3 月 24 日撮影）／調査地と難波宮跡(南東から:2004 年 3 月 24 日撮影)
原色図版 2
調査地周辺航空写真（2004 年 3 月 24 日撮影）
原色図版 3
柱穴列 190(東から)／柱穴列 190 の柱根(左:598、右:599)
原色図版 4
絵馬 1（435）／絵馬 2（436）／絵馬 3（437）
原色図版 5
絵馬 9（443）／絵馬 10（444）／絵馬 12（446）
原色図版 6
絵馬 14（448）／絵馬 16（450）／絵馬 19（453）／絵馬 20（454）
原色図版 7
瓦（112）／案（573）／箒柱（495）／斎串／漆容器
原色図版 8
調査地と大阪城（西南西から）
原色図版 9
調査地全景（南から）／堀 83 南半部（西から）
原色図版 10
堀 83 南西コーナー（南西から）／堀 83 十層断面（北東から）／遺構 141（南東から）
原色図版 11
墓 107(西から)／墓 107 細部(南西から)／墓 112(北東から）／墓 112 細部（南西から）／人骨 99（西から）／人骨・獣骨集積遺構 86（西から）／馬骨 101（北から）／獣骨集積遺構 126（東から）
原色図版 12
堀 83 出土の瓦
原色図版 13
堀 83 出土の土器・陶磁器
原色図版 14
堀 83 出土「菅平右衛門」木簡（1355）／堀 83 出土「慶長拾二年」銘祈祷札（1401）／遺構 162 出土蒔絵製品（686）／堀 83 出土蒔絵製品（1461）
原色図版 15
土坑 5 出土の土器・陶磁器
原色図版 16
土坑 5 出土小柄（2844）／土坑 5 出土小型製品／土坑 5 出土火打石

図版目次

図版 1　古墳時代の遺構
谷 2（北から）／谷 1（北東から）／谷 2　14 層遺物出土状況（遺物 27・42：南から）
図版 2　古代の遺構　谷 2
谷 2（南から）／谷 2（北から）／谷 2（北西から）
図版 3　古代の遺構　谷 1・谷 2
谷 1（北東から）／谷 2 東西上層断面（東から）／柱穴列 190 下層上層断面（北東から）
図版 4　古代の遺構　柱穴列 190
柱穴列 190（東から）／柱穴列 190（東から）／柱穴 157 上層断面（東から）
図版 5　古代の遺構　柱穴列 190
柱穴 156(南東から)／柱穴 157(南から)／柱穴 158(南東から)
図版 6　古代の遺構　集石遺構 160
集石遺構 160（南から）／集石遺構 160（南西から）／集石遺構 160 上層　軒丸瓦出土状況（北西から）／集石遺構 160 下層　軒丸瓦出土状況（南から）
図版 7　古代の遺構　護岸遺構 188
護岸遺構 188（東から）／護岸 188（北東から）／護岸遺構 188 細部（東から）
図版 8　古代の遺構　谷 2 遺物出土状況
谷 2 漆容器出土状況（西から）／谷 2 案出土状況（南西から）／谷 2 斎串出土状況（南から）／谷 2 斎串出土状況（東から）
図版 9　古代の遺構　谷 2 絵馬出土状況
谷 2 絵馬出土状況（南東から）／谷 2 絵馬出土状況（北から）／谷 1 絵馬出土状況（東から）
図版 10　豊臣前期の遺構　3 調査区
第 6 面（北から）／第 6 面 礎石建物跡 163（南から）／第 7 面（南から）
図版 11　豊臣前期の遺構　3 調査区
第 8 面(南から)／第 8 面 石敷き遺構 172 と溝 171(東から)／柱穴 174 断面（東から）／柱穴 183 断面（東から）

図版 12　豊臣前期の遺構　1・3調査区
3調査区 6層 層出土状況（東から）／井戸 166 検出状況（西から）／井戸 166 十層断面（西から）／井戸 166 最下層 釣瓶出土状況（西から）
図版 13　豊臣前期の遺構　井戸
井戸 103 断割り断面（東から）／井戸 155 検出状況／井戸 155 断割り断面（西から）
図版 14　豊臣後期の遺構　堀 83
調査地全景（南から）／堀 83 南半部（西から）
図版 15　豊臣後期の遺構　堀 83
堀 83 南西コーナー（南西から）／堀 83 西側南半部（南から）
図版 16　豊臣後期の遺構　堀 83
堀 83 西側北半部（北から）／堀 83 南側（東から）
図版 17　豊臣後期の遺構　堀 83
南北土層断面（堀 83 南側：北東から）／東西土層断面（堀 83 西側：北西から）／東側法面の段差（堀 83：南から）
図版 18　豊臣後期の遺構　堀 83
堀障子検出状況（堀 83 南側：北から）／堀障子埋没状況（堀 83 北側：西から）／障壁 144 埋没状況（堀 83 北側：西から）
図版 19　豊臣後期の遺構　遺構 141
南半部全景（北から）／南半部全景（南東から）
図版 20　豊臣後期の遺構　遺構 141
埋没状況（北東から）／埋没状況（東西土層断面：北から）
図版 21　豊臣後期の遺構　遺構 141
暗渠排水管（西から）／暗渠排水管（東から）
図版 22　豊臣後期の遺構　遺構 141
暗渠排水管（南から）／暗渠排水管 集水施設（南から）
図版 23　豊臣後期の遺構　遺構 141
暗渠排水管 堀側出水部分（南から）／暗渠排水管 細部（南西から）／暗渠配水管 下部（南から）
図版 24　豊臣後期の遺構　遺構 141
土塁東面の内部構造（竹しがらみ除去後：北から）／土塁東面の内部構造（竹しがらみ除去後：北東から）
図版 25　豊臣後期の遺構　遺構 141
土塁東面の内部構造（竹しがらみ除去後：南から）／土俵と杭（西から）／土塁断面（北から）
図版 26　豊臣後期の遺構　遺構 141
土塁東面竹しがらみ細部（東から）／土塁と礫の残存状況（北東から）
図版 27　豊臣後期の遺構　遺構 141
土塁（北から）／土塁西面の杭と土俵（北西から）／土塁西面の竹しがらみ（西から）
図版 28　豊臣後期の遺構　遺構 141
土塁西面の杭と土俵（南から）／土塁西面の竹しがらみ（南から）／土塁西側の断割り状況（南西から）／土塁西面の断割り状況（南西から）
図版 29　豊臣後期の遺構　遺構 141
木組み細部（北から）／木組み細部（上方から）／木組み細部（北東から）
図版 30　豊臣後期の遺構　遺構 154
全景（北から）／全景（南から）
図版 31　豊臣後期の遺構　遺構 154
竹しがらみ細部（東から）／竹しがらみと暗渠配水管（東から）／杭の折損状況（北から）
図版 32　豊臣後期の遺構　足場状遺構 106
全景（南から）／板敷き細部（南から）／板材に残る刻印（上方から）
図版 33　豊臣後期の遺構　足場状遺構
基礎部分の土俵積み（足場状遺構 106：西から）／基礎部分の土俵積み断面（足場状遺構 106：南東から）／足場状遺構 114（北から）
図版 34　豊臣後期の遺構　足場状遺構
足場状遺構 98（西から）／足場状遺構 113（南から）／足場状遺構 97（西から）／足場状遺構 104（北東から）
図版 35　豊臣後期の遺構　足場状遺構
足場状遺構 109（北から）／足場状遺構 109 細部（西から）／護岸遺構 128（東から）
図版 36　豊臣後期の遺構　墓 107
全景（西から）／銭貨検出状況（南西から）
図版 37　豊臣後期の遺構　墓 107
全景（東から）／全景（南から）
図版 38　豊臣後期の遺構　墓 107・墓 112
墓 107 竹行李細部（西から）／墓 112 検出時（北東から）／墓 112 ムシロ除去後（北東から）
図版 39　豊臣後期の遺構　墓 112
数珠検出状況（北東から）／漆器椀・銭貨検出状況（南西から）／ムシロ細部（北から）
図版 40　豊臣後期の遺構　人骨出土状況
人骨 99 検出状況（西から）／人骨・獣骨集積遺構 86（西から）／人骨・獣骨集積遺構 86 頭蓋骨検出状況（南から）
図版 41　豊臣後期の遺構　獣骨出土状況
馬骨 101 検出状況（北から）／獣骨 120 検出状況（南から）／獣骨 119 検出状況（西から）
図版 42　豊臣後期の遺構　獣骨出土状況

獣骨集積遺構 126（北から）／獣骨集積遺構 126 細部（東から）／獣骨集積遺構 126 細部（南西から）
図版 43　豊臣後期の遺構　獣骨出土状況
獣骨 132 検出状況（南東から）／獣骨 123 検出状況（西から）／獣骨 143 検出状況（南から）
図版 44　豊臣後期の遺構　堀 83 礫群
礫群 91（北から）／礫群 195（北から）／礫群 195（南から）
図版 45　豊臣後期の遺構　堀 83 遺物出土状況
瓦片出土状況（東から）／遺物集積遺構 127（東から）／遺物集積遺構 111（北東から）
図版 46　豊臣後期の遺構　堀 83 遺物出土状況
柄杓（1677）出土状況（西から）／柄杓（1678）出土状況（南から）／桶（1715）出土状況（北から）
図版 47　豊臣後期の遺構　堀 83 遺物出土状況
五輪塔（2043）出土状況（北から）／金属棒（2005）出土状況（西から）／傘（1790）出土状況（南から）
図版 48　豊臣後期の遺構　堀 45
堀 45（南から）／堀 45 底面（南から）／堀 45 上層断面（北から）／柱穴列 191（南から）
図版 49　豊臣後期の遺構　堀 45・井戸 88
柱穴列 191 と堀 45（南から）／井戸 88（北から）／井戸 88（北から）
図版 50　江戸時代の遺構
土坑 5（東から）／ 1 調査区第 4 面全景（北から）／溝 16・17（西から）
図版 51　江戸時代の遺構　井戸 117
井戸 117 検出状況（東から）／井戸 117 井戸枠（西から）
図版 52　近代の遺構
第 3 面全景（1 調査区：北から）／石組溝 4（西から）／礎石 8・9（西から）
図版 53　近代の遺構
礎石 6（北から）／礎石 8 断面（北から）／土坑 18 遺物出土状況（東から）
図版 54　近現代の遺構
防空壕 32（第 1 面：北東から）／防空壕 32（第 1 面：南から）／貯水槽（第 1 面：南から）
図版 55　古墳時代以前　土器・石器
図版 56　古墳時代　土器
図版 57　古墳時代　土器
図版 58　古墳時代　木製品
図版 59　古墳時代　木製品
図版 60　飛鳥・奈良時代　土器
谷 2（13 層）出土土器
図版 61　飛鳥・奈良時代　土器
谷 2（13 層）出土土器
図版 62　飛鳥・奈良時代　土器
谷 2（13 層）出土土器
図版 63　飛鳥・奈良時代　土器
谷 2（13 層）出土土器
図版 64　飛鳥・奈良時代　土器
谷 2（11c 層）出土土器
図版 65　飛鳥・奈良時代　土器・土製品
谷 2（11c 層）出土土器・土製品
図版 66　飛鳥・奈良時代　土器
図版 67　飛鳥・奈良時代　土器
図版 68　飛鳥・奈良時代　土器
3 調査区出土土器
図版 69　飛鳥時代　漆容器
図版 70　飛鳥時代　漆容器
図版 71　飛鳥時代　漆容器
図版 72　飛鳥時代　漆容器
図版 73　飛鳥時代　漆容器
図版 74　飛鳥時代　漆容器
図版 75　飛鳥時代　漆容器
図版 76　飛鳥時代　漆容器
図版 77　飛鳥時代　漆関連遺物
図版 78　奈良時代　軒瓦
図版 79　奈良時代　軒平瓦
図版 80　奈良時代　瓦・塼
図版 81　飛鳥・奈良時代　木簡
図版 82　飛鳥・奈良時代　木簡
図版 83　奈良時代　絵馬
図版 84　奈良時代　絵馬
図版 85　奈良時代　絵馬
図版 86　奈良時代　絵馬
図版 87　奈良時代　絵馬
図版 88　奈良時代　絵馬
図版 89　奈良時代　絵馬
図版 90　奈良時代　絵馬
図版 91　奈良時代　絵馬
図版 92　奈良時代　絵馬
図版 93　奈良時代　絵馬
図版 94　奈良時代　絵馬
図版 95　飛鳥・奈良時代　斎串・人形
図版 96　奈良時代　箏柱
図版 97　飛鳥・奈良時代 斎串状木製品・火付け棒
図版 98　飛鳥・奈良時代　木製品
図版 99　飛鳥時代　履物

図版 100　奈良時代　木製品
図版 101　飛鳥・奈良時代　木製品
図版 102　飛鳥・奈良時代
　　鉄製品・土製品・石製品・柱根
図版 103　豊臣前期　土器
図版 104　豊臣前期　土器
図版 105　豊臣前期　土器・陶磁器
図版 106　豊臣前期　土器・陶磁器
図版 107　豊臣前期　土器・陶磁器・土製品
図版 108　豊臣前期　木簡
図版 109　豊臣前期　木製品
図版 110　豊臣前期　木製品
図版 111　豊臣前期　木製品
図版 112　豊臣前期　木製品
図版 113　豊臣前期　人形
図版 114　豊臣前期　木製品
図版 115　豊臣前期　木製品
図版 116　豊臣前期　櫛・下駄
図版 117　豊臣前期　下駄
図版 118　豊臣前期　銭貨
図版 119　豊臣前期　銭貨
図版 120　豊臣前期　銭貨
図版 121　豊臣前期　金属製品
図版 122　豊臣前期　金属製品
図版 123　豊臣前期　金属・骨製品
図版 124　豊臣前期　石製品・縄
図版 125　豊臣前期　井戸出土遺物
図版 126　豊臣前期　瓦
図版 127　豊臣後期　土器
図版 128　豊臣後期　土器
図版 129　豊臣後期　土器・陶磁器
図版 130　豊臣後期　陶磁器
図版 131　豊臣後期　陶磁器
図版 132　豊臣後期　陶磁器
図版 133　豊臣後期　陶磁器
図版 134　豊臣後期　陶磁器
図版 135　豊臣後期　陶磁器
図版 136　豊臣後期　陶磁器
図版 137　豊臣後期　陶磁器
図版 138　豊臣後期　陶磁器
図版 139　豊臣後期　陶磁器
図版 140　豊臣後期　土器・陶磁器
図版 141　豊臣後期　土器・陶磁器
図版 142　豊臣後期　陶磁器
図版 143　豊臣後期　陶磁器
図版 144　豊臣後期　陶磁器
図版 145　豊臣後期　陶磁器
図版 146　豊臣後期　陶磁器
図版 147　豊臣後期　陶磁器
図版 148　豊臣後期　陶磁器
図版 149　豊臣後期　陶磁器
図版 150　豊臣後期　陶磁器
図版 151　豊臣後期　陶磁器
図版 152　豊臣後期　陶磁器
図版 153　豊臣後期　陶磁器
図版 154　豊臣後期　陶磁器
図版 155　豊臣後期　陶磁器
図版 156　豊臣後期　陶磁器
図版 157　豊臣後期　陶磁器
図版 158　豊臣後期　陶磁器
図版 159　豊臣後期　陶磁器
図版 160　豊臣後期　陶磁器
図版 161　豊臣後期　陶磁器
図版 162　豊臣後期　陶磁器
図版 163　豊臣後期　陶磁器
図版 164　豊臣後期　木簡
図版 165　豊臣後期　木簡
図版 166　豊臣後期　木簡
図版 167　豊臣後期　木簡
図版 168　豊臣後期　木製品
図版 169　豊臣後期　木製品
図版 170　豊臣後期　木製品
図版 171　豊臣後期　木製品
図版 172　豊臣後期　木製品
図版 173　豊臣後期　木製品
図版 174　豊臣後期　木製品
図版 175　豊臣後期　木製品
図版 176　豊臣後期　木製品
図版 177　豊臣後期　木製品
図版 178　豊臣後期　木製品
図版 179　豊臣後期　木製品
図版 180　豊臣後期　木製品
図版 181　豊臣後期　木製品
図版 182　豊臣後期　木製品
図版 183　豊臣後期　木製品
図版 184　豊臣後期　木製品
図版 185　豊臣後期　木製品
図版 186　豊臣後期　木製品
図版 187　豊臣後期　木製品
図版 188　豊臣後期　木製品

図版 189　豊臣後期　木製品
図版 190　豊臣後期　木製品
図版 191　豊臣後期　木製品
図版 192　豊臣後期　木製品
図版 193　豊臣後期　木製品
図版 194　豊臣後期　木製品
図版 195　豊臣後期　木製品
図版 196　豊臣後期　木製品
図版 197　豊臣後期　木製品
図版 198　豊臣後期　木製品
図版 199　豊臣後期　木製品
図版 200　豊臣後期　木製品
図版 201　豊臣後期　下駄
図版 202　豊臣後期　下駄
図版 203　豊臣後期　下駄
図版 204　豊臣後期　下駄
図版 205　豊臣後期　下駄
図版 206　豊臣後期　銭貨・煙管
図版 207　豊臣後期　金属製品
図版 208　豊臣後期　金属製品
図版 209　豊臣後期　金属製品
図版 210　豊臣後期　金属製品
図版 211　豊臣後期　石製品
図版 212　豊臣後期　石製品
図版 213　豊臣後期　鋳型・鞴羽口
図版 214　豊臣後期　鞴羽口
図版 215　豊臣後期　縄・不明製品
図版 216　豊臣後期　箒
図版 217　豊臣後期　瓦
図版 218　豊臣後期　瓦
図版 219　豊臣後期　瓦
図版 220　豊臣後期　瓦
図版 221　豊臣後期　瓦
図版 222　豊臣後期　瓦
図版 223　豊臣後期　瓦
図版 224　豊臣後期　瓦
図版 225　豊臣後期　瓦
図版 226　豊臣後期　瓦
図版 227　豊臣後期　瓦
図版 228　豊臣後期　部材
図版 229　豊臣後期　部材
図版 230　豊臣後期　部材
図版 231　豊臣後期　井戸出土遺物
図版 232　豊臣後期　墓出土遺物
図版 233　江戸時代　井戸 117 出土遺物
図版 234　近現代　刻印瓦

第１章　調査に至る経過と調査方法

第１節　調査の経緯と経過

現在の大阪府庁は、旧江ノ子島の府庁舎が大阪府の発展に伴う事務量の増大によって手狭になったため、移転されたものである。移転先は、旧東区大手前之町にあった不要な陸軍用地であった。移転は、大正10（1921）年12月に通用府会で決定され、同12（1923）年5月12日に着工し、同15（1926）年10月31日に竣工、同11月7日に開庁式が執り行われている。今日“府庁本館”と呼ばれている建物が、その時に建築されたものである。

この府庁本館は、大阪大空襲をくぐり抜け、今なお威容を誇っているが、建築後70余年を経て老朽化が著しい。また、第２次大戦後、本館も手狭になり、別館や労働部庁舎など幾つかの建物が増築されたが、そのため庁舎の分散化に伴う事務の非効率が憂慮されることとなった。一方、政治・経済をはじめとする各分野のグローバル化やＯＡの進展に伴う高度情報化社会への対応など、府庁舎に新たな機能を付加しないと府民サービスに影響を及ぼす事態にもなってきた。

そこで、大阪府は、府庁舎の建て替えを計画し、昭和62（1987）年９月に「庁舎・周辺整備計画」を発表した。平成元（1989）年10月、大阪府庁舎・周辺整備基本計画が策定され、大阪府庁舎周辺整備事業として府庁舎の建て替えが開始されることとなった。この建て替えは、現在の府庁舎の機能を保持しながら同じ敷地内に新庁舎を建築するという難工事であり、既存建築の撤去と仮移転、庁舎建築と入居を繰り返す必要があった。当初の建築順序としては、新別館、行政棟、議会棟、警察棟と進む予定であった。

この府庁の敷地は、豊臣大坂城の三の丸跡地にあたる。新庁舎は、駐車場など大規模な地下施設の設置により地中深く掘削されるため、三の丸関連の遺構やその上に築城された徳川大坂城の遺構を大きく破壊することとなる。そこで、建て替え事業を遂行する大阪府総合部庁舎周辺整備室と大阪府教育委員会文化財保護課との間で協議が行われ、財団法人大阪文化財センター（現：財団法人大阪府文化財センター）により発掘調査を実施することとなった。

平成２（1990）年４月１日、庁舎周辺整備室とセンターの間で同年度までを工期とする第１次調査の委託契約が締結された。以降、新別館や仮設駐車場用地などを対象に、平成８（1996）年３月29日まで５次の発掘調査が継続された。

図１　調査地の位置

ところが、府財政の悪化に伴い、新別館完成以降の庁舎建設スケジュールが見直され、行政棟や議会棟の建築が延期されることとなった。そこで、発掘調査も中断されたが、昭和34(1959)年３月に建築された警察棟については、老朽化が著しい上に、府民の安全を守るための最新施設の導入が強く求められたため、建て替えを実施することとなった。

なお、大阪府警察本部棟の新築工事は２分割で

写真１　文化庁調査官の視察

写真２　今宮高校生の体験発掘

実施され、このうちの１期工事は旧大阪府警察本部棟の西側にあった旧大阪家庭裁判所跡地にあたる。この１期工事に伴う調査は平成 11（1999）年２月 18 日から当センターの手で発掘調査を開始し、同年 11 月 30 日には調査を終了している。なお、この１期工事終了後は引き続いて中部調査事務所において整理作業を行い、最古の紀年銘木簡をはじめとするきわめて重要な遺物群の存在を鑑み、平成 12（2000）年３月 31 日に速報的役割を果たすべく終了報告書の刊行を行い、調査成果の一端を公にした。さらに、平成 14（2002）年３月 29 日には、正報告書である『大坂城址Ⅱ』の刊行を行った。

その後、１期工事部分に平成 14（2002）年７月、大阪府警察新本部棟の西半部分が先行して竣工、ここに旧大阪府警察本部棟の機能を移行し、旧本部棟は解体された。

この旧大阪府警察本部跡地部分が２期工事の対象地であり、当該地に関しては平成 15（2003）年６月から発掘調査を開始し、平成 16（2004）年３月に終了した。

この調査では豊臣期の大坂城に関わる大規模な堀を検出、大坂冬の陣前後の緊迫した状況を具体的に知ることができるきわめて重要な調査成果をあげた。平成 15（2003）年 12 月 13 日に第１回現地説明会を実施し、また、調査地の北東部で検出した谷の中からは古代に遡る柱列を検出し、絵馬や多量の漆壺が出土するなどの成果をあげ、これに関しては平成 16（2004）年２月 21 日に第２回現地説明会を開催して一般に供した。

また、平成 15（2003）年７月 28 日から８月１日までの５日間、大阪府立今宮高等学校の夏季集中講座を受け入れて体験発掘を実施した（写真２）。

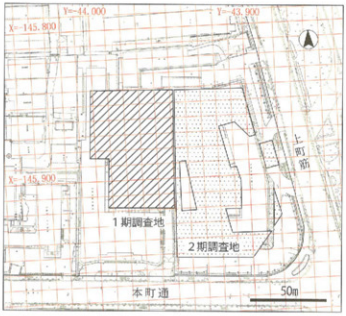


図２　大阪府警察本部地点の調査区（世界測地系座標）

図３　トレンチ配置図

なお、平成 16（2004）年４月からは、南部調査事務所において報告書作成に向けた遺物の整理作業を平成 18（2006）年３月 31 日までの期間で行い、平成 18（2006）年３月 31 日、本報告書の刊行を行った。

整理過程では、多量に出土した木製品の中から、歴史上に名を残す武将である「菅平右衛門」の名前を記した木簡の出土を確認し、その重要性を鑑み、平成 16（2004）年６月に記者発表を行うとともに大阪府立近つ飛鳥博物館および民家集落博物館において特別に展示を行った。

写真３　調査風景

第２節　調査の方法

今回の調査の地区割については、平成 14（2002）年４月、旧国土座標系から世界測地系への変換があり、今回の調査は航空測量や遺構図の作成などに関しては世界測地系の座標を用いている。

一方、遺物の取り上げに関する地区割については、１期調査地との整合性をはかるため、当センターが従前より行ってきた旧国土座標軸（第Ⅵ座標系）を基準とした地区割によっている（図４）。ちなみに今回の調査では基本的に従前の地区割で第Ⅳ区画としていた 10 m四方を最小単位として遺物の取り上げを行っている。

方位については、世界測地系に即した座標北を使用している。水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面（T.P.：TOKYO PELL の略）を使用している。大阪では T.P. のほかに大阪湾最低干潮位（O.P.：OSAKA PELL の略）も併用されており、今も大阪府関係等の土木工事で盛んに使用されており、実際、大阪府警察本部棟の本体工事では O.P. が用いられている。両者のレベル差は T.P. ± 0 m ＝ O.P. ＋ 1.3 m と定められている。

なお、今回の調査地は旧大阪府警察本部棟の跡地であり、建物によっては地下構造物によって現地表面から５m前後までが撹乱されていることが明らかとなっており、当該部分に関しては、古代の谷が検

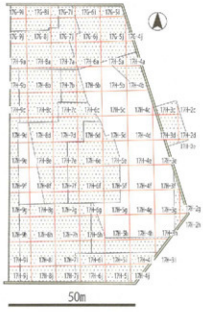


図４　遺物の取り上げ区画

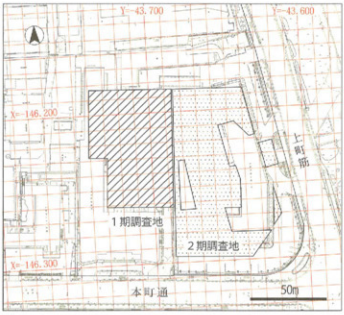


図５　大阪府警察本部地点の調査区（旧国土座標）

写真４　広島大学三浦正幸教授の調査指導

写真５　京都大学防災研究所による
地震計を用いた地中探査

出されると考えられる北端部を除いて当初より調査範囲からは除外していた。しかしながら、調査の過程で豊臣期大坂城跡の堀跡を検出し、さらに古代の谷が当初の予想に反した方向にのびていくことが明らかとなり、当初、調査対象としていなかった部分に関しても設計変更し、追加調査を行うこととなった。最終的な総調査面積は3896㎡を測る。

調査は、排土の仮置き場などの作業エリアを確保し、さらに本体工事とも併行して作業を進める必要があり、南北に大きく２分して調査を行った。

北半を１調査区、南半を２調査区とし、調査の過程で追加された東側に独立した長方形の調査区については３調査区とした。また、各調査区は掘削深度や調査工程の関係上、細分する必要があり、これらについては当センターの調査基本マニュアルに反するが、1aトレンチ、1bトレンチといったように調査区名の後にアルファベットを付して呼称している。

また、設計変更に伴う追加調査部分については、便宜的に1a南トレンチなどと呼称している（図３）。

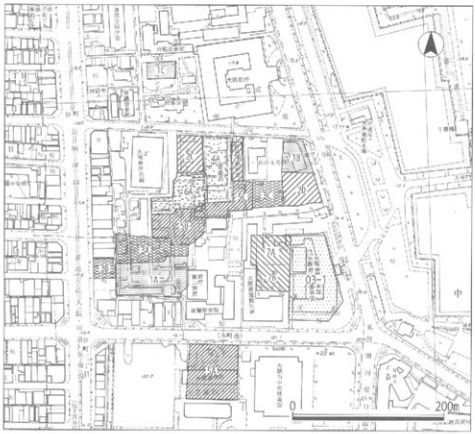


図６　既往の調査地（当センター調査分）

調査ではまず、現代の盛土層および攪乱層をバックホーによって除去する機械掘削を行い、その下部に堆積している包含層や遺構については人力による掘削を行っている。

ただし、豊臣期大坂城段階の堀の埋土のうち、地山を起源とする無遺物層に関しては一部、機械掘削を行っている。

遺構面および個々の遺構の実測に関しては、遺物の出土状況の作成など、個別に手書きによる実測を行って

いるが、遺構面の全体図に関してはレッカーによる空中写真測量を行い、50分の１の平面図を作成している。

遺物の取り上げに際しては、原則として図４に示した地区割りに準拠しているが、１期工事に伴う調査でもその有意性を実証したように、豊臣期大坂城段階の遺構埋土と包含層に関しては微細遺物を多く含んでいる可能性が高いことから、可能な限りで水洗選別作業を行っている。しかしながら、豊臣期大坂城跡の堀に関しては土量が膨大であり、作業エリアの関係上、土砂の場外搬出を急ぐ必要があり、大半については洗浄作業を行うことができなかった。

また、調査の過程で検出した竹行李に埋葬された人骨に関しては、（株）京都科学に取り上げから保存処理までを委託している。また、一部を破損しているものの、ほぼ原形を保って出土した傘に関しては、（財）大阪市文化財協会保存科学室の協力を得て、取り上げ作業を行い、保存処理作業を行っている。

写真６　傘の取り上げ状況

写真７　墓112の取り上げ状況

第３節　報告書の作成

本報告書掲載の図版類は、遺構図・遺物実測図ともに、一部を除いていずれもデジタルデータによって作成したものである。

遺構図・遺物実測図ともに原図をフラットスキャナーで取り込み（400dpi）、Adobe社のWindows版PhotoShop7.0もしくはPhotoShopCSを用いてトリミングもしくは合成作業を行い、Illustrater10もしくはIllustraterCSを用いてトレース作業を行うことによってデジタルデータ化した。

また、絵馬や木簡などの板状の木製品については、断面図を除いて、赤外線スキャナー（IR-2000）によって原寸大で画像を取り込み、PhotoShop7.0もしくはPhotoShopCSによって明度・コントラストなどの画像処理を行った後に、Adobe Streamline 4.0Jのほか、Illustrater10もしくはIllustraterCSを用いてトレース作業を行った。拓本等についても同様に400dplでスキャニングし、必要に応じてPhotoShop上で汚れを除去したり、コントラストを強調するなどの加工を行った。

また、これ以外に文様や釉薬などの情報が重要な要素である陶磁器類や漆器などの一部は、画像貼りこみからトレースまでを含めた作業を（株）文化財サービスに委託している。

そのほか、空中写真撮影によって作成した遺構全体図に関しては、解析図化機によって数値図化（DXF形式）されているため、AutoCAD LT2002およびIllustrater上で簡単な加工のみを行った。

報告書全体の編集作業はIndesignCSを用いて行った。

写真８　遺物のデジタルトレース作業

第２章　位置と環境

大阪城は大阪平野に突き出た上町台地先端に立地する。

台地の北は大川に面しているが、東は縄文海進以降、淀川と旧大和川によってできた幅２kmの天満砂堆を主とする低地が上町台地に沿った形で北へとのびている。

つまり南北長約 20km、東西幅約２km、標高 10 ～ 25 m を測る細長い上町台地はまさに大阪市域を南北に貫く脊梁ともいうべき姿を示す。台地の北端が標高約 25 m と最も高く、南に向かって低くなり、台地の北側と西側は比高 10 m前後の急崖によって画されるが、東側はなだらかな緩斜面となって低地部へ移行する。東側斜面には大規模な浸食谷が発達し複雑な様相を呈す。

縄文海進によって汀線が生駒山西麓までおよぶ縄文時代中期に上町台地では、森の宮遺跡（5）において人々の暮らしが本格的に開始される。

台地の東斜面に位置する森の宮遺跡に形成された大規模な貝塚は、貝層の堆積がマガキからセタシジミへと変化しており、河内湾から河内潟への変遷を如実に示す。しかし、縄文・弥生時代を通じて上町台地上では検出される遺構・遺物が稀少であり、実態はよく明である。

古墳時代には上町台地にも古墳が築かれるが、御勝山古墳（30）などを除き難波宮造営や大坂城築城にあたって大半が消滅してしまい、地名や埴輪片などから存在を想定するのみである。また、上町台地には応神天皇の大隅宮や仁徳天皇の高津宮があったと推定されている。これらはあくまでも推定の域をでないが、台地北端に難波の堀江が掘削され、難波津を中心に政権の重要拠点として発展していったことは確かであろう。周辺には集散する物資を管理する難波屯倉や外交をつかさどる役所の大郡や宿泊施設の難波館が設置されていたと推定されるが、難波宮下層遺跡で発見された５世紀代の大型倉庫群は難波津の繁栄を具体的に示すものといえる。

皇極４（645）年、中大兄皇子らによって蘇我氏が滅ぼされた乙巳の変を発端として数々の政策が打ち出されるが、そのひとつが飛鳥から難波長柄豊碕宮への遷都であった。孝徳天皇は白雉元（650）年から新宮の建設に着手し、白雉３（652）年に完成した宮は言葉に尽くしがたいほど壮麗であったという。白雉５（656）年には都は飛鳥に戻り、前期難波宮は朱鳥元（686）年の失火によって焼失する。

しかし、難波の地は難波津を中心とした外交機能は有しており、神亀３（726）年再び聖武天皇によって難波宮が造営される。やがて延暦３（784）年の長岡京遷都に伴い難波宮も解体される。

この地が再び歴史の表舞台となるのは、明応５（1496）年の本願寺第８世宗主蓮如による大坂御坊の建立まで待たなければならない。大坂御坊が建立された地は「摂津東成郡生玉庄内大坂」（『蓮文章』）

１．大坂城跡　２．大坂城下町　３．難波宮跡　４．難波宮朱雀大路跡　５．森の宮遺跡　６．今福遺跡　７．同心町遺跡　８．天満本願寺跡　９．天神橋遺跡　10．安曇寺跡　11．佐賀藩蔵屋敷　12．中ノ島２丁目所在遺跡　13．北浜４丁目所在遺跡　14．今橋４丁目所在遺跡　15．高麗橋４丁目所在遺跡　16．北浜３丁目所在遺跡　17．安曇寺跡（大坂魚市場跡）　18．敷本町１丁目所在遺跡　19．馬喰町遺跡　20．島之内１丁目所在遺跡　21．大今里遺跡　22．宰相山遺跡　23．上本町北遺跡　24．島之内２丁目遺跡　25．細工谷遺跡　26．石ヶ辻遺跡　27．堂ヶ芝廃寺　28．上本町南遺跡　29．四天王寺旧境内遺跡　30．御勝山古墳　31．勝山南遺跡　32．摂津国分寺　33．俺人町遺跡　34．大道１丁目所在遺跡　35．河内川堀江推定地　36．茶臼山古墳　37．北河内町所在遺跡　38．天王寺公園遺跡　39．阿倍野筋北遺跡　40．阿倍寺跡　41．林寺遺跡　42．難波貝層遺跡　43．船出遺跡　44．敷津遺跡　45．長橋遺跡

図７　周辺遺跡分布図

表1　大坂城関連年表

年号	西暦	事項
天正8	1580	石山合戦終結、石山本願寺焼失
天正10	1582	本能寺の変、信長が自刃
		山崎の合戦、秀吉が明智光秀を破る
天正11	1583	賤ヶ岳の戦、秀吉が柴田勝家を破る
		秀吉、摂津を占有し大坂城本丸築城を開始
天正12	1584	小牧長久手の戦、秀吉、徳川家康と和す
天正13	1585	大坂城本丸完成
		秀吉、関白に任ぜられる
天正14	1586	大坂城二の丸築造開始
		秀吉、太政大臣に任ぜられ、豊臣の姓を賜る
天正16	1588	大坂城二の丸完成
		刀狩令発令
天正17	1589	小田原の北条氏征討
天正18	1590	小田原の北条氏降伏、秀吉の天下統一成る
		徳川家康、関東に移封
天正19	1591	千利休、自刃
		朝鮮征討発令
		秀吉、関白職を甥の秀次に譲り太閤と号する
文禄元	1592	秀吉、朝鮮出兵(文禄の役)
文禄3	1594	大坂城惣構築造開始
文禄4	1595	秀吉、秀次の関白職を剥奪し、秀次自刃
慶長元	1596	慶長の大地震
慶長2	1597	朝鮮再出兵(慶長の役)
慶長3	1598	大坂城三の丸築造開始
		秀吉没
慶長5	1600	関が原の戦
慶長8	1603	家康、征夷大将軍に任ぜられ、江戸幕府を開く
慶長10	1605	徳川秀忠、征夷大将軍に任ぜられる
慶長19	1614	方広寺鐘名事件
		大坂冬の陣
慶長20	1615	大坂夏の陣
		秀頼、淀殿自刃、豊臣氏滅亡
		松平忠明、大坂城主となり大坂城下の復興と整備にあたる
元和5	1619	江戸幕府、大坂を直轄地し、大坂城代・大坂町奉行を置く
元和6	1620	大坂城再建工事開始
寛永6	1629	大坂城再建工事終了
寛文5	1665	大坂城天守閣に落雷し全焼、以後昭和6年まで天守閣なし
明治元	1868	戊辰戦争により、大坂城中ほぼ焼失
		大坂城跡は明治政府の軍用地となる
昭和6	1931	大阪市による大坂城天守閣再建
平成9	1997	大阪城天守閣、平成の大修理完成

と記され、ここに初めて「大坂」の名が文献に登場する。天文元（1532）年の山科本願寺の焼き討ち以後、大坂石山に本願寺が移されると一向宗の本拠として強大な勢力を保持した。やがて10年にわたる織田信長との石山合戦は、天正8（1580）年8月2日、第11世宗主顕如が大坂を明け渡し紀州へ移ることによって終結する。

石山本願寺は顕如が退去してすぐに焼失するが、『細川忠興軍功記』によれば、信長は大坂城本丸を丹羽長秀に、千貫櫓を織田信澄に預けたという。しかしながら、一向宗をようやく制圧し、天下統一を目前にした織田信長も本能寺の変によって倒れ、信長の天下統一の夢を引き継いだのが羽柴秀吉であった。天正11（1583）年9月、秀吉は大坂城築城に着手し、まず本丸が竣工された。ポルトガル人の宣教師ルイス・フロイスによると工事に従事する数は月に2、3万人、後には5万人に達したという。天正13（1585）年4月、着工からわずか2年足らずで完成した本丸はいくつもの曲輪からなり、5層からなる天守閣は本瓦葺きで鯱瓦や軒瓦、飾り瓦には金箔が貼られた壮麗なものであった。同年7月、関白の地位に上り詰めた秀吉は、本丸を囲む二の丸工事に着手し、文禄3（1594）年には大坂城の城郭を強化するため惣構の建設を命じた。

これによって北は大川、南は空堀、東は猫間川、西は新たに掘削した東横堀によって画された広大な大坂城下町が完成する。

さらに慶長3（1598）年、幼少の息子秀頼の身を案じた病床の秀吉は、新たに大坂城の工事を行なう。三の丸築造と想定されるこの工事は惣構内に新たに城郭を築いて大名屋敷を伏見から移転させる。そして、すでにあった町屋を惣構の外に整備した船場へ移す（大坂町中屋敷替）という大規模なものであった。同年8月、秀吉は62年の生涯を閉じた。

その後、慶長19（1614）年7月21日の方広寺鐘名事件を発端に、10月1日、徳川家康は大坂征討のため近江・伊勢・美濃・尾張等の諸大名に出陣命令を出す。豊臣秀頼も10月6日に大坂城修理を

行い、戦備を整え戦闘態勢に入る。家康は10月19日に西国・四国の諸大名にも参陣命令を出し、翌月の11月15日には二条城から大和路を進み、秀忠は伏見城から河内路を進みともに大坂へと進む。大坂冬の陣の始まりである。

11月19日木津川口の戦い、11月26日今福・鴫野の戦い、11月29日博労ヶ淵・野田・福島の戦い、12月4日真田丸の戦いと戦闘が続くも徳川勢は惣構を突破することが出来ず、12月19日に和睦が成立。12月22日誓書を交換、冬の陣が終結する。

12月23日大坂城の堀の埋め立て開始。『大坂御陣覚書』によると、「堀の埋様は三歳の子の上り下り致し候程にと御意にて」とあり、家康は徹底した堀の埋め戻しを命じている。年明けて、慶長20(1615)年1月19日大坂城の堀の埋め立て終了。その後、秀忠は伏見城に引き上げる。

そして4月4日、再び家康は駿府を発つ。4月6日には伊勢・美濃・尾張・三河等の大名を鳥羽伏見に集結させ、4月7日に西国の大名に出陣命令を出す。大坂夏の陣の始まりである。4月29日泉南樫井の戦い、5月6日道明寺の戦い、若江の戦い、5月7日天王寺口、岡山口の戦いを経て、強固な守りを見せていた真田幸村も討ち死にし、ついに大坂城は徳川勢によって落城する。5月8日秀頼、淀殿自刃により豊臣家は滅亡。難攻不落を誇った大坂城も、豊臣氏の命運とともに灰燼に帰した。

廃墟と化した大坂城だったが、元和6（1620）年から10年の歳月をかけて松平忠明が徳川幕府の直轄都市として本丸と二の丸を復興する。しかし、それは膨大な盛土に象徴されるように豊臣期の面影を完全に払拭したものであり、豊臣期の遺構は地下深く眠ることとなる。

寛文5（1665）年、落雷によって天守閣は焼失し、慶応4（明治元）年幕末の動乱の中、本丸から出た火は城中大火となり再び大坂城は落城する。

その後、大坂城域とその一帯は、大阪鎮台や大阪砲兵工廠など軍設備が立ち並ぶ官有地となる。

大阪鎮台は明治21（1889）年、第四師団と改称され、大阪は軍都の色合いを強めていった。調査地が所在する旧大手前之町一帯の区画は、明治時代から昭和時代にかけて、土地利用の様相が大きく変化するが、この地域は師団司令部がおかれていた城内から近いこともあって、師団司令部直轄の施設が多く造営されている。

その後、太平洋戦争末期に至り、大阪城周辺一帯は米軍による無差別爆撃を受け、多くの尊い生命とともに、徳川期の建築物も多くが焼失している。

終戦後、辛しくも戦火をくぐり抜けた中部軍管区司令部や旧大手前之町一帯の軍関係施設は昭和20(1945)年9月27日に大阪に進駐してきた米軍に接収される。

そして進駐軍の撤収後、新たに大阪城天守閣博物館と大阪市立博物館に生まれ変わる。また、平成13(2001)年11月には法円坂に大阪歴史博物館が開館し、難波宮跡および大阪城一帯は史跡整備され、都心のオアシスとして現在に至っている。

写真９　調査地と大阪城

第３章　調査の概要と層序

第１節　調査の概要

今回の調査地を含む大阪城周辺地域一帯は明治時代以降、陸軍の所管する地域であった。とくに調査地を包括する大手前３丁目の区画は砲兵隊区司令部や憲兵隊本部などが置かれ、第四師団の中枢的な施設が配置されていた。

今回の調査でも、調査地の南側では大正から昭和時代の憲兵隊本館建物の基礎や貯水槽を検出し、さらには明治時代の陸軍施設と考えられる礎石建物跡や土坑などを検出している。出土遺物は多くはないが、明治13年の紀年銘をもつ木簡等が出土している。

徳川大坂城時代、すなわち江戸時代の主要な遺構としては調査地北半部で検出した東西方向の２条の溝と南端部で検出した廃棄土坑があるのみで、全体として遺構密度は低い。これは近代以降の削平が及んだ結果であるともいえるが、元々、当地周辺は江戸時代の絵図や錦絵をみると、屋敷地などは表現されず、空閑地となっていた状況が看取される事実とも呼応している。

豊臣大坂城時代の遺構としては、調査地全体で検出した堀がある。この堀は二の丸大手口を逆コの字形に囲むものである。幅約25ｍ、深さ約６ｍを測るこの堀は、埋土の状況から人為的かつ短時間で埋め戻された状況が看取される。調査時においても、出土遺物の年代観や埋め戻しの具体相から、この堀は文献史料にみえる慶長19（1614）年の大坂冬の陣の講和後に埋め戻された蓋然性が高いものと考えていた。その後、遺物の整理過程で「菅平右衛門」なる武将に宛てた荷札木簡が出土し、文献史料との整合によって、堀の埋め戻しが、まさに大坂冬の陣の講和直後に行われたものであることが確実となっている。発掘調査による所見は、多くの文献史料にみえる徳川方による急ピッチな堀の埋め戻し作業を裏付けるような状況を示しており、結果的に今回の調査で検出した堀は大坂冬の陣段階の堀の状況をあたかも真空パックしたようであり、豊臣方の防御施設や堀の構造が、文字通り手に取るように白日の下にさらされることとなった。

また、今回の調査では、面積は小規模ながらも堀の掘削によって埋没した谷部からも礎石建物跡などを検出し、先の府警１期工事に伴う調査とともに、堀の掘削以前の状況や堀の掘削年代を考える上においても重要な調査所見が得られた。

古代の遺構に関しては、西側に隣接する府警１期調査区の北端で検出した谷の延長部分が検出されることは確実であり、新たな木簡の出土が期待されるところであった。しかしながら、今回の調査では、府警１期工事に伴う発掘調査で検出した谷は北側に逸れ、部分的に検出したに留まった。しかしながら、調査区の北東部分で新たな谷地形を検出し、これに伴って重要な遺構・遺物が検出された。この谷の南側からは、奈良時代の東西柱穴列を検出し、うち２基の柱穴には直径約30㎝の柱材が残っていた。この柱穴列は東西方向の塀であると考えられ、難波宮跡の宮域を推定する上においてきわめて重要な意味をもつものとなった。

また、遺物では後期難波宮跡に対応する奈良時代の堆積層から、30点を超える絵馬のほか、斎甲や箏柱、案などの祭祀関係の遺物が出土した。さらに、前期難波宮跡に対応する飛鳥時代の堆積層からは破片数にして1500点を超える漆壺が出土し、前期難波宮跡の大蔵とも推定されている内裏西方倉庫群との関連において重要な調査所見となっている。

第２節　基本層序

今回の調査地は、当センターが過去に調査を行った大阪府警本部棟１期工事に伴う発掘調査地と隣接するものの、結果的には両者を分け隔てるように豊臣大坂城期の巨大な堀を検出したこと、随所に近現代の撹乱が及んでいること、必要に応じて追加調査を行ったことなどの事由により、調査地を貫くような上層断面図を設定することができず、結果的に単純に土層を繋ぐことは困難な状況にあった。

したがって、以下の層序の記述は、当調査地にのみ限定されるものであり、府警１期調査地との対応については相対的な対応関係を表２に掲げた。なお、調査地の北半部の東西で検出した谷は、調査地内では直接的には繋がらないが、基本的な層序は共通するものであり、両者に関しては対応する層名を付した。なお、蛇足ながら、調査途上で提示した発表資料などには調査時の層序呼称を用いているものもあり、これについても表２に掲げた。

１層　調査区全体に広がる客土層で、昭和 33 年に竣工した旧大阪府警察本部に対応する整地層。

２層　戦後の基盤層で、褐色砂層をベースとする客土層であり、非常に固くしまっている。上面からは瓦や戦後、進駐軍が持ち込んだビール瓶などのガラス瓶の破片が出土している。

３層　灰色粗砂混じりシルト層。瓦片などを含む、第１面（昭和前期）の基盤となる客土層である。

４層　大きく２層に細分できる。４ａ層は層厚 50 ㎝の灰色シルト層で、同色の粘土ブロックや径３㎝以下の礫を多く含んでおり、第２面の基盤となる大正から昭和にかけての客土層である。４ｂ層は青灰色粘土層で、第３面の基盤層である。第３面では、松杭と礎石を基礎とする建物跡を検出している。明治期か。この層を除去して検出した遺構面が第４面である。溝や土坑などを検出している。江戸時代の遺構面である。

５層　層厚３ｍのオリーブ黄色粘土混じり粗砂層である。堀 83 掘削時の排土による客土層。今回の調査では５層の上部が撹乱によって残っておらず、詳細は不明である。

６層　層厚 15 ㎝のオリーブ黒色粗砂混じりシルト層で、第６面で検出した建物跡の基盤層。堀 83

表２　層序対照表

本報告	調査時名称							府警１期調査	時　代
	１地区					２地区	３地区		
	1b・1d～1f トレンチ	1aトレンチ（谷２北半部）	1aトレンチ南（谷２南半部）	1cトレンチ（谷１）					
１層	１層					１層			現　代
２層	２層					２層		１層	昭和時代後期
３層	３層					３層		２層	昭和時代前期
4a層	4a層					4a層		３層	大正時代～昭和時代
4b層	4b層					4b層			明治時代
５層								５・６層	豊臣後期～幕末初期
６層							１層	７層	豊臣前期
７層							２層	８層	豊臣前期
８層							３層	９・10層	豊臣前期
９層				１層				11a層	中　世
				２層				11b層	
		１層		３層				11c層	
10層		２層		４層				12層	
11a層		3a層		5層上層				14層	奈良時代
11b層		3b層							
11c層		3c層	１層	5層下層					
12層		3d層							
13a層		４層（1a層）	２層	６層				16層	飛鳥時代
13b層		4b層	3層						飛鳥時代
14層		５層	４層	７層				17層	古墳時代後期
15層		６層		８層				18層	不明（無遺物層）
16層		７層							

掘削時の排土でパックされている。

7層　層厚 15 ㎝の灰色粗砂混じりシルト層である。豊臣前期の遺構面である第７面の基盤層である。

8層　層厚 20 ㎝のオリーブ黒色粗砂混じり粘土層。豊臣前期の遺構面である第８面の基盤層である。なお、８層以下の層については堀造成時や、近現代の攪乱によって空白地帯がある。

9層　シルト層で２層に分かれる。炭酸鉄粒や地山ブロックを多く含む。瓦器や常滑焼の甕などの細片を包含し、上下層との関係からも中世の堆積層と考えられる。

10層　層厚 20 ㎝の灰白色粗砂層で、無遺物層である。谷の肩部に堆積した地山の崩落土である。

11層　府警１則調査の 14 層に対応する層で、大きく３層に分かれる。奈良時代の遺物が出土し、後期難波宮に対応する堆積層であると考えられる。11a 層は層厚 20 ㎝のオリーブ黒色粗砂混

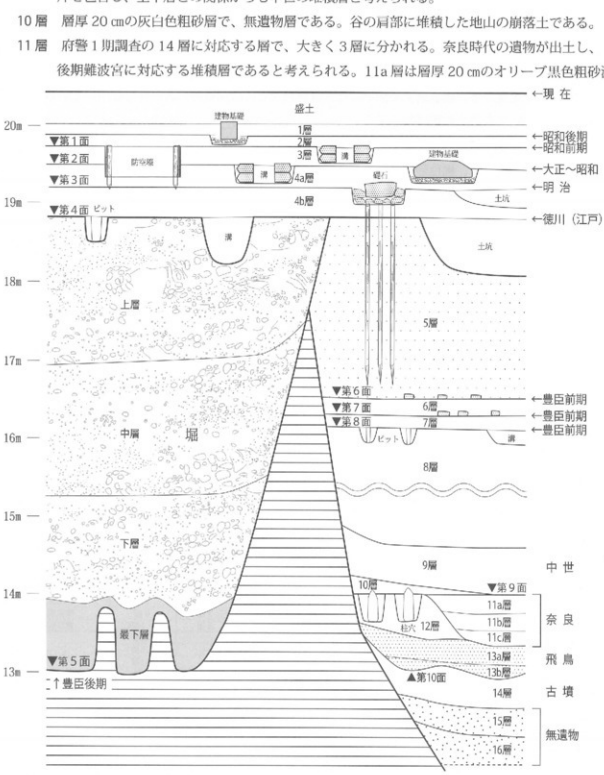
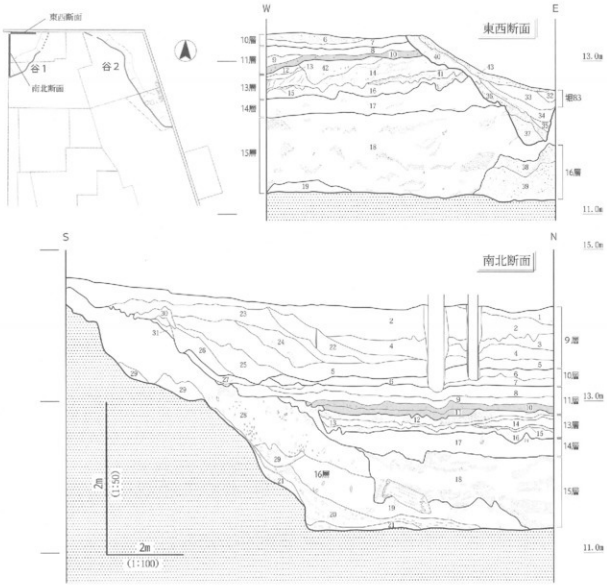


図８　層序模式図



1．黄褐色細礫じりシルト（径３cm以下のにぶい黄褐色細砂～シルトブロック含む：９層）
2．黄褐色粘砂～シルト（９層）
3．黒褐色細砂～微砂（粗砂を多く含む：９層）
4．暗灰黄色細砂～微砂（径１cm以下の礫を微量に含む：９層）
5．にぶい黄褐色細礫じりシルト（９層）
6．浅黄色粗砂（径１cm以下の明褐灰色シルトブロック少量含む：10層）
7．にぶい黄褐色細砂～シルト（10層）
8．灰黄褐色細砂～シルト（径５mm以下の礫を多く含む：11a層）
9．黒褐色細砂～シルト（11b層）
10．褐灰色細砂～シルト（炭化材混入を多く含む：11c層）
11．黒色粗砂混じりシルト（11c層）
12．浅黄色細礫じり粗砂
（径１cm以下のオリーブ灰色細砂～シルトブロック少量含む：13a層）
13．暗灰黄色細砂混じりシルト（13a層）
14．灰黄色細礫じり粗砂（径１cm以下の明褐灰色シルトブロック・径１cm以下の浅黄色粗砂ブロック多く含む、ラミナあり：13a層）
15．黄褐色シルト（13b層）
16．灰黄褐色シルト～粘土（13b層）
17．黒褐色細礫じりシルト（浅黄色粗砂少量含む：14層）
18．灰色細砂～中砂（自然堤防、炭化物を多く含む：15層）
19．明褐灰色細砂～粗砂（明色のシルトブロック少量含む：16層）
20．灰色細砂～微砂
（径１cm以下の淡黄色のシルトブロック少量含む、一部ラミナあり：16層）
21．オリーブ黄色細砂～細砂（炭化物含む：16層）
22．黄灰色細礫じりシルト（人為的に打ち込まれた杭あり：９層）
23．暗灰黄色細砂～微砂（径３mm以下の礫多く含む：９層）
24．暗灰黄色細砂～微砂（粗砂を多く含む、径５cm以下の明色シルトブロック含む：９層）
25．褐灰色粗砂混じりシルト（径５mm以下の礫多く含む：９層）
26．褐灰色細砂～粗砂（９層）
27．にぶい黄色微砂～シルト（径５cm以下の黒褐色細砂ブロック少量含む：11a層）
28．オリーブ灰色粗砂混じり粘土
（径３cm以下の礫・炭化物、径１cm以下の明黄褐色粗砂ブロック少量含む：16層）
29．明褐灰色シルト（明黄褐色シルトブロック含む、地山起源土：16層）
30．黄褐色細礫じり粗砂（９層）
31．黒褐色細砂（９層）
32．暗オリーブ灰色シルト～粘土（ヘドロ状で粘性高い：堀83埋土）
33．暗灰黄色細礫じり粗砂（堀83埋土）
34．暗オリーブ灰色シルト～粘土（ヘドロ状で粘性高い、一部砂混じる：堀83埋土）
35．オリーブ灰色細砂混じりシルト（堀83埋土）
36．灰オリーブ色細砂～微砂
（径５cm以下の暗灰色細砂混じりシルトブロック多く含む：堀83埋土）
37．浅黄色細礫じり粗砂（堀83埋土）
38．オリーブ黒色細砂～中砂（径５mm以下の明褐灰色微砂ブロック少量含む：16層）
39．オリーブ灰色細砂～粗砂（径５mm以下の礫を多く含む：16層）
40．明黄褐色粗砂～粗砂（径５cm以下の灰黄褐色微砂じりシルト少量含む：堀83埋土）
41．浅黄色細砂～粗砂（13b層）
42．黒褐色微砂～シルト（径５mm以下の礫・炭化物多く含む：13b層）
43．灰色微砂じり粗砂（径10cm以下の礫少量含む：堀83埋土）

図９　谷１断面図

じりシルト層で、径2㎝以下の地山ブロックを含む。11b 層は層厚 30 ㎝の灰色粗砂混じりシルト層で地山ブロック・炭化物粒を含み、炭酸鉄の結核が多い。11c 層は層厚 15 ㎝の灰色粗砂混じりシルト層である。径 1 ㎝以下の地山ブロック・細礫を含む層で、炭酸鉄の結核が上層よりも顕著に見られる。土器類は多くはないが、絵馬等の木製品が多く出土している。

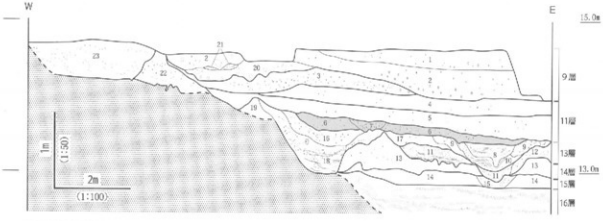
12 層　谷2の南半部で 12 層とした黄褐色の炭化物粒を含む粗砂混じり粘土層である。谷の埋土中でも異質な土層であり、柱列造営に際して行われた整地層であると考えられる。

13 層　府警 1 期調査時の 16 層対応層で、大きく 2 層に細分される。13a 層は層厚 50 ㎝の灰オリーブ色細砂～シルト層である。南側では上層を削って整地しており、層厚は 10 ㎝を測る。7 世紀後半代遺物を包含し、大量の漆容器が出土する。13b 層は層厚 10 ㎝の灰色中砂～シルト層である。部分的に堆積層にラミナがみられ、南から北に向かって断続的に水が流れていたものと考えられる。

14 層　府警 1 期調査時の 17 層に対応する堆積層である。層厚 20 ㎝を測るオリーブ黒色の固くしまった粗砂混じりシルト層である。量的には多くはないが、古墳時代後期を中心とする遺物を包含する。

15 層　府警 1 期調査時の 18 層相当層である。灰色の細砂～中砂の自然木が多く見られる層で遺物を含まない。層厚 50 ㎝～ 1 m の厚い自然堆積層で流木等を包含する。

16 層　細砂～粗砂の自然堆積層。なお、当該層はさらに下部に続いているが、無遺物層であることなどから、掘削深度の限界である T.P.11.5m 以下は未調査である。



1. 暗灰色粗砂混じりシルト（径3㎝以下の地山ブロック・細礫含む、炭酸鉄含む：9層）
2. 黒灰色粗砂混じりシルト（径3㎝以下の地山ブロック：9層）
3. 灰白色粗砂（砂土ブロック・細礫含む、地山起源土：10層）
4. オリーブ黒色粗砂混じりシルト（径2㎝以下の地山ブロック若干含む：11a層）
5. 灰色粗砂混じりシルト（径2㎝以下の地山ブロック・炭化物粒含む、炭酸鉄多い：11b層）
6. 灰色粗砂混じりシルト（径1㎝以下の地山ブロック・細礫多く含む、炭酸鉄多い：11c層）
7. 灰オリーブ色粗砂（細礫含む、一部的な流動痕跡、ラミナ不明瞭：11c層）
8. 灰色中砂（部分的にオリーブ黒色シルト層解にいる、自然堆積、流入あり？：13a層）
9. オリーブ灰色粗砂混じりシルト（径1㎝以下の地山ブロック含む：13a層）
10. 灰色粗砂～細砂（ラミナあり、部分的に細礫含む：13a層）
11. 灰色シルト（部分的に細砂の薄層にいる、自然堆積：13b層）
12. オリーブ灰色粗砂混じりシルト（13b層）
13. オリーブ黒色粗砂混じりシルト（固くしまる：14層）
14. 灰色粗砂～中砂（流木多量に含む、自然堆積層：15層）
15. 灰色中砂（地山ブロック・粗砂含む、一部的な流動痕跡：15層）
16. 灰色粗砂混じりシルト（地山ブロック・細礫多く含む：13a層）
17. 灰オリーブ色シルト～細砂（13a層）
18. 灰オリーブ色中砂と灰色シルトの互層（ラミナあり、流路状の痕跡、砂礫多い：13a層）
19. オリーブ灰色粗砂（径1㎝以下の地山ブロック含む、地山起源土：13a層）
20. オリーブ黒色粗砂（径10㎝以下の地山ブロック含む、固くしまる：9層）
21. 黄灰色中砂（9層）
22. 緑灰色粗砂（細礫混じる、地山起源土：16層）
23. 灰白色中砂（黄灰色シルトの薄層を挟む、部分的に細礫堆積、淡い浸蝕560年代の堆積、部分的にラミナあり：10層）

図 10　谷 2 断面図

第４章　古墳時代以前の遺構と遺物

第１節　遺　構

調査地の北半の東西から谷を検出している。北西部で検出したものを谷１、北東部で検出したものを谷２としている。

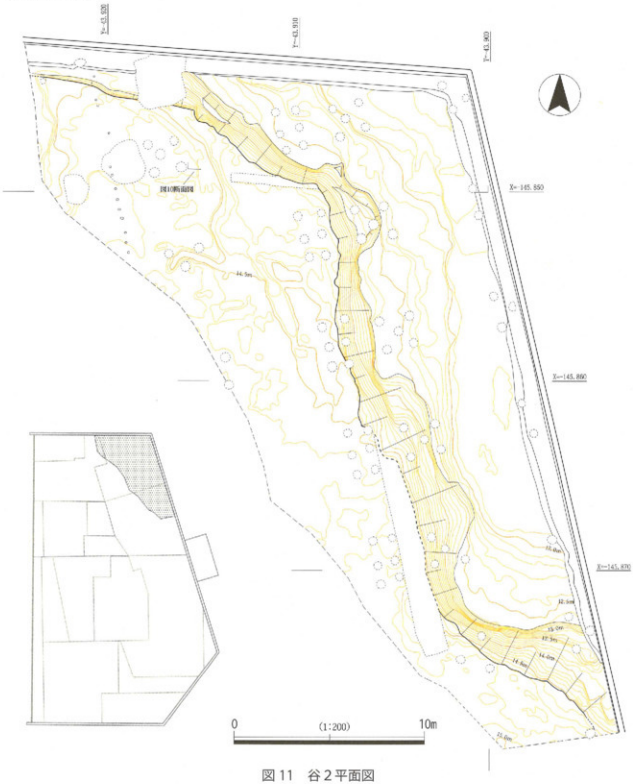


図11　谷２平面図

谷１は、府警１期調査時に検出した東西方向にのびる谷の延長部分である。この谷は厳密には東北東から西南西にのびるものである。レベルは東が高く、西が低い。

谷２は、調査地の北東部で検出したものである。やや蛇行するがおおむね南南東から北北西方向にのびる（図 11）。レベルは南が高く、北が低い。この谷は３調査区においても共通する堆積層を確認している。谷１・２ともに、古墳時代の層準としては、地表面から約７m下で検出した 14 層がこれに対応し、これ以下の 15・16 層は自然堆積で無遺物層である。

第２節　遺　物

１．石器

１～４はサヌカイト製石器。いずれも古墳時代以後の包含層から出土したものである。

２．土器

５～ 16・19・21・23 ～ 27 は古代以後の包含層出土の須恵器。17 は 14 層下部から出土した土師器二重口縁壷で、横方向の細かいヘラミガキが施される。胎土に角閃石粒を多く含む。18・20・22・28 ～ 30 は 14 層出土の須恵器。22・30 は谷１からの出土で、これ以外は谷２からの出土である。

３．木製品

31 ～ 42 は 14 層出土の木製品である。36･37 が谷１からの出土、これ以外は谷２からの出土である。31 は一方の側面に鋸歯状の刻み目を持つ木製品で、下部を欠損している。鋸歯部分は摩滅しているが、二次的な磨耗である可能性も残る。32 は独楽状木製品。上部を平坦に加工し、角は丁寧に面取りを行っている。側面は縦方向に面取り成形で先端は摩滅している。33 はＵ字形の木製品。府警１期調査でも

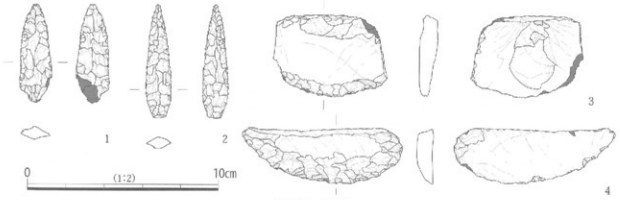


図 12　石器

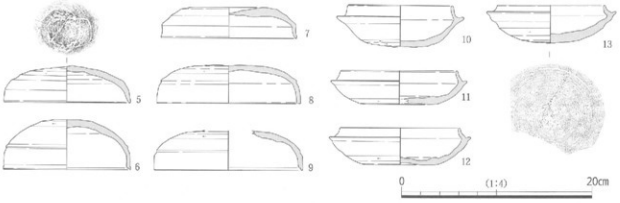


図 13　須恵器

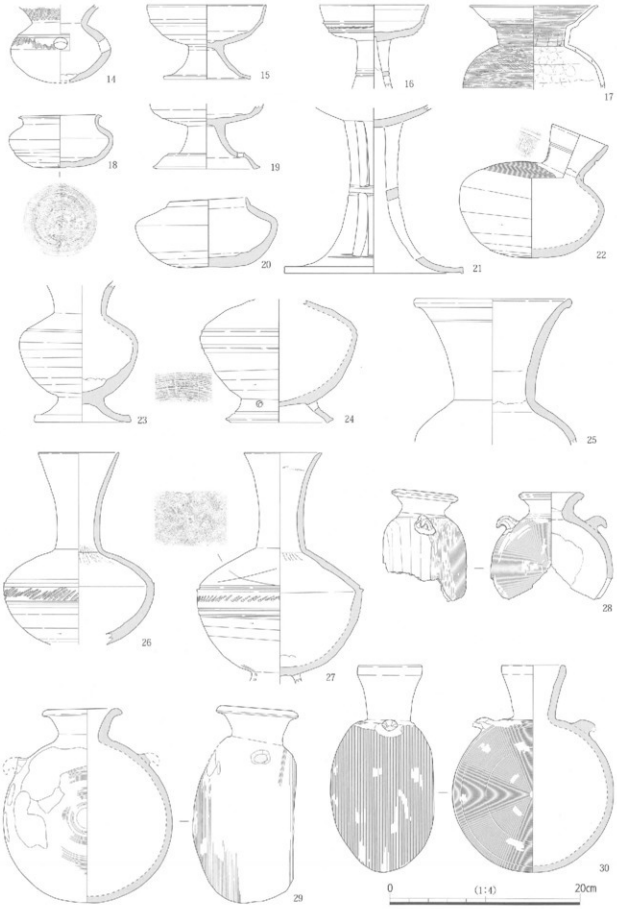


図 14　土師器・須恵器

類似する木製品が出土している。34･35は上部の左右に切り込みをもつ木製品。34は下部を欠損するが、35は完存する。36は刳り込みを持つ長方体の木製品。37は穿孔を有する木製品であるが、破損しているため全形は不明。38は穿孔を持つ板状木製品。うち2個の孔には木釘が折損した状態で残り、1箇所には穿孔を途中で止めた錐の痕跡が残る。39は曲物の蓋である可能性が高い。40は盤である。内面は浅い平底で、両端には把手状の突起がある。41は楕円形の木製品である。外周に沿って2個1対の穿孔があり、一部には桜の樹皮が残る。端部はやや斜めに成形されている。42は丁寧に成形された柄。先端を欠損しているため、全長は不明である。鍬などの農耕具の柄である可能性が高い。

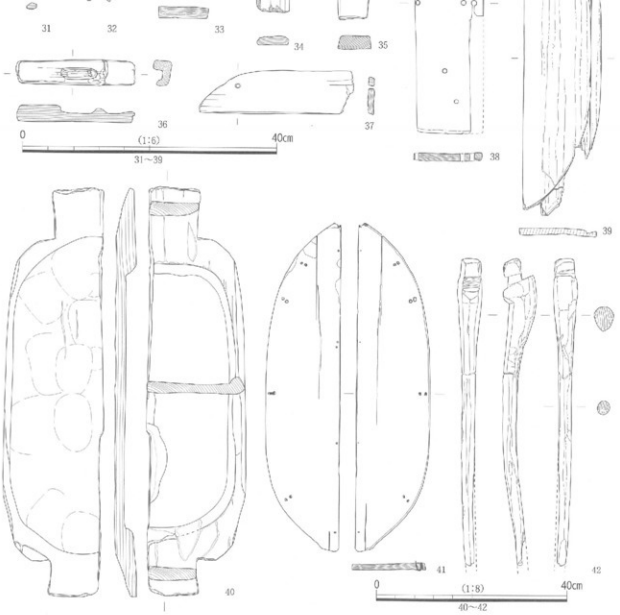


図15　木製品

第５章　飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

第１節　遺　構

１．前提

今回の調査地は、地形的には難波宮跡に近い南側が高く、北側は深い谷地形となって落ち込んでいることが明らかとなっている。また、今回の調査地は、当センターが府庁周辺整備事業に伴って行ってきた調査地の中でも、距離的に難波宮跡に最も近く、南半の高い部分では何らかの遺構が検出されるのではないかと想定される部分でもあった。

しかしながら、調査地南半部は近世以降の削平がほぼ全域に及んでいることや、豊臣大坂城期の堀が調査地のかなりの面積を占有していることなどから、古代の遺構面に関しては、ほぼ完全に削平された状態であった。このような状況ではあったが、今回の調査では調査地北西で府警１期調査で検出した谷の延長を検出し、調査地北東部では方向を異にする新たな谷を検出している。後者の谷の南側では谷を横断する形で東西方向の柱穴列を検出するとともに、その延長上にあたる３調査区からは谷の西斜面の一部を横板と杭によって護岸した施設を確認するなどの成果をあげている。

２．谷

（１）谷１

調査地の北西で検出したものであり、府警１期工事に伴う発掘調査で検出した東西方向にのびる谷の東側延長部分にあたる。府警１期調査では、この谷から西暦648年に該当する蓋然性が高い「戊申年」銘木簡が出土しており、今回の調査でも前期難波宮跡に関連する遺物が出土する可能性が高いものと考えていた。

しかし、今回の調査では、谷自体が北側に逸れていくことに加えて、豊臣大坂城期の巨大な堀によって大きく削平されていたこともあり、その遺存状況は必ずしも良好ではなかった。

埋土の状況は図９に示したとおりで、11層および13層が古代の堆積層である。前者が府警１期地区の

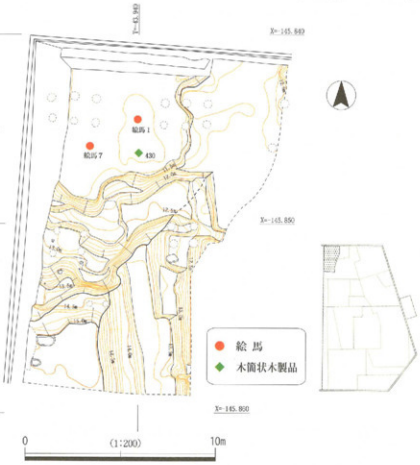


図16　谷１平面図

14 層に対応する奈良時代の包含層であり、後者は府警 1 期の 16 層に対応する飛鳥時代の包含層である。

飛鳥時代の包含層である 13 層は大きく 2 層に分かれ、上層を 13a 層、下層を 13b 層とした。13a 層は粗砂を主体とするが、基本的にラミナは確認できない。下部の 13b 層もシルトもしくは粘土を主体とする堆積層である。層厚はさほど厚くなく、古墳時代までの景観とは異なり、恒常的に水が流れるような状況ではなかったものと判断できる。なお、府警 1 期調査では未分解の樹木の葉を含む粘性の高い粘土層中からまとまって木簡が出土しているが、今回の調査では同様の性状をもつ上層は確認できなかった。これは、今回の調査で検出した谷が谷心線ではなく、肩部に近いことに起因するものであると考えられる。

奈良時代の包含層である 11 層は大きく 3 層に分かれる。上層から 11a ～ c 層とした。いずれも微砂～シルトを主体とする堆積層であるが、最下の 11c 層は炭酸鉄の結核を多く含み、湿潤な堆積環境であったことを窺わせている。全体に遺物は僅少であるが、同層から絵馬 2 点、木簡状木製品 1 点が出土している。

（2）谷2

調査地の北東で検出したものである。南南東から北北西に向かう谷地形であり、調査地内では西側の一部を検出したに留まる。この谷は過去の調査では認知されておらず、新たに確認したものである。谷 1 と同様に近現代以降の削平によって中世以前の堆積層しか遺存しておらず、上層の様相は判然としない。調査範囲内では谷 1 とは直接的にはつながらない。大きく蛇行する一連の谷地形となる可能性も皆無ではないが、谷 1 に対してほぼ直交する方向を指向する点から、谷 2 は谷 1 の支谷として調査地の北側直近で合流していたものと推察される。

埋土の状況は図 10 に示したとおりで、基本的な層序は谷 1 と共通する。11 層が奈良時代の包含層であり、13 層が飛鳥時代の包含層である。

13 層は部分的にはシルト層であるが、基本的には砂層を主体とし、ラミナが見られる部分が多く、断続的に水が流れるような環境であったことが窺われる。断面図をみても分かるように、この段階の谷底面は、流水によって東西 2 条の溝状の落ち込みが形成されている。当該層中からは漆容器が多量に出土しており、その出土分布は南側に濃く、北側に行くにつれて希薄になる。

奈良時代の包含層である 11 層は大別でき、上層から 11a ～ c 層とした。いずれも粗砂混じりシルトを主体とする堆積層であるが、最下の 11c 層は炭酸鉄の結核が顕著であり、水が流れるような環境ではないものの、湿潤な堆積環境であったことを窺わせている。

この谷は上部を大きく削平されているが、西側の肩部は部分的に階段状となり、一部では溝状を呈する部分もある。ただし、いずれも形状は不整形であり、人為的な改変によるものか否かは判断しがたい。

一方、この谷の南側では、他の堆積層とは異なる粘土層を検出し、整地層と考えられる当該層を切り込むように柱穴列を検出している。この柱穴列は東西方向の一本柱塀であると考えられるものである。また、この柱穴列の東側からは花崗岩を集積した集石遺構 160 を検出している。この遺構は調査区東側の SMW 壁際で検出したものであり、調査時にはこのような谷の中から、よもや柱穴列が検出されようとは考えておらず、両者間に南北方向の側溝を掘削し、結果的に両者の層位関係を直接的に比較することが困難となってしまっている。しかしながら、大局的には両者が 13 層とした飛鳥時代の包含層よりは確実に上層に位置することは明らかであり、奈良時代、すなわち後期難波宮跡に対応する遺構群である可能性が高いものと判断している。

また、直接的にはつながってはいないが、東側に張り出す３調査区の調査では、掘削限界に至るまでの間で地山面は確認できず、方向的にみても谷２がのびていた可能性が高い。当該調査区では谷の西側肩裾部に該当する箇所から横板と杭とを用いた護岸施設が検出された（護岸遺構 188）。この護岸施設は谷の法面を大規模に護岸するものではなく、法面に階段状の平坦面を造成するものである。直近からは奈良時代後半の土器が比較的まとまって出土しており、奈良時代に造営された施設であるといえる。

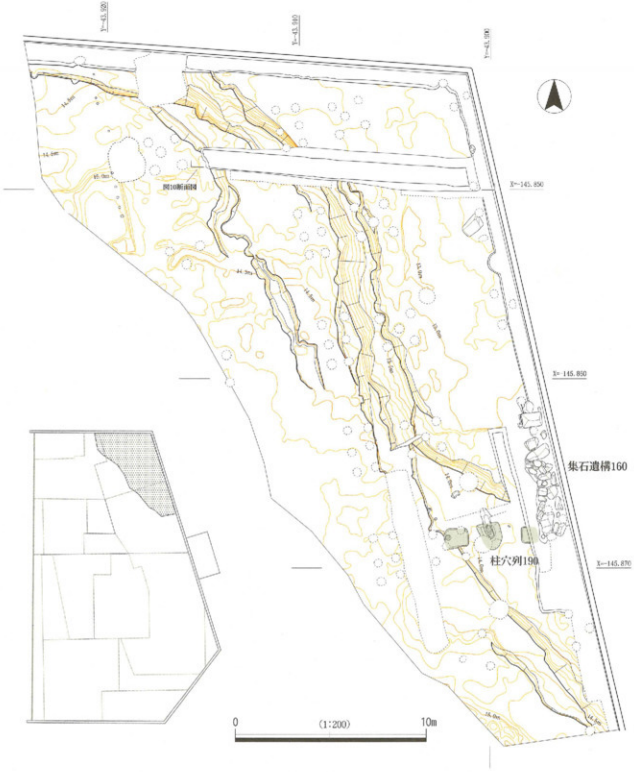


図 17　谷２平面図

したがって、谷２に関しては、厳密にはその同時性については不明だが、奈良時代のある段階で谷を横断するように東西方向の一本柱塀が造営され、その南では谷の法面を人為的に改変して護岸施設が設けられていた状況が看取される。また、SMW の打設や PC 杭の打設によって、旧状を損ねてはいるが、集石遺構 160 に関しても、人為的かつ意図的に花崗岩が持ち込まれたのは確実である。

谷２からは、すでに記したように 13 層中からは多量の漆容器が出土している。また、その上層の

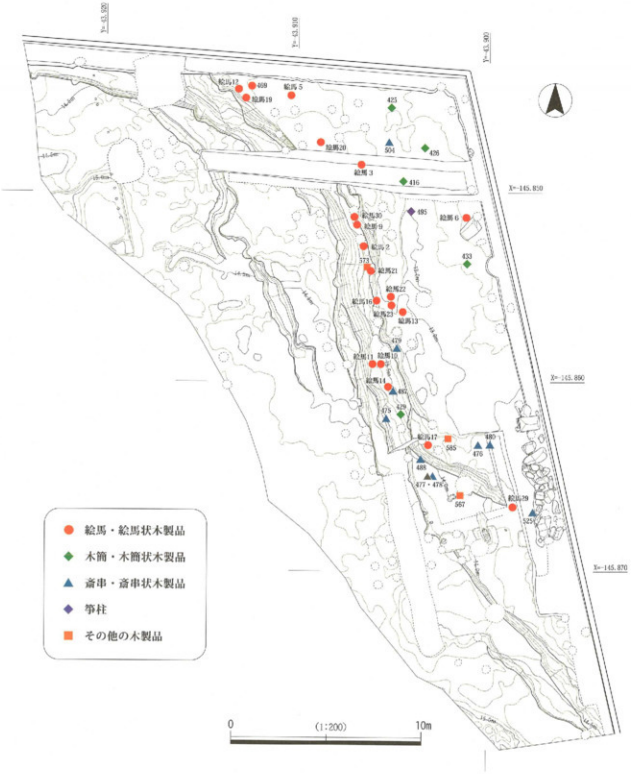


図 18　谷２遺物出土分布図

11層からは絵馬や斎串、木簡などが比較的まとまって出土している。とくに、絵馬は谷全体からいえば、その一部を調査したのみにもかかわらず、出土点数は30点を超えている。

図18には谷2から出土した遺物のうち、絵馬などの主要な木製品の出土分布を示した。このうち、絵馬の出土分布をみると、1点のみがやや東に偏して出土しているものの、大半は西側法面の裾部付近に集中している状況が看取される。絵馬はいずれも11層からの出土であるが、すでに記したように11層は流水性堆積ではないことから、絵馬は遠くから流着したのではなく、比較的至近から谷底へと落ち込んだ可能性が高いものと判断される。

3．柱穴列

（1）柱穴列190

谷2の南側で検出した掘立柱の柱穴列である。この柱穴列は東西に3基の柱穴が直列したものであり、うち2基には柱根がそのまま残っていた。

西側の柱穴156は東西に長い長方形の掘方をもつ。掘方の規模は東西1.35 m、南北1.09 m、深さ0.32 mを測る。当該柱穴には西側に偏して直径約30 ㎝の柱根が直立した状態で残っていた。裏込め土の観察からも、この柱根は原位置を保つものである。柱の上端は廃絶の過程で露頭していたのであろうか、先端はやせて先細りとなり、柱の芯には空隙が生じている。

中央の柱穴157は南北に長い隅丸長方形の掘方をもつが、南辺はやや丸みを帯びる。掘方の規模は南北1.59 m、東西1.31 m、深さ0.86 mを測る。当該柱穴にも柱根が残るが、北に向かって傾いた状態で原位置は留めない。この柱根に対応するように南北約1.6 m、幅約0.4 mの柱抜き取り穴が掘削されているが、結果的に柱は抜き取られることなく放棄されたものと判断できる。柱の上部は柱穴156と同様に先端は腐朽して尖っている。この柱は基部付近に全周する刳り込みがあり、当該部分がストッパーとなり、抜き取ることができなかった可能性もある。この柱穴の底面では、柱根を除去した段階で柱に対応する形で深さ約10 ㎝の円形の落ち込みが検出された。断面形状や直径が柱根形状と対応することから、これは人為的な掘り込みではなく、柱の重みによる沈下であると考えられる。

なお、この柱は基部の一方が被火によって焦げており、転用された可能性を残すものである。

表3に示した柱の座標値のうち、柱穴157に関しては、原位置を逸した柱根の基部ではなく、柱穴底面に残る円形の落ち込みを柱の原位置と考えてその中心を計測したものである。

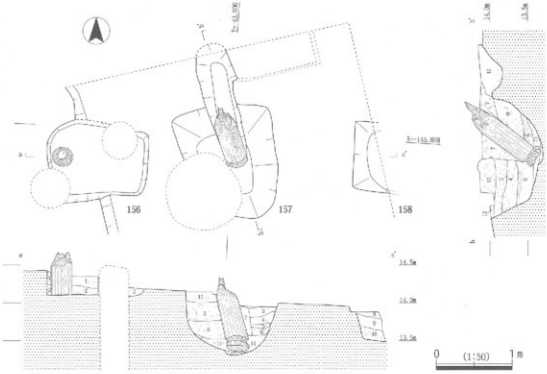
東側の柱穴158は側溝の掘削によって旧状を留めず、西半部がかろうじて残るのみである。掘方は矩形を呈し、残存する西辺は南北0.89 m、東西は残存で0.53 m、深さは0.41 mを測る。当該柱穴はすでに記したように、深く思慮することなく側溝を掘削するという調査ミスにより、不明確な部分が多いが、少なくとも西側の2基とは異なり、柱根は残っていなかった。埋没環境には大きな隔たりはないことを考慮すると、自然に腐朽して消滅したのではなく、抜き取り作業が行われた可能性が高い。

この柱穴列は南北には展開せず、したがって、東西方向の一本柱塀もしくは柵を構成するものである。また、柱穴底面は柱穴156と柱穴157では80 ㎝もの高低差があり、あたかも「万里の長城」のごとく谷地形の起伏に沿って造営されたものと判断される。これより西側では柱穴の痕跡が見出せないのは、地山に沿って造成されていたが故に削平されて痕跡すらも残していないものといえる。なお、柱穴156と柱穴157に柱間距離は水平距離で2.33 mを測り、柱根中心間の斜距離で2.43 mを測る。

各柱穴からは、土器小片がわずかに出土しているが、年代を特定しうるまでの遺物は含んでいない。ただ、層位的には、柱穴列に伴う整地層下面には飛鳥時代の包含層である13層が確実に連続し、ここ

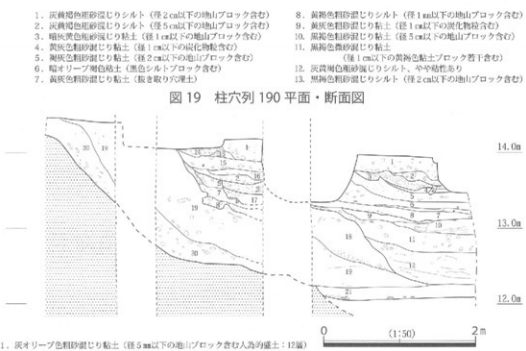
座標系	座標	柱156	柱157
旧国土座標系	X座標	−146215.247	−146215.125
	Y座標	−43641.140	−43638.855
世界測地系	X座標	−145868.399	−145868.294
	Y座標	−43902.211	43899.924

表3　残存柱の座標値



1．灰黄褐色粗砂混じりシルト（径2cm以下の地山ブロック含む）
2．灰黄褐色粗砂混じりシルト（径5cm以下の地山ブロック含む）
3．暗灰黄色粗砂混じり粘土（径1cm以下の地山ブロック含む）
4．黄灰色粗砂混じり粘土（径1cm以下の炭化物粒含む）
5．褐灰色粗砂混じり粘土（径2cm以下の地山ブロック含む）
6．暗オリーブ褐色粘土（黒色シルトブロック含む）
7．黄灰色粗砂混じり粘土（抜き取り穴埋土）
8．黄褐色粗砂混じりシルト（径1mm以下の地山ブロック含む）
9．黄灰色粗砂混じり粘土（径1cm以下の炭化物粒含む）
10．黒褐色粗砂混じり粘土（径5cm以下の地山ブロック含む）
11．黒褐色粗砂混じり粘土
（径1cm以下の黄褐色粘土ブロック若干含む）
12．灰黄褐色粗砂混じりシルト、やや粘性あり
13．黒褐色粗砂混じりシルト（径2cm以下の地山ブロック含む）

図19　柱穴列190平面・断面図



1．灰オリーブ色粗砂混じり粘土（径5mm以下の地山ブロック含む人為的盛土：12層）
2．黒褐色粗砂混じり粘土（径5mm以下の地山ブロック含む人為的盛土：12層）
3．灰黄褐色地山ブロック混じり粗砂（地山ブロック多量含む：13a層）
4．灰色中砂（比較的均質、ラミナ顕著ではないが流水作の堆積か？：13b層）
5．オリーブ黒色粗砂混じりシルト（粒質均くしまる：14層）
6．オリーブ褐色粗砂混じりシルト（粒質均くしまる、砂が多い：14層）
7．黒色粗砂強じりシルト（均質固くしまる、繊維若干含む：14層）
8．黒色粗砂強じりシルト（均質固くしまる：14層）
9．黄灰色細砂（部分的にシルト互混、自然堆積：15層）
10．灰オリーブ色細砂（植物遺体多い、自然堆積層：15層）
11．オリーブ灰色シルト～細砂（自然堆積、酉側グライ化：15層）
12．灰色細砂（黒褐色シルトとの互層、自然堆積、植物遺体多い：15層）
13．オリーブ黒色粗砂混じり粘土（12層）
14．灰オリーブ色粗砂混じり粘土（地山ブロック多量に含む：12層）
15．黒色粗砂混じりシルト（12層）16．灰黒色粗砂強じりシルト（12層）
17．灰オリーブ色中砂～粗砂（部分的にラミナあり：13b層）
18．灰色中砂強じり粘土（下層に砂礫多い：16層）
19．灰色粗砂強じり粘土（15層）
20．暗黄黄色粗砂混じり粘土（16層）
21．緑灰色粗砂混じり粘土（16層）

図20　柱穴列190下層断面図

からは 72・73 の杯蓋が出土しており、柱穴列の上限年代を推量することが可能となっている。AMS 法による放射性炭素年代測定による年代測定では、柱 156 が暦年較正値で 597 ～ 647calAD（相対比 87％）、柱 157 が 529 ～ 601calAD（相対比 76％）という結果が出ているが、上記の杯蓋が下層から出土していることは動かしがたい事実であり、この柱穴列を初期の造営時の前期難波宮に関連付けることはできないものと判断する。また、この柱穴列の周辺からは、量的には多くはないが、重圏文軒丸瓦が出土していることなどを考えると、後期難波宮との関連を考えておきたい。

なお、柱根が残る２基の柱穴の柱間寸法は８尺を意図したものである可能性が高いが、傾斜地での造営のためか、厳密には水平距離では８尺に満たない。

いずれにしても、この柱穴列は難波宮跡に関連する区画のうち、最北で検出されたもので、難波宮跡の宮域を考える上できわめて重要な意味をもつものである。

４．集石遺構

（１）集石遺構 160

集石遺構 160 は柱穴列 190 の東側で 11 層中から検出したものである。調査区東端で検出したため、全容は不明ながらも、南北約 7.5 m、東西約 1.5 mの範囲におよそ 35 個の石が集積した遺構である。性格が特定できないことから集石遺構と呼称しておく。

石材の大きさは一辺１mを超えるものもあるが、多くは 50 ㎝前後である。石材の種類はその大半が花崗岩である。

当該遺構は調査地東端で検出したことから、東側は SMW 工法による地下連続壁体の施工段階にオーガー機による攪拌を受けて石が切削されている部分もあり、この段階で石材が動いている可能性もある。さらに、この遺構の南北両端では旧府警本部棟造成時に PC 杭が打設されており、当該箇所についてもオーガー機によって石が切削されている。

上記のように、この集石遺構はかなり旧状を損ねている可能性が高い。しかしながら、調査範囲内のみでの状況判断ではあるが、少なくとも南北方向に帯状に石が並んでいるのは明らかである。南北を指向する点や石の南端が柱穴列の延長線と対応している点など、何らかの意図をもって配置されたものと考え

図 21　柱穴列 190 と集石遺構 160

られる。しかし一方で、石の上面レベルには40㎝近い高低差があり、石敷きのごとき施設ではなく、かつ規則的に石が組まれた部分を見出すことも困難である。図21に示した断面図ではあたかも門型に組んだかのようにもみえるが、これは局所的なもので全体に共通するものではない。柱穴列の造営に伴う暗渠排水路である可能性も考慮して調査を行ったが、結果的に性格を特定するには至らなかった。

なお、当該遺構では石材を除去する段階で重圏文軒丸瓦391が出土しており、層位的にも奈良時代の所産であることは確実である。

5．護岸遺構

（1）護岸遺構188

護岸遺構188は3調査区で検出したものである。3調査区の調査は本体工事による影響範囲がさほど深いものではなく、調査段階において掘削深度および掘削範囲が制限される結果となった。したがって、古代の遺構面は上記のような制約を受けた中での調査となり、結果的にきわめて断片的かつ不十分な調査となっている。

この護岸遺構は、長さ約3.5ｍ、幅約20㎝、厚さ2～3㎝の板材を南北に3枚以上を並べ、その東側を直径10㎝弱の杭で押さえているものである。北側の板材は東に倒れているが、中央と南側の板材は直立しており、断面観察からも、これが元来の形状であると判断できる。板材の西側には裏込め土が観察され、階段状の平坦面を造成するための施設であることが窺われる。北側と中央の板材の連結部分は、木簡のような切り込みが入れられており、痕跡は残っていなかったが、形状から推察して、当該箇所を縄で縛るなどして連結していた可能性が高いものといえる。

上記のように、当該遺構は護岸施設とはいっても、谷の斜面を大規模に護岸したのではなく、谷の底面近くの法面に高さ20㎝程度の階段状のテラスを造成したものと考えられる。

この遺構の東側に堆積した砂層から奈良時代後半の土師器椀A 129などが出土している。

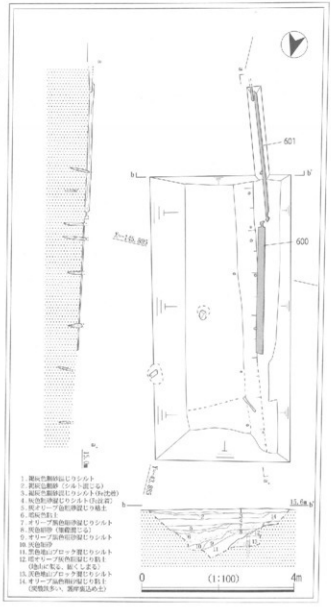


図22　護岸遺構188

第２節　遺　物

１．土器

古代に帰属する谷１および谷２の 11 層・13 層からまとまった数の土器が出土している。このうち、谷１では概算破片数で、土師器 460 点、須恵器 310 点、谷２では土師器 5750 点、須恵器 5920 点が出土している。土器類の多くは細片と化しており、完形での出土は僅少である。一方、このような状況にあって、谷２の 13 層からは多量の漆容器が出土しており、漆を掻き出すために人為的に割られてはいるが、原形を留めるものが多い。

以下では出土層位毎に全体を概観する形で報告を行う。なお、谷１と谷２からの出土遺物は、別に報告すべきところであるが、谷１は調査面積が狭いことなどから、実測に耐えうる出土遺物も少なく、ここでは対応する層位毎に一括して記述を進めることにしたい。

（１）13 層出土土器

谷２で検出した古代の包含層のうち、下層にあたる 13 層からは土師器 43 ～ 57 および須恵器 58 ～ 81 が出土した。

土師器には杯Ｃ 43・44、杯 45、蓋 46、甕 47・55・57、椀 48・49、高杯 50 ～ 54、壷 56 がある。

杯Ｃは口縁部径 10.1 ㎝の 43 と 12.6 ㎝の 44 がある。前者は放射状暗文をもつが、後者は内面が摩滅して暗文が残らない。45 の杯は内面に放射状暗文をもち、外面は黒色処理されるとともに全面にヘラミガキが施されている。形態・調整の特徴から他地域産である可能性が高い。46 は高い器高をもつ特異な蓋である。内面はヨコナデで調整されるが、外面は丁寧なヘラミガキである。上部には把手がはがれた痕跡がある。甕のうち、47 は丸い体部の外面をユビオサエ調整するもので、南河内地域のものと考えられる。55 は外面はナデ、内面は板ナデ調整である。56 は球形の体部をもつ壷である。内面はユビオサエ、外面は摩滅しており、調整は不明である。57 は体部外面は板ナデ、内面はヘラケズリである。48・49 は口縁部を短く外反させて端部を肥厚するものである。外面はいずれもユビオサエ調整である。高杯のうち、51・53・54 は精製なつくりで、51・54 は杯部内面に暗文を施す。50 は回転力を用いて作られた高杯であり、杯部内面に暗文はなく、外面の下半は回転ヘラケズリである。焼成が甘く、白っぽい色調を呈するなどの特徴があり、府警本部１期地区の調査でも同様の高杯が出土している。52 は厚い器壁をもつ粗製の高杯であり、脚部内面はヘラを用いて円錐形に削り取っている。

須恵器には杯Ｈ 58 ～ 63、杯Ｇ 64 ～ 74、高杯 75、ミニチュア土器 76、甕 77・80、甑 78、壷 79・81 がある。

破片も含めて杯Ｈよりも杯Ｇの占める割合が高い。杯Ｈの受部径は 8.6 ～ 11.1 ㎝、杯Ｈ蓋は口縁部径 10.2 ～ 11.1 ㎝である。杯Ｇは２時期に分かれ、64 ～ 71 の古い一群は、杯身の口縁部径が 8.8 ～ 9.8 ㎝、杯Ｇ蓋の受部径は 7.5 ～ 7.8 ㎝である。61・63 の底部には一文字のヘラ記号がある。一方、新しい一群の 72・73 の蓋の受部径はそれぞれ 13.4 ㎝と 15.9 ㎝である。74 の口縁部径は 13.6 ㎝である。73 は杯Ｇの蓋としてはやや大きく、杯Ｂなどの蓋である可能性も残る。72・73 は柱穴列 190 の下層から出土したものである。75 は低脚の高杯で円形の透し孔が四方に穿たれている。76 は胴部径 5.4 ㎝のミニチュア須恵器である。口縁部は残らないが、甕部が中心よりやや偏していることから、平瓶のミニチュアであろうか。77 は瓦質の焼成である。78 は台付の甑である。79 は扁平な体部をもつ壷である。底部は円盤を用いて作られており、体部には全面にカキメが施される。体部の制作技法は横瓶のそれと

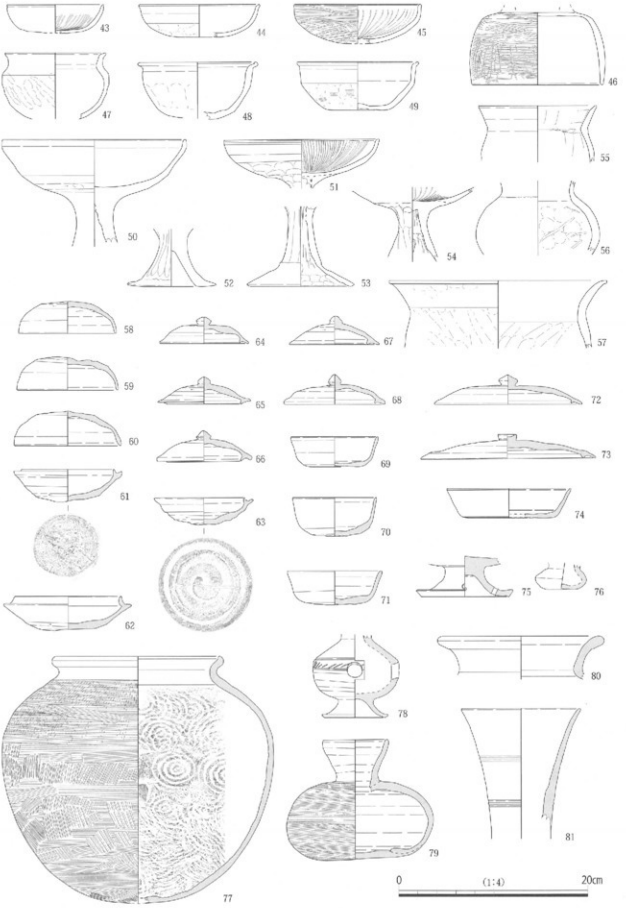


図23　谷2（13層）出土土器

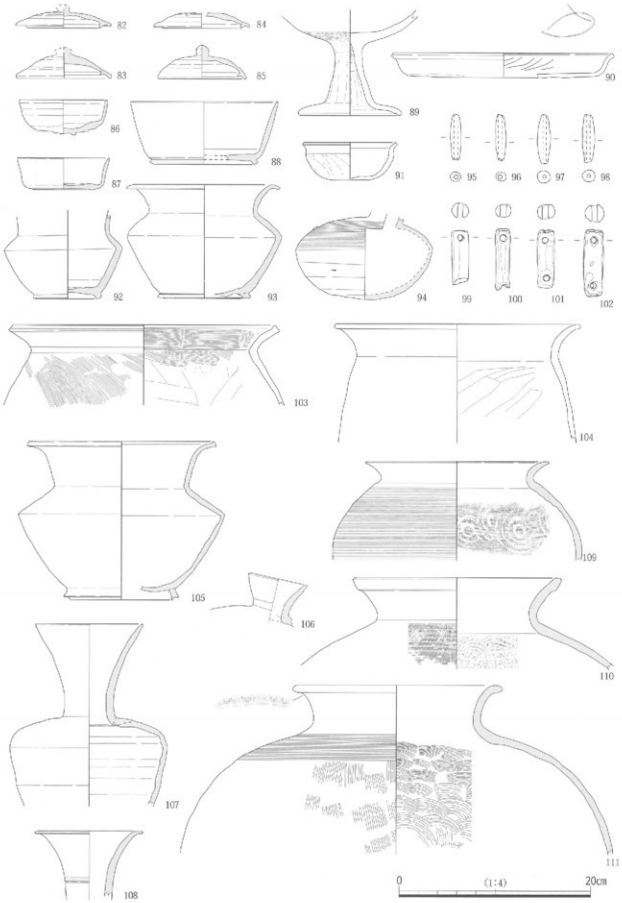


図24　谷２（11c層）出土土器（1）

同様であり、口縁部の形状も横瓶にありがちな形状である。あたかも横瓶の胴部を寝かせて口縁を付した特異な形態の壺である。81 は長頸壺の口縁部である。

（2）11c 層出土土器・土製品

すでに記述してきたように谷 2 で検出した古代の包含層である 11 層は大きく 3 層に分かれる。このうち、最下層である 11c 層からは絵馬などの木製品が多数出土している。以下では 11c 層出土の土器・土製品のみを抽出して報告する。

土師器には高杯 89、皿 A 90、椀 91、甕 103・104、竈 112 がある。

89 の高杯は精製なつくりであり、杯部外面の下半はハケメ調整、内面には暗文は施されない。90 は外反する口縁端部をもつ皿で、内面には粗い斜放射暗文、見込みには螺旋暗文が残る。底部外面はユビオサエである。91 は外反する口縁端部をもち、体部外面はユビオサエである。103 は体部外面と口縁部内面をハケメ調整、体部内面をヘラケズリする。体部外面には煤が付着している。104 は外面はナデ、体部内面はヘラケズリである。112 は付け庇の竈である。口縁部の下方には羽釜のような鍔が周り、庇の後方で下方に回り込んで収束する。この竈の体部外面には焚口以外に縦方向の 4 本の突帯が付され、破断面の状況から円形の透し孔が連続して穿たれている可能性が高い。また、円孔の 1 箇所は受口状を呈していた可能性もある。直接的には接合しないものの、同一個体と考えられる焚き口基部と粘土帯の基部を見出したことから、図 25 に示したような形状に復元した。口縁部径は 20.9 ㎝を測

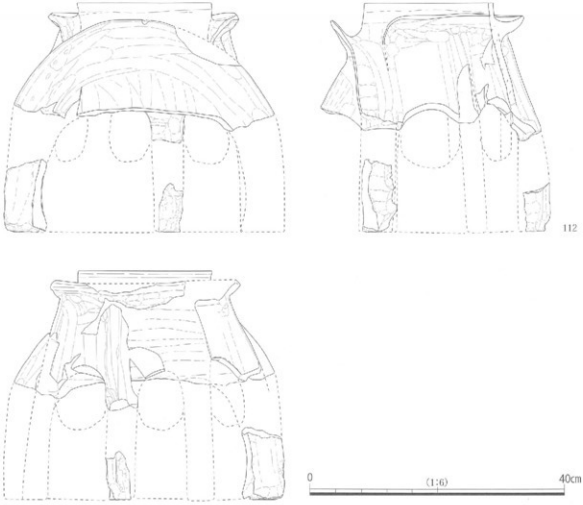


図 25　谷 2（11c 層）出土土器（2）

り、器高は残存で 21.9 ㎝である。焚口基部は、11.5 ㎝の高さが残り、図 25 では器高を 36 ㎝に復元した。結果的に柱状となる突帯部分は幅約 4.5 ㎝である。内面はわずかに煤が付着し、黒変している。他に類例のない特異な形態をもつ竈である。

須恵器は杯Ｇ 82 ～ 87、杯Ｂ 88、壺Ｑ 92・93・105、平瓶 94・106、長頸壺 107・108、甕 109 ～ 111 がある。

杯Ｇは 86 の口縁部径が 9.0 ㎝、87 が 9.5 ㎝である。杯Ｇ蓋は受部径 7.3 ～ 8.6 ㎝であり、13 層出土の杯Ｇとほぼ同大である。88 は杯Ｂでも深い器形を呈する。なお、杯Ｇ以外に杯Ｈもわずかに出土しているが、その多くは古墳時代以前のものであり、７世紀中頃以降の杯Ｈでは図化に耐えるものはない。92･93･105 の壺Ｑは法量に差がある。92 のみ瓦質で焼成があまい。94 は口縁部を欠く以外は完存。体部の外面上方にはカキメが巡る。106 は口縁部と体部の一部が残る。体部外面にはカキメが観察できる。107 は体部上面を円盤で塞いだ後に穿孔し、口縁部を接合している。108 は大きく外反する口縁部をもつ。109 は尖り気味の口縁端部をもち、体部外面にはカキメを施す。110・111 ともに体部外面はタタキの後、カキメを施す。後者の口縁部には肥厚した端部の下面に直径約８㎜の竹管文が不規則に並んでいる。

その他、土錘が８点出土している。管状の 95 ～ 98 と棒状の 99 ～ 102 に大別できる。前者はいずれも紡錘形を呈するもので、土管形のものは出土していない。質量は 4.27 ～ 8.51 ｇである。後者は両端に長軸に直交して穿孔を施すもので、瀬戸内型土錘とされるものである。99・100 が一端を欠いている以外、完存する。完存する２点の土錘の質量は 101 が 21.91 ｇ、102 が 39.64 ｇである。

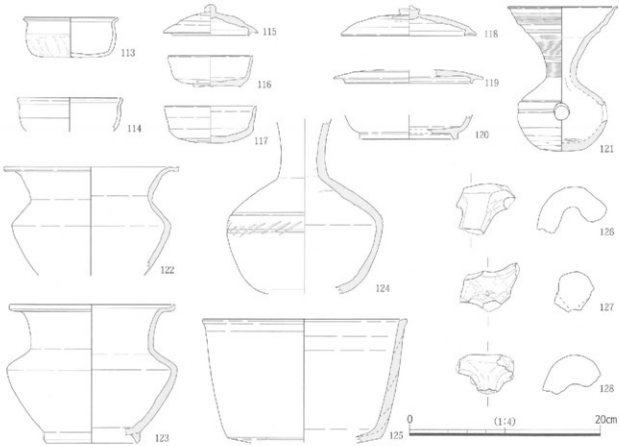


図 26　谷１・２（11a 層・11b 層）出土土器・土製品

（3）11a 層・11b 層出土土器・土製品

11a 層および 11b 層からの出土遺物はさほど多くない。したがって、ここでは谷 1 および谷 2 の同層から出土した遺物を一括して報告する。図 26 に掲げた遺物のうち、120・122・123 は谷 1 からの出土であり、これ以外は谷 2 からの出土である。

土師器には小壷 113、椀 114 がある。

113 は短い口縁部と扁平な体部をもつものであり、㈶大阪市文化財協会が調査を行った OS92-74 次Ⅲ 8 層から同様の小壷に人面墨画したものが出土している（市文協 1993）。内外面ともにナデ調整である。

須恵器には杯G 115 ～ 119、杯B 120、甑 121、壷Q 122・123、長頸壷 124、鉢 125 がある。

杯Gは 116 の口縁部径が 8.8 ㎝、117 が 9.5 ㎝である。杯G蓋 115 の受部径は 7.9 ㎝である。118 および 119 の口縁部径はやや大きく、前者の受部径は 11.6 ㎝、後者は 13.0 ㎝である。120 は細片であるが、杯Bと考えられる。121 はほぼ完形の甑、口縁部には細かいカキメが施される。122・123 は谷 1 から出土した。すでに報告したものを含めて、壷Qの出土が目立っている。125 は底部を欠くが、バケツ形の鉢である。底部外面はヘラケズリ、その他はヨコナデである。

このほか、土製品として土馬 3 点が出土している。126 は脚部と胴部の一部が残る。細片であり、前肢か後肢かも判断できない。127 も細片であるが、脚部と胴部の一部が残る。胴部からは斜め上方に突出する部分は頸部にしては細く、尻尾である可能性が高い。128 も脚部と胴部の一部が残るのみであり、全容は不明である。

（4）3 調査区出土土器

すでに記述してきたように、3 調査区は東に張り出した調査区であり、谷 2 の延長上ではあるものの、直接的にはつながらない。また、調査では掘削深度に制約があり、古代の包含層も完掘することができなかった。したがって、3 調査区から出土した土器については項を改めて報告する。図 27 に掲げた土器が出土した層は図 22 の断面図中の土層№ 7 と 8 であり、129 と 133 が土層№ 8 とした砂層から出土した以外は、いずれも土層№ 7 の細砂混じりシルト層からの出土である。谷 2 との対比でいえば、いずれも 11 層に対応する層準と判断する。

土師器には椀A 129、杯C 130、甕 135 がある。

129 はほぼ完形で出土。口縁部径 11.4 ㎝、器高は 4.1 ㎝である。外面はヘラケズリの後、分割ヘラミガキである。内面はヨコナデ調整である。赤褐色の色調を呈する。奈良時代後半の所産であり、絵馬の年輪年代とも対応する。130 は口縁部外面をヘラミガキ、底面をヘラケズリする。内面には放射状暗文を施す。全体に摩滅している。135 は人面墨画を有する甕片である。左半部が黒斑と重なり不明瞭で

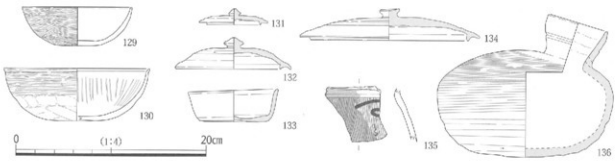


図 27　3 調査区出土土器

あるが、頸部直下に眉と目が描かれている。下方にも不明瞭な墨痕が残るが、何を表現したものかは不明である。

須恵器には杯G 132・133、蓋 131・134、平瓶 136 がある。

131 は受部径 5.6 ㎝の扁平な小型の蓋である。132 は受部径 9.8 ㎝、133 の口縁部径は 9.2 ㎝である。134 は受部径 16.3 ㎝を測る大型の蓋であり、杯Gの蓋としてはやや大きく、椀などの蓋である可能性が高い。136 は口縁部の一部を欠くものの、ほぼ完形で出土した。外面の上半部はカキメを施す。

2．漆容器

今回の調査で出土した漆容器は接合作業を終えた段階での破片数で 3009 点を数える。このうち、土師器はわずかに微細な破片を含めて 35 点を数えるのみであり、これ以外はいずれも須恵器である。

漆容器に利用された須恵器には、後述するように甑・小型の壷・短頸壷・平瓶・提瓶・甕などのほか、専用容器と考えられる長胴の壺などがある。甑や小型の壷が占める割合が高く、とくに甑などは猿投窯系などをはじめとする陶邑産とは異なる特徴を有するものが確認できる。また、出土した土器片は破断面に漆膜が確認されるものが多く、漆の移し替えの際に人為的に割られている状況が看取される。このため、出土した漆が付着する土器片はわずかに接合するものが確認できるものの、その大半は接合しない。また、後に報告するように、漆の漉し布や漆を掻き出す際に用いたと考えられるヘラ状の木製品が出土するなど、各地から集積された漆が不純物を取り除きつつ、移し替えるといった作業が今回の調査地周辺において行われていたことを示している。

なお、層位的にみると、前期難波宮跡に対応する 13 層からの出土が多いが、谷ということもあって 13 層より上層の堆積層にも多くの漆容器片が含まれている。しかしながら、容器に用いられた須恵器には層準と対応する年代差は見出しがたく、いずれも 7 世紀代の所産であり、基本的には一連のものであると考えられるものである。したがって、ここでは一括して報告を行うことにしたい。

なお、当該報告書所収の土器実測図では、破断面に漆が付着するなどして、人為的に割られたことが確認できる部分に関しては破断面を表現し、調査時等に生じた新しい破損に関しては従来の実測図と同様に表現して区別している。また、実測図中の薄いトーンは漆が塗膜状に付着している箇所を示し、濃いトーンは漆が塊となって固着している部分を示している。

137 ～ 175 は甑であり、うち 137 ～ 141 は甑の口縁部である。137 は内面には全面に漆が薄く付着し、外面には口縁部から垂れるように部分的に漆が付着している。138 は内面の下部に薄く漆が付着する。猿投窯系か。139 は内外面に漆が薄く付着する。口縁端部は大きく開き、受口状の形態をもつ。灰白色の白っぽい色調を呈し、胎土も精緻である。140 は穿孔部上半が完存する。白っぽい灰白色の色調を呈し、胴部穿孔部分は粘土を付加して注口を作り出す。内面に薄く漆が付着するほか、胴部の破断面にも漆が付着し、胴部を横方向に割って、漆を取り出したことがわかる。139 とともに美濃須衛窯系の可能性がある。141 は口縁部外面に豆粒状の粘土を貼り付けた装飾をもつことを特徴とする。現状では 1 箇所が残るのみであるが、剥離痕跡から 10 箇所であった可能性が高い。内面にはほぼ全面に漆が薄く付着し、外面にも口縁端部を中心にわずかに漆が付着する。頸部内面には木栓の痕跡が残る。湖西窯産か。

142 ～ 171 は甑の胴部片である。142 は胴部上半に 1 条の沈線を巡らせる以外に文様を施さない。口縁部および胴部の破断面には双方ともに漆が付着しており、胴部を斜めに割って漆を取り出している。内面には漆が薄く付着している。頸部には蓋として詰められた平織りの布が残り、その内側は漆が固着して頸部を塞いでいる。穿孔部は注口状にはならない。143 は口縁部と胴部下半を欠く。双方とも、破

断面には漆が付着する。胴部外面には１条の沈線が巡るのみであり、穿孔部が注口状とならないなど、器形は 142 と似る。144 も 143 と同様に口縁端部と胴部下半を欠くが、いずれの破断面にも漆が付着する。140 と同様に胴部を横方向に割って漆を取り出している。注口状に作り出された穿孔部には長さ約 1.9 ㎝の木栓が残る。頸部の下方では漆が塊となって固着し、頸部を塞いでいる。内面には全面に漆が付着している。頸部内面には、栓は残らない。猿投窯系の須恵器である。145 は胴部上半が残るのみである。外面には２条の沈線が巡り、穿孔部は注口状にはならない。上下の破断面にはいずれも漆が付着する。他例と同様に胴部を横方向に割って、漆を取り出していることがわかる。146 も胴部上半が残るのみである。穿孔部が注口状にはならず、残存範囲内では文様も見られない。内面のみならず、上下の破断面に漆が付着する。147 は小振りの胴部と太い頸部をもつ瓶である。胴部上半から頸部にかけての部位が残るのみである。上下の破断面ともに漆が付着している。頸部は布と考えられる栓が残り、このため頸部は窄がっている。穿孔部にも長さ約 1.2 ㎝の木栓が残り、その外側に固着した漆塊には籠の痕跡が残る。頸部の漆塊にも籠目が確認でき、横方向と斜め方向に交差する状況から亀甲編みの籠に包まれていた可能性が高い。148 も胴部上半から頸部にかけての部位が残る。内面および下方の破断面に漆が付着する。頸部内面には直径約 1.7 ㎝の木栓の痕跡が残る。149 は小振りの瓶であり、胴部に２条の沈線が巡る以外に文様はない。穿孔部には木栓が残る。内面および胴部の縦方向の破断面に漆が付着しており、この瓶に関しては胴部を縦割りにして漆を取り出したものと判断できる。150 は胴部上半と頸部にかけて遺存する。胴部外面には２条の沈線が巡り、その中に角度をつけた列点文を施文している。上下の破断面ともに漆が付着する。内面には全面に漆が付着し、外面にもこぼれた漆が筋状に付着する。頸部には木栓が残り、この部分で漆が固着して頸部を塞いでいる。151 は胴部上半が残るのみである。外面には２条の沈線以外に文様は施されない。上下の破断面ともに漆が付着し、内面には全面に漆が付着している。外面にも部分的に漆膜が残る。穿孔部は布と考えられるものを丸めて詰め込んで塞いでいる。152 は 150 などと同様に胴部上半から頸部にかけての部位が残るのみである。穿孔部は下方にのみ粘土が付加されて受口の注口状を呈する。外面には１条の沈線のほか、カキメが施される。内面には酒色の漆が厚く付着する。穿孔部は痕跡しか残らないが、その形状から木栓ではなく、布を用いて塞いでいたものと考えられる。153 はラッパ状に開く口縁と胴長を特徴とする瓶である。外面には２条の細い沈線が巡る以外に文様はない。沈線の状況や胴部の形状は後述する 160 と共通する特徴をもつ。胴部上半から頸部にかけての部位が残り、破断面には上下ともに漆が付着する。内面にはほぼ全面に漆が付着し、外面も頸部を中心に漆が付着している。穿孔部は注口状にならず、木栓で塞いでいる。154 は胴部上半から頸部にかけての部位が残る。外面には１条の沈線が巡る以外には文様はない。胴部は斜め方向に割られており、破断面には頸部とともに漆が付着している。内面にはほぼ全面に漆が付着する。外面にもかなり漆が付着し、一部は筋状を呈する。頸部は窄がれているが、布目は確認できず、紙を用いている可能性がある。155 は灰白色の色調を呈し、器壁が厚い。外面に１条の沈線が巡る以外に文様はない。胎土中には砂礫を多く含む。口縁部および胴部下半を欠損するが、いずれの破断面にも漆が付着している。内面はほぼ前面に漆が付着するが、外面にはわずかに付着するのみである。胴部の穿孔部分は下半を欠損するが、木栓の木目痕跡が漆に残る。156 は胴部の上半に２条の沈線を施し、その中を放射状の列点文で埋めている。胴部の上半が残るのみであり、下部の破断面には漆が付着する。穿孔部に栓は残らないが、内側の全面に付着する漆に木栓の痕跡が残る。胴部の中位ではなく、上半部に文様を施文する点が特徴的である。157 は平底気味の底部をもつ。胴部上半に２条の浅い沈線を施す以外に

文様はない。内面の全面と斜めに割られた胴部上半の破断面には漆が付着する。穿孔部には、長さ約4.6㎝の棒状の漆塊があり、下方の垂れ下がっている点や形状が不定形であることなどから、布を丸めて栓としていたものと考えられる。外面にはこの穿孔部から噴出したように放射状に漆が付着している。形態や文様は153や後述する160と共通する。158は胴部の一部が残るのみである。外面の上半にはカキメののち、2条の沈線を施し、その間を放射状の列点文で埋めている。打ち欠かれた頸部の破断面には漆が残る。内面と外面の一部に漆が付着し、穿孔部には、長さ約3.0㎝の栓が残る。この栓は直径約1.4㎝棒状に固着したものであり、布もしくは紙をねじって詰め込んだものと考えられる。159は胴部の下半が残るのみである。破断面には漆が付着する。内面はほぼ全面に漆膜が残り、外面には移し替えの際にこぼれたと考えられる漆がわずかに残る。外面は回転ヘラケズリであり、残存部位では文様はない。また、穿孔部は注口状にはならず、栓の痕跡も残らない。160は胴部下半が斜めに残る。底面は平底気味に削られていることや、文様が胴部中位に2条の沈線のみであることなど、157と共通する特徴をもつ。内面には全面に漆が付着するが、他の多くが、黒色を呈するのに対して、本例では飴色を呈する。破断面と外面の一部にも漆が付着する。別に出土した破片が接合するが、破断面に漆が付着しており、古い段階の割れであることが看取される。穿孔部の栓は残らない。161は胴部下半が残るのみである。内面の全面と破断面に漆が付着し、外面にも斑点状に漆膜が残る。底面は平底状に削り出している。残存範囲では文様は確認できない。穿孔部は注口状にはならず、栓の痕跡も確認できない。162は胴部の上半部のみが残る。外面は肩部に1条の沈線が巡り、その下方に斜めの列点文が施される。穿孔部には粘土が付加されて受口の注口状を呈する。穿孔部には木栓の痕跡が残る。内面には全面に漆が付着し、頸部周辺は漆の塊が固着する。下方の破断面および外面の一部にも漆が付着する。猿投窯系の須恵器である。163は胴部下半が残るのみである。胴部中位には2条の沈線が施され、その内側を列点文で埋めている。内面の一部にわずかに漆が付着するのみである。穿孔部は粘土が付加されて、受口に注口状を呈する。断面を観察すると内面は灰白色を呈するのに対して、外面は灰色であり、内外面で異なる粘土を用いていた可能性が高い。猿投窯系の須恵器である。164は灰白色の色調と精緻な胎土を特徴とする。穿孔部の内側と下方の破断面に漆が薄く付着する。穿孔部は粘土帯が付加されて注口状を呈し、先端部分はヘラケズリによって平滑にしている。穿孔部に残る漆膜には木栓の痕跡が残る。165は斜めに割られた胴部片である。胴部中位には1条の沈線が巡り、その下方に右下がりの列点文が施文される。内面には固着した漆の塊があり、破断面にもほぼ全面に漆が付着している。穿孔部は粘土帯が付加されて受口の注口状を呈する。形状的には162と共通し、猿投窯系の須恵器であると考えられる。穿孔部の内側には木栓の痕跡が残る。166は大振りの壺の胴部下半である。内外面にはほとんど漆膜は残らないが、破断面には漆が残る。外面には穿孔部の下方に1条の沈線が巡り、その上方に密な列点文が施される。167は胴部下半が残る。内面および破断面には漆が全面に付着しており、166と同様に胴部を横方向に割って漆を取り出した状況が看取される。穿孔部は下半しか残らないが、粘土帯を円錐形に付加して注口状に作り出している。他の多くのものが接合部をナデ調整によって消しているのに対して、本例は接合部の境界はそのままで、先端部に面をもっている。湖西窯産か。168は底部のみが残る。内面と破断面に漆が付着している。穿孔部が底部近くに位置するのが特徴的である。穿孔部に栓の痕跡は残らない。外面の一部に残る漆膜の表面には籠目が残り、三角形状に交差する点からみて、亀甲編みの籠であった可能性が高い。169は胴部を縦割りにした状態の破片である。内面および破断面に漆が付着する。胴部中位には2条の沈線とその間に列点文が施文される。穿孔部は粘土帯が付加されて注口状を呈

する。168 と同様に穿孔部は底面に近い。猿投窯系の須恵器である。170 は胴部の 4 分の 3 が残る。穿孔部から頸部かけての胴部上半の半分が打ち欠かれている。胴部中位には 2 条の沈線が巡るのみである。内面の全面および破断面に漆が薄く付着している。頸部もしくは穿孔部に棒などを差し込み、梃子の原理を利用し、胴部上半の一部を割り取った可能性が高いものと判断する。猿投窯系か。171 は下膨れの胴部となだらかな頸部を特徴とし、外面は無文である。色調は暗灰色を呈する。穿孔部を境目として横方向に二分された上下の破片が接合している。底面の内側および破断面に漆が付着する。外面に漆は付着していない。器壁が厚く、通常では横方向に割ることは困難であると考えられるが、穿孔部を境目として割れていることを考えると、170 などと同様に穿孔部に棒を差し込んで梃子として使い、割られた可能性が高いものと判断する。172 は胴部下半の 2 分の 1 が残るのみである。内面および破断面に漆が付着する。外面には沈線と列点文が施文される。穿孔部は注口状を呈する。穿孔部には木栓の痕跡が残り、内側では漆が固着して孔を塞いでいる。猿投窯系の須恵器である。173 は胴部下半が残る。胴部中位には 2 条の沈線とその間に列点文が施文される。穿孔部は受口の注口状を呈する。穿孔部の上半は欠失しているものの、漆で固着した木栓が残る。内面と破断面には、ほぼ全面に漆が付着し、内面には破片も付着している。また、外面には移し替えの際に垂れた漆が筋状に付着している。本例の漆は飴色を呈する。猿投窯系の須恵器である。174 は胴部下半のみが残る。割り方は 167 や 173 などと共通するもので、胴部を横方向に半割している。胴部中位には 2 条の沈線と列点文を施す。列点文の原体には刻みはない。内面および破断面には漆は付着しないが、外面には疵点状に漆の付着がみられる。穿孔部は粘土を付加して注口状を呈する。上半を欠失するが、木栓の一部が残り、外面には籠の一部が孔を横断するように残る。猿投窯系か。175 は底部から穿孔部が残るのみである。胴部には列点文と沈線がある。穿孔部は注口状を呈する。この注口部分の先端は他の多くが面をもつのに対して、本例は尖り気味である。穿孔部内側にわずかに漆膜が残るのみである。猿投窯系の須恵器である。

176 ～ 188 は甕もしくは壺の胴部片である。2 条の沈線と列点文をもつなど、穿孔部は残らないものの、甕の可能性がきわめて高い。しかし、今回の調査地の南側で行われた調査で出土した漆容器では「甕の製作技法を利用しながら専用の容器として生産された可能性」が指摘されており（市文協 2000）、ここでは甕とは特定せずに報告する。

176 は胴部上半が斜めに残る。肩部には 1 条の沈線をもつ。頸部と胴部の破断面ともに漆が付着する。177 は台付の壺もしくは甕の底部片である。胴部中位には列点文と 1 条の沈線が残る。内面と破断面のほぼ全面に漆が付着し、外面にも部分的に漆膜が残る。脚台部分は人為的に打ち欠かれた可能性もある。台付甕である可能性が高い。178 は 177 と同様に台付の壺もしくは甕の破片である。肩部に不明瞭な沈線が 1 条巡るのみである。体部は頸部から斜めに割られており、内面および破断面に飴色の漆が付着する。脚台部は人為的に打ち欠かれており、当該部分の破断面に残る漆膜には籠の痕跡が残る。これが運搬時の籠であれば、脚台は漆を入れた時点ですでに打ち欠かれていたことになる。179 は頸部から胴部上半が残る。胴部中位には 1 条の沈線が巡り、その下に列点文が施文される。頸部にも沈線が巡る。上下とも破断面は古い段階のものと考えられ、わずかに漆が付着する。猿投窯系か。180 は頸部から胴部上半にかけての部位が残る。頸部には 2 条の沈線が巡る。焼成は瓦質気味であり、器壁は厚い。上下とも破断面には漆膜が残る。内面には裳状の漆膜が付着している。頸部外面には部分的に漆が付着する。胴部下半は残らないが、器形からみて甕である可能性が高い。181 は頸部から胴部上半の破片である。内面と上下の破断面ともに漆が付着する。頸部の栓は残らない。頸部と肩部に沈線を入れる以外は無文

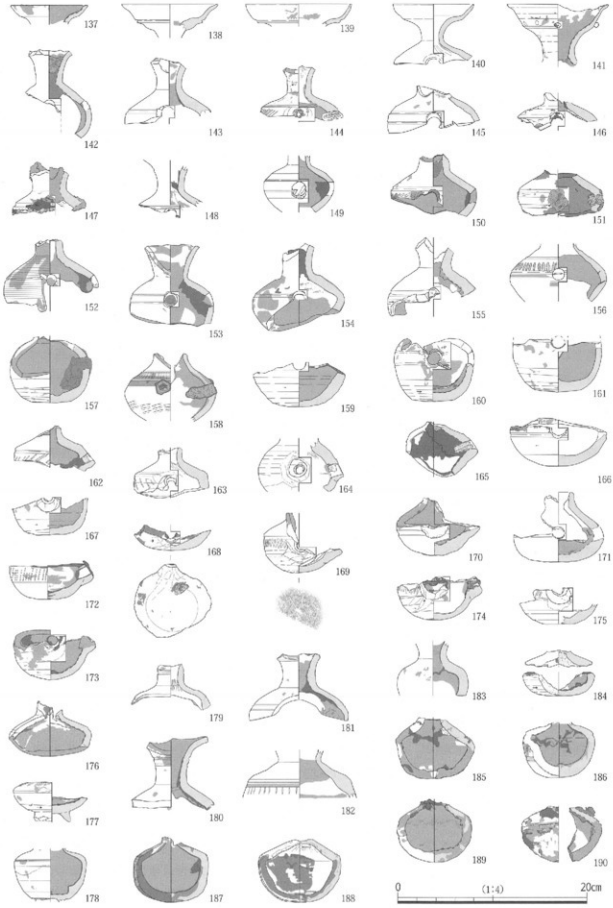


図 28　谷２出土漆容器（1）

である。口縁部は丁寧に打ち欠かれている。182 は頸部から胴部上半にかけての破片である。胴部にはカキメ状の沈線と列点文を施す。内面のほぼ全面に漆が付着し、上下の破断面にもわずかに漆膜が残る。外面には漆は付着しない。183 は頸部から胴部上半にかけての部位が残る。残存範囲内では無文である。内面にはかなり厚く漆が付着しており、外面も部分的に漆膜が残る。破断面は胴部側には漆が付着するが、口縁部側には残らない。焼成はあまく、全体に灰白色を呈する。184 は小振りの胴部片であり、ばらばらに出土した上下の破片が接合するものである。肩部に 1 条の沈線が巡る以外は無文である。接合面には漆が付着しており、漆を移し替える際に割られた破断面であることがわかる。頸部の破断面にも漆が薄く残る。185 ～ 190 は胴部が縦方向に半割されたものである。185 は胴部の上半に列点文を施文するものであり、施文位置だけでみれば、156 や 158 と共通する。内面およびすべての破断面に漆が付着し、外面も下半を中心に漆膜が残る。186 は胴部中位には上 1 条、下 2 条の沈線の間に比較的密な列点文を施文する。内面には飴色の漆がほぼ全面に付着し、上半では襞状に固着した部分もある。破断面には下方を中心に漆が付着する。文様や器形などから鹿の可能性が高いものと考えられる。猿投窯系か。187 は胴部中位には沈線間に右上がりの列点文を施文する。内面および破断面には漆が全面に付着している。188 は焼成があまく、灰白色を呈する。肩部に 2 条の沈線を巡らせ、その下に左上がりの列点文と 1 条の沈線を入れている。内面と破断面の下方には漆が付着する。器形と文様から鹿と考えられる。猿投窯系の製品である。189 は胴部中位に 1 条の沈線に挟まれた左上がりの列点文が施される。内面と破断面に飴色の漆が全面に付着する。外面にも筋状の漆膜が残る。文様と器形から鹿の胴部である可能性が高い。猿投窯系の須恵器である。190 は胴部が縦方向に半割されたものである。肩部に強い沈線が施され、その下方に稜線が作り出されている。部分的にしか残らないが、底部は平底気味である。内面および破断面のみならず、外面にもかなり漆が付着している。外面には籠の痕跡が残る。器形からみて、鹿である可能性が高い。

図 29 に掲げた 191 ～ 235 は壺などの胴部下半である。底部のみが残存するものなどは全体の器形を特定することができず、ここで一括して報告することにしたい。

191 ～ 200 は小型の壺の胴部と考えられるものである。191 は平底気味の底部をもつものであり、頸部がやや大きいことなど、鹿ではなく小型の壺である可能性が高い。外面は無文である。内面および破断面には漆が付着しており、頸部付近では塊となって固着している。外面にも移し替えの際にこぼれた漆が局部的に付着している。192 は明灰白色を呈するものであり、焼成があまく、全体に摩滅が著しい。肩部には薄くカキメが残る。胴部上半を斜めに割っており、内面および破断面には漆が付着する。漆の表面にはヘラなどを用いて漆を掻き出した際の筋状の痕跡が残る。外面にはわずかに垂れた漆が付着するのみである。193 は胴部の上半部を斜めに割っている。外面は下半を不定方向のヘラケズリとする。文様はない。内面および破断面には漆が全面に付着している。外面にはわずかに漆膜が残る。194 は肩部に浅い 1 条の沈線をもつ。胴部のおよそ 3 分の 1 を縦方向に打ち欠いて漆を取り出している。内面および破断面のほぼ全面に漆が付着する。外面にもわずかに漆が付着する。195 は胴部が縦方向に半割されている。胴部上半にはカキメが施され、下半は不定方向のヘラケズリである。内面および破断面には漆が付着し、頸部内面では漆が襞状に固着している。外面にはわずかに漆膜が残る。196 は肩部に 1 条の沈線を巡らせる胴部片であり、縦方向に半割されている。内面にはほぼ全体に漆が付着し、須恵器細片が固着している。破断面にも漆が付着し、外面の一部にも垂れた漆が付着する。197 は胴部上半を斜めに割っている。胴部の中位には 2 条の沈線を巡らせる。焼成は軟質である。内面には漆が厚く付

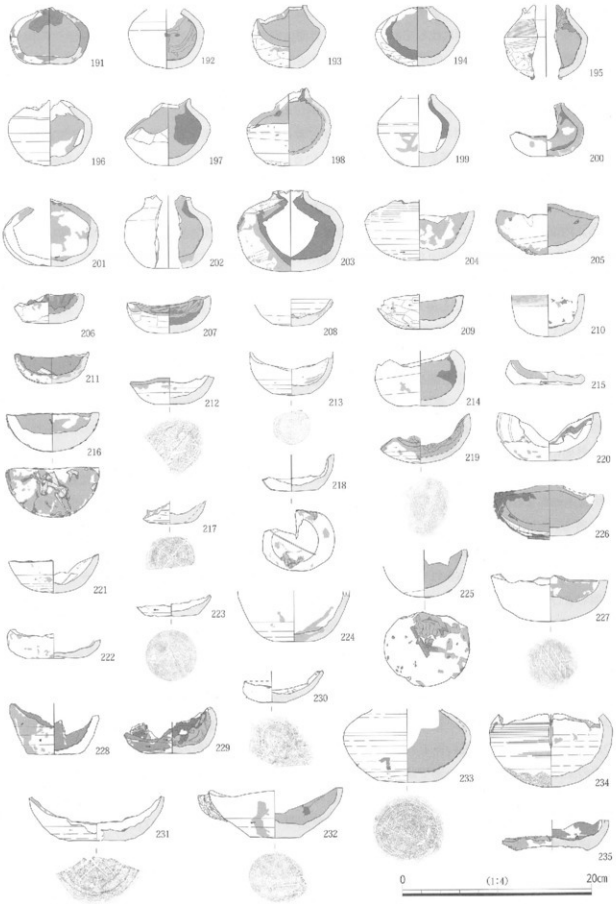


図29　谷２出土漆容器（２）

着し、上半部では塊となって固着している。破断面は下方に漆が付着する。198 は胴部上方の約 2 分の 1 を打ち欠いている。他例に比して器壁が厚い。外面は胴部中位に 2 条の浅い沈線を巡らせ、下半は不定方向のヘラケズリである。内面および破断面には漆が全面に付着する。外面にも部分的に漆が付着し、一部に籠目の痕跡らしきものが確認できる。頸部内面には漆が塊となって固着する。199 は軟質な瓦質焼成で、全体に器壁が厚いことを特徴とする。底部付近での厚さは 1.9 ㎝である。胴部中位には浅い 1 条の沈線を巡らせる。内面および破断面には漆が付着しており、胴部を縦に半割している状況が看取される。200 は胴部上半の一部を残して打ち欠いている。下膨れの胴部をもち、底部は平底気味である。内面および破断面に漆が付着し、頸部の内側には漆の塊が固着している。201 は丸い胴部中位に 1 条の沈線を巡らせる。底部は不定方向のヘラケズリである。頸部以上を打ち欠き、胴部を縦方向に半割している。内面および破断面には部分的に漆が付着する。202 は瓦質焼成であり、全体に器壁が厚い。胴部を縦方向に半割している。内面および破断面に漆が付着し、頸部内面では塊となっている。203 は焼成不良の須恵器である。断面は黄褐色を呈し、表面はやや灰色がかっている。十分な還元焼成となっておらず、一見すると土師器にもみえる。肩部には 1 条の沈線が巡る。頸部以上を打ち欠き、胴部を縦方向に割っている。内面および破断面には厚く漆が付着し、外面にも部分的に漆膜が残る。外面には籠目の痕跡がある。

204 ～ 232 は底部の破片である。底部のみであることから全容不明なものが多い。

204 は大型の製品であり、底面は回転ヘラケズリ、胴部にはカキメを施す。内面と破断面に漆が残り、胴部を横方向に半割して漆を掻き出したことがわかる。205 は内面と破断面に飴色の漆がべったりと残り、外面にもこぼれた漆が底部にかけて厚く付着している。206 は平底である。破断面に漆が付着しており、底面を打ち欠いて漆を取り出したものと考えられる。内面には固まった漆が襞状に残っている。207 は内面および破断面に漆が付着する。内面に厚く残る漆膜には、ヘラのようなもので掻き出した痕跡が残る。208 は白っぽい灰白色の色調をもち、底部を平底状に仕上げる。後述する 213 とともに湖西窯産である。内面と破断面の一部に漆が付着する。なお、底面の中心には直径 1.0 ㎝、高さ 0.9 ㎝のキノコ形の物体が漆で固められて残る。性状は不明である。209 は底面を不定方向のヘラケズリとする。内面および破断面、外面の一部に漆が残る。210 は底面を丁寧にナデ、上方にはカキメを施す。内面および破断面の一部には漆が付着する。211 は底面の 2 分の 1 が残るのみであるが、内面および破断面にはいずれも漆が付着する。底部付近には、須恵器の細片が漆で固着する。外面には列点文が施文されており、猿投窯系の瓶である可能性が高い。212 は底部のみであり、破断面の全面に漆が付着するものの、内外面は部分的に漆膜が残る程度である。底面には一文字のヘラ記号がある。213 は平底状の底部をもつ。砂礫をほとんど含まず、器壁が薄いなど精製な須恵器である。底部外面には「X」のヘラ記号をもつ。内面の一部に漆が残るのみである。猿投窯系か。214 は瓦質で器壁が厚い。平底気味の底部をもつ。内面の全体に漆が付着し、一部では塊となっている。破断面にも漆が付着しており、胴部を横方向に半割して漆を取り出している。215 は底部外面は表面が円形に剥離している。脚台部分を人為的に打ち欠いた可能性も残るが判然としない。内面および破断面の一部に漆が付着する。216 は丸底の底部片である。底面では厚さ 1.9 ㎝を測るなど、器壁が厚い。内外面および破断面には漆が付着している。外面に付着した漆には幅 7 ㎜前後の短冊状の竹が編んだ状態で付着し、亀甲編みの籠に入れられていたものと考えられる。217 は平底気味の底部片である。外面には「X」のヘラ記号がある。内面および破断面の一部に漆が付着する。218 は平底気味の底部に一文字のヘラ記号をもつ。色調は異なるが、形態は 213

と似る。内外面および破断面に漆が付着し、外面には籠の痕跡が残る。籠目の交差状況からみて亀甲編みの籠であると考えられる。219 は２条の平行線のヘラ記号をもつ平底である。内面および破断面に飴色の漆が厚く付着する。漆は襞状に固着している。220 は精緻な灰白色の胎土と緑色の自然釉が厚くかかることを特徴とする。底部内面には９㎜もの釉が溜まり、その上に漆が付着している。外面には縦方向に太い沈線が規則的に並び、弁状を呈し、当該部分にも自然釉が厚くかかる。美濃須衛窯系か。221 は内面および破断面に漆が付着し、内面には須恵器細片が固着する。猿投窯系か。222 は平底気味の底部である。内面には厚く漆が付着し、破断面および外面には部分的に漆膜が残る。223 は平底気味の底部をもつ。外面には「X」のヘラ記号をもつ。外面と破断面の一部に漆が付着する。224 は丸底であるが、わずかに面をもつ。還元焼成があまく、内面は黄褐色を呈する。内面および破断面に漆が付着する。225 は丸底で、還元焼成があまく、土師質である。胴部を横方向に半割しており、内面の全面に漆が付着する。底部付近にはヘラなどを用いて漆を掻き出した痕跡がみられる。破断面および外面には部分的に漆が残り、とくに外面に残る漆膜には籠の痕跡が残る。籠は部分的に残るのみであるが、幅約５㎜の竹を亀甲編みにしたものであると考えられる。226 は焼成不良の須恵器底部である。内面および破断面に厚く漆が付着する。外面にも漆の移し替えの際にこぼれた漆が付着し、底部を横断するように植物繊維の痕跡が残る。他例に見られる亀甲編みの竹籠と考えられるものとは様相を異にする。227 はきわめて分厚い底部をもつ。底部外面には平行タタキの痕跡が残る。内面および破断面に漆が付着する。228 は直径約５㎝の平底をもつ。内面および破断面には厚く漆が付着する。外面にもこぼれた漆が筋状に付着する。形態からみて、長胴の漆容器の底部である可能性が高い。229 は平底気味の底部をもつ焼成不良の須恵器である。内面および破断面に漆が付着する。外面にも移し替えの際にこぼれた漆が付着する。230 は平底状の小さな底部をもち、胴部は斜め上方に大きく開く。底部には V 字形のヘラ記号をもつ。内外面および破断面の一部に漆膜が残る。231 は平底状の底部をもつ。底部に平行する２条の沈線とそれに直交する沈線のヘラ記号を付す。内面と破断面の一部に漆が付着する。湖西窯産である。232 は猿投窯系の平瓶底部である。底部には一文字のヘラ記号を付す。外面にはおよそ６×４㎝の窯壁が溶着している。内面および破断面に漆が付着し、外面の一部には筋状に流れた漆が付着する。233 は平底気味の底部をもつ壺胴部である。曲線と直線を交差させたヘラ記号がある。頸部の一部が確認できることから、広口壺である可能性が高い。内面と外面の一部に漆が付着するが、破断面には漆は残らない。234 は底面をタタキ調整し、胴部中位に１条の沈線とカキメをもつ。内面および破断面に漆が付着しており、胴部を横方向に半割して漆を取り出したものと考えられる。235 は底面が円形に剥離している。この状況は先に報告した 215 と共通するものであり、脚台を人為的に打ち欠いた可能性がある。この剥離部分にも漆が付着しており、漆容器として機能していた段階ではすでにこのような状態であったことが看取される。内面のほぼ全面に漆が付着し、外面および破断面の一部にも漆が付着する。

236 ～ 285 は壷を漆容器としたものである。口縁部の形態などから数種類に分かれる。

236 ～ 248 は口縁部が大きく外反する小型の壷である。236 および 237 は内面の頸部よりに漆が付着する。238 は漆が固着して頸部を塞いでいる。頸部側の破断面には漆が付着しており、頸部を打ち欠いて漆を取り出そうとしたものと考えられる。栓の痕跡は確認できない。239 は内面の全面と口縁端部および外面の一部に漆が付着する。240 は頸部内面を中心に漆が付着し、頸部側の破断面にも漆が付着する。241 は口縁部がやや歪む。内面には厚く漆が固着する部分がある。外面および頸部側の破断面にも漆が付着する。242 も 241 と同様に口縁部に焼け歪みがある。口縁部の内側に漆が付着する。頸部

側の破断面にも漆が付着する。内面の漆膜は口縁端部までは広がらず、漆をいれる際に付着したものであると考えられる。猿投窯系か。243 は頸部および胴部内面、胴部の破断面に漆が付着する。頸部内面には栓の痕跡が漆に残るが、栓自体は欠失する。胴部を横方向に半割して漆を取り出したものと考えられる。244 は内外面ともに漆が付着する。頸部内面は固着した髮法の漆で塞がれている。漆膜が厚く、栓の有無は判然としない。245 は頸部内面から胴部内面にかけて、漆が厚く付着する。胴部側の破断面にもほぼ一面に漆が付着し、胴部を横方向に半割して漆を取り出した状況が看取できる。頸部内面に栓の痕跡は見出せない。246 も 243 や 245 などと同じパターンであり、頸部内面および胴部内面に漆が厚く付着し、胴部側の破断面にも漆が付着する。頸部内面には布と考えられる痕跡が残り、頸部を固着した漆とともに塞いでいる。247 は頸部内外面および胴部の破断面に漆が残る。頸部外面には焼成時に須恵器片が溶着している。248 は頸部内面に膜状の漆と木質の一部が残る。胴部内面および破断面の全体に漆が付着し、他の多くと同様に胴部を横方向に半割している。頸部内面の木質と膜については、木栓と紙などである可能性が高い。

249 ～ 261 は口縁部を肥厚、もしくは上下に拡張する甕類である。249 は頸部に 2 条の沈線を巡らせるもので、頸部内面は漆が固着して塞がっている。250 および 251 は口縁端部を下方に拡張する。250 は頸部内面から口縁端部にかけて粗い平織りの布が漆で固まっている。かなりの厚みをもっており、頸部を塞ぐ栓として用いられていたものと考えられる。251 は頸部に 2 条の沈線を巡らせる。栓の痕跡は残らないが、頸部内面と口縁部外面の一部に漆が付着する。252 は短い口縁部の端部を肥厚する。焼成不良で土師質である。内側には布が漆で固められて残っており、その下には平滑な膜が見える。この膜はきわめて平滑であり、紙を内面に落し込んだ後に布を用いて蓋にしたものと考えられる。253 は器形や焼成に至るまで、252 と酷似する。口縁部内側の布は残らないものの、紙と考えられる平滑な膜があり、蓋に関しても共通する。同一箇所から搬入された漆容器であると考えられる。254 は狭く短い口縁部をもつ壺である。焼成不良である。胴部内面および破断面には漆が厚く付着している。口縁端部の内側には漆が固着して塞がっている。当該部分には栓の痕跡がネガティブに残っている。栓そのものは残っていないが、漆膜の中心には 3 × 2 ㎜の孔があり、これは後述する 255 も同様である。漆膜には木目などが観察できず、木栓とは断言できない。口縁端部からの深さは 4.7 ㎜であり、薄い円盤状の栓であったと考えられる。255 も 254 と同様に焼成がややあまい。口縁部内側には栓の痕跡がネガティブに残っている。状況は 254 と同じであり、ほぼ中心に直径 1.6 ㎜の孔がある。器形および蓋の仕方が共通しており、252 と 253 の関係と同様に同一箇所からもたらされたものである可能性が高い。256 は肩部に 1 条の沈線をもつ。頸部から胴部にかけての内面に漆が付着する。257 は胴部の中位で半割された破片が接合するものである。両者の破断面には漆が付着しており、漆の取り出しに際して割られたものであることがわかる。内面は口縁端部に至るまで、漆が付着しており、とくに胴部上半から頸部にかけては漆が襞状となって厚く固着する。258 は木栓が残り、口縁部を塞いでいる。内面および破断面には漆が厚く付着する。外面には垂れた漆が筋状に付着する。木栓は直径約 2.2 ㎝の円形で上方は朽ちて残らない。口縁端部の内径は 3.5 ㎝であり、木栓の周囲には詰め物がある。漆で固着しているため、判然としないが布である可能性が高い。259 は小型の広口壺である。内面の全面および胴部下半の破断面に漆が付着する。頸部から胴部にかけては藁のような植物繊維が漆に付着している。後述する 262 の状況を勘案するならば、栓に用いられていたものである可能性が高い。猿投窯系か。260 は器壁が厚い広口壺である。頸部から胴部にかけての内面と破断面に漆が付着する。頸部内面の漆膜には栓の痕跡が残る。

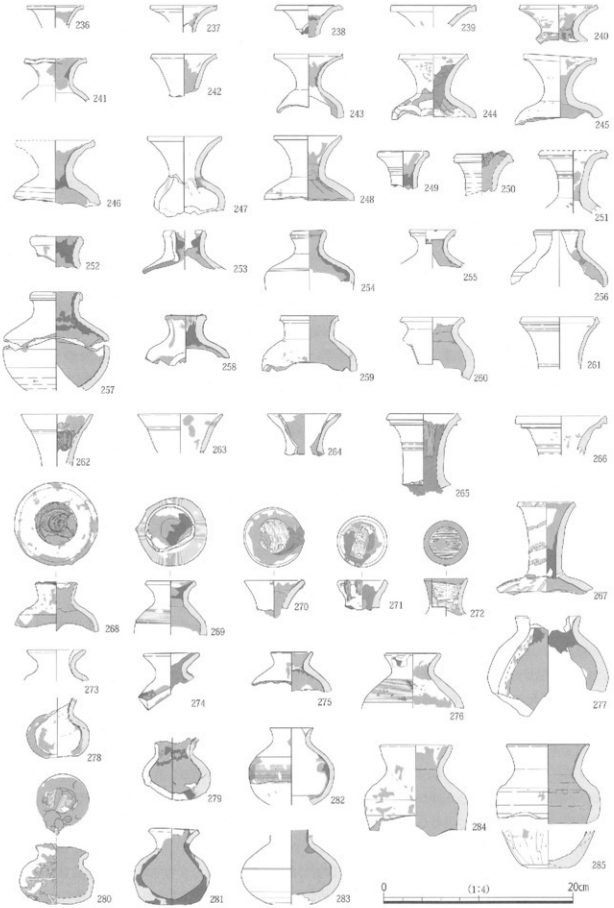


図30　谷２出土漆容器（３）

261はフラスコ形土器の口縁部で、内面にわずかに漆膜が残る。湖西窯産か。262は口縁部の細片ではあるが、蓋をした栓の構造がよく分かる事例である。この栓は藁状の植物を束ねたものを芯として、その周囲に布を巻いて補充したものである。芯となる藁束は縦方向に並べたものを同じ藏を用いて周囲を横方向にまとめている。布は平織りで目はかなり粗い。263は内面に部分的に漆膜が残る。264は口縁部が半割された状態であり、内面と破断面に漆が付着する。口縁部近くには蕊状の繊維が固着している。265・266はフラスコ形土器とも呼称される東海系の細頸瓶の口縁部で、いずれも猿投窯系の須恵器である。265は頸部の付け根で割れているが、この部分の破断面に漆が付着しており、古い段階の割れであることが看取される。内面と外面に暗緑色の自然釉が厚くかかる。頸部内面には直径2.3㎝、長さ3.7㎝以上の木栓の痕跡がネガティブに残り、周囲には隙間を補填した布が重層的に確認できる。266は頸部内面の一部に漆膜が残るのみである。267は口縁端部に波状文をもつ細頸壺である。胴部は東海地方のフラスコ形土器と共通する作りである。頸部中位にのみ釉がかかっている。蛍光X線分析の結果、鉛は検出されなかった。頸部から胴部上半までを斜め方向の列点文で埋めている。頸部と胴部は人為的に割られており、胴部側の破断面にのみ漆が付着する。頸部内面には栓に用いられていた布が器壁に沿って残っている。268は壷の上半部が完存する。内面および破断面の全面に漆が付着し、外面にも部分的に漆膜が確認できる。口縁部には蓋自体は残らないが、サザエの蓋痕跡がみられ、さらにその上面には、部分的ではあるが口縁端部を覆うように二重の漆膜が残る。この内側では胴部にかけて漆が固着して頸部を塞いでいる。サザエの蓋を用いて栓をした後、口縁端部までを覆うように紙などで蓋をした状況が看取される。269は268と同様に胴部の中位で横方向に半割されている。内面および破断面に漆が付着する。口縁部内面には木栓の痕跡が部分的に残る。270は打ち欠かれた口縁部である。破断面に漆が付着する。直径約3.5㎝の木栓の痕跡が残り、頸部は固着した漆で塞がれている。口縁部外面にはこぼれた漆が筋状に付着している。271も270と同様に人為的に打ち欠かれた口縁部である。長さ3.6㎝、幅1.4㎝の短冊形の木片と幅1.5㎝で長さ不明の木片を十字に交差させて蓋にしている。口縁部外面には縦方向に植物繊維が付着している。他の事例で見られる籠の素材と同じものであり、籠の痕跡である可能性もあるが、蓋の構造に関わるものである可能性も残す。272は木栓が残る。木栓は口縁部の内側にあわせるように裁頭円錐形を呈し、上端直径3.4㎝、下端直径1.7㎝、長さ1.9㎝を測る。下方の隙間には紙と考えられるものを充填している。木栓の中心には直径3.7㎜の穿孔があり、上面ではこの孔から噴出した漆が固着している。外面にもほぼ全面に飴色の漆が付着している。276は肩部にカキメをもつ。上半部が残り、内面と破断面に漆が付着する。頸部内面にも漆が残るが、栓の痕跡は見出せない。273・274は大きく外反する口縁部をもつ。273は灰白色の色調で、他の須恵器よりも白っぽく、美濃須衛産の可能性がある。頸部内面および下方の破断面に漆が付着する。274は口縁部から胴部にかけての内面全体に漆が付着する。外面には口縁から垂れた筋状の漆が見られるほか、胴部にも部分的に漆が付着する。275は短く外反する口縁をもつ。頸部内面には布の痕跡が残り、当該部分で頸部は塞がっている。内面には襞状となった漆が破断面を含めて厚く付着している。277は瓦質焼成で器壁が厚い。頸部の内側で漆が塊となって固着しており、上面は滑らかな膜状を呈している。

278～280は小振りの壺であり、278と279はいずれも縦方向に半割して漆を取り出している。内面および破断面に漆が付着する。280は今回の調査で出土した漆容器のうちで唯一の完形品である。口縁部内面には蓋にされていた2枚以上の板が斜めに落ち込んだ状態で残る。外面にはこぼれ出た漆によって籠目が良好な状態で残っており、亀甲編みの籠に入れられていたことが看取される。底部には

文字のヘラ記号がある。281は平底気味の底部をもつものであり、他の小型壷と同様に縦方向に半割されている。内面および破断面には漆が付着する。口縁部に栓の痕跡は残らない。282は内面と破断面に漆が付着し、外面にも部分的に漆膜が付着する。283は軟質な焼成であり、胎土や色調は254と似る。内面全体に漆が付着し、頸部直下では漆が塊となって固着する。284・285は瓦質焼成で器壁も厚い。いずれも胴部中位を横方向に割っており、285では直接的には接合しないが、平底の底部をもつ胴部下半が出土している。焼成や形態的特徴が共通しており、同一箇所からもたらされたものであると判断できる。

286～303は口縁部が短く垂直に立ち上がる短頸壷である。なお、口縁部が残らず、厳密には短頸壷とは断じえないものも含んでいる。286は小型の短頸壷で、口縁端部は外反気味である。内面の一部に漆が付着するのみである。287は灰白色を呈する。内面と破断面、外面の一部に漆が付着する。口縁部の内側は端部直下の漆に木質の痕跡が残り、円盤状の木栓で蓋をしていたと考えられる。288は内面と下方の破断面に飴色の漆が付着する。外面にもわずかに漆膜が確認できる。289は内面全体に飴色の漆が付着する。口縁部内面にも漆膜が残るが、栓の痕跡は観察できない。290は白っぽい胎土に緑色の自然釉がかかる。内外面に漆は残らないが、破断面に漆が付着する。美濃須衝窯系か。291は縦方向に半割された短頸壷である。外面には暗緑色の自然釉がかかり、蓋の端部が溶着している。底部は平底気味である。内面および破断面に漆が付着し、胴部内面では大きな塊となって漆が固着している。猿投窯系か。292・293は短い口縁部をもち、肩が張る。292は胴部上半を斜めに割られている。胴部下半は縦方向のヘラケズリ、肩部の自然釉には焼成時の蓋の痕跡が残る。内面および下方の破断面に漆が厚く付着する。外面にもわずかに漆が付着する。293は内面全体に飴色の漆が薄く付着する。外面には肩部を中心に筋状に漆が残る。294は口縁部がやや受口状を呈する。肩部には焼成時の蓋の痕跡が残る。破断面にわずかに漆が残るのみである。295は口縁部の形態が290と似る。肩部に1条の沈線が巡る。破断面にわずかに漆が残るのみである。296は灰白色の精製な胎土をもち、器壁が薄い。肩部には小さな豆状の浮文が残り、1箇所に剥離痕も残る。内面および下方の破断面に漆が付着する。湖西窯産である。297は胴部上半部が完存する。口縁部内側には木栓の痕跡が残り、その下では漆が厚く固着している。外面には口縁部から筋状にこぼれた漆が付着し、一部では籠目の痕跡が確認できる。他例の多くと同じ亀甲編みの籠であった可能性が高い。298は口縁端部に面をもつ。内外面および破断面の一部に漆が残る。湖西窯産である。299はきわめて扁平な胴部をもつ。肩部には強い3条の沈線が巡り、その下方にはカキメが施される。肩部には3条の平行沈線によるヘラ記号がある。内面および下方の破断面に漆が付着し、頸部外面には横方向の植物繊維が漆によって固まっている。300は294と同様の口縁形態をもち、胎土や色調も似る。内面および口縁部外面に漆が付着する。301は外面に弱い2条の沈線を巡らせる。内面には漆が薄く付着するが、栓の痕跡は残らない。302は口縁端部および胴部下半を欠失する。口縁部内側には直径6.63㎝、厚さ0.86㎝の木栓の痕跡が残る。この木栓の中心には1.07㎝の穿孔があり、この部分で漆が塊となって固着している。単独で出土した木栓379などと同様の形態をもつものであった可能性が高い。栓の内側では漆が塊となって固着している。胴部下方の破断面には漆が付着しており、胴部を横方向に打ち欠いて漆を取り出した状況が看取される。303は肩部に1条の沈線を巡らせる。内面および破断面に飴色の漆が付着する。外面にも部分的に漆が付着する。栓の痕跡は見られない。

304～332は細部では形態が異なるものの、長胴の体部と短い口縁部をもつ一群で、漆の専用容器

と考えられるものである。304 は直口の短い口縁部をもつものであり、口縁部径に差があるものの、形態・色調ともに後述する 312 に似る。内面および破断面に漆が付着する。305 は口縁部が外反気味にのびるものである。内面は口縁端部から胴部に至るまでの全面に漆が付着するが、外面にはわずかに漆膜が確認される程度である。306 は口縁部内に木栓の痕跡が残る。木栓は上端で直径約 1.7 ㎝、長さは 3 ㎝以上の裁頭円錐形である。胴部内面に残る漆は大きな塊となって固着している。307 は内面の全面に漆が付着する。栓の痕跡は確認できない。外面には口縁部から筋状の漆膜がのびており、部分的に籠目が残る。308 は長胴の体部に短く外反する口縁部をもつ。内面と破断面の一部にのみ薄く漆膜が残る。栓の痕跡はみられない。309 は樽形の胴部に直口の口縁部をもつ。瓦質焼成である。胴部外面は下半が横方向のヘラケズリ、上半は口縁部にかけて縦方向の板ナデ調整である。内面には飴色の漆が全体に付着する。縦方向に半割されており、底部近くの破断面と外面には漆が付着する。310 は 308 と類似する口縁形態をもつ。底面を打ち欠いて漆を取り出しているため、底部は残らないが、残存部の形状からみて丸底に近いものであった可能性が高い。内部は頸部から胴部の中位まで漆が塊となって固着している。下半の漆膜には漆を掻き出した際の痕跡が筋状に残る。猿投窯系か。311 は下膨れの胴部をもち、底部は丸底気味である。口縁部は残らないが、外反する口縁部と考えられ、308 や 310 に近い形状であったとも考えられる。内面の一部に漆膜が残るのみである。312 は直立する短い口縁部をもつ。頸部内面には漆が塊となって固着する。栓は布である可能性が高いが、漆膜に覆われているために判然としない。内面には全面に漆が付着しており、漆を掻き出した際の痕跡が筋状に残る。外面に垂れた筋状の漆に亀甲編みの籠の痕跡が残る。313 は口縁部のみの破片で、焼成不良のため赤褐色を呈する。内面の一部に漆が付着する。314・315 は 312 と同じ形態の口縁部をもつ。314 は口縁部内側に藁などの植物繊維を束ねた栓の痕跡が残り、頸部外面にも巻きつけられた植物繊維の痕跡が残る。315 は栓が残るが、漆で覆われているためにその性状は判然としない。316 は平底である。外面と破断面の一部に漆が付着する。317・318 はやや上げ底気味の平底をもつ。両者ともに胴部上半を斜めに削ぎ落とすように打ち欠いて、漆を取り出している。内面および破断面に漆が付着する。319・320 は不整な平底をもつ。319 は胴部上半を斜めに削ぎ落とすように打ち欠かいている。内面の全体に漆が付着し、外面にもこぼれ出た漆が付着している。320 は頸部付近で打ち欠いている。内面および破断面に漆が付着する。321 は 316 の形態に近い平底をもつ。内面および破断面に飴色の漆が付着する。322 は焼成があまく、土師器に近い。内面および破断面に漆が付着する。323 は分厚い底部をもつ。内面および破断面に漆が付着しており、胴部を横方向に半割している。内面には同一個体と考えられる須恵器片が固着している。324 は下膨れの胴部をもつもので、胴部の高さは異なるが、大局的には 311 や後述する 329 と類似する。内外面および胴部の破断面に漆が付着しており、縦方向に半割して漆を取り出した状況が看取される。325 は 323 と近い平底をもつものであり、破断面にのみ漆が残る。326 は平底に直線的な胴部をもつ。内面および上方の破断面に漆が付着する。327 は底部のみの破片である。胴部にカキメがみられ、小型の壷の底部である可能性も高いが、器壁が厚く、調整は粗雑である。内面と破断面に漆が付着する。328 は平底の底部をもつ。内面および破断面と外面の一部に漆が付着する。329 は下膨れの腹部に平底気味の底部をもつ長胴の壷である。底面は平らではなく安定しない。胴部上半の約半部を打ち欠かれており、内面および破断面に漆が付着する。330 は他例に比して器壁が厚く大型である。内面および破断面と外面の一部に漆が付着する。331 は厚い器壁をもつ平底の壺である。縦方向に半割されており、内面および破断面に厚く漆が付着する。外面にこぼれ出した漆には大振りの亀甲編みの籠の痕跡が残る。332 は胴

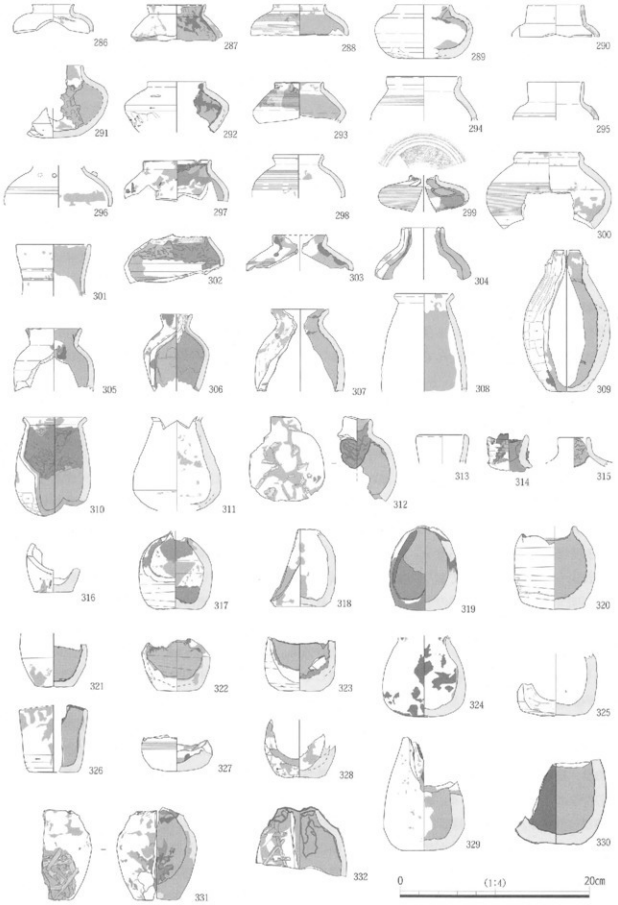


図31　谷２出土漆容器（４）

部上半が残るのみである。下半の割れは新しい段階のものであるが、頸部の打ち欠きは古い段階のものである。頸部および外面に漆の付着が顕著であり、頸部から上を打ち欠くことによって漆を取り出した可能性がある。外面には亀甲編みの籠の痕跡が残る。

333 ～ 345 は口縁部が外反する壺である。333 は内面と側面の破断面の一部に漆が付着する。334 は口縁端部に面をもつ。側面の破断面に漆が付着する。335 は直口気味の口縁部に縁帯をもつ。内面および破断面に漆が付着し、口縁部には塊となった漆が固着する。口縁部外面には筋状の漆膜が残る。336 および 337 は内面および外面の一部に漆が付着する。破断面の一部にも漆膜が残る。338 は器壁が厚く、胴部下半はタタキ調整である。内面および破断面に漆が付着する。外面にも部分的に漆が薄く付着している。339 は口縁端部から胴部中位に至るまでの間に漆が塊となって固着している。下方の破断面にもわずかに漆が付着する。頸部付近には膜状を呈する漆の薄層がみられ、紙などで栓をしていた可能性がある。340 は口縁部内面の一部に漆が薄く付着するのみである。341 は内面および下方の破断面に漆が付着する。342 は口縁部に縁帯をもち、肩部には 7 条の沈線を巡らせる。内面には漆が厚く付着するが、栓の痕跡は確認できない。343 は口縁端部を外方につまみ出す。内面全体および破断面と外面の一部に漆が付着する。344 は肩部に 1 条の沈線が巡る。内面全体および破断面と外面の一部に漆が付着する。345 は口縁部が大きく焼き歪んでいる。内面および破断面に飴色の漆が付着する。栓の痕跡はみられない。

346 は提瓶である。提瓶を漆容器としたものは多くなく、当該資料以外では 14 点が確認できるのみである。頸部内面に漆が固着しており、その上面には漆が膜状を呈している。紙などを用いて栓としている可能性があるものの、その性状は不明である。

347 ～ 367 は平瓶である。347 は 2 条の沈線をもつ。内面の漆は筋状になっている部分があり、漆を取り出す時ではなく、漆を入れる際に付いたものである可能性も考えられる。破断面に漆は付着しない。348 は灰白色を呈し、緑色の自然釉がかかる。内面と破断面の一部に漆が付着する。湖西窯産である。349 は 1 条の沈線を巡らせる。内面には厚く漆が付着する。口縁部内面の漆は細かい木の葉をちりばめたように微妙に凸凹しており、木栓などの補填材が漆で固着している可能性があるものの、その性状は不明である。350 は内面の全体に漆が付着する。口縁部内面の漆膜は表面が凸凹するが、栓の痕跡は見出せない。351 は口縁端部内面および頸部側の破断面に漆が付着する。湖西窯産である。352 は外面に 1 条の沈線を巡らせる。内面には木栓の痕跡が残る。木栓は直径 3.4 ㎝、長さ 3.9 ㎝以上の円柱形であり、器壁との隙間には補填材が残る。漆で固着しているため性状は不明であるが、布の可能性が高い。頸部内面は固着した漆でほとんど塞がれた状態である。頸部の破断面にも漆が付着し、この部分から外面に向かって筋状の漆がのびている。353 は残存範囲内に 1 条の沈線を巡らせる。口縁端部内面にわずかに漆が付着するのみである。354 は内面全体に漆が付着する。口縁端部から 3.7 ㎝の位置に漆膜が張っており、痕跡は残らないが、本来は栓があった可能性が高い。355 は小型の平瓶である。胴部上面に円形の浮文が 1 箇所に付される。胴部を縦方向に半割して漆を取り出している。内面および破断面に飴色の漆が付着する。356 は口縁部と胴部下半が打ち欠かれている。頸部内面は漆が固着して塞がっている。当該部分には布のようなものが観察できるが、漆に覆われており判然としない。内面は全体に漆が付着しており、頸部および胴部の破断面にも漆膜が残る。湖西窯産である。357 も 356 と同様に口縁部と胴部下半が打ち欠かれている。頸部内面は布を重ねて栓にしていた状況が看取され、当該部分は漆が固着して塞がっている。胴部内面および破断面には漆が付着し、外面には筋状の漆膜が付いている。358 は

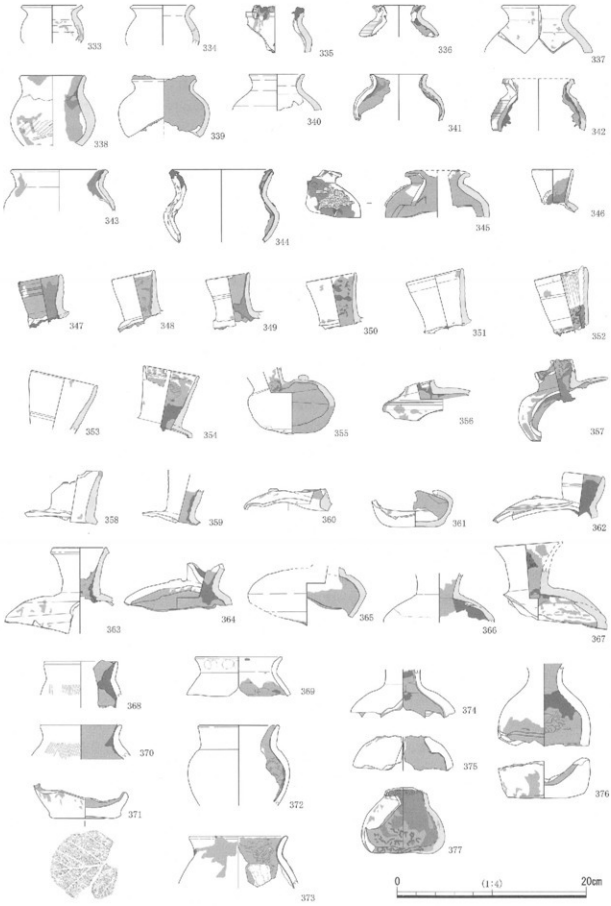


図32　谷２出土漆容器（５）

灰白色を呈し、緑色の自然釉がかかる。口縁端部には面をもち、他の平瓶とは区別される。口縁部には1条の沈線を巡らせ、内面と破断面の一部には漆が付着する。湖西窯産である。359は頸部内面に漆が付着する。漆膜は表面は凸凹が激しいが、栓の痕跡は見出せない。湖西窯産である。360は胴部上半が残るのみである。内面および破断面に漆が付着するが、その範囲は広くない。部分的に残るのみであるが、口縁を胴部の中心近くに付加している。355と同様に1箇所にのみ円形浮文を付している。361はやや撓成があまい。肩の張る扁平な体部の形態的特徴から、小型の平瓶と考えているが、断定はできない。内面には一方に偏して漆が塊となって固着している。破断面の一部に漆が付着する。362は口縁部から胴部上半までが残る。口縁部内側は漆膜が波を打って塞いでおり、頸部までの間で漆が塊となって固着している。口縁部には不明瞭な沈線が巡る。胴部の上面には2条の沈線が巡り、ほぼ中心の1箇所にのみ円形浮文が貼り付けられている。363は口縁端部に縁帯を付す。内面および破断面に漆が付着する。頸部内面には栓と器壁の間に充填されていた布が残る。猿投窯系の製品である可能性が高い。364は灰白色を呈し、胴部上面の全体に緑色の自然釉がかかる。内面および破断面に漆が付着する。口縁部の内側には茶褐色の漆膜があり、これによって頸部は塞がれている。性状は不明ながらも、栓であると考えられる。美濃須衛窯系の須恵器である可能性が高いが、断定はできない。355・360・362と同様に胴部の上面には1箇所のみ円形浮文が貼り付けられる。365は胴部上半のみが残り、内面と下方の破断面に漆が付着する。漆にはかなり砂礫が付着する。美濃須衛産か。366は胴部上半の一部が残るのみである。口縁部は胴部の中心近くに付されるが、製作技法は平瓶である。内面と下方の破断面に漆が付着する。367は肩部に1条の沈線を巡らせ、外反する口縁部をもつ。内面および破断面に漆が付着する。口縁部内面には布が漆で固着しているが、木栓などは残らない。

368～377は土師質の漆容器である。368・370は胴部に縦方向のハケメをもつ。368は頸部内面で漆が塊となって固着しており、口縁端部近くでは繭状の植物繊維が付着している。370も同様に内面に漆が厚く付着しており、口縁部内側では内傾する平滑な面があり、蓋の痕跡であると考えられる。木目の痕跡等は確認できない。369は内面に薄く漆が残るのみである。372・373は内面に厚く漆が付着するが、蓋の痕跡は見出せない。371は木葉の圧痕をもつ平底の底部片である。外面は底部から胴部の一部にかけて黒斑がある。内面および破断面の一部には漆が付着している。底部片であることから、全容は不明であるが、木葉痕をもつ平底の上師器という特徴から関東地方以北からもたらされた可能性がある。374は後述する376と胎土や色調が似る。徳利形の器形をもち、内面および下方の破断面に漆が付着する。375は肩部のみが残る。内面と打ち欠かれた頸部の破断面に漆が顕著であり、頸部を打ち欠いて漆を取り出した可能性が高い。376は内面および胴部の破断面に飴色の漆が厚く付着する。頸部の内面には漆で固まった布が観察できる。木栓などで蓋をしていた可能性が高いが痕跡から栓の性状を推定することは困難である。なお、直接的には接合しないものの、同時に出土した平底の底部片は胎土・色調ともに酷似しており、同一個体である可能性がきわめて高い。377は下膨れの扁平な胴部をもつ。口縁部が残らないが、頸部内側に栓に使われていた布の痕跡がある。頸部から胴部中位にかけて、漆が塊となって固着している。底部を斜めに削ぎ落とすように打ち欠いて漆を取り出した状況が確認できる。

3．漆関連遺物

（1）木製品

11c層からは漆容器などとともに数量的には多くはないが、漆が付着した木製品や漆の漉し布などが出土している。他の木製品については後述するが、漆容器と関連する木製品等に関しては一項を設けて

ここで報告する。

378 は長さ 13.3 ㎝を測る棒状の木製品である。割り放しの方柱形の木の両端を人為的に加工したものである。両端の形状は異なり、一方の端は各面から斜めに削り落して方錐形とし、他方は先端で直径 1.2 ㎝の円柱状に加工されている。円柱状に削り出された側は全体に黒っぽく変色しており、未加工部分との境界付近には直径１～２㎜前後の漆の飛沫が見られる。鼈などの木栓とするには、長すぎることや円柱部への漆の付着が薄く、固着した木栓をこじ開けたり、穿孔部分をきっかけに鼈を打ち欠く際に用いられたものである可能性を憶測するが、推測の域をでるものではない。379 は円盤状を呈する漆容器の木栓である。直径 5.31 ㎝の柾目板の側面を斜めに加工する。下端部の直径は 4.25 ㎝、厚さは 1.24 ㎝である。中心には 7.2 × 6.1 ㎜、長さ 4.92 ㎝の方柱形の棒が差し込まれている。この棒の先端は不規則ではあるが、面取りされている。円盤の下方には漆が厚く付着するが、上面は部分的に漆が付着するのみである。一方、棒の部分には薄いものの、漆を塗布したような状態で付着している。

380・381 は漆が付着するヘラ状木製品である。両者ともに漆塗りのためのハケではなく、漆を掻き出す際に用いられたものの可能性が高い。380 は長さ 5.57 ㎝、幅 1.29 ㎝、厚さ 2.3 ㎜を測る。平滑な柾目の板材を用いており、一方の端部の表裏両面に漆が付着している。381 は長さ 15.6 ㎝、広端幅 2.13 ㎝、狭端幅 0.95 ㎝、厚さ 3.9 ㎜を測る。円柱形の材を削ぎ落したものであり、漆が付着する狭端部は面取りされる。

（2）漉し布

382 ～ 385 は漆の漉し布が固まったものであり、図化したもの以外にも３点が出土している。

いずれも平織りの布目圧痕が残り、絞り目も明瞭に観察できる。382 では 1 ㎝^{2} に 8 × 6 本、385 では 11 × 10 本前後の織り目が確認できる。これ以外にも、植物繊維などの不純物が漆で固まったものが２点出土しており、当地周辺に漆が搬入され、濾過作業が行われていたことを示す資料である。

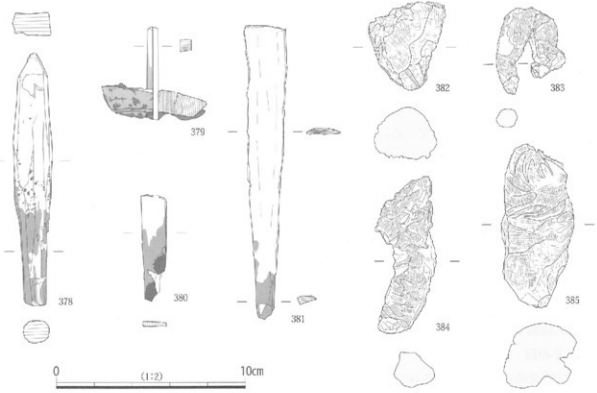


図 33　谷２（11・13 層）出土漆関連遺物

4．瓦塼類

後期難波宮に使用された瓦塼が古代～近世の遺構から、遺物整理箱にして約20箱出土した。ここでは出土した瓦当をもつ軒丸瓦・軒平瓦の全てと、特長的な平瓦・塼を紹介する。

出土遺構・層序は豊臣時代の堀83や江戸時代の土坑5など、後世のものからの検出が目立つが、奈良時代包含層（谷1・2）からのものもある。軒丸瓦は重圏文10点と蓮華文3点、軒平瓦は重圏文8点と唐草文3点と、重圏文が多い。重圏文の型式番号の根拠である計測値は表4・5に示した。

(1) 軒丸瓦

388と397が谷2の11b層、391が谷2の13層出土である以外は、堀83など近世以降の遺構からの検出である。392～394が蓮華文である以外は重圏文である。

重圏文386は太い圏線と内向斜縁をもつ。難波宮跡では未だ知られていない型式である。387は繊細な圏線をもつ6021型式で、第1圏と第2圏に挟まれた地に楕円形の深い穴をもつ。388は直立縁をもつ6012型式で、瓦当裏面に指頭痕を残すが平らに仕上げられている。389も6021型式で内向斜縁をもつ。390は磨滅が顕著だが6015B型式で、瓦当裏面は平らである。391も6015B型式で、瓦当裏面の丸瓦接合の補強方法が看取できる。瓦当裏面中央はやや凹む。

392は複弁八弁蓮華文の6303型式で、硬緻な須恵質の仕上がりである。瓦当裏面中央は指で掻き取られ、大きく凹む。393も6303型式だが、瓦当裏面中央は平らである。394も鋸歯文の大きさ・配置から6303型式の可能性がある。

395～398は重圏文の細片で、以下の型式番号は可能性にとどまる。395は6015Aか6016型式、396・397は6022型式、398は6015B型式の可能性がある。

(2) 軒平瓦

402が谷2の11a～13層、403が11b層、404が中世層である9層、405が奈良時代後期の11層出土である以外は、堀83からの検出である。407～409が唐草文、以外は重圏文である。

重圏文399は瓦当面中央に十印をもつ6572A型式で、直線顎をもつ。凸面は縄目タタキ痕が弧を描くように刻まれ、凹面は上外縁に幅1.5㎝、左側辺に幅1～3㎝の浅い面取りを加えている。400は瓦当面中央に十印をもつ6574A型式で、全長は39.7㎝。直線顎に近い曲線顎をもち、凸面は縄目タタキ痕が斜め方向に刻まれるが、丁寧にスリ消されている。凹面左側辺に幅3㎝の浅い面取りを加えた後、尻隅を三角形に面取りしている。401は6572H型式で曲線顎。402は6572F型式で曲線顎。403は6572のC・D・E・G・H型式のいずれかで、404は6572H型式である。405・406は6574B型式で、405は直線顎をもち、凸面にタテ方向の縄目タタキ痕が密に見られ、凹面は上外縁に幅2㎝の面取りを加え、右側辺を焼成後に打ち欠く。406はやはり直線顎で、全長は32.3㎝と短く、凸面にはタテ方向の縄目タタキ痕が密に施され、凹面は上外縁を幅2.5㎝にわたってナデてカキ目をいれ、右側辺を焼成後に打ち欠いている。

唐草文407は6664A型式で段顎をもち、平瓦部凸面にヨコ方向の縄目タタキ痕が見られる。408・409は6664B型式で段顎をもち、408はやはり平瓦部凸面にヨコ方向の縄目タタキ痕をもち、凹面の上外縁には幅2㎝の面取りを加える。

(3) その他

410は奈良時代包含層である谷2の11a層出土の平瓦で、凸面に大柄な斜格子のタタキ痕をもつ。411は谷1の11層（下層）出土の須恵質の平瓦で、厚さ1.1～1.3㎝と薄く、凸面は疎らに斜格子タ

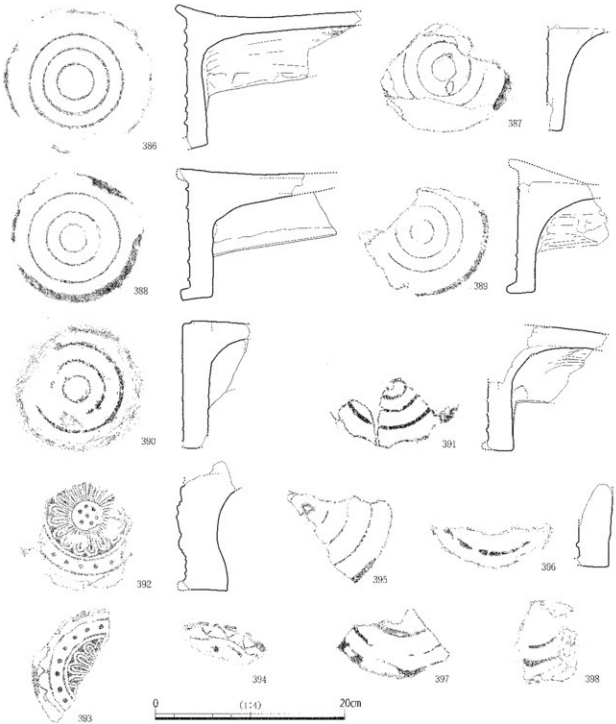


図 34　古代軒丸瓦

表 4　重圏文軒丸瓦計測表

遺物番号	直径	内区				外区			瓦当厚	色調	硬度	型式番号
		第一圏内径	第二圏内径	第三圏内径	内区径	外縁幅	外縁高	外縁特徴				
386	15.0	3.3	6.2	9.0	12.2	1.5	1.4	内面斜縁	3.2	灰色	やや軟	不明
387	13.6	2.4	5.5	8.1	11.0	1.5	0.7	やや内向斜縁	2.9	灰色	軟	6024
388	13.7	2.6	5.3	9.2	11.1	1.4	1.0	直立縁	2.4	暗灰色	やや軟	6012
389	13.9	2.2	5.2	8.2	11.3	1.4	1.0	やや内向斜縁	3.1	灰色	やや軟	6021
390	13.7	2.6	5.2	8.6	11.7	0.9	-	-	-	灰色	軟	6015B
391	(13.8)	(2.8)	(5.4)	(8.8)	12.0	1.2	0.6	やや内向斜縁	3.3	暗赤色	軟	6015A
395	(17.8)	3.9	(8.0)	(12.7)	(16.0)	1.1	0.6	直立縁	3.7	灰色	軟	6015A か、6016 の可能性
396	(15.4)	-	(6.8)	(10.6)	(13.6)	1.0	-	-	-	暗赤色	軟	6022 の可能性
397	(15.2)	-	(6.4)	(11.0)	(13.2)	1.3	-	直立縁	3.7	褐黄色	軟	6022 の可能性
398	-	(2.8)	(5.4)	(9.0)	(12.0)	-	-	-	-	灰白色	軟	6015B の可能性

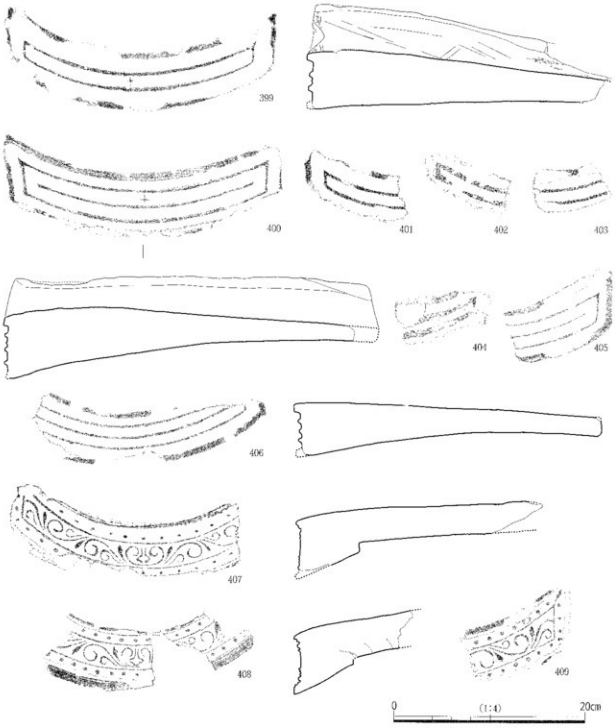


図 35　古代軒平瓦・平瓦

表 5　重圏文軒平瓦計測表

遺物番号	瓦当																		色調	硬度	型式番号
	上弦幅	下弦幅	弦深	厚さ	中央弧厚	圏内厚	圏外厚	内区厚	上外縁		下外縁		全長	平瓦部							
									幅	高	幅	高		凹弦幅	凹弦深	凹厚					
399	27.3	27.8	5.2	5.6	なし	0.9	2.1	4.1	1.0	0.7	0.5	0.7	-	-	-	-	暗灰色	軟	6572A
400	28.8	28.5	3.8	6.6	0.7	2.5	3.6	4.9	1.1	0.4	0.7	0.4	39.7	23.6	2.6	1.6	灰白色	やや軟	6574A
401	-	-	-	4.9	なし	0.8	2.2	3.5	1.0	0.6		-	-	-	-	-	灰色	やや軟	6572H
402	-		-	4.2	なし	0.8	2.0	3.0	0.8	-	-	-	-	-	-	-	灰白色	軟	6572F
403	-	-	-		なし	0.7	2.0	3.1	1.0	0.6	-	-	-	-	-	-	灰色	やや軟	6572I
404	-	-	-	4.3	なし	0.7	1.9	2.9	1.2	0.7	0.6	-	-	-	-	-	灰色	軟	6572H
405	-	-	-	5.6	0.5	1.8	2.6	4.2	1.0	0.5	0.9	0.6	-	-	-	-	灰色	やや軟	6574B
406		-	-	5.8	0.6	1.6	2.7	3.8	1.0	0.7	1.0	0.7	32.3	27.4	2.6	1.5	灰白	やや軟	6574B

タキを加え、凹面には布目痕が残る。

412・413はともにレンガ形をした厚めの塼で、軟質に焼き上がり煙されている。基壇の化粧積みに用いられたものと考えられる。

（4）小結

当調査地南側の大阪歴史博物館・ＮＨＫ敷地では、重圏文系と蓮華文・唐草文系の個体比率はほぼ半々であったが、当地では重圏文系が約4分の3を占める。重圏文系の多い朝堂院地域に比して、軒平瓦では6572型式が多いのも当地の特長である。

また410の大柄な斜格子タタキ痕は、播磨国分寺・国分尼寺周辺に見られる。既出の播磨国府系の軒丸瓦（大文セ2002、図版350の16）と相俟って、注目される。

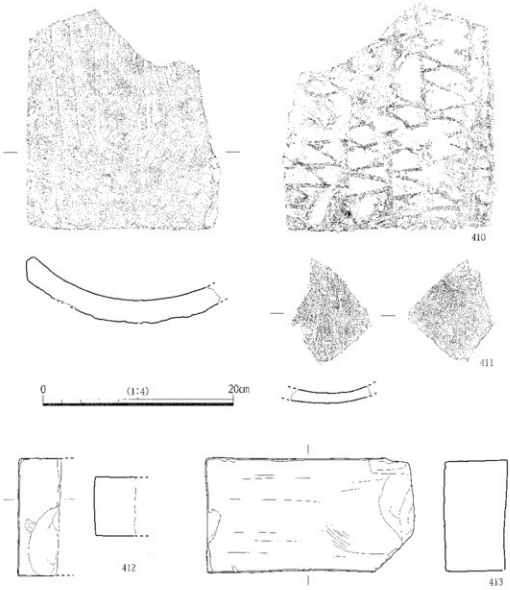


図36　平瓦・塼

5．木製品

（1）木簡

今回の調査では、谷1・谷2の11層および13層から木簡が出土している。なお、ここでは文字もしくは墨痕が残らないものの木簡の形状をもつ木簡状木製品もあわせて報告する。谷1は府警1期調査地で検出した谷につながるものであるが、今回の調査では調査面積が狭いこともあり、わずかに1点の木簡状木製品430が出土したのみである。一方、調査地の北東で新たに検出した谷2から出土した木簡は、前回の出土点数には及ばないものの、比較的まとまった数の木簡群といえる。

なお、図37・38の画像は赤外線スキャナーでスキャニングした画像をAdobe社のPhotoshopで明度とコントラストを調整したものである。

414は谷2の13層出土。木取りは板目である。下端部が折れて欠損、左辺および左上方は二次的な削りである。上端および上端から斜めに下りる面も切断面が平滑であり、二次的な削りである可能性を残す。表裏とも墨痕は明瞭である。表面の「委尓□久因支」は人名である可能性が高い。裏面には上半に明瞭な2文字があり、1文字目は「洛」の可能性もある。下半には不明瞭な墨痕が確認できる。2文字前後かと考えられるが、断定はできない。415は谷2の13層出土。木取りは柾目である。左右と下端が折損している。全体に墨痕はかすれている。6文字が確認できるが、一部の文字を除いて判読できない。裏面に墨痕はない。416は谷2の13a層出土。木取りは板目である。上端の左右に切り込みをもつ木簡であるが、左右ともに切り込み上方を欠損する。表面が荒れており、文字は不明瞭であるが、大振りな四文字分の墨痕が確認でき、2文字目は「俵」、3文字目は「一」の可能性がある。417は谷2の13b層出土。木取りは板目である。上下と右端が折損しており、下端は二次加工の可能性がある。厚さが不均衡であり、上方は7㎜前後、下端では約3㎜である。表面には比較的明瞭な文字が残るが、文字の中心で割れていることから、判読は困難である。裏面にも不明瞭ながらも文字が残る。判読は困難で、文字数も確定できない。418は谷2の13層出土。木取りは板目である。上方が折れ、左右は大半が削りによって、二次的に加工されている。下端は調査時に生じた欠損である。墨痕は明瞭であるが、四文字目が「下」と読める以外、判読は困難である。裏面に墨痕は確認できない。419は谷2の11c層と13a層の層境から出土した。板目材を用いた木簡であり、完存する。下端は裏面には刃物の痕跡が残る。肉眼では、ほとんど墨痕は見えないが、赤外線画像では上半に墨痕と考えられるシミが確認できる。文字・字数と

表6　木簡釈文一覧

414	・「□家君委尓□久因支鉄	(131)×(17)×3	081
	・「□費　□」□		
415	「□ロ之□者□	(139)×(15)×4	061
416	「〈俵〉イ□□□」	138×29×5	032
417	・「□□□□□□□」□□」□□	(226)×(12)×7	081
	・「□□□」	(139)×(15)×4	081
418	□□□　下［　］		
419	「〈下〉□□」	174×24×3	032
420	「〈下〉□□」	74×22×5	032
421	「九　〇」（刻書）	112×22×5	011
422	「□□」	(133)×(10)×4	081
423	「□□」	(80)×(6)×3	061
424	「□□」	(72)×(4)×3	011
425	「〈下〉□□」	189×34×5	032
426	「〈下〉□□「□」	73×13×4	032
427	「□□」	198×16×7	011

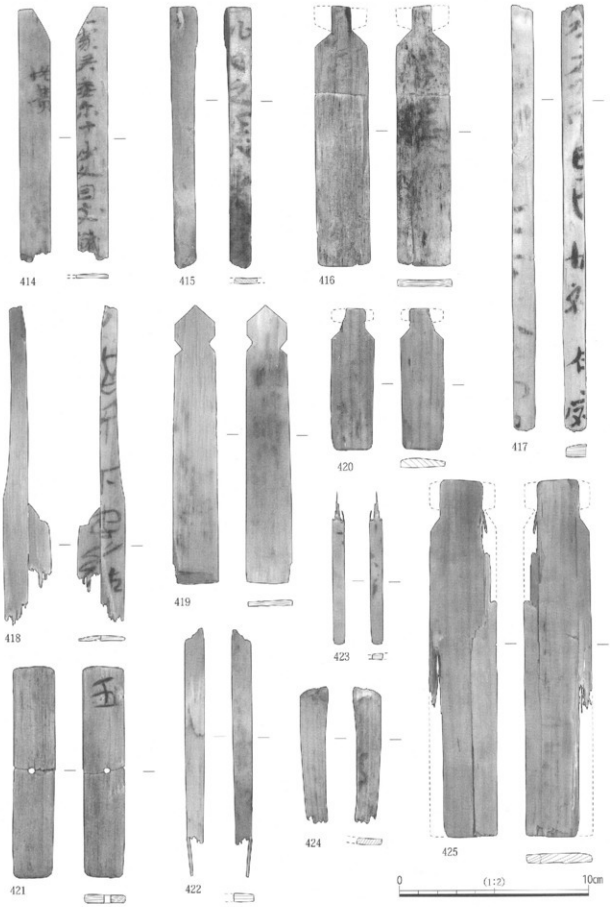


図 37　木簡（画像は赤外線スキャナーによる）

もに確定は困難である。切り込み部分を横断するように帯状の白っぽい部分が観察される。

420は谷２の13層出土の小型木簡。木取りは追柾目である。上端の左右に切り込みをもつ木簡であるが、左右ともに切り込み上方を欠損する。一方の面にのみ薄く墨痕が残るが、文字・文字数ともに確定できない。421は谷２の11c層出土。中央で折れるが、全体が完存。上端に「五」の刻書がある。この木簡の中位には直径約3.2㎜の穿孔がある。文字の線刻部分は黒色化しており、埋没過程での二次的な付着物である可能性もあるが、黒を落し込んでいる可能性も残る。線刻の切り合い関係は判別しがたい部分が多いが、１画目と２画目は逆順になっている。

422は谷２の13b層出土。木取りは板目である。右辺が残る以外は折損している。表面は丁寧に成形されているが、裏面は未成形である。表面にのみ薄い墨痕が残るが、文字数すら確認できない。423は谷２の13b層出土。木取りは板目である。上端は折損。左右両端は二次加工である。下端は旧状と考えられるが、二次的な加工である可能性も残す。下端の形状は417と似る。あるいは同じような転用目的を意図して二次加工した可能性もある。424は谷２の13層から出土した。木取りは柾目である。右辺が残る以外は折損している。表裏面ともに成形するが、表面にのみ墨痕が残る。絵馬の断片である可能性も残るが、絵馬に用いられる板材の裏面が基本的に未成形であることから、表裏面ともに成形を行う当該資料については木簡とした。425は谷２の11c層と13a層の層境から出土した。木取りは追柾目である。表面の下半に文字が残るが、判読は困難であり、文字数も確定できない。裏面の成形は粗く、墨痕も確認できない。426は谷２の11c層出土。追柾目材を用いた小型の木簡で、ほぼ完存する。切り込み部分は表裏面ともに変色せずに木地の色が残る。墨痕は薄く、一見すると文字は見えないが、一方の面にのみ４文字前後の文字がやや膨らんだ状態で残る。不明瞭であることに加えて、中心に木目が入っているために正確には判読できない。しかし、２文字目には横棒が２本見え、３文字目は「口」にも見える。また、４文字目は「了」や「子」などがその候補となる。427は谷２の13層から出土した。木取りは柾目である。整正な短冊形の木簡であるが、表裏面の調整はさほど丁寧ではない。側面の角は丁寧な面取りである。片面にのみ薄い墨痕が確認できるが全体に不明瞭である。

428は谷２の13層から出土した。木取りは板目である。表裏面・周縁ともに丁寧な成形を行うが、墨痕は残らない。429は谷２の11c層と13層の層境から出土した。細かい柾目材を用いるが、厚さは不均衡である。表面は平滑に成形されるが、裏面は木目が表出しており、未調整もしくは粗い調整である。430は谷１の11c層出土。非常に細かい柾目材を用いる。一方の面は未成形であり、表裏の区別がある。表面の下方には文字状の膨らみがあるが、文字か否かは判断できない。上方の傷は調査時のものであるが、中位の折れは古い段階のものである。

431は谷２の集石遺構160の直下から出土したものである。木取りは板目である。層位的には13層に対応する。上端の両側に切り込みの痕跡が残り、木簡状木製品と判断できるものである。集石遺構160の石材に挟まれた状態で埋没していたこともあり、全体に残りはよくない。表裏面ともに墨痕は確認できない。432は谷２の11c層から出土した。木取りは柾目である。右辺の一部を残す以外は折損している。上端に切り込みをもつが、墨痕は確認できない。433は谷２の11c層から出土した木簡状木製品である。木取りは板目である。上方の左辺に切り込みが残る。右辺は二次加工が施されている。全体に丁寧な成形であるが、裏面は表面が荒れた状態である。434は谷２の11層から出土した。木取りは柾目である。上方の一方に小さな切り込みがあることから、木簡状木製品としているが、切り込みが浅い上に小さく、別の用途をもつ木製品である可能性も残す。

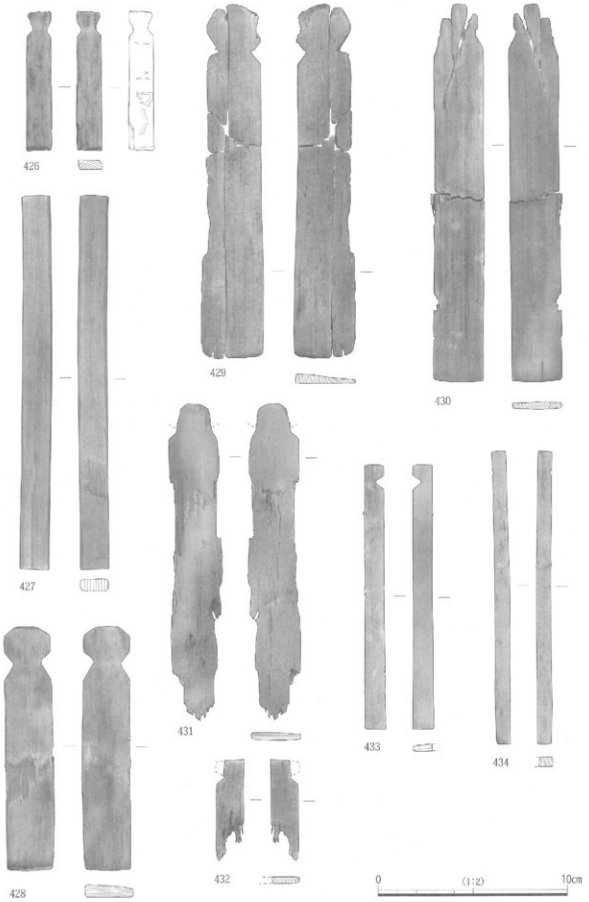


図 38　木簡・木簡状木製品（画像は赤外線スキャナーによる）

（2）絵馬

概要　今回の調査では、谷1の11層から2点、谷2の11層から31点、合計33点の絵馬が出土した。このほか、絵画は確認できないものの、絵馬である可能性が高い板材が4点出土している。いずれも層位的にみて、埋没年代は奈良時代のものである。

個別の記述を進める前に今回の調査で出土した絵馬について概観する。

出土した絵馬の多くは完全な形を残さないが、脚部や鞍などの特徴的な絵画が残ることから、絵馬と判断できるものが多い。多くは断片ではあるが、接合作業や固体識別を経た数が、冒頭で記述した個体数である。

多くの絵馬は木取りの関係もあり、横方向に短冊形に割れているものが多く、高さは判然としないものが多いが、幅に関しては旧状を残すものが多い。幅は完存するものでは絵馬9が最小で17.6㎝、絵馬12が最大で30.2㎝であるが、多くは20～24㎝の範囲におさまる。上端部の中央に穿孔をもつものが5点確認できるが、上端部が残存していても穿孔しないものも存在する。このうち、絵馬1や絵馬20などは工具を用いて円形の穿孔を行うものであるが、絵馬2や絵馬6などは釘などを打ち込んだために生じたものと考えられるものである。

描かれた馬は基本的には鞍などを装着した飾り馬であり、胸繋や尻繋、障泥や鐙などを表現するものもある。いずれも手馴れた筆致で描かれており、多くは輪郭線を墨で描くが、必ずしも一様ではない。

描かれた馬は、確認できるものでは、およそ半々の割合で右向きと左向きがあり、雌雄の区別が表現されるものもある。頭部の向きを別とすれば、基本的な全体構図は共通する。右向きの場合は左前肢と左後肢を上げ、左向きの場合は右前肢と右後肢を上げ、頭部は顎を引いた形である。

ただ、細かく見ると絵馬のすべてが同一の絵師の手になるものではないことは明らかである。馬の描き方には複数のパターンがあり、筋肉の細部に至るまでを墨画で表現するものや体部に赤色顔料を塗布するものもある。また、彩色が残らないものでも、体部のみが白っぽくなっているものもあり、これらについては彩色されていた可能性が高いものと判断している。また、一部の絵馬では手綱等を赤色顔料を用いて描かれていたことも看取できる。

以下、個別に報告を進めるが、絵馬に関しては向後の研究資料への引用などを考慮し、報告書全体を通しての遺物番号以外に固有番号を付与しておく。なお、絵馬の番号についてはすでに現地説明会資料（大文セ 2004a）やシンポジウム資料（大文セ 2004b）において調査時に付した絵馬番号を公示しているが、その後の整理過程で接合したり、新たに確認したものもあり、基本的にはすべての番号を新たに付与しているので留意いただきたい。

なお、絵馬の実測にあたっては、赤外線フラットスキャナーもしくは通常のフラットスキャナーで原寸の画像を読み込み、その画像をPhotoshop上で明度・コントラストの調整を行い、それを原画として実物を観察することによって細部の確認を行ったうえで、Illustrater上でデジタルトレースしたものである。また、断面図については通有の実測方法で実測しているが、木目については非常に細かい柾目材の場合などでは間引きして表現した部分もあり、あくまでも木取りを見るための目安程度と捉えていただきたい。

また、ここでは絵画が残らず、絵馬とは所定できないものの、絵馬と共通する幅や厚さをもつ板材についても、絵馬の蓋然性が高いという判断に基づき、木簡と木簡状木製品のごとく、絵馬状木製品としてあわせて報告することにした。

絵馬１（435）　谷１の11c層から裏面を上に向けて出土した。大きく５片に割れているが、ほぼ完形に復元できる。上端部幅23.15㎝、下端部幅22.95㎝、右辺15.88㎝、左辺15.51㎝を測る。木取りは板目である。表面は平滑に成形されるが、裏面は未成形であり、表裏の区別が明確である。したがって、裏面の凹凸は著しく、このため板材の厚さも均等ではなく。最も厚い部分で10.2㎜、最も薄い部分では5.8㎜である。側面は切断時に生じた凹凸がおよそ２㎜間隔で規則的に連続している。

上端部の中央に直径3.6㎜の穿孔がある。穿孔は表側から行われているが、断面は臼状を呈し、錐を用いたものではなく、刀子などの刃物の先端を用いて抉り取ったような穿孔方法が想定される。穿孔部分には紐擦れなどの摩滅はみられない。

表面にのみ絵画があり、板材の下端に左の前後肢を着けて、板材いっぱいに左向きの馬を描いている。絵画は全体に不明瞭となっており、肉眼では細部を視認することが困難である。しかしながら、図39に掲げた赤外線画像では非常に丁寧に細部まで描き込まれた馬であることが看取できる。また、白黒を反転した画像によっても馬の輪郭を追うことができる。赤外線画像をみると、墨による線が残るのは、臀部から左後肢にかけての輪郭と鞍から頸部にかけての輪郭、胸部から右前肢にかけての輪郭、尻尾などである。そのほかの部分はわずかに痕跡が追える程度であるが、線描された部分が暗色の木地に比して白く浮き出しており、馬の輪郭を追うことができる。左前肢にとくに顕著であるが、筋肉を線描することも特徴的である。また、股間には男性器の表現があり、牡馬を描いたものであることがわかる。

鞍は輪郭を線描し、その内側を薄めの墨で塗りつぶしている。鞍の周囲には不明瞭ながらもぼんやりと暗色の部分があり、障泥が表現されていたことがわかる。鞍の下方にはひときわ濃く墨が置かれた部分があり、位置的にみてこの部分は鐙を表現したものと考えられる。手綱と面繋のほか、胸繋、尻繋も線描されるが、当該部分は他の輪郭線などと比して際立っており、墨痕は一切残らない。後述する絵馬３・５などで手綱等が赤色顔料で描かれていることを勘案すれば、この絵馬に関しても手綱等の装具は顔料を用いて描かれていた可能性が高い。

また、絵馬全体に関しても輪郭の内外では、外側が黒ずんでいるのに対して、内側は白っぽく、木地に輪郭線等を線描しただけではなく、体部全体に着色していた可能性もある。

絵馬２（436）　谷２の11c層から出土した。旧府警本部棟の基礎杭により、右下部は後世に大きく歪んでいる。最も残りのよい中位での幅は25.75㎝である。下部を欠失し、短冊状に細かく割れるものの、墨痕も明瞭でおおむね全体の状況を知ることができる。

下端の割れは古い段階でのものであるが、意図的なものかは不明である。木取りは追柾目である。表面は平滑に成形されているが、裏面は未成形である。板材の厚さは最も厚い部分で4.8㎜、最も薄い部分では3.7㎜を測る。両側面ともにキリオリで成形されている。上端部の中央には矩形の穿孔があり、長辺3.6㎜、短辺1.9㎜を測る。この穿孔は工具を用いたものではなく、形状等からみて、釘などを打ち込んだことによって生じたものと想定される。

絵画は表面のみで、板材いっぱいに左向きの馬を描いている。股間には男性器の表現はない。絵画の線描は明瞭で、墨の濃淡を用いて細部まで表現している。絵馬１と同様に、左前肢の付け根などでは筋肉を線描する。鞍は輪郭が墨で線描されるが、その内側は塗りつぶさない。鞍の下方には障泥が描かれるが、内側を濃く、外側を薄くして同心円状に描いている。臀部の側面には逆U字形の線描があり、尻繋を表現した可能性もあるが、前後のつながりがなく、断定できない。障泥の下部には胴部を超えて下方にのびる線があり、これは位置的にみて鐙を表現したものであると判断できる。

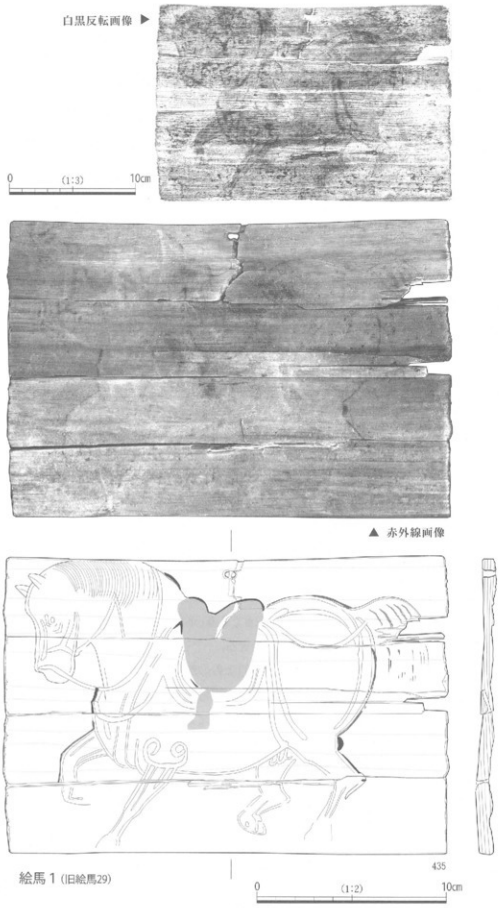
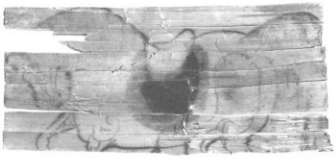
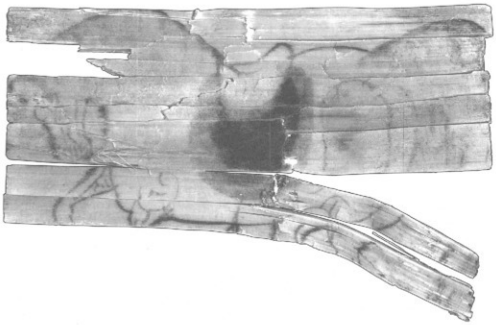


図 39 絵馬（1）

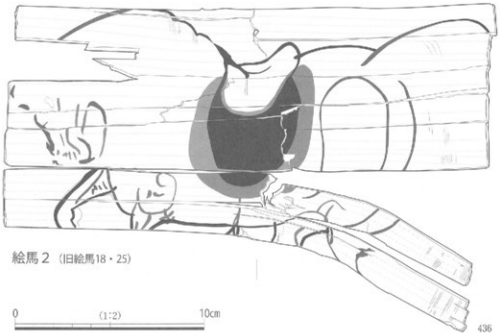
破片の歪みを補正した復元画像 ▶



0　(1:3)　10cm



▲ 赤外線画像



絵馬２（旧絵馬18・25）

0　(1:2)　10cm

436

図40　絵馬（２）

また、全体に輪郭の内外では内側が白く、右前肢の後方では墨による輪郭線を超えた位置に明暗の境界が確認できる。また、わずかではあるが臀部周辺が赤く見えることなどを勘案すると体部全体を赤色顔料等で彩色していた可能性が高いものと判断する。

絵馬３（437） 谷２の11c層から出土した。上下両端を欠失するが、表面を下方に向けて出土したこともあり、残存部分の状態は比較的良好である。上下端の割れは古い段階のものであるが、意図的なものか否かは不明である。

幅は上部で19.98㎝、下部で20.02㎝、高さは左辺で9.42㎝、右辺で9.38㎝が残存する。木取りは板目である。表面はきわめて平滑に成形されており、さほど風化もみられないが、加工痕は看取できない。裏面は他の絵馬に比して平滑ではあるが、未成形であり、表裏面の区別が明確である。厚さは均質であり、最も薄い部分で5.0㎜、最も厚い部分で6.3㎜を測る。両側面ともキリオリで成形されるが、切断面は垂直ではなく、いずれも斜めに傾いている。なお、側面の切断面は当該絵馬を下方から見た場合、左辺、右辺ともに右上から左下へと60°前後の傾斜をもつ。刃はいずれも基本的には表面側から入れられており、複数回にわたって断続的に切断した形跡が見られず、現代的にいえば、定規などを用いて、それに沿わせるような形で刃物を使うような作業を行った状況が想定される。ただし、左辺の裏側には浅く切り込みの痕跡がある。残存範囲内には穿孔は確認できない。

絵画は表面のみで、左向きの馬を描いている。右前肢を大きく上げ、胴部が丸く、さらに細線によって臀部に沿う長い尻尾が描かれるなど、特徴的な意匠である。性器の表現はなく、牝馬の可能性が高い。墨による線描が顔面の先端部とタテガミ、障泥部分のみである。これらの墨描き部分はきわめて明瞭であり、他の部分については経年変化で霧消したのではなく、もとより輪郭のすべてを墨描きしていなかったものと判断できる。この絵馬は図41の赤外線画像、赤外画像の階調を反転した画像をみてもわかるように、暗色化した木地の中に絵画が白く浮き出しており、さらには紐の部分には赤色顔料が残っている。胸繋や尻繋、手綱や面繋のほか、障泥なども表現されるが、尻繋を除いて、紐の先端は胴部に巻き込むことなく、下方に垂れ下がっている。

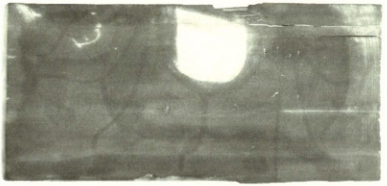
体部に塗布した顔料は残らないが、木地の明暗ではっきりと輪郭線が追えることなどを勘案すると、体部全体を着色していたと考えられる。また、紐の部分は体部の内側では赤色顔料が残らないのに対して、体部の外側では例外なく赤色顔料が残っている。これは、体部に着色した後に紐を赤色顔料で描いたため、体部内側の赤色顔料は体部の着色部の剥落とともに消滅したも可能性がある。

当該絵馬は、今回の調査で出土した絵馬の中でも、ひときわ特徴的な意匠をもつものであり、板材の加工も非常に丁寧である。この特徴を他の出土絵馬と照らし合わせると、後述する絵馬５が板材の加工や絵画の意匠にいたるまで、共通する点が多い。馬の向きが左右で異なってはいるが、シンメトリーになるようにセットで作られていたものである可能性も高い。ちなみに、絵馬３と絵馬５の出土地点の平面距離は約５ｍである。

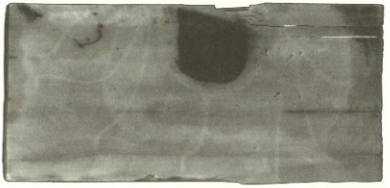
絵馬４（438） 谷２の11c層から出土した。現地調査では絵馬とは認識できず、地区毎に取り上げた遺物の洗浄中に見出したものである。したがって、厳密な出土位置は不明であるが、谷２の中央やや南寄りからの出土である。

幅は21.43㎝で旧状を保つが、上下端ともに短冊状に割れている。高さは左辺で2.60㎝、右辺で2.41㎝が残るのみである。厚さは比較的均質で最も薄い部分で4.5㎜、最も厚い部分で5.6㎜を測る。木取りは柾目である。表面は非常に平滑に成形されるが、裏面は未成形である。上下端の割れは、いずれも

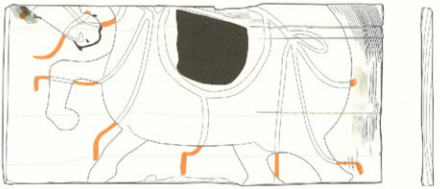
絵馬３
(旧絵馬31)



▲ 白黒反転画像



▲ 赤外線画像



437

絵馬４
(旧絵馬16)

▲ 赤外線画像

438

0　(1:2)　10cm

図41　絵馬（３）

古い段階のものであるが、意図的なものか否かは不明である。両側面の加工はいずれも摩滅および風化によって判然としない。

表面にのみ絵画があり、右向きの馬の胴部から脚部の付け根部分が看取される。全体に不明瞭ながら、墨描きによる輪郭線が残り、左前肢を上げた牡馬を描いていたことがわかる。尻尾の部分には墨が残らないが、線描部分が木地の部分よりわずかに膨らんでいる。残存部分では装具は確認できない。

輪郭線の内外での色調の変化はなく、顔料の残存も確認できない。

絵馬５（439） 谷２の11c層から出土した。上半部と下半部が二分した状態で出土し、表面を下に向けて出土した上半部の残りは良好であるのに対して、絵画の描かれた表面を上に向けて出土した下半部の残りは悪く、対照的である。全体を通して短冊形に細かく割れているが、馬が描かれた表面は上半部の残存状況は比較的良好であることから、馬の姿を追うことが可能となっている。

幅は全体に揃っており、20.15 ～ 20.20 ㎝を測る。高さは細かく割れていることから多少の誤差を含むが、最も残りのよい部分で 11.76 ㎝を測る。木取りは板目である。表面には加工痕は残らないものの、平滑に成形されている。一方、裏面は未調整であり、表裏が明確に区別されている。厚さは残りのよい上半部の破片では、上端が薄く 1.4 ㎜、下方の厚い部分では 5.3 ㎜である。下半部は全体に風化が著しく、かなりやせており、旧状を留めていない。側面はキリオリ成形で面取りは行わない。右上隅は面取りによって角を落している。この絵馬には穿孔はない。

表面にのみ絵画があり、下半は不明瞭ながらも、板材いっぱいに右向きの馬を描いていることが看取できる。馬の背中や臀部の上方は板材の上端からはみ出している。墨による線描が残るのは、頭部と顔の先端部、障泥部分にのみである。これらの墨描き部分はきわめて明瞭に残っており、状況からみて他の部分の墨が経年で霧消したとは考えがたく、当該絵馬に関しては、元来、輪郭のすべてを墨で線描していなかったものと判断する。この絵馬も他例と同様に暗色化した木地に比して、絵画部分が白く浮き出しており、それを追うことによって図 42 に掲げたように顎を引いた馬の姿が看取できる。下半は不明瞭で雌雄は不明である。

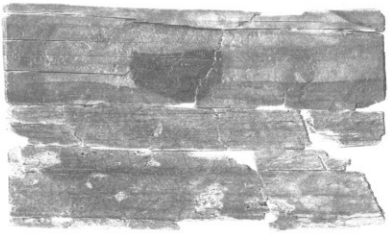
鞍の位置は墨が置かれていないのに対して、その下部の障泥と考えられる部分は真っ黒に塗りつぶされている。体部には尻繋、胸繋を構成する紐が表現され、顔面には面繋も描かれる。口の部分の紐の線描部分には赤色顔料が明瞭に残っている。

体部に塗布した顔料は残らないが、木地の明暗ではっきりと輪郭が追えることや墨による輪郭線が全周しないことなどを勘案すると、当該絵馬も体部全体を着色していた可能性が高いものと判断する。

絵馬３の報告でも記したように、当該絵馬の絵画意匠は頸のラインや胸繋や尻繋、さらには障泥や尻尾の描き方に至るまで、多くの点で絵馬３と共通する。板材の加工に関しても両サイドを整正に丁寧に切断する板目材を用いる点や、両者の幅が近似することなどから、両者はシンメトリーに馬を描いた絵馬のセットであったものと判断できる。

絵馬６（440） 谷２の11a層から出土した。他の絵馬が谷の法面近くに集中しているのに対して、当該絵馬のみ谷心線近い東側から出土している。横方向に細かく割れているが、右上方を欠失する以外はほぼ完存する。この絵馬は上方３分の２と下方３分の１がやや離れて出土し、前者の表面が比較的良好な状態で残っているのに対して、後者は表面が荒れて木目が浮き立っている。右上方の割れは人為的なものか否かは不明ながら、古い段階での折損である。

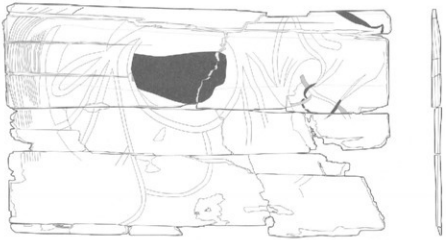
横幅は上端が残らないが、下端で 23.45 ㎝を測り、上方に向かってやや幅を減じている。左辺は



▲ 通常画像

▲ 赤外線画像

絵馬５（旧絵馬19・37）



0　(1:2)　10cm

図42　絵馬（4）

11.51 ㎝、右辺は復元すると 13.50 ㎝前後であったと考えられる。左右で 2 ㎝前後の差があるが、これは下端が緩やかにカーブを描いて成形されているためである。木取りは板目である。表面は平滑に成形されているが、裏面は未調整で、表裏が明確に意識されている。しかしながら、厚さは比較的均質であり、薄い部分で 3.6 ㎜、厚い部分でも 4.2 ㎜である。側面は左辺のみ丁寧な面取りが行われており、上下端とのコーナー部分も同様に面取りを行い、角を落している。上端部には中央に穿孔がある。この穿孔は矩形を呈し、長辺 3.5 ㎜、短辺 1.6 ㎜を測る。穿孔は絵馬 1 に見られるような工具を用いた穿孔ではなく、絵馬 2 と同様に釘を打ち込むことによって生じたものである可能性が高い。

表面にのみ絵画があり、前肢は不明ながらも右後肢を下端に接するようにして、板材いっぱいに右向きの馬を描いている。絵画は全体に不明瞭であり、とくに下半部は肉眼での視認は困難である。しかしながら、図 43 に掲げた赤外線画像をみると、不確定部分を残すものの、馬の輪郭を追うことが可能となる。全体の構図は他の絵馬と同様に左の前後肢を上げて、顎を引いた状態で描かれており、輪郭部分に墨による線描が看取できる。前肢および臀部では墨による輪郭線がない部分でも木地の色調に濃淡があり、顔料は残らないが、元来は体部の内側は着色されていた可能性がある。また、この絵馬では、臀部上方から尻尾にかけての部分の墨痕が筆で描いたものとすると不自然であり、型紙の輪郭をなぞった可能性もある。被は上部の輪郭は明瞭であるが、下半は不明瞭である。少なくとも鞍全体を塗りつぶすことはしていない。口にあたる部分には直径約 1.8 ㎝の円形を呈する白っぽい部分が観察でき、そこからは上方に向かって手綱と考えられる線描がある。円形の描写は位置的にみて轡の鏡板を表現したものと考えられる。

絵馬 7（441） 谷 1 の 11c 層から出土した。谷 1 から出土した絵馬は絵馬 1 と当該絵馬の 2 点のみである。絵馬 1 がほぼ完形に復元できるのに対して、当該絵馬は細片である。割れは古いものであるが、意図的な切断痕などは観察できない。残存部位は絵馬の右下隅部であり、右辺と下端の一部は旧状を留めている。幅は残存で 9.53 ㎝、高さは 6.59 ㎝が残るのみである。木取りは追柾目である。表裏ともに経年変化によって木目が浮き出しているが、表面が比較的平滑であるのに対して、裏面は未成形である。厚さは下端が 6.2 ㎜、上方はやや薄く 4.4 ㎜を測る。側面は風化によって木目が浮き出ており、切断痕は残らない。

絵画は表面のみで、後肢と尻尾の線描が視認できることから、左向きの馬を描いたものであることが看取される。肉眼でも赤外線画像においても墨痕は観察できず、線描部分が僅かに盛り上がっていることから、図像を追うことが可能となっている。左後肢を下端面に接するようにおき、右後肢を僅かに上げている。全体に線描が不明瞭であり、断定はできないが、牝馬の可能性が高い。また、他の絵馬の一部に見られるような輪郭線の内外での明暗差は看取できない。他例との比較によれば、元来は幅 19.5 ㎝、高さ 13.5 ㎝前後の絵馬であったと推定される。

絵馬 8（442） 谷 2 の 11c 層から出土した。調査区東端の側溝掘削中に出土したものであり、厳密な意味での出土位置は特定できない。ただし、多くの絵馬が谷の西側法面の下部に集中している中にあって、当該絵馬は絵馬 1 と同様に谷心線に近い位置からの出土である。

細片と化しており、全容は不明である。割れは古いものであるが、意図的な切断痕などは観察できない。残存部位は絵馬 7 と同様に絵馬の右下隅部であり、右辺と下端の一部は旧状を留めている。幅は残存で 12.92 ㎝、高さは 4.06 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。表裏ともに経年変化によって荒れているが、表面が比較的平滑であるのに対して、裏面は凹凸が目立つ未成形である。厚さは下端が 6.4 ㎜、

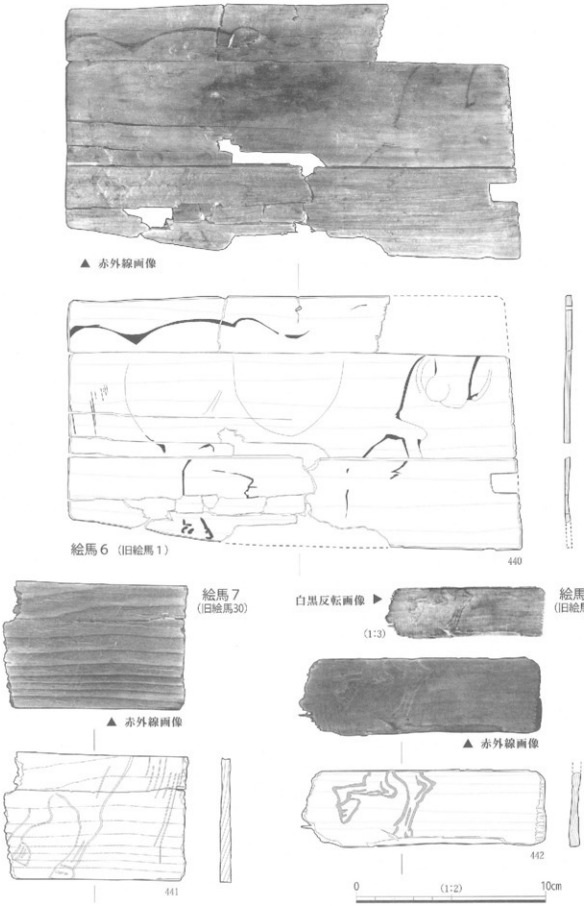

▲ 赤外線画像
絵馬６（旧絵馬１）
440
絵馬７
（旧絵馬30）
白黒反転画像 ▶
絵馬８
（旧絵馬12）
(1:3)
▲ 赤外線画像
▲ 赤外線画像
441
442
0
(1:2)
10cm

図43　絵馬（５）

上方はやや薄く3.5㎜を測る。側面の加工は表面側から斜め45°前後で刃を入れたキリオリである。

絵画は表面のみで、後肢が視認できることから、左向きの馬を描いたものであることが看取される。肉眼でも赤外線画像においても墨痕は観察できず、線描部分が明瞭に盛り上がっていることから、図像を追うことが可能となっている。左後肢を下端面に接するように置き、右後肢を大きく上げている。残存範囲では尻尾は確認できず、雌雄も判別不能である。他例のごとく輪郭線の内外での明暗差は見られず、筋肉を表現した線描を有する点が特徴的である。他例に比して後肢から板材の右辺までの間隔が大きいが、全体を復元すると幅21㎝前後の絵馬であった可能性が高い。

絵馬9（443） 谷2の西側法面下部の11c層から出土した。上部を欠失し、2片に割れるものの、残存状態は比較的良好である。

幅は下端で17.57㎝、上部では17.54㎝で、ほぼ均一である。高さは左辺で10.16㎝、右辺で10.33㎝が残存する。樹種はヒノキで木取りは柾目である。表面は平滑に成形されているのに対して、裏面は未成形である。厚さは下端が7.1㎜、上方はやや薄く3.7㎜を測る。側面の加工痕は不明瞭である。

絵画は表面のみで、肉太の筆致で墨描きされた輪郭線が明瞭に残っており、右向きの馬を描いたものであることが看取される。板材の下端に右の前後肢を接するように配置し、左の前後肢を上げる図像は他の絵馬にも共通する意匠である。股間に性器の表現はなく、牝馬の可能性がある。基本的に輪郭線を墨で描くが、一部では途切れる部分もある。なお、途切れた部分では、体部の内外で木地に明暗差が確認でき、輪郭を追うことができる。したがって、当該絵馬に関しても、体部には顔料が塗布されていたものと考えられる。また、全体に不明瞭ではあるが、胸繋などが表現されている。

全般に肉太の筆致であることや蹄の描き方などが非常に特徴的であり、基本的な構図などは共通するものの、細部では他の絵馬とは意匠を異にしている。

なお、当該絵馬は、奈良文化財研究所の協力を得て行った年輪年代測定によれば、最外年輪年代は西暦759年という測定結果が導き出された。樹皮を残さないことから、伐採年代は759＋α年ということになるが、当該絵馬は下端側には約2㎝の辺材部分を残しており、759年からさほど大きく時間を隔たらない時期に伐採された板材を用いていた可能性が高い。

絵馬10（444） 谷2の西側法面下部の11c層から出土した。後述する絵馬11と近接して出土しており、その距離は約20㎝を隔てるのみである。上部を欠失し、2片に割れている。割れはいずれも古い段階のものであるが、人為的なものか否かは不明である。状況から見て、全体がほぼ均等に3片に割れ、上部の破片が逸失していることがわかる。このような状況は、当該絵馬に限られたことではなく、絵馬9や後述する絵馬11でも酷似した破損状況を示していることは留意される点である。

幅は最大で22.53㎝、高さは右辺で9.54㎝が残存する。木取りは板目である。表面は平滑に成形されているが、裏面は未成形で凹凸が激しく、表裏の区別は明確である。左辺は摩滅が著しく加工痕は不明瞭であるが、右辺には切断時に生じた規則的な凹凸が連続して観察できる。板材の厚さは、最も薄い部分で4.8㎜、最も厚い部分で5.7㎜である。

表面にのみ絵画があり、板材の下端に右の前後肢を着けて、右向きの馬を描いている。股間部分は不明瞭ながら、性器の表現は視認できない。他の絵馬と同様に左の前後肢を上げて、顎を引いた構図である。輪郭線の大半は墨によって線描されているが、右後肢では輪郭線の外側に木地の明暗差による輪郭線が視認できる。他例との対比から、当該絵馬に関しても体部に顔料を塗布していた可能性が高い。

上部は欠失しているが、上端部には半月形に墨で塗りつぶされた箇所があり、その周縁部にもわずか

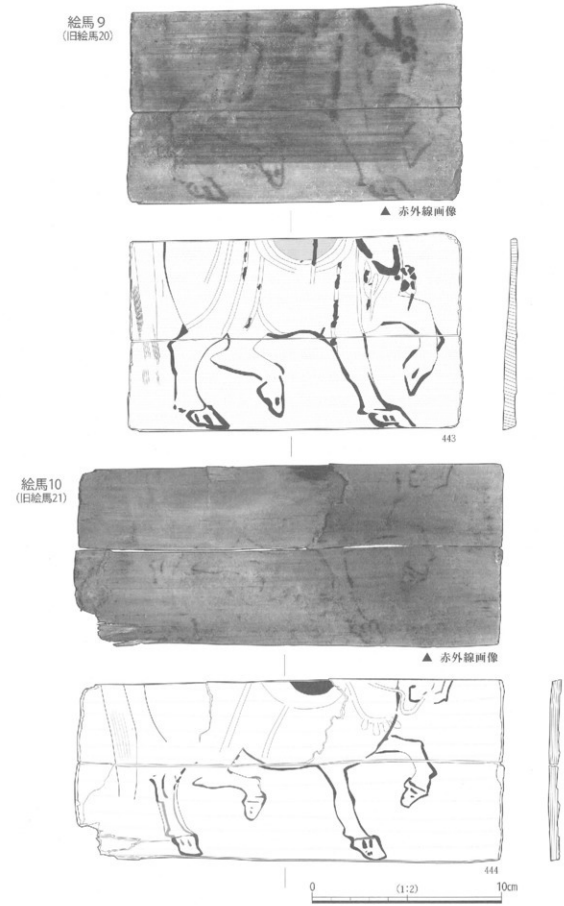


図44　絵馬（６）

に墨が残っている。位置的にみて被もしくは障泥であると考えられる。これ以外は全体に不明瞭であるが、手綱のほか、胸繋および尻繋などの紐の痕跡が僅かに白く浮き出している。きわめて不明瞭ながらも胸繋には何らかの飾りが下がっていた状況も看取される。これらの部分には墨痕はまったく残らず、他の顔料を用いて線描していた可能性が高い。

上記のように、当該絵馬には胸繋に装飾がある点を特徴とするが、このような胸繋は後述する絵馬11でも確認でき、出土位置が接近していることとあわせて近親性の高い絵馬である可能性が高い。すでに報告した絵馬3と絵馬5の関係と同様に顔の向きが左右の逆位であることも留意される点である。

絵馬11（445）　谷2の西側法面下部の11c層から出土した。絵馬10から20㎝ほど離れた東側から出土している。上半部と右辺側を欠損している。上方の割れは古い段階のものであるが、右側の割れは調査時の損傷である。幅は残存で最大21.63㎝、高さは8.18㎝が残存する。木取りは板目である。表面は平滑に成形されるが、裏面は未成形であり、表裏面の区別は明確である。板材の厚さは最も薄い部分で2.5㎜、最も厚い部分で6.8㎜である。薄い部分は圧密による二次的な変形であると考えられる。左辺はかなり凹凸が激しいものの、切断痕は明確ではない。

表面にのみ絵画があり、板材の下端に左前肢を着け、右前肢を上げた左向きの馬を描いている。後肢部分は欠失しているが、股間には下方に垂れ下がる牲器の表現があり、牡馬を描いたものであることがわかる。輪郭線を墨で線描するが、不明瞭な部分も多い。しかしながら、この絵馬では線描部分が白っぽく浮き出ており、比較的明瞭に図像を追うことができる。これによって、上半部が欠失によって不明ではあるが、上方からのびる紐の痕跡が確認でき、装具をもつ飾り馬を描いていたことが看取できる。なお、胸繋の下方には長楕円形の列点が表現されており、先に報告した絵馬10と同様に胸繋に飾りをもつものであったことがわかる。全容は不明であるが、他例と比較すると、幅26㎝前後、高さ16㎝前後を測る大型の絵馬であった可能性が高い。

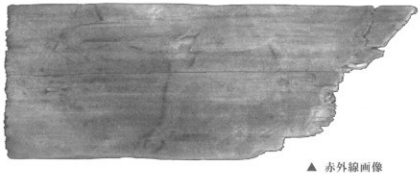
すでに、記したように当該絵馬は絵馬10と近接して出土している上に、意匠面においても共通する点が多い。元来、向かいあった雌雄の馬を描いたセットであった可能性も示唆されるところである。

絵馬12(446)　谷2の11c層から出土した。地区毎に取り上げた遺物の洗浄中に見出したものであり、厳密な意味での出土位置は特定できない。上部と下部を欠失するが、幅は田状を残す。上下の割れは古いものであるが、意図的な切断痕などは観察できない。

幅は30.16㎝、高さは左辺で8.67㎝、右辺で9.85㎝が残るのみである。木取りは追柾目である。表面は平滑に成形されるが、裏面は未成形である。裏面には左端から約5.3㎝の位置に垂直方向の浅い条線がある。中途で切断を止めた痕跡であるとも考えられるが即断はできない。厚さは左辺側は厚いが、右辺下部は非常に薄い。最も厚い部分で10.0㎜、最も薄い部分は2.3㎜を測る。側面の加工痕は明瞭ではないが、左辺は約1㎝の厚さをもつ板でありながら、ほぼ垂直に切断されている。

絵画は表面のみで、左向きの馬を描いている。上下を欠いているものの、右の前後肢を大きく上げる意匠は他の絵馬と共通する構図である。顔面の先端と脚部の辺りは墨による線描で輪郭線を描くが、これ以外の部分では視認できない。しかしながら、当該絵馬では体部にあたる部分が暗色化した木地の中で、明確に白っぽく浮き出しており、図像を追うことが可能となっている。墨描きによる線描部分はきわめて明瞭であり、他の部分については経年変化で霧消したのではなく、もとより輪郭のすべてを墨描きしていなかったものと判断できる。なお、股間に牲器の表現はなく、牝馬の可能性が高い。輪郭以外は全体に不明瞭であるが、胸繋と尻繋のほか、手綱や障泥はかろうじて見て取ることができる。障泥の

絵馬11
(旧絵馬15)



▲ 赤外線画像

絵馬12 (旧絵馬28)

▲ 通常画像

図45　絵馬（7）

下部には鐙とも考えられる表現があるが、非常に不鮮明であることから断言はできない。尻尾にも墨による線描はなく、輪郭のみが確認できることから、尻尾全体が着色されていたものと考えられる。体部はぼんやりと赤みを帯びており、後述する絵馬14と同様に体部には赤色顔料を塗布していた可能性が高い。当該絵馬は上下端を欠損するものの、幅約30㎝を測る大型の絵馬である。平城宮跡出土尺の1尺が30.25㎝であることなどを勘案すると（岩田1992）、当該絵馬はに幅1尺を意図して作られた可能性が高い。また、現状では古代の出土絵馬の中では平城京跡出土例を上回る最大のものである。

絵馬13（447）　谷2の11c層から出土した。地区毎に取り上げた遺物の洗浄中に見出したものであり、厳密な意味での出土位置は特定できない。全体としてはわずかな部分を残すのみであり、左辺の一部が旧状を留めるのみである。残存長は幅17.29㎝、高さ4.72㎝を測る。木取りは板目である。表面は平滑に成形されるが、裏面は未成形である。厚さは最も厚い部分で4.4㎜、最も薄い部分は3.0㎜を測る。側面の加工痕は明瞭ではない。

絵画は表面のみである。全体に絵画の残りは悪く、わずかに墨痕が残るほかは線描された部分がわずかに浮き出しているのが確認されるのみである。他例と対比すると、上部の黒っぽい部分が障泥である可能性が高いが、詳細は不明である。

絵馬14（448）　谷2の11c層から出土した。絵馬10・11の南側で、他の多くの絵馬と同様に西側法面の裾部付近から出土している。全体の2分の1弱が残るのみで、細かく割れている上に土圧による変形がみられ、全体に波打っている。しかしながら、木地の風化は顕著ではなく、下端および左辺、右辺ともに旧状を留め、絵画も明瞭である。上部の割れは古い段階のものであるが、意図的な切断痕などは観察できない。

幅は23.95㎝を測るが、上記のように二次的な変形がみられ、本来はもう少し長かった可能性がある。高さは左辺で6.38㎝が残存するのみである。木取りは柾目である。加工痕は観察できないものの、表面は非常に平滑に成形されている。裏面は未成形であるが、比較的平滑である。厚さは最も厚い部分で5.8㎜、最も薄い部分で3.4㎜を測る。側面の加工痕は明瞭ではないが、直線的に切断されている。

絵画は表面のみで、全体の下半部が明瞭に残り、右向きの馬を描いたものであることが看取できる。馬の構図は他例と共通するものであり、右の前後肢を板材下端に着け、左の前後肢を上げている。雌雄の判定は困難である。輪郭線は幅1.5㎜前後の肉太の筆致で墨描きし、その内側は蹄の部分を除いて赤色に塗られていた状況が看取される。赤色顔料は輪郭線の上にも及んでおり、墨で輪郭線を描いた後に赤色顔料を塗布したことがわかる。尻尾は繊細な筆使いで墨描きされており、非常に長く、先端は下端にまで及んでいる。他の絵馬の多くが蹄の中に列点もしくは数条の線を描くのに対して、本例は空白であり、右の前後肢には蹄の後方に斜めの線が付加されている。

当該絵馬は絵画の残りが非常に良好であり、赤馬を描いたものであることが確実な事例である。また、その意匠は非常に特徴的であり、少なくとも今回の調査で出土した絵馬の中には共通する意匠を有するものを見出すことはできない。

絵馬15（449）　谷2の11c層から出土した。地区毎に取り上げた遺物の洗浄中に見出したものであり、厳密には出土位置は特定できない。しかしながら、出土した地区をみると、谷の中でも多くの絵馬が出土している西側法面付近ではなく、谷心線に近い部分からの出土である。調査時の傷を含めて、細片と化している箇所も多く、全容は不明であり、絵馬14と同様に全体からすると下半の2分の1弱が残るのみである。

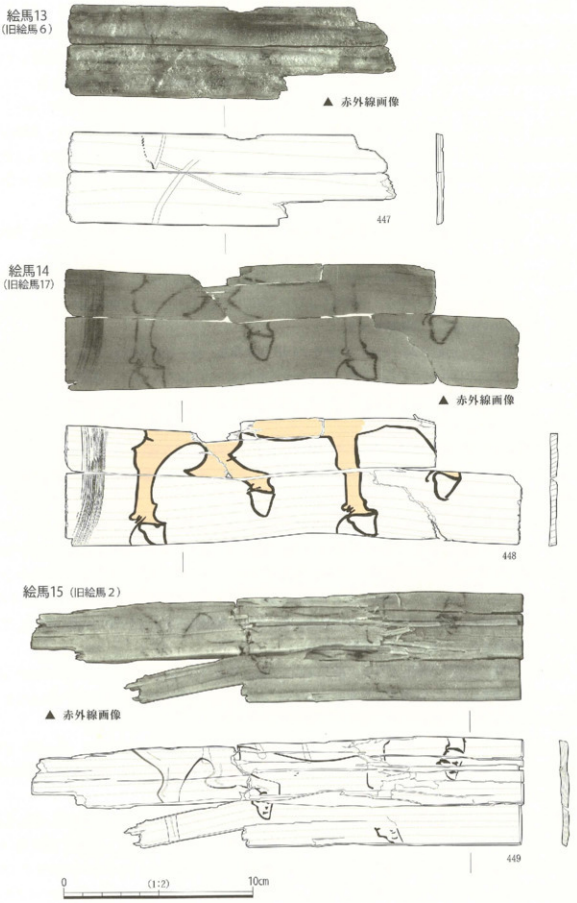

絵馬13
(旧絵馬６)
▲ 赤外線画像
447
絵馬14
(旧絵馬17)
▲ 赤外線画像
448
絵馬15（旧絵馬２）
▲ 赤外線画像
449
0
(1:2)
10cm

図46　絵馬（８）

幅は一部でかろうじて左右両端が残る。法量は幅 25.98 ㎝、高さは最大で 5.98 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。他例と同様に表面は非常に平滑に成形されるが、裏面は未成形である。厚さは最も厚い部分で 4.6 ㎜、最も薄い部分で 3.2 ㎜を測る。側面は表裏面から切り込みをいれて切断している。

絵画は表面のみである。断片的ではあるが、胴部下半と脚部が観察でき、右向きの馬を描いたものであることが看取できる。馬の描き方は他例と共通するものであり、右の前後肢を板材下端に着け、左の前後肢を上げている。股間には性器の表現はなく、牝馬を描いたものである可能性が高い。輪郭線は基本的に墨描きである。胴部には、3 条の線が上方から垂れ下がっているのが、明度の差によって観察できる。装具の紐の下端であると考えられるが、詳細は不明である。後肢の内側には稜線が描かれている。当該絵馬に関しては、輪郭線を挟んだ内外で木地の明度に差はない。

なお、当該絵馬の周辺からは同一個体と考えられる板材の断片が別に 5 片出土しているが、直接的には接合しない。

絵馬 16（450） 谷 2 の 11c 層から出土した。出土位置は西側法面下部で、後述する絵馬 22・23 と近接する。下部を欠失するものの、上端面および左右両辺は残存している。下端の割れは古いものであるが、意図的な切断痕などは確認できない。

幅はほぼ均一で、上端で 22.72 ㎝、下端で 22.49 ㎝を測る。高さは右辺で 8.71 ㎝、左辺で 8.64 ㎝が残存する。木取りは板目である。表裏ともに経年変化によって荒れているが、表面が比較的平滑であるのに対して、裏面は未成形である。厚さは下端が 3.5 ㎜、上方はやや薄く 2.0 ㎜を測る。側面の加工は不明瞭である。

表面の絵画は鞍などを除けば、全体に不明瞭であるが、右向きの馬を描いたものであることは看取できる。臀部と尻尾、顔の一部には墨描きの輪郭線がのこるが、その他の部分については不明瞭である。雌雄は不明である。

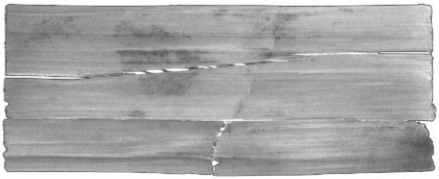
鞍は墨を用いて黒く塗りつぶされており、その下方には障泥も描かれている。障泥は鞍とともに黒く塗りつぶされていることから、両者の境界は不明確であるが、割れの部分で黒塗りされた部分が垂れており、当該箇所が鞍と障泥の境界部分であると考えられる。また、障泥は真っ黒に塗りつぶされた周縁にぼんやりと黒い部分があり、絵馬 2 などと同様に濃い墨と薄墨で塗り分けられていた可能性が高い。鞍と障泥以外の装具は確認できない。当該絵馬に関しても、輪郭線を挟んだ内外で木地の明度に差はなく、体部が着色されていたか否かは不明である。

上端部の中央には扁平な穿孔がある。横方向は 4.2 ㎜、縦方向は 3.2 ㎜である。穿孔は表側から行われ、断面は臼状を呈する。錐を用いた穿孔ではなく、刀子などの刃物の先端を用いて抉り取ったような穿孔方法であると考えられる。穿孔部分には紐擦れなどの摩滅はみられない。

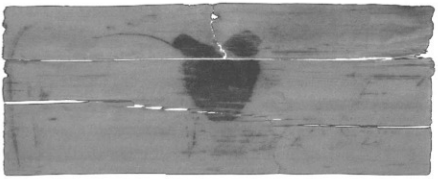
なお、当該絵馬の裏面には図 47 の赤外線画像に示したように、不明瞭ではあるが、黒っぽい部分が観察される。肉眼で見る限りは墨痕ではなく、シミのように見えるが、黒っぽい部分が鞍と障泥の形状に似ているのも事実である。

絵馬 17（451） 谷 2 の西側法面下部の 11c 層から出土した。左辺の一部を残す以外はいずれも欠損している。全体に残りはよくないが、左辺寄りに尻尾が描かれていることから、右向きの馬を描いたものであることが看取できる。幅は残存で 15.06 ㎝、高さは 4.46 ㎝を測る。厚さは厚い部分で 4.8 ㎜、薄い部分で 2.2 ㎜である。木取りは板目である。表面は平滑に成形されている。裏面は未成形であると考えられるが、比較的平滑である。

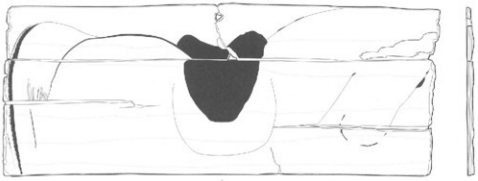
絵馬16
（旧絵馬４）



▲ 赤外線画像（裏面）



▲ 赤外線画像（表面）



450

絵馬17（旧絵馬26）

▲ 赤外線画像

451

絵馬18（旧絵馬11）

▲ 赤外線画像

452

0　(1:2)　10cm

図47　絵馬（９）

絵画は表面のみであり、上記のように右向きに馬を描いている。雌雄は判別不能である。鞍と障泥は部分的に残るのみであるが、全体を黒く塗りつぶしている。臀部から尻尾にかけての輪郭線は肉眼では視認できず、赤外線画像によってかろうじて判別できる程度である。

輪郭線を挟んだ内外において木地の明度に差はなく、体部が着色されていたか否かは不明である。

絵馬 18（452） 谷２の 11c 層から出土した小片である。地区毎に取り上げた遺物の洗浄中に見出したものであり、厳密な意味での出土位置は特定できない。左辺の一部を残す以外はいずれも欠損する。幅は残存で 4.86 ㎝、高さは 2.06 ㎝が残る。厚さはほぼ均一で 3.2 ㎜を測る。木取りは板目である。左辺の切断は表面側からのキリオリである。他例と同様に表面は平滑に成形されているが、裏面は未成形である。小片ではあるが、わずかに墨痕が残り、耳と考えられる線描が白く浮き出していることから、左向きの馬の頭部であると考えられる。

絵馬 19（453） 谷２の 11b 層から出土した。調査区北端近くで絵馬 12 と近接して出土している。短冊状に割れており、上端部と左辺の一部を残すのみである。一部に土圧による変形がみられる。いずれの割れも古い段階のものであるが、意図的な切断痕などは観察できない。

幅は残存で 18.19 ㎝、高さは左辺で 6.15 ㎝が残るのみである。木取りは追柾目である。明瞭な加工痕は観察できないものの、表面は非常に平滑に成形され、良好な状態で遺存している。裏面は未成形で、凹凸が激しく、表裏の区別は明確である。厚さは最も厚い部分で 4.3 ㎜、最も薄い部分で 2.5 ㎜を測る。左側面の加工は不明であるが直線的に切断されている。

絵画は表面のみであり、頭部および下半を欠いているが、右向きの馬を描いたものであることが看取できる。雌雄の判定はできない。輪郭線は繊細な筆致で墨描きされ、鞍と障泥は黒く塗りつぶされている。障泥の周囲は図示するまでには及ばないが、薄いながらも周囲に比して黒く、他例と同様に周縁部分を薄墨で塗り分けていた可能性もある。尻尾は外郭線を肉太に墨描きし、その内側を細線で埋めている。鞍と障泥以外の装具は視認できない。当該絵馬では上端部の過半が残存しているが、穿孔はみられない。全容は不明であるが、他例と比較すると、幅 20 ㎝前後を測る絵馬であった可能性が高い。

絵馬 20（454） 谷２の 11c 層から出土した。土層観察用セクションのすぐ北側から出土したものである。短冊状に割れており、上半部のみが残る。下方の割れは古い段階のものである。

幅は上端で 19.99 ㎝、残存部の下端で 20.12 ㎝、高さは左辺で 4.89 ㎝、右辺で 4.92 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。表面はほとんど風化せずに残っており、下半にカットグラス状のケズリが観察され、平滑に成形されている。裏面は未成形である。厚さはほとんど均一で最も厚い部分で 5.6 ㎜、最も薄い部分で 4.5 ㎜を測る。側面の加工は判然としないが、直線的ではなく微細な凹凸がある。

絵画は表面のみであり、全体に薄くはなっているが、比較的良好な状態である。頭部から尻尾にいたるまでの図像が視認でき、顎を引いた右向きの馬を描いたものであることが看取される。下半を欠失するために雌雄の判定はできない。絵馬 19 と同様に輪郭線は繊細な筆致で墨描きされ、鞍と障泥は黒く塗りつぶされている。輪郭線を挟んだ体部の内外で木地の明度に差があり、体部内面が着色されていた状況が窺われる。部分的に輪郭線の墨痕に被る箇所も確認されることから、輪郭線を墨で線描したのちに内面を着色したことがわかる。障泥の周囲には同心円状の線描の痕跡があるが、この部分は墨ではなく、顔料を用いていた可能性がある。同様に木地の明暗差によって面繋なども確認できる。臀部には輪郭線に沿う墨の線描がある。尻尾は上部を肉太に墨描きし、その下方を細線で埋めている。タテガミも墨描きの細線で丁寧に描かれていたことが観察できる。

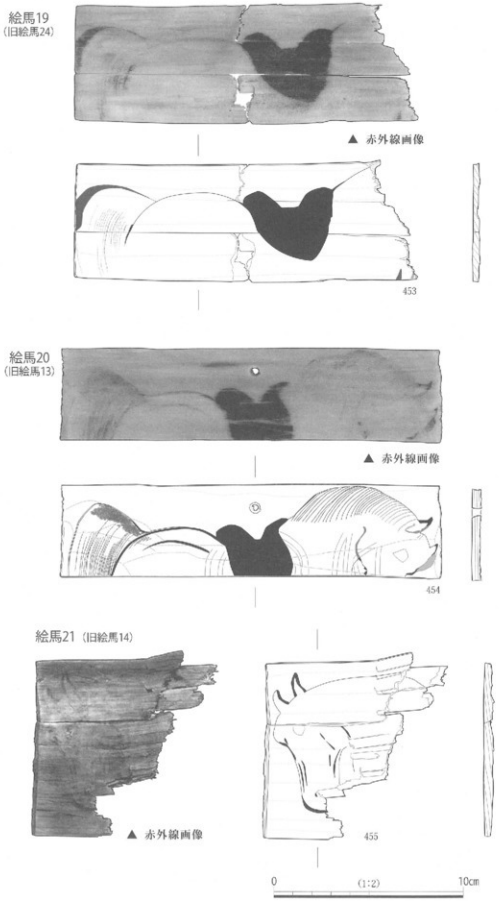

絵馬19
(旧絵馬24)
▲ 赤外線画像
453
絵馬20
(旧絵馬13)
▲ 赤外線画像
454
絵馬21 (旧絵馬14)
▲ 赤外線画像
455
0
(1:2)
10cm

図48　絵馬（10）

当該絵馬の上端部中央には直径 4.1 ㎜の穿孔がある。この穿孔は表裏両面から行われ、断面が鼓形を呈することから、錐を用いた穿孔ではなく、刀子などの先端を用いて抉るような方法がとられたものと考えられる。穿孔部に紐掛れなどは確認できない。

絵馬 21（455） 谷２の 11c 層から出土した。他の多くの絵馬と同様に谷２の西側法面の下部から出土したものである。絵馬全体からすれば、左上方の角を残すのみであるが、顔の部分が残っていることから、左向きの馬を描いたものであることがわかる。

幅は残存で 9.58 ㎝、高さは 9.37 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。他の絵馬と同様に表面は成形されるが、裏面は未成形である。厚さは最も厚い部分で 4.8 ㎜、最も薄い部分で 3.3 ㎜を測る。側面の加工は表面側からのキリオリである。

絵画は表面のみで、全体に不明瞭ではあるが、墨で線描された頭部の輪郭線が看取でき、馬の図像部分全体が木地よりも白く浮き上がっている。他例との比較から、全体に顔料が塗布されていた可能性が高い。赤外線画像をみると、口元から頸部にかけては数条の細線が視認でき、面繋を表現したものである可能性が高いが断言はできない。

当該絵馬の顔の長さは耳の先端から鼻先までで約 7.6 ㎝を測る。全体が残る絵馬１では同一箇所の長さが約 5.9 ㎝であることから、当該絵馬はかなり大型の絵馬であったことを窺わせている。細片であることから、多少の誤差を考慮する必要があるが、他例との比較でいえば、幅 26 ㎝前後、高さ 17 ㎝前後の法量をもつ絵馬であった可能性が高い。

絵馬 22（456） 谷２の 11c 層から出土した。谷２の西側法面の下部から、後述する絵馬 23 などと近接して出土したものである。絵馬全体からすれば、中位の一部を残すのみであり、土圧による変形がみられる。上下端の割れは古い段階のものであるが、人為的なものか否かは不明である。

幅は 22.86 ㎝、高さは 3.23 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。他例と同様に表面は平滑に成形されるが、裏面は未調整である。厚さは最も厚い部分で 4.2 ㎜、最も薄い部分で 3.5 ㎜を測る。側面の加工痕は風化のために判然としない。

絵画は表面のみで、全体に不明瞭である。かろうじて視認できる図像から右向きの馬を描いたものであることがわかる。部分的に墨描きによる輪郭線が残り、左辺側の円弧は臀部、右辺側の線描は他例との比較から、顔の先端部の輪郭線である可能性が高い。ほぼ中央には半円形に黒っぽい部分が視認でき、陰泥を表現したものであると判断できる。尻尾は左辺端に外郭線が確認でき、墨痕は残らないが、その内側には細かい線描が観察される。

輪郭線を挟んだ内外において木地の明度に差はなく、体部が着色されていたか否かは不明である。

絵馬 23（457） 谷２の 11c 層から出土した。谷２の西側法面の下部から、絵馬 22 の南から近接して出土したものである。短冊形に細かく割れるものの、左下方を欠失する以外はほぼ完存する。部分的に土圧などによって二次的に変形している。

幅は上端で 23.98 ㎝、高さは最も残りの良い箇所で 13.19 ㎝である。厚さは最も厚い部分で 5.0 ㎜、最も薄い部分で 3.1 ㎜を測る。上端には左辺から約 3.6 ㎝の位置に直径 1.2 ㎜の穿孔がある。この穿孔は表裏両面から行われたものであり、錐によるものではない。木取りは柾目である。表面は平滑に成形されるのに対し、裏面は未成形である。全体に経年変化による劣化が著しく、表面のうち右半部は肉眼では絵画を視認することはできない。

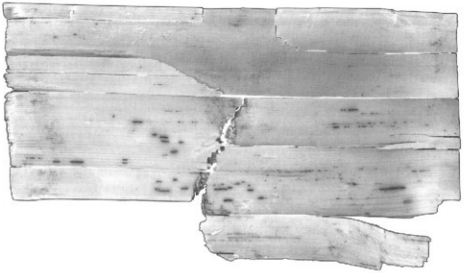
絵画は表面のみに確認できるが、上記のように残存状況は良くない。しかしながら、赤外線画像をみ

絵馬22（旧絵馬５）

▲ 赤外線画像

456

絵馬23（旧絵馬３）



▲ 赤外線画像

457

0　(1:2)　10cm

図49　絵馬（11）

ると右上に耳が看取でき、左半に臀部および尻尾が視認できることから、右向きの馬を描いたものであることがわかる。中央には薄れてはいるが、鞍と障泥が確認できる。また、下方にはわずかに左前肢とその蹄が確認でき、他例と同様にわずかに上げている。臀部には墨描きによる輪郭線は観察できないが、木地の明暗差が顕著であり、肉眼でも図像を追うことが可能である。なお、ごくわずかではあるが、体部には赤色顔料が残り、赤馬を描いたものであることが窺われる。

絵馬 24（458） 谷２の 11b 層から出土した。部分的に残存するのみであるが、赤外線画像によって障泥が明瞭に観察できることから容易に絵馬と判別できるものである。右辺の一部が旧状を留めるのみである。割れはいずれも古い段階のものであるが、意図的な切断痕などは観察できない。

幅は残存で 16.72 ㎝、高さは最大で 3.92 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。表面は平滑に成形されているが、裏面は未成形である。厚さは最も厚い部分で 4.6 ㎜、最も薄い部分で 3.8 ㎜を測る。右側面には幅 1.5 ㎜、深さ 1.6 ㎜の断面Ｕ字形の溝が側縁に平行して彫られているが、意図は不明である。

絵画は表面のみで、全体に不明瞭であるが、尻尾が右辺側で確認できることから、左向きの馬を描いたものであることがわかる。雌雄の判定はできない。墨痕が残るのは障泥の中心部分のみであり、その他の箇所は木地の明度差によって、かろうじて図像を追うことができる程度である。

すでに記したように、右辺側に細線で線描された尻尾があり、その少し左には数条の線が確認できる。位置的にみて尻繋などを表現したものであると考えられる。また、障泥は中心部分を墨で塗りつぶしており、その周囲にも薄い墨塗りの部分がかろうじて看取できる。鞍が黒く塗りつぶされておらず、絵馬２・３・５などと似た意匠をもつ絵馬である可能性が高い。

絵馬 25（459） 谷２の 11c 層から出土した。小片ではあるが、左向きの馬の頭部を描いたと考えられる線描が残る。左辺の一部が旧状を留める以外はいずれも欠損している。

幅は残存で 6.36 ㎝、高さは最大で 3.55 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。表面は平滑に成形されているが、裏面は未成形である。厚さは最も厚い部分で 6.2 ㎜、最も薄い部分で 4.8 ㎜を測る。側面の加工はキリオリで直線的に切断されている。

絵画は表面のみで、顔の鼻先および目、タテガミが細線で墨描きされている。輪郭線の描き方や筆の運び方にいたるまで、絵馬３と共通する意匠をもっている。両者を透過して重ねてみると、左端からの距離や線描の位置関係にいたるまで、ことごとく一致しており、同一絵師の筆によるものである可能性が高いものと判断できる。

絵馬 26（460） 谷２の 11c 層から出土した。部分的に残存するのみであるが、赤外線画像で障泥が明瞭に観察できる。左辺の一部が残るのみである。

幅は残存で 14.56 ㎝、高さは最大で 3.57 ㎝が残るのみである。木取りは板目である。表面は平滑に成形されているが、裏面は未成形である。厚さは最も厚い部分で 6.9 ㎜、最も薄い部分で 4.9 ㎜を測る。側面の加工はキリオリで直線的に切断されている。

絵画は表面のみで、全体に不明瞭であるが、尻尾が左辺側で確認できることから、右向きの馬を描いたものであることがわかる。雌雄の判定はできない。墨痕が残るのは障泥の中心部分のみであり、その他の箇所は木地の明度差によって、かろうじて図像を追うことができるのみである。

絵馬 27（461） 谷２の 11c 層から出土した。部分的に残存するのみであるが、墨痕と木地の明度の差によって線描を追うことができるものである。木取りは板目である。

幅は残存で 9.32 ㎝、高さは最大で 4.36 ㎝が残るのみである。厚さは 3.0 ～ 3.5 ㎜である。

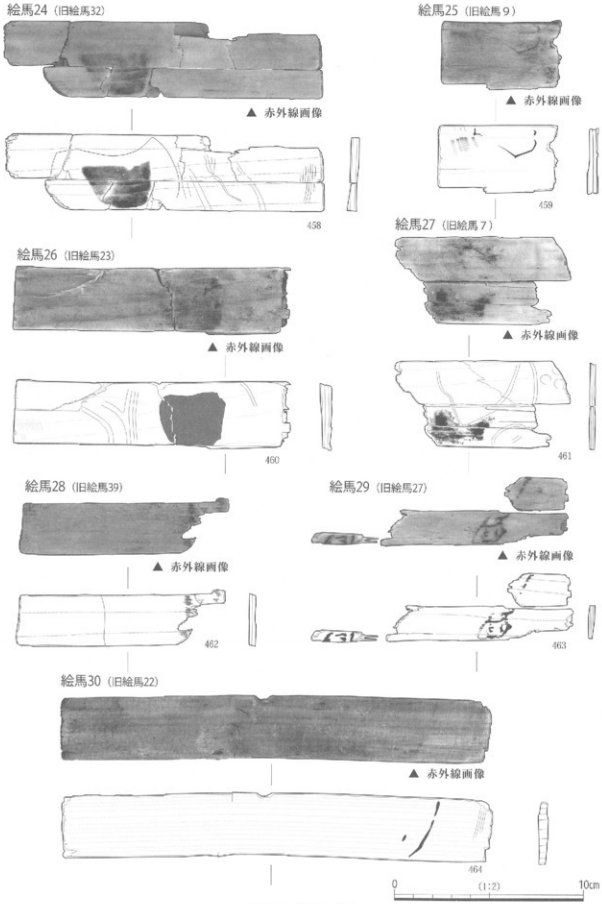

絵馬24（旧絵馬32）
▲ 赤外線画像
458
絵馬25（旧絵馬９）
▲ 赤外線画像
459
絵馬26（旧絵馬23）
▲ 赤外線画像
460
絵馬27（旧絵馬７）
▲ 赤外線画像
461
絵馬28（旧絵馬39）
▲ 赤外線画像
462
絵馬29（旧絵馬27）
▲ 赤外線画像
463
絵馬30（旧絵馬22）
▲ 赤外線画像
464
0
(1:2)
10cm

図 50　絵馬（12）

絵画は表面のみで、一部で黒く塗りつぶした箇所があり、陰泥を表現した可能性が高い。細片であることから、不明確な点も多いが、表裏面の区別が明確であるなど、絵馬である蓋然性は高い。

絵馬 28（462） 谷２の 11c 層から出土した。全体に残りは悪いが一部に墨痕が残る。幅は残存で 10.89 ㎝、高さは最大で 2.79 ㎝が残るのみである。厚さは 2.5 ～ 4.8 ㎜である。木取りは板目である。

絵画は表面のみで、右側に２条の墨描き線があり、中位には微妙な段差がある。表裏面の区別が明確であり、絵馬と考えられるが、天地を含めていかなる部位であるのかは不明である。

絵馬 29（463） 谷２の 11c 層から細かく割れた状態で出土した。最も大きい破片で残存長 10.0 ㎝、残存高 1.83 ㎝、厚さ 1.9 ～ 2.8 ㎜を測る。木取りは板目である。

板材の特徴などから、直接的には接合しないものの、同一個体と考えられる。下端が残っており、２片には左向きの蹄が確認できる。墨痕は比較的明瞭であり、左向きの馬を描いたものであることは明らかである。輪郭線の内外で明度に差はない。

絵馬 30（464） 谷２の 11c 層から出土した。上下端を欠失し、中位で上圧による変形が見られる。全体に風化が著しい。幅は 22.78 ㎝、高さは残存で 3.35 ㎝である。厚さは 3.6 ～ 7.5 ㎜を測る。木取りは柾目である。絵画は肉眼では、ほとんど視認できないが、右辺側に尻尾と弧を描く輪郭線が確認できることから、左向きの馬を描いた絵馬であると考えられる。

絵馬 31（465） 谷２の 11c 層から出土した。下端を欠失する以外は完存する。幅は上端で 14.72 ㎝、高さは残存で 6.57 ㎝である。厚さは 4.6 ～ 5.1 ㎜を測る。表裏面の区別は明確である。木取りは板目である。

全体に風化が著しく、絵画は肉眼ではほとんど視認できない。赤外線画像をみると、右側に臀部と尻尾が確認でき、左向きの馬を描いたものであると考えられる。今回の出土絵馬中で、幅がわかるものとしては最も小型である。

絵馬 32（466） 谷２の 11c 層から出土した。上端の一部を残す以外は欠失する。幅は残存で 14.45 ㎝、高さは残存で 3.71 ㎝である。厚さは 6.1 ～ 6.9 ㎜を測る。木取りは板目である。

表裏面の区別は明確である。断続的に墨痕が残るものの、全容は不明である。少なくとも天地は正しいと考えるが、馬の向きも判然としない。

絵馬 33（467） 谷２の 11 層から出土した。上下端ともに丁寧な成形であるが、下端では線描が中断していることから、下端に関しては二次加工の可能性がある。右辺は旧状を残す。木取りは板目である。幅は残存で 14.82 ㎝、高さは残存で 3.72 ㎝である。厚さは 5.9 ～ 7.6 ㎜を測る。表裏面の区別は明確である。

墨痕は残らないが、木地の明暗差によって線描を追うことが可能となっている。複数の弧を描く線描を抽出することが可能であり、左向きの馬であると考えられるが、断言はできない。

絵馬状木製品（468 ～ 471） 上記の絵馬以外に絵画は残らないものの、絵馬と同じ法量をもち、かつ表裏面の差が明確であるなど、絵馬の絵画部分が霧消した可能性のある木製品が４点出土している。470 のみ３調査区で出土したものであり、一部が被火によって焦げている。ここでは個別に報告しないが、幅は 21.7 ～ 23.9 ㎝であり、厚さはおよそ３～７㎜前後である。幅と高さが判明する 471 の法量は絵馬 23 と近似する。

また、468 と 469 に関しては、年輪年代測定が可能となり、奈良文化財研究所で行った年代測定で、前者が 762 ＋ α 年（辺材型）、後者が 738 ＋ α 年（心材型）であったことが判明した。

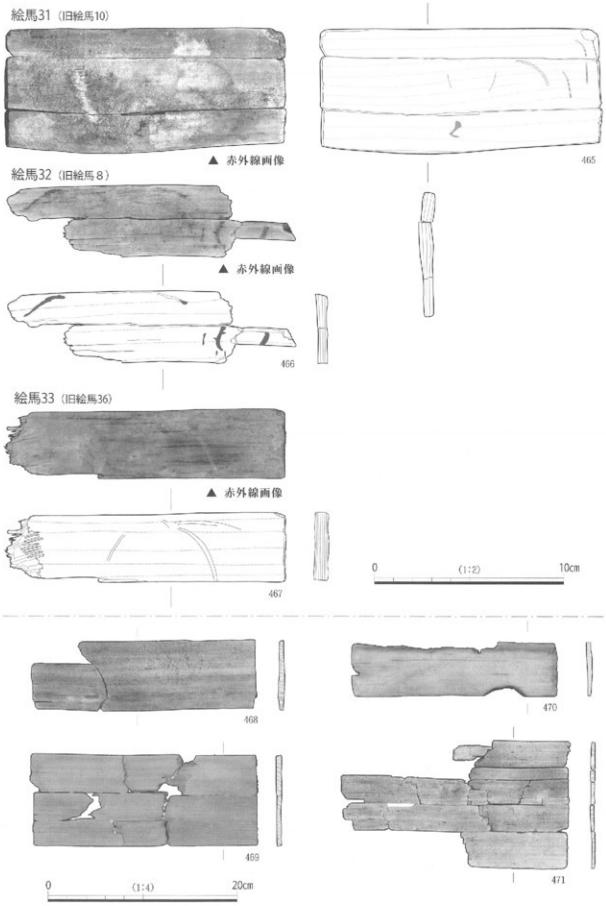


図 51　絵馬・絵馬状木製品

表7　出土絵馬一覧表

新絵馬番号	図版番号	遺物番号	旧絵馬番号	調査区	地　区	遺　構	層　位	方向	穿孔	彩色	幅 (cm)	高　さ (cm)	厚　さ (cm)	木取り	年輪年代
1	39	435	29	1 a	H5-11-17G-9j	谷1	11c層	左	有	雄	22.95～23.15	15.51～15.88	5.8～10.2	板目	
2	40	436	18・25	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	左	有	雌?	25.75	11.30	3.7～4.8	柾目	
3	41	437	31	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	左	不明	雌?	19.98～20.02	9.38～9.42	5.0～6.3	板目	
4	41	438	16	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	右	無	雄	21.43	2.41～2.60	4.5～5.6	板目	
5	42	439	19・37	1 a	H5-11-17G-9j	谷2	11c層	右	無	不明	20.15～20.20	11.76	1.4～3.3	板目	
6	43	440	1	1 a	H5-11-17H-4a	谷2	11a層	右	有	不明	23.45	11.51～13.50	3.6～4.2	板目	
7	43	441	30	1 a	H5-11-17G-9j	谷1	11c層	左	不明	雌?	9.53	6.59	4.4～6.2	柾目	
8	43	442	12	1 a	H5-11-17H-4a	谷2	11c層	左	不明	不明	12.92	4.06	3.5～6.4	板目	
9	44	443	20	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	右	不明	雄?	17.54～17.57	10.16～10.33	3.7～7.1	柾目	759+α年 (辺材型)
10	44	444	21	1 a	H5-11-17H-5b	谷2	11c層	右	不明	不明	22.53	9.54	4.8～5.7	板目	
11	45	445	15	1 a	H5-11-17H-5b	谷2	11c層	左	不明	雄	21.63	8.18	2.5～6.8	板目	
12	45	446	28	1 a	H5-11-17G-9j	谷2	11c層	左	無	雌?	30.16	8.67～9.85	2.3～10.0	柾目	
13	46	447	6	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	右	不明	不明	17.29	4.72	3.0～4.4	板目	
14	46	448	17	1 a	H5-11-17H-5b	谷2	11c層	右	不明	不明	23.95	6.38	3.4～5.8	柾目	
15	46	449	2	1 a	H5-11-17H-4a	谷2	11c層	右	不明	雌?	25.98	5.58	3.2～4.6	板目	
16	47	450	4	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	右	有	不明	22.49～22.72	8.64～8.71	2.0～3.5	板目	
17	47	451	26	1 a	H5-11-17H-5b	谷2	11c層	右	不明	不明	15.06	4.46	2.2～4.8	板目	
18	47	452	11	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	左?	不明	不明	4.88	2.06	3.20	板目	
19	48	453	24	1 a	H5-11-17G-6j	谷2	11b層	右	無	不明	18.10	6.15	2.5～4.3	柾目	
20	48	454	13	1 a	H5-11-17G-5j	谷2	11c層	右	有	不明	19.99～20.12	4.89～4.92	4.5～5.6	板目	
21	48	455	14	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	左	不明	不明	9.58	9.37	3.3～4.8	板目	
22	49	456	5	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	右	不明	不明	22.86	3.23	3.5～4.2	板目	
23	49	457	3	1 a	H5-11-17G-5j	谷2	11c層	右	有	不明	23.98	13.19	3.1～5.0	柾目	
24	50	458	32	1 a	H5-11-17G-5j	谷2	11b層	左	無	不明	16.72	3.92	3.8～4.6	板目	
25	50	459	9	1 a	H5-11-17G-5j	谷2	11c層	左?	不明	不明	6.36	3.65	4.8～6.2	板目	
26	50	460	23	1 a	H5-11-17G-5j	谷2	11c層	右	不明	不明	14.56	3.57	4.9～6.9	板目	
27	50	461	7	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	不明	不明	不明	9.02	4.36	3.0～3.5	板目	
28	50	462	39	1 a	H5-11-17H-5b	谷2	11c層	不明	不明	不明	10.89	2.79	2.5～4.8	板目	
29	50	463	27	1 a III	H5-11-17H-5c	谷2	11c層	左	不明	不明	10.00	1.83	1.9～2.8	板目	
30	50	464	22	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	左?	無	不明	22.78	3.35	3.6～7.5	柾目	
31	51	465	10	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層	左?	無	不明	14.72	6.57	4.6～5.1	柾目	
32	51	466	8	1 a	H5-11-17G-9j	谷2	11c層	不明	不明	不明	14.45	3.71	6.1～6.9	板目	
33	51	467	36	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11層	左?	不明	不明	14.82	3.72	5.9～7.6	板目	
-	51	468	33	1 a	H5-11-17G-9j	谷2	11c層	不明	不明	不明	23.60	9.50	5.0～7.0	柾目	762+α年 (辺材型)
-	51	469	34	1 a	H5-11-17G-9j	谷2	11c層	右?	不明	不明	23.60	7.40	3.0～5.0	柾目	738+α年 (心材型)
-	51	470	35	3	H5-11-17H-3d	谷2	11層	不明	不明	不明	21.70	5.60	3.0～5.0	柾目	
-	51	471	38	1 a	H5-11-17H-5a	谷2	11c層				23.98	13.44		柾目	

※ 法量のうち、明朝体は残存長をあらわす。

（３）斎串

472 ～ 474 は谷２の 13a 層から出土した鋸歯状の切り込みのある斎串である。

472 は左側面２箇所に V 字状の切り欠きを持つ。右側面は端部を欠くが、同様の切り欠きの痕跡が残る。473 は左右対称の V 字状の切り欠きが残る。厳密にみると、切り欠き位置の幅は不均一である。上部は破損して不明だが、下部は先端部を丸く成形している。472 と同一個体の可能性が高い。474 は右側面に４箇所の V 字状の切り欠きが残る。左側面は割れており、詳細は不明である。475 ～ 493 は斎串である。489 が谷１で出土した以外は谷２からの出土である。層位的には 485 が 11a 層、475・476・480・482 ～ 484・486・492・493 は 11c 層、481・487 は 12 層、477 ～ 479・488・490・491 は 13 層からそれぞれ出土している。475 は上部を欠くが、下端部を剣先状に加工しており、斎串の下部と考えられる。476 は上部を圭頭形に成形し、下部を剣先状に加工する C Ⅳ型式である（奈文研 1984）。長さは 26.15 ㎝を測る。上部に左右２箇所ずつの切り込みをもつ。木取りや法量、形態的特徴から 475 と 476 はセットであった可能性が高い。477・478 も C Ⅳ型式である。両者は 13b 層から重なった状態で出土しており、板目の薄板を用い、左右２箇所の切り込みをもつなど、共通する特徴をもつ。475・476 の場合と同様にセットであったと考えられる。479 は長さ 47.6 ㎝以上を測る大型品である。左右２箇所に切り込みをもつものであったと推定される。下端部は破損しており不明である。木取りは板目で、477・478 と同様、非常に薄い。480・481 は圭頭形に加工した斎串の上端部片であり、いずれも左右１箇所に切り込みが残る。482 は 481 と同様に柾目材の斎串であり、残存部位で３箇所の切り込みを確認できる。表裏面ともに比較的平滑に成形される。483 は４箇所の切り込みをもつものであり、切り込み位置は 482 と共通する。484 は他例に比して厚みがあり、切り込みも深い。485 は板目の木取りで、左右２箇所の切り込みを持つ。486 も先端を圭頭形に加工するが、端面の大半を欠失しており、切り込み等は不明である。487 は上下端を欠くが、３箇所に切り込みが残る。488 は上端を圭頭形にし、下端を剣先状にした C Ⅲ型式の斎串の完形品である。板目の木取りであるが、他例に比して厚く、左右１箇所ずつの切り込みがあるが裏面まで達していない。489 は唯一、谷１の 11c 層から出土したものである。上端部を圭頭形に加工する板状の木製品であるが、下端部は単純な剣先形にはならず、厳密には斎串とは断定できないものである。490 は D Ⅰ形式の斎串である。一方を切り落し、他方は先端を圭頭にしている。長さは 14.79 ㎝を測る。491 は下端部を欠損するものの、490 とほぼ同大同形である。ただし、木取り方向は異なる。492・493 は形状から斎串の下端部と考えられる。

（４）人形

494 は人形である。表は比較的平面に成形され、上部を圭頭形に加工、その下方を両側面から切り欠く。肉眼ではほとんど判別できないが、わずかに墨痕が残り、赤外線スキャナーによる画像では、烏帽子の下端と考えられる横線と目や鼻、口が細線で線描されている状況が看取できる。

（５）箏柱

495 は箏柱である。高さ 6.25 ㎝、幅 4.75 ㎝、最大厚 1.09 ㎝を測る。非常に丁寧な成形を施し、一方の面に「二」と刻書する。ほぼ左右対称であるが、下方の脚部端の角度が微妙に異なる。正倉院南倉蔵の箏柱にも「十二」・「十三」の番号を書したものがあり（正倉院事務所編 1967）、法隆寺献納宝物中の新羅琴の琴柱にも「一」・「八」などの番号を墨書したものがある（東京国立博物館 1994）。このような事例の存在を勘案すると当該例は第２弦の箏柱であった可能性が高い。上端には弦を受けるための細い切り込みをもつが、この部分は角が摩滅しており、実際に使用されていたことを窺わせている。

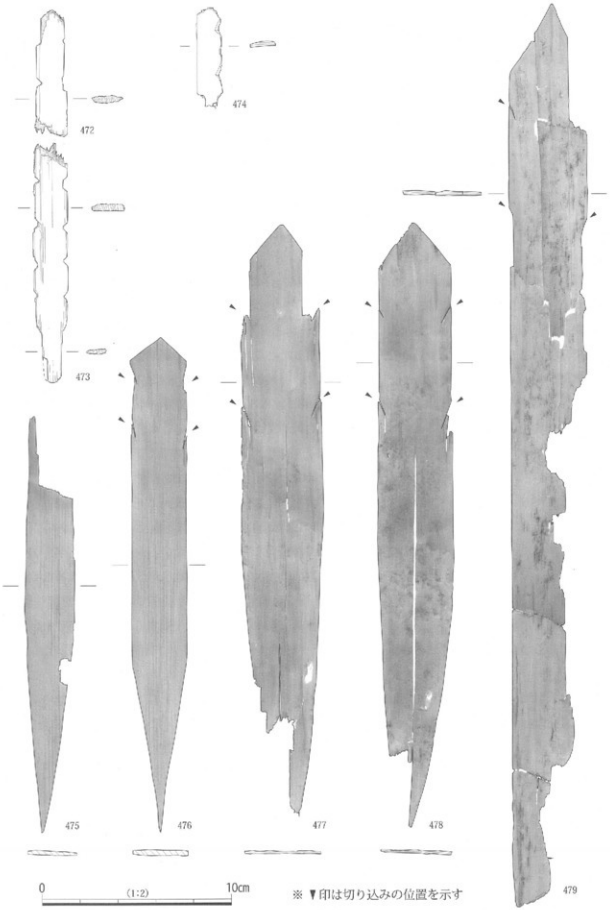
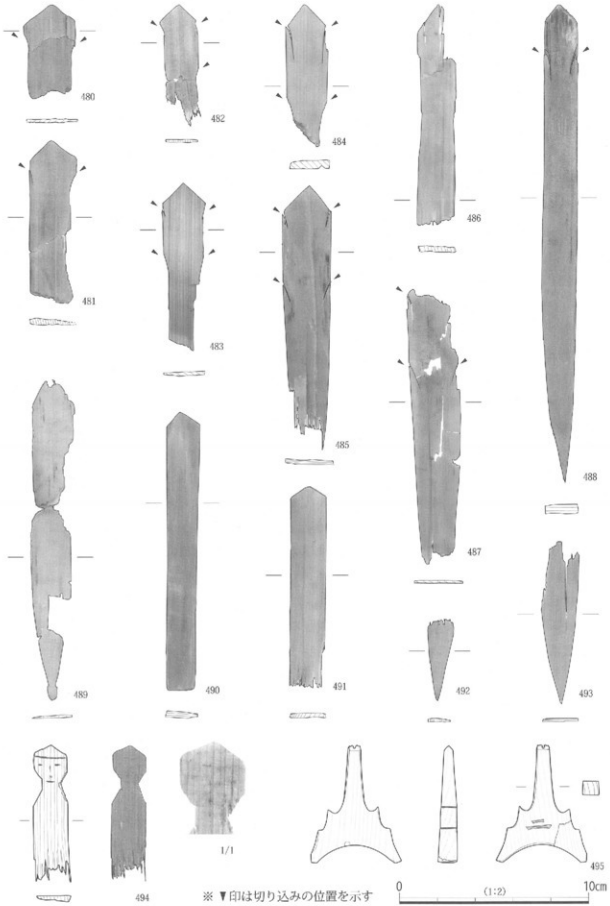


図52　斎串



※ ▼印は切り込みの位置を示す

図53　斎串・人形・掾柱

（6）斎串状木製品・棒状木製品

496～558は11～13層から出土した棒状の木製品である。いずれも、厳密には表裏および天地も不明であるが、以下の報告にあたっては便宜的に図示した面を表面とし、天地左右についても図の方向に即して記述を進める。496～514は扁平な板状を呈し、一方もしくは両端を圭頭形に加工するものである。厳密には天地も不明であり、斎串である可能性も残すが断定できない。

496は右辺の一部と下部を欠失する。497は左辺と下部を欠く。木目の細かい柾目板である。498は一方の面のみ表面を平滑に面取り状に加工する。499は下部を欠損するのみである。500は左辺および下部を欠く。501は表裏面とも未成形であるが、両端は鋭角の圭頭形に切り落している。502は一方の面に樹皮を残し、先端を圭頭形に加工する。圭頭部分の樹皮は面取りによって削ぎ落している。503は土圧によって変形しているが、全体が完存する。表裏ともに未成形であるが、両端は鋭角に圭頭形に加工している。504は柾目の薄板の一方を圭頭に加工したものであるが、圭頭部の形状は整正ではない。505は503と同様に細い薄板の両端を圭頭形に加工するものである。表面は平滑に成形するが、裏面は未成形である。両端の圭頭部分は一方の角度が浅く、摩滅している。506は一方の先端を圭頭形とし、他方を斜めに切り落している。全体に摩滅しているものの、表裏とも平滑に成形されている。507は幅が均一ではなく、一方の先端を欠損する。残る他方の先端を圭頭形に加工する。さほど丁寧ではないが、表面は面取り加工する。508は先端を圭頭形に加工することから、ここで扱っているが、厚さが1.12㎝と厚い上に大型であり、他例とは一線を画する。4面ともに丁寧な成形を施す。上端は圭頭形を呈するが、下端は複数方向から不規則な面取りを行う。下端の先端部分はやや摩滅しており、この部分を地面に突き刺して斎串として用いていたとしても矛盾はないが、断定はできない。509は右辺と下部を欠失する。上端を斜めに削ぎ落しているが、全体に粗い作りである。510は上端を圭頭形に加工するが、厳密には左右非対称である。幅が均一ではないが、これは土圧などによる変形に起因する。511は右辺と下部を欠く。512は先端を圭頭形とする。先端部の幅が狭く、下部に向って緩やかに幅を広げる。表裏ともに平滑に成形されている。513は厚みのある棒状を呈する。先端は圭頭形に加工するが、左右対称ではない。表裏面ともに面取り状に加工する。514は柾目の薄板で、先端を圭頭形に加工する。下端は欠損する。左辺は欠損の可能性があるが、破断面は古い段階のものであり、摩滅が著しい。

515～537は何らかの形で加工が加えられた棒状の木製品である。515は上端を圭頭形とするが、下端は幅を減じ、裏面側から斜めに切り落とされている。左右両側辺は角を面取りする。516は上端を面取り加工した棒状を呈し、下端は尖り気味である。下端部は摩滅によって角を失った部分も見られる。517は下端を両側面から削ぎ落とすことによって鋭利に尖らせている。上端は裏面からの削ぎ落しによって尖っている。518は表裏面ともに未成形で、一方の先端に段をつけながら斜めに切り落している。519は上端を圭頭形に加工する。下端は切損している。520は下端を四方から切り落して尖らせる。表裏の加工には明瞭な差があり、一方が丁寧に成形されているのに対して、一方は未成形である。521は全体に丁寧な成形を行なう。一方の先端のみを斜めに切り落して尖らせている。522は先端を不整な圭頭形に成形する。表面は全体に平滑に成形するのに対して、裏面は下端付近のみを面取りする。523は木目が密な柾目の薄板で、上部を欠損するものの、下端は一方から削ぎ落して尖らせている。524は下端を両側面から削ぎ落して、先端を尖らせている。表裏面ともに未成形である。525は厚さ1㎜に満たない柾目の薄板の先端を両側面から削ぎ落して先端を尖らせている。526は角柱状の棒の先端を対峙する両側面から薄く板状に削り出し、その先端を不整な圭頭形に削り出している。板状に削り出された先

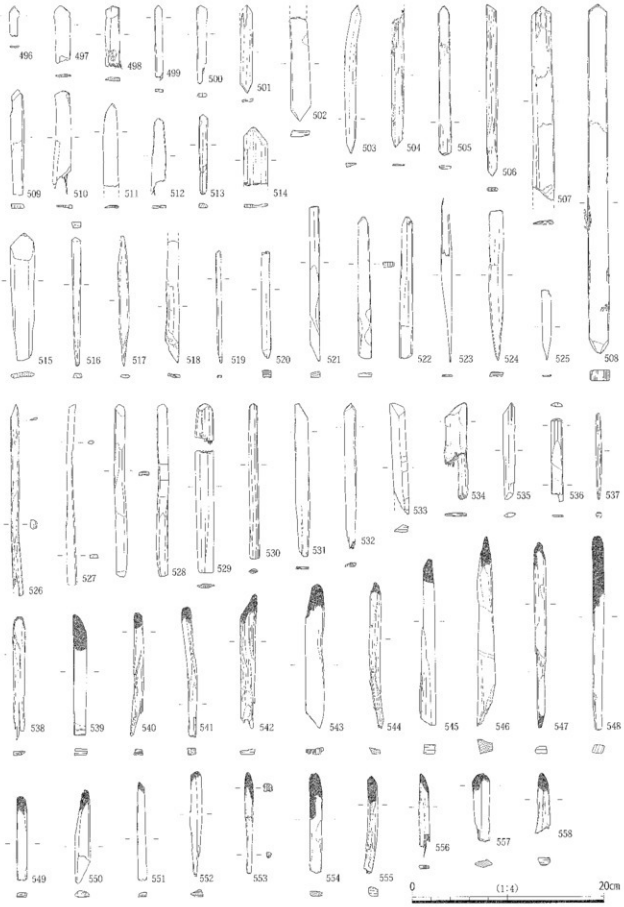


図54　斎串状木製品・棒状木製品

端部以外は未成形である。527は板状を呈する棒の約3分の2を楕円形に削り出している。先端は斜めに切り落とされている。全体に丁寧に成形されている。528は板状の木製品で完存する。両端は一方向から斜めに削り落している。表裏ともに約3分の2は全面を削り、それ以外は角を面取りする。529は非常に丁寧に成形されたヘラ状の木製品である。2片に割れているが、直接的には接合しない。表裏ともに丁寧に成形され、断面は凸レンズ形を呈する。下端はまっすぐに切り落し、裏面から斜めに面取り成形を行なう。上端は尖り気味ではあるが、丸く削り出す。上端部のエッジはかなり摩滅しており、この部分が擦れるような用途に用いられていた可能性が高い。530は細い棒状を呈するが、表裏ともに丁寧に成形され、断面形は529と同様に凸レンズ形を呈する。上端部は丸く面取りされている。531・532はいずれも上端を除いては未成形で、前者は上端を斜めに、後者は不整な圭頭形に削り出す。533は表面側の上端と右辺のみを面取り成形するものであり、断面は不整な方形を呈する。534は表面のみを成形した板状を呈し、上端を斜めに切り落している。右辺は折損している可能性が高いが、破断面は古い。535は未成形の不整な棒の両端を斜めに切り落とす。536は丸い棒の一部を削ぎ取ったような形状をもつ。表面は下半を板状に削り出す。裏面は未成形である。537は表面を細かく面取りすることによって針状に作り出されている。上端の一部を欠くが、ほぼ完存する。

538～558は一方の先端、まれに両端が被火によって焦げて炭化したいわゆる火付け棒である。

538・540・543・545・547・550・552・555～558は短冊状に割り出したままで、まったく加工を行なわないものであり、547で両端が焦げている以外は一方が焦げるのみである。541は割り出したのちに先端が焦げている側の一部を面取りするものであり、一方、544・546・553は焦げている側とは反対側の一部を面取り加工する。539・542・548・549・551・554は一部に丁寧な加工面を残すものであり、製品もしくは加工された板材を短冊形に割り出して転用したものと考えられる。

（7）その他の木製品

559は谷2の11c層から出土した。刀子などの柄と考えられるものであり、一木作りである。長さ10.4㎝、幅2.08㎝、厚さ1.34㎝を測る。一方の小口には断面形が二等辺三角形を呈する穴が穿たれている。この穴の深さは7.38㎝を測り、表面が黒色化している。表面の加工はさほど丁寧ではなく、風化のためか木目が浮き上がっている。560は谷2の13層から出土した。実物大の刀子を模した一木作りの木製品である。長さは残存で15.3㎝、柄の部分は長さ12.0㎝、幅1.9㎝、厚さ1.2㎝を測る。刃部は幅1.4㎝、厚さは0.4㎝である。柄の部分は丁寧に面取り成形され、全体に断面形が楕円形を呈する。561は谷2の11c層から出土した板状の側面形代である。全体に平滑に成形されている。直線的な縁辺をもつ側を下にしているが、あるいは天地は逆かもしれない。図示した方向でいえば、左側上方が欠損している。尖らせた右端には平行する細い線刻がある。562は谷1の11c層から出土した扇の要部分である。6枚の骨が長さ2.1㎝、直径約4㎜の円柱形の木棒によって結束されている。骨の厚さは最も厚いもので4.2㎜、最も薄いもので2.7㎜を測る。調査時には骨が外れた状態で取り上がったために厳密には配列順序は不明であるが、少なくとも外側には厚いものが配されたが状況は看取できる。また、骨を束ねる木棒は一方がやや細く作られており、端部には楔が打ち込まれていた痕跡が残る。全体にきわめて丁寧な成形を施す。563は上面を粗く刳り込んでいる。外面の加工は比較的丁寧で上下両端は斜めに切り落とされている。564は谷2の13層出土である。長さ4.7㎝、幅2.0㎝、最大厚6.6㎜を測る菱形の木製品である。角を丁寧に面取りする。直径4.4㎜で斜めに穿孔されているが、穿孔部位が偏っており、穿孔を有する板材を転用した可能性も残る。565は谷2の11c層出土である。上下

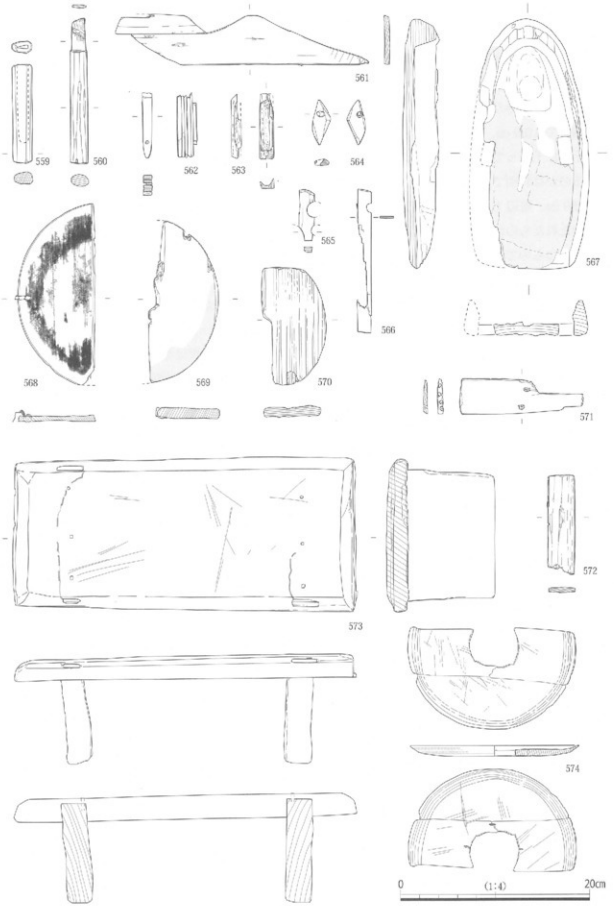


図55　その他の木製品（1）

端は旧状を残し、上端は円弧を描き、角が面取りされる。一方、下端は垂直に切り取られている。左右両辺ともに欠損するが、右辺には2箇所、左辺には1箇所に円弧を描く切り込みがある。右辺上方の円は直径約1.6㎝を測るが、全容は不明である。566は谷1の13層から出土した。上下方向は旧状を残すが、左辺を欠失する。厚さ1.9㎜の薄板で、全体が非常に平滑に成形されている。右辺の上方に半円形の刳り込みがある。567は履物と考えられるもので、谷2の13層から出土した。全長26.5㎝、幅は残存で10.9㎝、高さは3.6㎝を測る。後方を除いて周縁が削り出される。側面から見ると先端が斜め上方に上がっているが、これは当初からの形状であるのか、使用過程で磨り減ったことによるものであるのかは判別できない。底面の左右両側には2箇所に長方形の穿孔を有する。完存する右側の孔は長辺2.9㎝、短辺1.5㎝を測る。周縁の前面部分にはやや左に偏して深さ5㎜前後の穴があるが、意図的に穿たれたものか否かは不明である。内側を中心に被火によって炭化している。履物としては特異な形態をもつものであるが、調査地の南側で（財）大阪市文化財協会が調査を行った谷の第7a層から同形態の履物が出土している（市文協2000b）。これ以外にも長原遺跡（市文協2000a）や新上小阪遺跡（大文セ2003）からの出土が報告されている。568は谷2の13層から出土した円形曲物である。2分の1弱が残るのみであるが、直径20㎝前後であったと考えられる。1箇所に側板を留めるための樹皮が残る。縁辺約1㎝を残した内側は黒色を呈している。漆のような光沢はなく、意図的に塗られたものであれば、柿渋である可能性が高い。いわゆる樺皮結合曲物であり、蓋の可能性が高い。569・570は谷2の11c層から出土したもので、いずれも2分の1前後が残るのみである。569は直径18㎝前後に復元できる。厚さは1.1㎝である。中央には2.5㎝以上の穿孔があり、その外側の2箇所に一辺4㎜前後の方形の小孔が確認できる。表面の一部は焦げて炭化している。570は不整円形を呈し、中央には円孔の痕跡が残る。いずれも側面には釘穴等の痕跡は残らず、蓋板もしくは蒸器のサナと考えられる。571は谷2の11c層出土の用途不明板状木製品で、右上方を欠損する。幅13.0㎝、高さ3.7㎝、厚さは左辺側で6.3㎜、右辺側で3.2㎜を測る。中央の上下2箇所に直径約3㎜の小孔が穿たれる。左の側面には4個の小孔が等間隔で並び、内側の2箇所には木釘が残る。572は谷2の13層から出土した短冊形の板状木製品である。下部は古い段階に欠失している。左辺には上端から5.1㎝の位置に切り込みをもつ。表面はきわめて丁寧に成形されている。573は谷2の西側斜面から出土したものであり、ほぼ原形を留めている。2本の脚台をもつ小型の机と考えられるものである。天板は厚さ2.4㎝で、長さは36.2㎝、幅は一方が16.2㎝で、他方が14.8㎝でやや狭い。天板の上端面の角はいずれも幅広に面取り成形が成されており、部分的に刃痕が残る。脚台は天板の裏側に矩形のほぞ穴を刳り込み、そこに脚台となる高さ10.5～10.9㎝、幅13.0～13.9㎝、厚さ2.8㎝の方形の板材を差し込む、天板の上面から木釘を3箇所打ち込んで固定している。木釘は一辺約3㎜の方形である。ほぞ穴部分は、天板角の面取り部分で孔が開いた状態になっているが、これは風化によるものと考えられ、意図したものではないと考えられる。なお、天板の年輪年代測定の結果、最外年輪年代は西暦506年（心材型）であることが明らかとなっている。574は横木取り、柾目の挽物の皿である。高台の付かない皿D類である（奈文研1984）。直径17.6㎝、高さ0.9㎝を測る。中央に直径約5㎝の2次的な穿孔があり、蓋板もしくは蒸器のサナに転用された可能性がある。見込み部分に刃痕が多く見られる。底部外面には3箇所に鼬の爪痕が残るほか、刃痕もわずかに確認できる。

575は谷2の11c層から出土した。心材の表面を丁寧に面取りした棒状木製品である。上端は欠失する。下方には2本の平行する線刻がある。576は谷2の14層から出土した。上方に貫通しない穴を

錐で穿った棒状木製品であるが、縦方向に折損しており、約２分の１が残るのみである。上端面は面取りによって丸く仕上げられるが、下端面は鋸歯状に切り込まれている。577は棒の一部を丸く抉り取った木製品である。縦方向に割れており、詳細は不明である。578は谷１の11c層から出土した。角柱状の棒に直径約６㎜の孔を穿っている。579は上方に両側面から切り込みを入れてくびれを作り出した棒状木製品である。表面が丸みを帯びて丁寧な成形であるのに対して、裏面は平坦で成形も粗く、さら

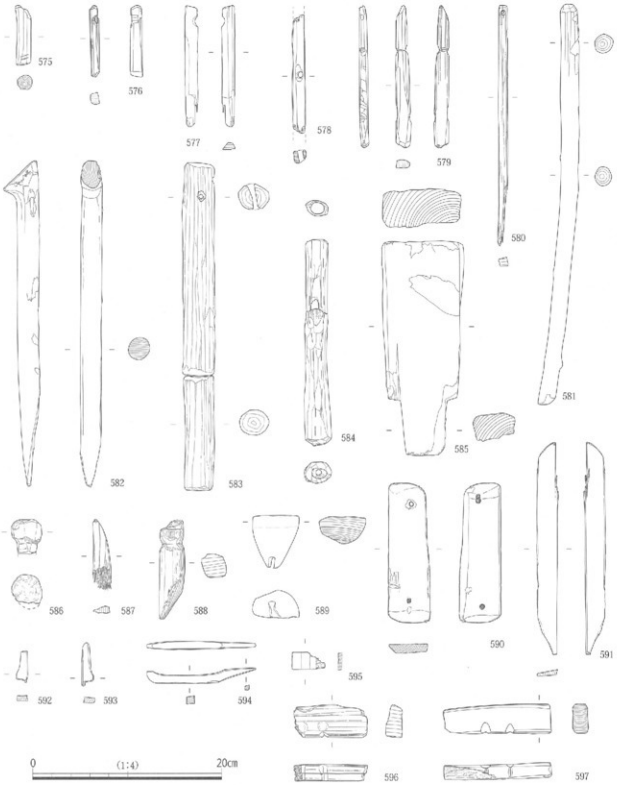


図56　その他の木製品（２）

に大きな円柱状の棒を転用したものである可能性が想定される。表面および側面は面取り状に削っており、下半にも左右両辺からわずかに削り込み、不明瞭ながらもくびれが作り出されている。上端が斜めに切り落とされているのに対して、下半は細かい面取り成形によって丸く削られている。580 は谷２の 13 層から出土した。上端には直径約 2.5 ㎜の穿孔を施し、下端は尖らせている。表裏面が非常に平滑に成形されているのに対して、両側面は割り出したままの未成形である。既製の板材を転用したものである。581 は心材の樹皮と枝を取り、上端を面取りによって丸く削り出している。下端は折損している。582 は直径 2.2 ㎝を測る円柱状の木製品であり、残存長 34.4 ㎝を測る。先端を肥厚させて斜めに切り落して楕円形の平坦面を作り出している。下端は折損しているが、側面をみると真っ直ぐではなく、やや反っている。きわめて丁寧な成形を行なっており、何らかの道具の柄であるとも考えられるが、上部の平坦面には接合痕跡等は観察できない。583 は長さ 34.4 ㎝、最大径 3.4 ㎝を測る円柱状の木製品である。２片に割れており、切断面は摩滅している。上方に 6.5 ～ 6.9 ㎜の円孔を穿っている。心材を用いており、樹皮および枝を払い、表面は面取り状に丁寧に成形している。上下端ともに角を含めて面取り成形を行なう。584 は長さ 21.9 ㎝、径は上端で 2.4 × 1.7 ㎝、下端で 2.8 × 2.3 ㎝である。基本的には円柱状であるが、上端部はかなり扁平で楕円形を呈する。心材を用いており、表面はほぼ全面に面取り調整が施される。縦方向に孔が貫いており、その法量は下端で直径 5.6 ㎜であるのに対し、上端では 12.3 ㎜と広がっている。585 は谷２の 11c 層から出土した不整な羽子板形の木製品である。長さ 22.7 ㎝、上端幅 8.6 ㎝、下端幅 4.2 ㎝、厚さは平均して 3.8 ㎝を測る。下半は長さ 5.6 ㎝凸形に成形されており、当該部分は先端に向かって幅を減じている。全体に成形は粗い。586 は谷２の 13 層から出土した栓状の木製品である。直径 3.3 ㎝の心材の下部を粗く削り込んでいる。下端部は折損している。587 は谷２の 13 層から出土した。下端は欠損する。右辺のみに加工面が残り、表裏面ともに割り放しで未成形であり、旧状を留めていない可能性もある。丁寧に成形されるが、全体に成形は粗い。588 は谷２の 11c ～ 13 層から出土した。不整な円柱状の材にくびれを作り出した木製品である。上端は欠損するが、下端は斜めに切り落とされている。589 は谷２の 11b 層から出土した。元来は円錐形を呈するものであったと考えられるが、縦方向に割れて２分の１が残るのみである。上端部には幅約 0.6 ㎝、深さ約 1.2 ㎝の不整な溝が彫られている。表面の成形は比較的丁寧である。590 は谷２の 11b 層から出土した。平面形は隅丸長方形を呈し、一方の面はきわめて平滑に成形されるのに対して、他方は角を幅広に面取り成形している。上下両端に直径約 3.5 ㎜の穿孔があり、下方には折損した木釘が残っている。穿孔および木釘はいずれも中心方向に向って傾斜している。591 は長さ 22.5 ㎝、幅 2.2 ㎝を測る。上端は円弧を描いて刀の切先のように削り出し、下端は一方向から尖り気味に削り出されている。刀の形代である可能性もあるが、上端部のみが摩滅していることから、ヘラ状の道具であった可能性も残る。592・593 はいずれも側面の一部が原形を留めるのみであるが、両者ともにほぼ同じ厚さの柾目材の側面を同じ形にきわめて丁寧に削り出している。594 は谷２の 11c 層から出土した用途不明木製品である。左端は丸く仕上げられ、右端は尖り気味である。きわめて丁寧な成形を施す木製品であり、側面にはわずかに赤色顔料が残る。595 は谷１の 11 層から出土した。左端と下端が旧状を留めるのみである。内面には４条の垂直方向のケビキが残る曲物の側板片である。596・597 はいずれも谷２の 13 層から出土した火鑽板である。両者ともに未使用である。596 は厚い柾目の角材の上面に２箇所に臼状の窪みを彫り込み、それに対応して側面にＶ字形の切り欠きを入れる。上面の臼状の窪みは火鑽杵によって生じたものではなく、火鑽杵を安定させるために彫られた窪みである。左半はこの切り欠き部分で折損して

いる。597 は長さ 11.2 ㎝、幅 2.9 ㎝、厚さ 1.5 ㎝を測る火鑽板である。側面には約 2.6 ㎝の間隔をおいてＶ字形の切り欠きを２箇所に刻む。上面にはこれに対応して浅い彫り込みを設ける。

（８）柱根

598 は柱穴列 190 を構成する柱穴のうち、西側で検出した柱穴 156 に遺存していた柱根である。長さは残存で 59.6 ㎝、直径は 28.2 ㎝を測る。原位置で直立した状態で検出したものであり、上端は経年による風化で痩せている上に、芯の部分は長径約 15 ㎝、短径約 11 ㎝で空洞化している。しかしながら、外面下半部および基底部は旧状を残しており、成形痕が良好に残る。外面はおよそ４～６㎝の幅で面取り状のハツリ成形が成されており、基底面は周縁部では、約 5.6 ㎝の刃部幅をもつ工具痕がおよそ 45°の角度で重複して残っている。伐採時の斧の痕跡であると考えられる。一方、中心部近くは明確に単位は追えないものの、刃部幅の狭い工具痕が残る。伐採後に基底部の凹凸を成形した段階のものと考えられる。

当該柱の外表部分の放射性炭素年代測定（AMS 法）では、補正年代値が 1450 ± 40yBP、暦年較正値は 597-647calAD（相対比 87％）という結果が出ている。年輪年代測定も試みたが、不適であった。

599 は柱穴列 190 の中央で検出した柱穴 157 に遺存していた柱根である。長さは残存で 126.2 ㎝、直径は最大で 30.7 ㎝を測る。樹種はコウヤマキである。この柱根は斜めに倒された状態で検出したものであり、598 と同様に上端は風化して心材部分が尖っている。外面の成形は手斧などによるハツリであり、上半では不明瞭であるが、下半部では幅４～５㎝、長さ５～６㎝程度の単位が看取される。基底面も４～５㎝前後の幅で角度をもった工具の刃痕が重複して残っている。基底部から上に 10 ㎝前後には幅５～８㎝でくびれが作り出され、当該部分には細かい工具痕が残る。図に示したトーン部分は被火により表面のみが炭化して黒色化している部分である。

当該柱の外表炭化部分の放射性炭素年代測定（AMS 法）の結果、補正年代値は 1520 ± 40 y BP、暦年較正値は 529-601calAD（相対比 76％）という結果が出ている。598 と同様に年輪が粗く、年輪年代測定には不適であった。

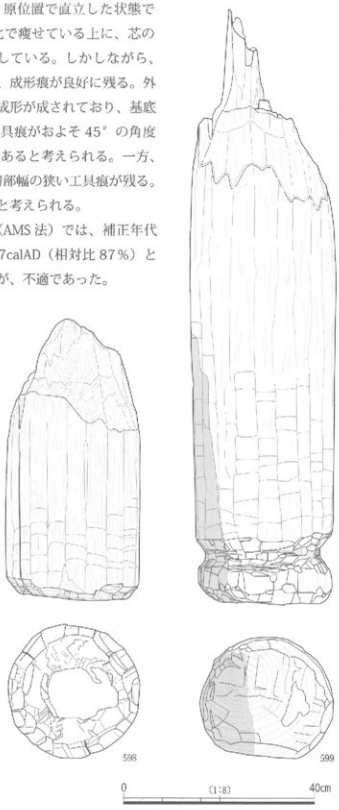


図 57　柱根

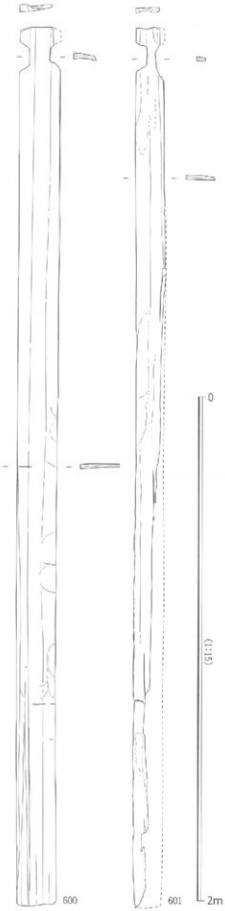


図 58　護岸板材

（9）護岸板材

600 は 3 調査区で検出した護岸遺構 188 を構成する横板の 1 枚であり、取り上げた 2 枚の板材のうち、北側に配されていたものである。長さは 3.495 m、最大幅 16.1 ㎝、厚さ 1.8 ～ 3.0 ㎝を測る。木取りは板目であり、表裏面は割り放しで未成形である。一方の端部は両側から木箆のような切り欠きを行い、くびれ部分を作り出している。中位には円弧を描く圧痕が不規則にみられるが、意図的なものではない可能性が高い。

601 は護岸遺構 188 を構成する横板のうち、南側に配されていたものである。長さは 3.493 m、最大幅 11.5 ㎝、厚さ 1.1 ～ 2.1 ㎝を測る。600 に比して風化のためか、全体に残りが悪く、相対的に厚さが薄いのもこれに起因するものと考えられる。木取りは板目で、表裏とも未成形である。一方の端部にのみ両側から切り欠きを行い、くびれ部を作り出している。

6．その他の遺物

ここでは、出土点数が少ない金属製品や石製品などを一括して報告する。602 は谷 2 の 11c 層から出土した長頸鏃で、長さは残存で 7.12 ㎝、幅は 4.8 ㎜、厚さは 3.3 ㎜である。関部はわずかに突出し、当該部の幅は 6.4 ㎜を測る。603 は谷 2 の 11b 層出土。径 1 ㎜前後の砂粒を多量に含む甕形土器で、被熱により赤変しており、製塩土器の可能性もある。604 は谷 2 の 11c 層出土の坩堝である。幅約 3.4 ㎝、高さ約 2 ㎝の細片ではあるが、直径 12.5 ㎝前後に復元される。内面には溶融した金属やスラグなどが厚く付着している。これ以外に鞴羽口の細片とスラグが各 2 点出土している。605・606 は砥石である。605 は粗目で 2 面が使われている。606 は細目で破損して原形を留めない。607 は谷 2 の 11b 層から出土した凝灰岩切石片である。きわめて平滑に成形された面が残る。

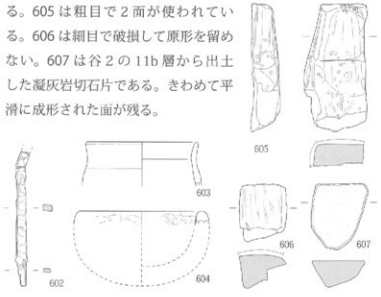


図 59　鉄製品・土製品・石製品（602 は 1/2, 他は 1/4）

第６章　中世の遺構と遺物

第１節　遺　構

１．杭列

（１）杭列 159

谷１の９層中の砂層下から調査区西端から北東に向かう段差を確認し、これに伴って杭列 159 を検出した。杭は９本を検出しており、直径５～10 ㎝で枝などの先端を尖らせただけのものが多い。

杭列 159 および段差は、西側に隣接する府警本部の１期調査で検出した中世水田面の南側肩部の延長上に該当しており、先の調査でも水田の南辺崖面が木杭などで護岸されていた事実とも対応している。前回の調査成果との対応関係からいえば、杭列 159 以北が田面となる可能性が高いが、調査対照面積が狭く、足跡が確認できない上に、土壌層の攪拌が顕著でないことなどから、積極的に耕作が行われていた可能性は低いものと判断する。

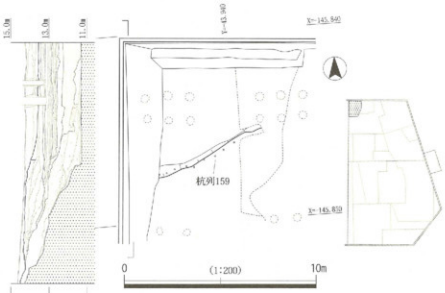


図 60　谷１ 中世遺構面

第２節　遺　物

谷１・谷２ともに中世の堆積層では９層から瓦器椀などの細片が出土しているが、いずれも極細片であり、図化に耐え得るものはない。一方で谷２の９層からは古代の遺物が少なからず出土している。

608・609 は須恵器杯 G 蓋である。608 は小振りの宝珠形ツマミをもち、受部径 6.8 ㎝前後に復元される。609 は受部径 7.7 ㎝に復元できる。610 は土師器杯 C であり、直径 15.7 ㎝、器高 4.8 ㎝を測る。ほぼ完形に復元できるが、器表面は摩滅が著しく、暗文などは観察できない。612 は須恵器の台付壺である。頸部以上を欠損するが、それ以外は完存する。方部には２重沈線と放射状の櫛描き列点文が施文される。

611 は口縁部径 12.8 ㎝を測る漆器椀である。内面はくすんだ朱漆、外面は黒漆である。柱列 190 近くの 12 層上面で出土した。当該地点では既存建物によって上層の堆積層が完全に削平されており、厳密に出土層位の年代を押さえることができない。現状では古代以降の漆器といえるのみであるが、層位的には豊臣期まで下るものではない。

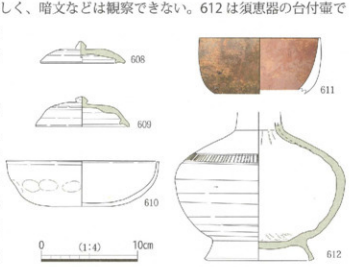


図 61　谷２（９層）出土遺物

第７章　豊臣前期の遺構と遺物

第１節　遺　構

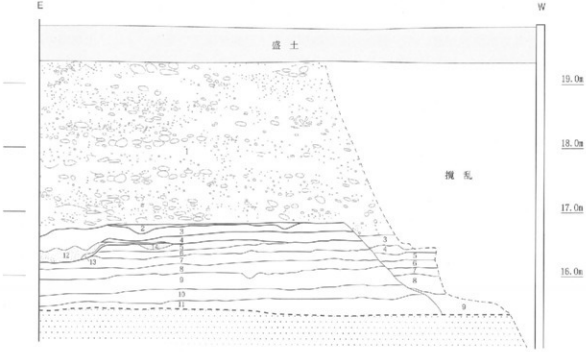
１．前提

今回の調査では、既述してきたように旧府警本部の建物などによる攪乱が著しいとともに、後に報告する豊臣後期の堀 83 の掘削とその埋め戻しに伴う土取りなどによって、豊臣前期の遺構面や遺構は局地的に残存するのを除けば、ことごとく削平されている。

しかし、上記のような状況下にあって、３調査区では、谷２の中から堀 83 の掘削で生じたものと考えられる客土によって埋没した豊臣前期の遺構面を重層的に検出、調査面積が小規模であることから断片的ではあるものの、礎石建物跡を検出するなどの成果をあげている。

また、１・２調査区でも豊臣前期の遺構面はまったく残らないものの、堀 83 の掘削によっても、掘削深度の深い数基の井戸だけは完全な破壊を免れていた。

以下では、まず最初に重層的に遺構面を検出した３調査区の報告を行い、その後、１・２調査区で堀 83 に切られる形で検出した井戸、出土遺物から豊臣前期に遡る可能性が高い塀・溝など、堀 83 掘削以前の遺構面および遺構について報告することにしたい。



1.　オリーブ黄色粘土ブロック混じり粗砂（地山砂礫層起源土、堀83掘削時の客土：５層）
2.　オリーブ黒色粗砂混じりシルト（植物遺体・遺物多く含む）
3.　オリーブ黒色粗砂混じりシルト（径３cmの礫含む、第６面基盤幅：６層）
4.　灰色細砂混じりシルト（径３cmの礫含む、第７面基盤層：７層）
5.　オリーブ黒色粗砂混じり粘土（第８面基盤層：８層）
6.　灰色細砂混じり粘土（第８面基盤層：８層）
7.　灰色細砂混じり粘土
8.　灰色細砂混じりシルト（地山ブロック若干含む）
9.　灰色粗砂混じりシルト（硬くしまる）
10.　明灰色細砂混じりシルト（軟くしまる）
11.　灰色粗砂混じりシルト（粗砂の比率高い）
12.　オリーブ黄色粗砂（溝171）
13.　オリーブ黒色シルト（土壌化層）
14.　オリーブ灰色粗砂～中砂

図 62　３調査区南壁断面図

図 63　豊臣前期遺構分布図

2．3調査区

3調査区は、調査の過程で追加調査を行ったものであり、規模は南北約16ｍ、東西約8ｍで、規模的には大きくないものの、調査区西側の一部を除けば、既存建物の影響をほとんど受けていない部分である。当該調査区の調査を開始した段階では、すでに1調査区で谷2を検出しており、この谷が南南東にのび、3調査区をかすめていることは容易に判断できる状況にあった。

調査では、重機を用いて現代の盛土層を除去することから始めたが、掘削を進める過程で地山を起源とする2ｍを超える客土層（5層）を確認し、一旦、この客土層上面で遺構の有無を確認した。しかし、近代以降の削平や攪乱によって客土上面には遺構面が残らないことを確認し、継続して下層の遺構面直上まで機械掘削を行い、下層から豊臣期の遺構面3面を検出した。

この5層とした土層は、地山の堆積土を起源とする分厚い客土層であり、以下で報告する出土遺物には、唐津や志野焼などの豊臣後期に下る遺物を含まず、当該客土は堀83の掘削に伴って谷を埋積したものと判断している。

なお、南壁断面図（図62）中の西側で地すべりを起こしているが、これは昭和33年の旧大阪府警本部棟の地下掘削工事の際に生じたものであり、地震を起源とするものではない。

（1）第6面

堀83掘削に伴う客土層（5層）直下で検出した豊臣前期の遺構面で、遺構面のレベルは16.6～16.7ｍ前後を測り、全体に平坦である。

当該遺構面からは20㎝前後の花崗岩を用いた礎石列が南東および北西でまとまって検出されている。このうち、北西側の礎石に関しては本来、第7面に帰属するものが露頭したものもある。したがって、当該遺構面に帰属する礎石は南東側の一群である。礎石は南北方向に2条が直列しており、これと直交する部分も確認でき、これを礎石建物跡163とした。

これらの礎石は掘方や根石をもつものではなく、礎石の形状にあわせて浅い掘方を掘って据えているか、もしくは布置しただけのものである。一見、浅い掘方をもつものも、圧密による礎石の沈下に伴うものである可能性も考えられる。したがって、礎石の抜き取りがあっても、その痕跡が追認しにくい状況にある。

礎石建物跡163の礎石のうち、ａ－ａ'とした南北礎石列は、N－17°－W　の方向をもち、礎石の心々間距離で1.96～2.02ｍを測る。1尺を30.26㎝、6尺5寸を1間とすると、1間は約1.97ｍとなり、上記の礎石は1間幅で配置された可能性が高い。西側のｂ－ｂ'の礎石列は、ａ－ａ'の礎石列とおよそ0.99ｍの間隔で平行する。礎石間の心々間距離は0.75～1.06ｍと短く、ややばらつきが見られるものの、平均距離は0.94ｍである。先の計算にしたがえば、0.98ｍが半間となり、両礎石列の間隔とｂ－ｂ'礎石列の礎石間隔は半間で設計されていたものと判断できる。現状では、建物の上部構造を復元するのは困難であるが、ａ－ａ'とした南北礎石列の礎石が1間の間隔で比較的大きめの礎石を用いていることから、母屋の西辺とし、ｂ－ｂ'礎石列は軒もしくは縁に関わるものとも考えられるが、推測の域を出るものではない。また、ｂ－ｂ'礎石列の西には0.96ｍの間隔を隔てて、2個の礎石が南北に並んでいる。ｂ－ｂ'礎石列との間隔が半間であり、平行していることなどから、礎石建物跡163に関連するものと考えられる。

なお、建物の方向に関しては、下層で検出した古代の護岸施設である護岸遺構188の方向とほぼ一致しており、当該護岸遺構が谷の法面方向に規制されている蓋然性が高いことを考慮すれば、礎石建物

図 64　３調査区 第６面

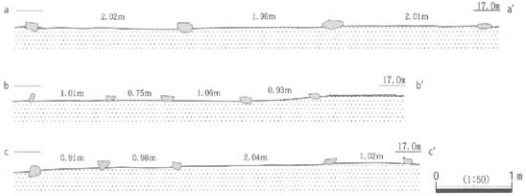


図 65　礎石建物跡 163 断面図

跡163も谷の方向に合わせて造営されたものと判断できる。

このほか、礎石建物跡163の北西では、およそ1m四方で板材が敷きつめられている（遺構161）。性格は不明ながらも、建物に付属する施設の遺構であることが窺われる。

当該遺構面は谷2の中位に位置し、後述する堰83掘削時に人為的に埋め戻された遺構面として、調査面積は大きくはないが、重要な位置を占めるものである。

（2）第7面

第6面の基盤層となる6層を除去することによって検出した豊臣前期の遺構面である。遺構面のレベルは16.5～16.6m前後を測り、東側がやや低いが、全体に平坦である。6層は層厚10～15cmを測る整地層であり、調査地のほぼ中央では、炭化物や食物残滓などを含む黒色土が局地的に堆積しており、ここからは後に報告するようにまとまった遺物が出土している（図64）。

整地層の一単位ではあるが、元来はゴミ穴などの廃棄土坑の埋土を起源とするものと考えられ、出土遺物に一括性が高いことなどを考慮し、遺構162として区別した。ここからは、多量の箸や土師器皿のほか、金槌や錐などの工具類、銭貨、扇など、多種多様な遺物が出土している。

当該遺構面からは、第6面に比してやや大振りな30cm前後の花崗岩を用いた礎石列を検出している。これらの礎石は明確な掘方を持つものではなく、礎石の形状に合わせて浅く掘り窪めて据えたか、もしくはそのまま基盤層に布置しただけのものである。この遺構面では礎石の抜き取り痕が浅いピット状を呈しているが、これらはいずれも不定形で深さもまちまちであり、掘方というよりも、土圧などの圧密による礎石の沈下による痕跡であると判断している。

ここでは、東西南北に平行もしくは直交する礎石列をまとめて礎石建物跡192としている。

礎石建物跡192の南北礎石列は、N－17°－Wの方向をもち、これは先に報告した第6面の礎石建物跡163と同一方向であり、谷の方向に沿って造営されたものと考えられる。

a－a'の礎石列の各礎石の心々間距離は北側の3間分が1.52～1.66mである。南側の1間分は3.30mで倍の長さであり、あるいは中間の礎石が逸失している可能性もある。西側のb－b'の礎石列は、a－a'の礎石列とおよそ0.98mの間隔で平行する。この長さは1尺を30.26cm、6尺5寸を1間とした場合のちょうど半間になり、第6面で検出した礎石建物跡163における2条の南北礎石列との関係と同じである。b－b'の礎石列の礎石間の心々間距離は、一部で抜き取りがあるものの、おおむね1.11～1.36mで、全体に間隔は狭い。なお、当該礎石列の中には石臼を打ち欠いて転用したものが含まれる。

このほか、図中ではラインをひいてないが、礎石列b－b'の西側でも礎石および礎石抜き取り穴が南北に並んでいる。また、礎石列a－a'の東側でも同様に礎石および礎石抜き取り穴が南北に直列する状況が看取されることを補記しておく。

一方、東西方向の礎石列では、礎石列d－d'とe－e'が約3.30mの間隔で平行するとともに、礎石の心々間距離も近似する。礎石列d－d'は、礎石の心々間距離が0.82～1.03mで、平均0.95mを測る。礎石列e－e'は、2箇所で礎石が抜き取られているが、各々の心々間距離は0.98～1.02m、平均0.98mを測る。両者ともに礎石間は半間を意図したものである可能性が高い。

礎石列d－d'の約0.74mで検出した礎石列c－c'は配列および心々間距離にもややばらつきが見られる。しかしながら、これを境に南側には礎石が展開しないことから、この北側で検出した礎石群と一連のものと考えられる。礎石の心々間距離は全体に狭く、建物の付帯施設に伴う礎石の可能性が高い。

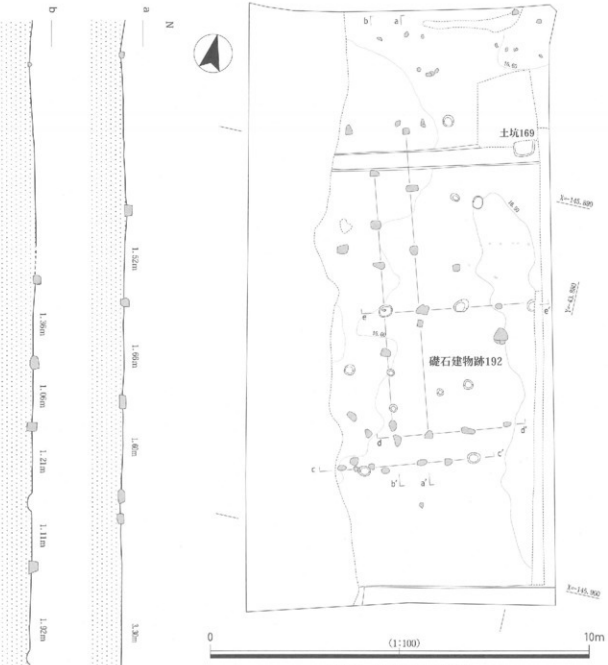


図 66　３調査区 第７面

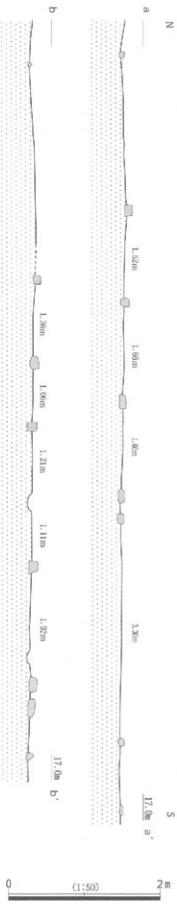


図 67　礎石建物跡 192 断面図

当該遺構面では、これ以外に土坑 169 を検出している。土坑 169 は北側を下層確認用試掘坑で破壊してしまっているが、東西 0.57 m、南北は残存で 0.42 m、深さ 0.42 mを測る。出土遺物は僅少であり、陶磁器では美濃天目碗片、木製品では箸などが出土したのみである。

（3）第8面

第7面の基盤層となる層厚約 15 ㎝の 7 層を除去することによって検出した豊臣前期の遺構面である。

遺構面のレベルは 16.4 ～ 16.5 m前後を測り、すでに報告した第6・第7 面同様に東側がやや低いが、全体に平坦である。当該遺構面からは、溝・ピット・石敷き遺構などを検出している。

溝 171 は調査区の南東隅から北西に向かって直線的にのびる。南北ともに調査範囲外に続いている。

方向は、N－ 11°－Wで、西側で検出したピット列と同方向を指向する。規模は幅 0.97 m、深さ 0.22 mを測り、底面のレベルはわずかに北側が低いものの大きくは変わらない。埋土は暗灰黄色細砂混じり粘土であり、これにオリーブ灰色細砂混じり粘土塊が混じる。埋土の状況からは頻繁に水が流れるような状況ではなかったことが窺われる。なお、この溝の南側では、西側から幅約 40 ㎝、深さ約 10 ㎝の溝状の窪みが合流している。

また、当該溝では、局地的に杭と板材などを用いて護岸状の施設が設けられている。この護岸状遺構 193 は、西側では 1.7 m、東側では 1.2 mの延長であるが、基本的には対峙するように設けられている。造作としては、さほど丁寧なものとはいえず、ミカン割りした長さ 20 ～ 60 ㎝前後の材を横木とし、それを直径 5 ～ 8 ㎝前後の杭で押さえただけのものである。

また、この南からは溝 171 を横断するように打ち込まれた杭列 194 を検出している。この杭列は径 3 ～ 5 ㎝前後のミカン割りされた 6 本の杭を 20 ～ 30 ㎝間隔で打ち込んだものである。厳密には溝が埋まりかけて窪んでいた段階に打設したもので、第7 面の遺構とすべきものかもしれない。

ピットは溝 171 の西側で 14 基を検出している。このうち、ピット 173 ～ 178 は、溝 171 と同じ方向で、N－ 11°－Wで直列している。断面図を見ても分かるようにピット 175 ～ 178 は掘削深度が浅いものの、整然と並んでいることから一連の構造物であると判断される。一方、これより以西のピットでは、ピット 178 が直角に折れていること以外には、整然とした配列は見られない。

ピットは楕円形もしくは円形を呈するものが多く、径は最も小さいピット 180 で 22 ㎝、最も大きいピット 179 で 55 × 37 ㎝を測る。深さはピット 175 ～ 178 が 7 ～ 11 ㎝で柱根などは残らない。一方、ピットのうち、173・174・179・180・182・185 は、180 が 12 ㎝で浅いが、それ以外は 28 ～ 41 ㎝の深さをもつ。断面形状も台形状にはならず、不正なU字形もしくはV字形を呈するものが多く、最深部に対応するように柱根が残っている。柱根は先端を尖らせたものであり、直径が 5 ㎝前後と細く、柱というよりは杭と呼ぶべき形状を呈する。

掘方に関しては、杭の打設によって上層の土が巻き込まれて落ち込んだ可能性も考慮して調査を行ったが、結果的にこれらは確実に掘方を有するものであることを確認した。したがって、状況としては、不正な掘方を掘削し、そこに先端を尖らせた杭状の柱を立てた掘立柱構造であったと判断できる。なお、埋土は浅黄色細砂ブロックを含む灰色砂混じり粘土である。

ピット間の距離は、直列するピット 173 ～ 178 では、0.82 ～ 1.30 mでややばらつきがある。178 と 179 の間隔は 1.69 m、174 と 182 の間隔は 1.53 mである。

これらのピット群については、柱材が細いことや、間隔が不整であることなどの特徴をもつ。また、先端を尖らせた杭の先端加工をしているにも関わらず掘方を有しており、断言はできないものの、これ

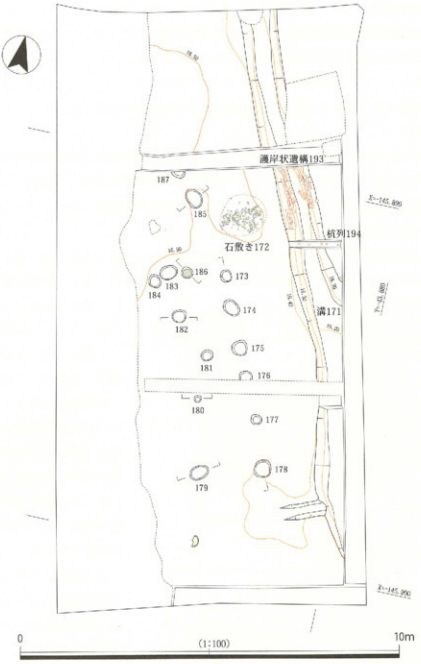


図 68　３調査区 第８面

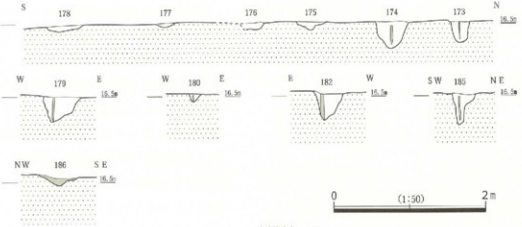


図 69　遺構断面図

らは建物の基礎ではなく、杭列や足場などのような臨時の構造物であった可能性も考慮する必要がある。

ピット群の北側では円礫を敷いた石敷き172を検出している。この石敷きは南北1.1 m、東西1.2 mの範囲に径5㎝前後の扁平な円礫を敷き並べたものである。やや中央付近が盛り上がるものの、全体に平坦であり、いずれも平坦面を上方に向け、円礫は1層のみである。護岸状遺構193の西側に位置し、周辺の遺構に伴う石敷きであることは確実だが、性格は不明である。

3. 井戸

冒頭でも記したように、今回の調査では、旧府警本部の建物や豊臣後期に帰属する堀83の掘削とその埋め戻しに伴う土取りなどによって、豊臣前期の遺構面や遺構は3調査区を除くと、深く掘削された井戸が残るのみである。以下では、堀83に先行する豊臣前期の井戸について報告する。

（1）井戸102

井戸102は堀83の南西コーナーから北に約22 mの地点で検出した。見かけ上、堀83の西側上端付近に位置するが、堀の肩部も同様に後世に大きく削平されており、実際は堀の法面に位置していたものと考えられる。この井戸は旧府警本部建物のコンクリート基礎杭に挟まれる形でかろうじて遺存していたものであり、全体に残りが悪く、細部では不明瞭な部分が多い。

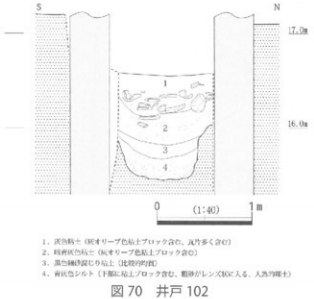


図70　井戸102

直径はおよそ1.5 m前後であったと推定され、深さは検出面から1.65 mを測る。埋土は最下層が人為的な埋め戻し土であり、最上層には礫を含む瓦片が層状を成して出土している。井戸枠は残らないが、これが抜き取り後の状況であるのか否かは埋土の状況だけでは判断できない。

出土遺物には軒丸瓦を含む瓦片が多く、その内訳は破片数で瓦片115点、土師器片4点、曲物底板などの木製品5点、スラグ2点、漆器椀1点である。

（2）井戸147

井戸147は調査地南東側の谷2の掘削過程で検出した。谷2の埋土中に掘られた井戸であり、底面は13層の砂層に達している。平面形は円形を呈し、直径0.80 m、深さは検出面から1.47 mを測る。埋土は下層が人為的な埋め戻し土である可能性が高いものの、上半は粘土層と粗砂層の互層で、ラミナが見られる部分もあることから、自然堆積であることが窺われる。底面には直径2～7㎝前後の円礫が敷き詰められている。図上では

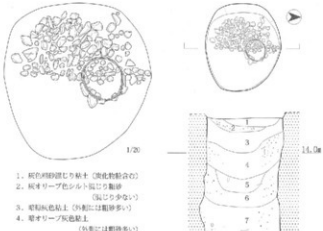


図71　井戸147

東半部には広がらないが、これは東半部を先行して掘削した際に取り上げてしまったことに起因する。この礫敷きの直上から桶のタガのみが出土している。このタガは内径で直径 21 ㎝を測る竹製で、桶もしくは釣瓶などのタガが脱落したものであるとも考えられる。

出土遺物はさほど多くはないが、陶磁器片は青花を含んで 28 点、瓦片２点、木製品 19 点、漆器片１点が出土している。当該井戸は層位的には豊臣前期か後期かが、にわかに判断しがたい状況であるが、わずかに出土した瀬戸丸皿や軒平瓦などの特徴を勘案し、豊臣前期に帰属するものと判断している。

（３）井戸 155

井戸 155 は調査地の北半部、堀 83 の東側肩部付近から検出した小型の井戸である。上面は旧府警本部棟によって削平されており、掘り込み面は不明である。しかしながら、後述する井戸 166 と同様に堀 83 の東肩付近に位置し、堀東側の土塁に重複する部分に該当する。井戸 166 と同様に一気に埋め戻された状況が看取されることから、堀 83 の造成に伴って埋め戻されたものと判断し、豊臣前期の遺構として報告することにした。

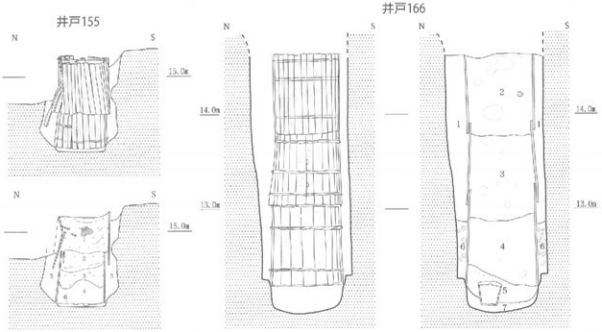
直径約 0.8 ｍの円形掘方をもち、小型の桶を連結した井戸枠が２段分残る。深さは残存で 1.09 ｍであり、地山の砂礫層を掘り込んでいる。桶はいずれも直径約 50 ㎝、高さ約 55 ㎝である。

埋土は最下層を除けば、いずれも人為的な埋め戻し土である。遺物は上層からほぼ完形の漆器椀が１点出土したのみであり、陶磁器等はまったく出土していない。

（４）井戸 166

井戸 166 は調査地の北半部、堀 83 の東側肩部付近から検出した。

堀 83 の東側には地山土を盛り上げた土塁がわずかに残っており、当該井戸は、この土塁を除去した



1．オリーブ灰色粘砂
（部分的に黒土斑状入る、炭分解の植物遺体が多い）
2．暗緑灰色粘砂（下部はシルト～砂土層）
3．灰色粘砂（地山ブロック含む）
4．黒色粘土（部分的に粘砂がブロック状に入る）
5．オリーブ灰色粘砂（裏込めか、地山起源か）
6．灰白色中砂（礫を少量含む）

1．淡色微細なり粗砂（径10cm以下の石少量含む）
2．黄色中砂～粗砂（径30cm以下の灰白色シルト～粘土含む）
3．黄灰色粗砂（地山ブロック多く含む　地山起源）
4．灰オリーブ色粘砂（地山ブロック若干含む　地山起源）
5．黄灰色粗砂（部分的にラミナあり）
6．灰色礫層（粗砂含む）
7．オリーブ黒色シルト（井戸廃棄時の自然堆積層）

0　(1:40)　1m

図 72　井戸 155・166

下層から検出したものである。したがって、層位的には堀83の掘削に先行するものであることは確実である。

直径1.04mの円形掘方のほぼ中央に逆位で連結した3段の桶を井戸枠としている。各段の桶は直径が73㎝であるが、高さには若干の差異がみられ、上段と中段の桶が高さ87㎝であるのに対して下段の桶は103㎝である。中段の桶には2箇所で長方形の小孔が穿たれている。掘方は底面では径を減じて30㎝前後で一段深く掘り込まれており、この部分には桶枠は及ばない。

埋土は底面から40㎝前後の堆積土（図72土層番号5・7）を除けば、地山を起源とする人為的な埋め戻し土である。この人為的な埋め戻し土は径20㎝にも及ぶ粘土ブロックを含んでおり、3層に分層しているものの、層相の共通性から一気に埋め戻されたものであると判断できる。状況からみて、当該井戸は堀83の掘削に伴って、埋め戻されたものである可能性が高く、埋め戻し後に堀83の造成と一連のものと考えられる杭列165が打ち込まれていることも、これを証左するものである。

最下層からは原形を留めた釣瓶が正位で出土している。調査時には縄の痕跡を確認すべく精査したが、検出できなかった。なお、出土遺物の内訳は陶磁器を含む土器片が9点、瓦片16点、木片を含む木製品が6点を数える。

4.堀・溝

（1）堀45

堀45は2aトレンチで検出した。東半は調査範囲外であるが、3m近い幅をもち、深さも2mを超えることから堀とした。西側の法面は63°を測る急峻な角度で掘り込んでいる。幅は2.9m以上、深さは検出面から2.0mを測り、断面は逆台形を呈する。埋土は大きく2層に分かれ、上半部は一気に埋め戻された人為的な埋土である。なお、この堀45は南側では底面が2条の溝になっており（溝46・47）、切り合い関係から北半部を新規に拡張し掘り直し、堀45が掘削された状況が看取される。

平面的にみると、堀45と溝46・47の方向は異なっており、堀45はN－12.5°－Wで北側で西に振っている。最終的な埋没は同一層による人為的な埋め戻しであり、溝46・47は大半が埋没しつつも浅い窪みとして新規に掘削された堀45とは併存していた状況が窺われる。

底面からは規則的に並ぶ隅丸長方形の土坑群を検出している。土坑は調査範囲内で6基が直列している。土坑は平均して長辺1.3m前後、短辺0.7m前後、深さ0.7m前後を測るものであり、およそ0.6～1.3m間隔で規則的に掘削されている。埋土の状況から水が溜まることもあったことが窺われる。このような土坑群は、静岡県田方郡函南町所在の仁田館跡検出の堀で検出されている堀障子と類似することから（静岡県埋蔵文化財調査研究所2003）、小規模ながら防御的性格を意図して穿たれた可能性が高い。

また、北側では西側肩部がやや西に膨らんでいるが、この部分では直径25㎝前後のピットのほか、法面にも直径30㎝前後の円形の浅いくぼみを検出しており、簡便な木橋などの基礎である可能性も考えられるが断言はできない。

出土遺物は多いとはいえないが、瓦片や陶磁器片のほか、下駄などが出土している。わずかに出土した軒平瓦や瀬戸丸皿などをみる限り、豊臣前期の遺構であると考えられるが、断言はできない。

（2）溝46

溝46は堀45の南側で検出したもので、N－1°－Eの方向を指向し、溝47と平行する。

規模は幅1.02m、深さ1.35mであり、西側法面が65～72°、東側法面が72°を測る。断面形はV字形を呈するいわゆる薬研堀である。単なる溝というよりも堀45に先行する防御的性格をもつ区画

溝であると判断できる。調査範囲が狭いこともあり、出土遺物は僅少であるが、最終埋没は同時ながらも堀 45 に切られることなどから、豊臣前期段階の遺構と考えられる。

（３）溝 47

溝 47 は溝 46 の東側で平行して検出した。大半が調査範囲外であるが、幅は 1.28 m以上、深さ 1.40 mを測る。西側法面の角度は約 45°である。最終的には同一埋土で埋め戻されるが、下記の断面図中の土層番号 12 と溝 46 の東法面との関係を見ると、溝 46 は溝 47 に先行して掘削されていた可能性もある。調査範囲が狭く、出土遺物も僅少だが、豊臣前期に帰属する遺構であると考えられる。

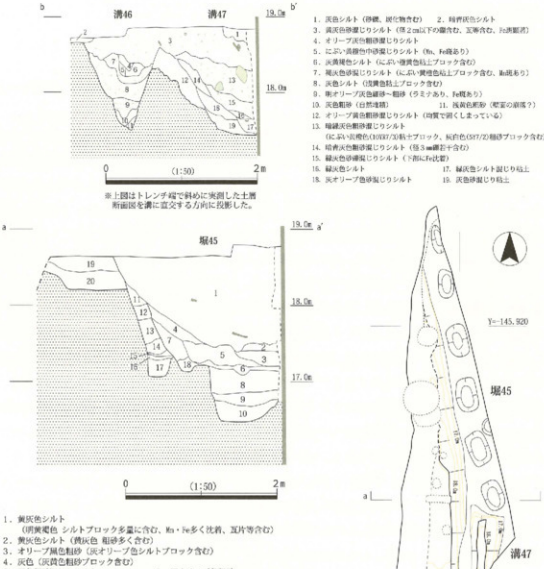


図 73　堀 45・溝 46・溝 47

第２節　遺　物

１．前提

再三にわたって記述してきたように、今回の調査では豊臣前期の遺構面の遺存状況は必ずしも良好とはいえず、３調査区で堀 83 掘削時に整地された遺構面および掘削深度が深く削平を免れた井戸などが検出されたに留まる。したがって、これと呼応して出土遺物も後述する豊臣後期段階の遺構を比較すると量的には多いとはいえない。以下では、瓦類を除いて、遺構報告と同様に豊臣前期の遺構面を重層的に検出した３調査区出土の遺物に関する記述を先行し、続いて１・２調査区で堀 83 に切られる形で検出した井戸などから出土した遺物を報告することにしたい。

２．３調査区の出土遺物

（１）土器・陶磁器・土製品

図 74 に掲げた土器・陶磁器のうち、649 が第８面検出の溝 171 から出土した以外は、いずれも遺構 162 からの出土である。

613 ～ 638 は土師器皿である。613 は内湾気味の口縁をもつ。614 ～ 618 は口径 8.9 ～ 10.0 ㎝、620 は口径 13.1 ㎝を測る。616･621 ～ 638 は、内面および口縁端部を中心に油煙などが付着しており、灯明皿として使用された痕跡を残す。このうち、628 ～ 632 は底部の中央が盛り上がるいわゆるヘソ皿である。また、634 ～ 637 は 619 とともに外反する口縁部をもち、強い回転力を使って成形するなど、技法的特徴を一にする。いずれも硬質の焼成であり、口径も 12 ㎝前後で近似するなど、一元生産された規格性が高い土師器皿の一群である。638 は口径 15.8 ㎝を測る大型の皿で、内外面に煤油の痕跡が明瞭に残る。639 ～ 641 は瀬戸美濃窯の灰釉丸皿である。いずれも付け高台で、輪ドチ痕が残る。642 は瀬戸美濃窯の灰釉稜皿で、削り出し高台の内側は露胎である。口縁端部に油煙が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。643 ～ 646 は瀬戸美濃窯の大Ｋ碗である。いずれも高台部分に鉄化粧を施しており、643・644 見込み部分には擦痕が顕著である。648 は大Ｋ碗の高台部片で、外面には鉄化粧を施す。意図的に円盤状に加工された可能性もある。647 は瀬戸美濃窯の灰釉丸碗である。649 は景徳鎮窯系の白磁皿であり、口縁部は大きく外反する。高台端部外面のみ釉剥ぎする。650 は備前焼の瓶である。口縁部を欠くが、底部にはヘラ記号を施す。651 は漳州窯系白磁稜花皿で、見込み部分は蛇の目剥ぎである。652 は小型の皿である。653 は焼塩壷の蓋で被熱のため色調が赤変している。654 は瓦質のミニチュア土器である。外面が丁寧なミガキ調整、内面には波状の櫛描き文が施文される。口縁端部の一部が片口状を呈していた可能性もあるが、破損しており断言はできない。655 は厚さ 1.5 ㎝の瓦質土器を直径 3.7 ㎝の円盤に加工したものである。656 は墨書のある土師器皿である。底部には大きく「大□」の文字がある。内面にも６字前後の文字と考えられる墨書があるが、判読できない。底部には、直径約５㎜で外面から内面に向かって穿たれた円孔がある。657 ～ 662 は景徳鎮窯系の製品である。657 は龍文をもつ青花碗。658・659 は外面に彩色を施す。660・662 は青花皿で、後者には底部に字款がある。661 は白磁の稜花皿であり、内面には梅の陽刻が作り出される。663 は円盤状の粘土板の一方を浅く窪ませた土製品である。胎土の状況からみて微量の貴金属を溶融するための坩堝もしくはトリベの可能性がある。664 は小型の有孔円盤である。665 ～ 667 は犬形土製品である。体長 2.4 ～ 2.7 ㎝、体高 1.7 ～ 2.2 ㎝前後を測るものであり、666 と 667 はほぼ同大である。府鴬１期調査で出土した犬形土製品との対比でいうと、小型のＡⅰ類に該当する（江浦 2000）。

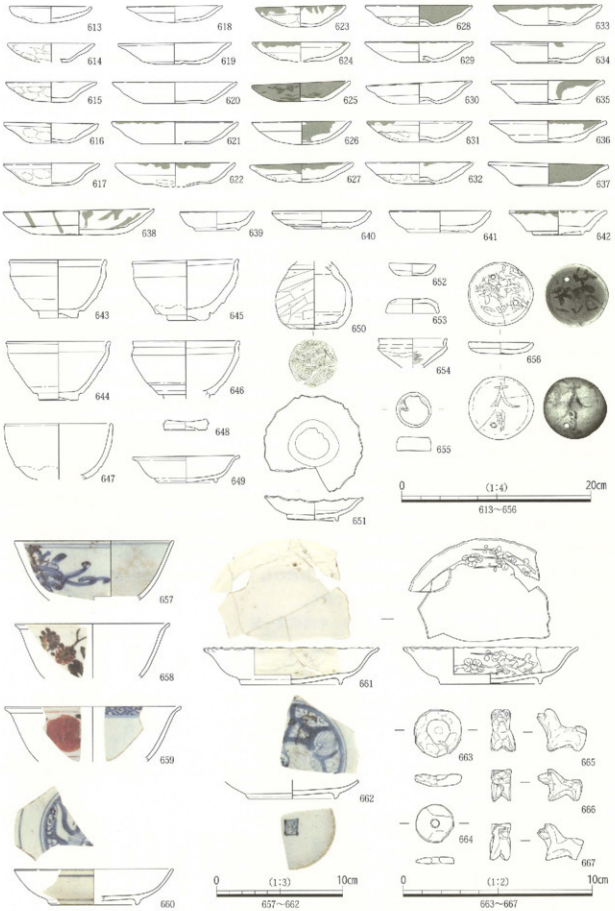


図74　３調査区出土土器・陶磁器・土製品

（2）木製品

① 木簡

3調査区から出土した木簡は、いずれも遺構162から出土した。このほか、将棋駒も出土しているが、本書では将棋駒は木製品の項で報告する。また、現状ではまったく文字の痕跡を見出すことができないものもあるが、その形状から木簡である可能性が高いものについては、ここで報告することにした。

668は完存する荷札木簡であり、表面には「米四斗京枡清八」と書かれており、裏面は不明瞭ながらも、同文であった可能性が高い。「京枡」によって計量された米に付された荷札である。669は上端の一部を欠損するものの、ほぼ完存する。表面に「与三郎」という人名を記す。裏面にも墨痕が確認できるが、判読できない。670は短冊状を呈するが下端と上端左半を欠失する。上端はキリオリである。下位に人名が記されている。671は左辺のみが残る。一面のみ墨痕が残るが、判読できない。672は左辺と上端が残るのみである。一面にのみ墨痕が残るが判読できない。673は「と」の一文字が残るのみである。木簡とするには厚く、角材などに文字が書かれていたものが破損して、現状の形になったとも考えられる。674は右辺および下端は原形を留め、左辺は二次加工によるものと考えられる。中位に文字が残るが判読できない。675は上端および右辺上部を除いて欠失する。一面にのみ文字が確認できるが、判読できない。676は左辺および上端を残す以外は欠損する。上端に文字が書かれるが、判読できない。677は上下端を残す。大振りの文字が表裏面に書かれるが、左右辺が二次加工されているために判読できない。678は上下端を欠くものの、032型式もしくは051型式の下部の破片であると考えられる。表裏面に文字があるが、内容は不明である。679は上下端を欠くものの、表裏面に文字が残る。残片であり、内容は不明である。680～682は墨痕を確認できない木簡状木製品である。680は上端部を面取りし、下端は丸く成形する。681は下端を欠失する。682は下端の一部が被火によって炭化している。683は下端を欠く。上端がキリオリである。一方の面にのみ墨痕が確認できるが、判読できない。

684は小判形の木製品で、片面の中央に文字と考えられる墨書がある。文字は一文字で明瞭だが、判読できない。685は上端を欠く。片面に規則正しい格子状の墨書を行い、その内側には赤色顔料が残る。格子はほぼ正方形を呈し、線の太々距離は間隔はおおむね1.04㎝である。684・685は狭義には木簡とは断じがたいものであるが、ここで報告しておく。

表8　木簡釈文一覧

668	・「〈米四斗京枡清八 ・「〈米四斗京□」	157×19×6	032
669	・「〈与三郎」 ・「　」	183×25×4	081
670	「かた（ぎり）□り産左	(209)×10×3	032
671	□	(31)×(12)×2	081
672	□	(60)×14×2	081
673	「と	(79)×(10)×11	032
674	□	(117)×(30)×8	032
675	□	(169)×(22)×8	011
676	□	(142)×(36)×2	081
677	・□ □	(38)×(11)×2	081
678	・□ □（ぶち） □（ぶち）カ	(51)×22×2	081
679	・「　」 ・「　」	(86)×39×3	032
680	木簡状木製品	126×20×4	032
681	木簡状木製品	(140)×22×5	039
682	木簡状木製品	146×18×4	032
683	「〈□」	(93)×18×4	032
684	「□」	28×12×2	065
685	格子状の線様	28×12×2	065

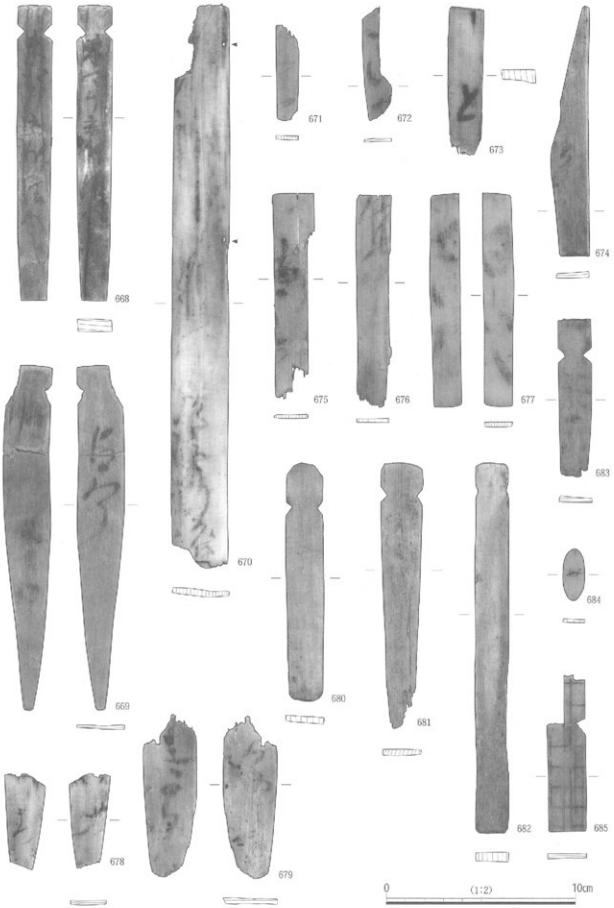


図 75　遺構 162 出土木簡

② 漆器

漆器に関しては広義には漆塗りを施した木製品全般を包括するが、ここでは小型の椀や皿などのみを取り上げ、箸や大型の皿などの漆塗り木製品については後述する木製品の項で報告することにした。

3調査区から出土した漆器は、697が第8面の溝171で出土した以外はいずれも遺構162から出土した。出土した漆器は個体識別によると23個体が確認でき、このうち、比較的残りの良い19点を図76に掲げた。

686は内湾する口縁と外面に3条の細い突帯をもつ鉢形を呈する漆器である。内外面ともに梨地金蒔絵で、外面には繊細なタッチの「三つ藤巴」を蒔絵で描いている。内面を梨地とすることから、食器ではない可能性が高い。蒔絵は平蒔絵をした後、薄く漆を塗布し、研ぎだしている。蒔絵の特徴は室町時代的な様相を呈する。木地も非常に薄く、洗練された技法によって作られた優品である。年代的にみて大坂本願寺の什器であった可能性も考えられる。

687は椀である。内外面とも塗色は赤色である。上半を欠損するが、外面にのみ黒色の文様が残る。文様は藤と考えられる意匠がみられるが、全容は不明である。688は椀である。内外面ともに塗色は赤色である。外面にのみ黒色で「横見梅に南天」と考えられる文様が描かれる。687・688は見込み部分が被火により炭化している。689・690は同一意匠をもつ碗である。両者ともに内外面の塗色は赤色である。外面にはいずれも黒色で「切竹に藤」が描かれる。691は皿である。内外面ともに塗色は赤色である。外面に黒色の「三つ盛木瓜」が3箇所に配される。692は椀である。内外面ともに塗色は赤色である。破片であり、文様の全容は不明であるが、黒色の文様が描かれる。文様は「木瓜」の崩しであろうか。693は皿である。内外面とも塗色は赤色である。外面には黒色で文様が描かれる。文様は橘を表現したものと考えられるが判然としない。

694は小型の皿である。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。文様はない。695は椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。高台見付には図示したような文様が痕跡として残る。696は椀である。塗色は内外面ともに赤色である。外面には黒色で木葉などの文様が描かれるが、大半が破損しており、全容は不明である。

697は椀である。塗色は内外面ともに赤色である。外面には「三つ盛り花菱」が黒色で描かれる。この「三つ盛り花菱」は下方の二つが陰花菱となっている。698・699はいずれも椀である。塗色は内外面ともに赤色である。文様は外面に「三つ盛り亀甲に花菱（花角？）」が黒色で描かれている。700は椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。外面には下向きの三葉とそれを結ぶ弧線が赤色で描かれる。

701は高い高台をもつ椀である。塗色は内外面ともに黒色である。外面には「中陰桔梗桐」に別の文様が付加されたものが赤色で描かれている。702は椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。外面には下向きの三葉とその周囲に弧線が赤色で描かれる。細部は異なるが、700と共通する文様意匠と考えられる。見込み部分は被火により焦げている。703は椀である。他例に比して木地が厚い。塗色は内外面ともに黒色である。内面の見込みにデフォルメされた「逆さ鶴」と考えられる文様が赤色で描かれている。704は椀である。塗色は外面が黒色、内面が赤色である。内外面に文様は描かれないが、高台見付に「丸に一文字」が赤色で書かれている。

705は高い高台をもつ椀である。塗色は内外面ともに黒色である。外面には「鶴亀」と「松竹」が描かれている。この文様は光沢のない緑灰色を呈しており、顕微鏡観察を行ったが、蒔絵や箔絵などの痕跡は見出せなかった。

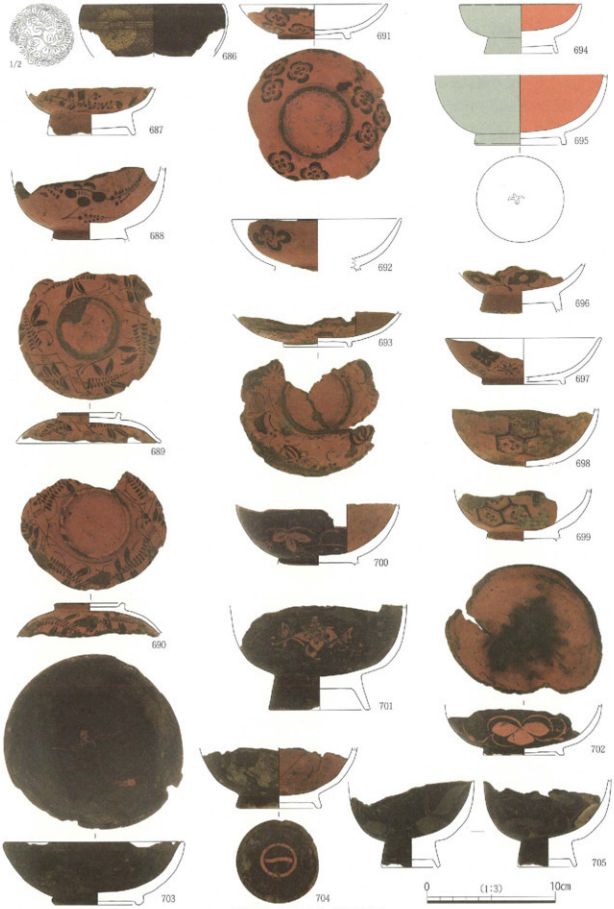


図 76　３調査区出土漆器

③ 箸

706 ～ 718 は遺構 162 から出土した箸である。この遺構から完形品が 257 点、破損品が 4698 点出土した。ここではそのうちの 13 点のみを図示した。

出土したすべての箸の長さを計測した結果、破損品の箸の延べの長さは 62909.76 ㎝である。完形品の計測結果から得られた一本の長さの平均値は 23.63 ㎝であり、これを基準とすると、計算上、箸は約 2660 本分にあたることが看取される。そしてこれら破損品の約 1330 膳と完形品数を併せると、約 1454 膳の箸が一括廃棄されたと推定できる。707・718 のみ漆塗りであり、全面に黒漆を塗布する。断面形は整正な円形を呈し、丁寧に成形されている状況が看取される。その他の箸は白木であり、形状は中心付近に最大幅をもち両端が細くなる両口箸が大勢を占める。ただし、一部には 712 のような寸胴気味のものも散見される。このほか、711・715 は上端を斜めに切り落している。長さは 1 寸の長さを 3.025 ㎝とした場合、最も短い 6 寸 2 分のものから 1 尺 1 寸 3 分まで見られる。そのうち 7 寸 3 分 ～ 7 寸 8 分のものが 51％を占める。1 尺を超えるものは 1 尺 1 寸を測る 706 を含む 2 本のみであり、特殊な用途に用いられた可能性もある。

第 8 面で検出した溝 171 から 5 本の完形品が出土しているが、状況は大きく変わらない。

④ 棒状木製品・楊枝

719・721 は棒状木製品である。いずれも一方の端部に切り込みをいれる。720・722・724 は先端を尖らせる。いずれも上端を欠損しており、長さは不明である。723・736 ～ 738・740 ～ 743 は楊枝である。737 は箸を切り落したものである可能性が高い。738 は漆塗製品を転用したもので、側面の一部と頭部上面に漆塗膜が残る。739 は頭部を三角錐状に成形する。740 ～ 742 は長さは異なるが、扁平な板状を呈し、頭部を斜めに切り落とす楊枝であり、共通する特徴をもつ。743 は上端を欠損する。

⑤ 火付け棒

725 ～ 735 は一方の先端、まれに両端が被火によって炭化したいわゆる火付け棒である。99 点が出土し、図 77 にはこのうちの 11 点を図化した。大半は一方の端部が炭化するのみであるが、725・726・728 は両端が炭化する。火付け棒には割り放しのもの（728 ～ 730・734・735）、おおまかに角柱状に割られたもの（725 ～ 727・731）、板状の製品を転用したと考えられるもの（732・733）がある。

また、箸の破損品の中には、一方の端部が被火により炭化したものが 113 本確認でき、これらについても火付け棒として使用された可能性がある。

⑥ 蓋・曲物・柄杓

744 ～ 746 は蓋である。いずれも中央に 1 箇所もしくは 2 箇所の穿孔がある。744 は他の 2 点に比して厚みがあることや穿孔が大きく、蓋ではなく玩具等の車輪の可能性も残る。

747 ～ 750・757・771 は柄杓の部品である。747 ～ 750 は底板である。750 は内外面に黒色塗料が残る。757 は柄である。771 は竹柄杓の受けである。圧密による変形が著しいが、中位には柄を差し込むための穿孔が確認できる。復元径が 5.3 ㎝で小型であることや、外面の成形が丁寧であることなどから、茶道具であった可能性が高い。751 は曲物の底板であり、側面の 3 箇所に木釘が残る。

⑦ へら・しゃもじ

752 ～ 756 はへらである。いずれも篦部を弧状に加工し、先端は薄く削りだして刃状に成形する。756 は細身であり、他例がいわゆる「せっかい」であるのに対して別の用途をもつものであった可能性もある。758 はしゃもじで、先端が摩滅する。

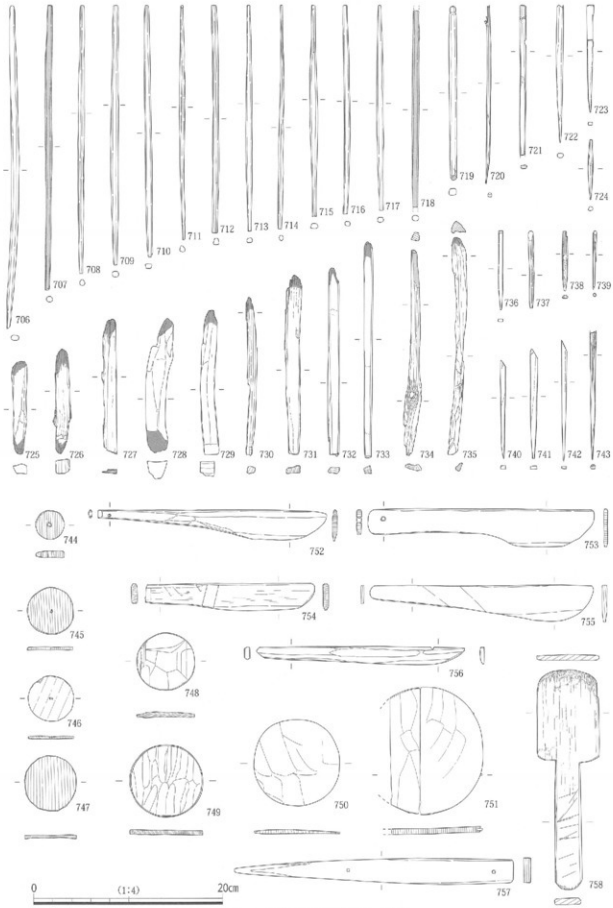


図77　３調査区出土木製品（１）

⑧ 折敷・脚部

760・761・767は折敷の部材である。760・761は脚である。760は上面の両端に鉄釘が残る。761は四周ともに原形をとどめておらず、大きさは不明である。柾目材を使い、円弧を描く透かしを穿つ。表面の成形は非常に丁寧である。767は隅切折敷の側板である。内外面ともに朱漆が残る。外面の下部には、元来の木釘痕跡のほか、補修時に打たれた木釘が5箇所確認できる。759・766・798は詳細は不明ながらも脚と考えられる。759は中央上位に棒状の材を通したと考えられる方形の穿孔があり、左右対称の位置に縦に並んだ木釘が2箇所ずつ残る。一方の木釘部分にはこれと対応するように幅約1㎝の帯状の圧痕が観察でき、当該部に板材が組み合わされていた可能性が高い。

⑨ 灯明台

762～765は灯明台である。762・763には下方に刳り込みがある。764・765は上方に刳り込みがあり、一方の端部は直線的にのびるのみである。壁の柱のほぞ穴に差し込んで用いられたものであると考えられる。764・765は先端や上面の一部が炭化する。

⑩ その他の木製品

769は箆状を呈する木製品である。768は羽子板状を呈する用途不明木製品である。770は草履下駄の可能性が高い。台部上面には面を留めるための木釘が前部・後部中央と縁辺に確認できる。歯は鉄釘で打ち付けているが、台部と歯部との接合面は整形されておらず、歯部は後に付加された可能性が高い。772は自在鉤など組み合わせて用いる木鉤である。木の二股部分を用い、全体を削り、黒色塗料を塗布する。下部は部分的に炭化している。773は用途不明の棒状木製品である。形状は中央がややふくらみをもち、両端は徐々に細くなるように成形されている。両端面ともに細かい面取りを行い、丸みを帯びている。また、両端には方向を合わせて「×」の線刻がある。774・776は杭である。774は第8面で検出したピット179に残っていた杭であり、全体を断面八角形に成形する。776は杭を払い先端を尖らせるのみである。775は用途不明品の部材である。3箇所に方形の刳り込みが残り、間隔は12.0～12.6㎝で、ほぼ等間隔である。780～785は木栓である。遺構162からは10点が出土し、そのうち6点を図示した。いずれもほぼ同大で長さ4.7～5.3㎝、直径1.8～2.3㎝を測る。断面形は大半が円形を呈するが、六角形に近いものもある。778は方柱状の用途不明品である。各面ともに非常に平滑に整形するとともに、小口部分も丁寧な面取りを行い、四角錐状に成形する。779は隅丸長方形を呈する刳り抜きの容器である。全体に薄く成形されるが、内面には擦痕が明瞭に残る。777は用途不明品である。上端を段状をつけて薄くし、鋸歯状に成形する。786・787は挽物の皿で、いずれも黒漆が塗布されている。2点とも破断面が被火によって炭化している。787には見込みと底面には重複した不定方向の刃物傷がみられる。両者ともに底部の段差の内径が20.5㎝で共通しており、同大同形の揃いの製品であった可能性がある。788～792は数珠玉と考えられる小型の玉である。いずれも断面形は算盤玉形を呈する。792のみ厚みがあるが、他は扁平である。791は乾燥および圧密によって変形している。793は「金将」の将棋駒である。文字は漆書で盛り上っている。駒尻が厚く、流麗な文字であることなど、いわゆる水無瀬駒の特徴を有している。下部の欠損はネズミなどの齧歯類にかじられたものである。794は2箇所に穿孔を行う板状木製品である。795は有頭棒状木製品である。頭部は頂部が平坦である。

796・797・799・800は人形である。796は高さ3.4㎝の小型の人形である。断面菱形の材の稜線を鼻筋に合わせる。顔面は目・鼻・口を表現し、顎は胴部の全面を削ることで表現する。目および顎の切り込みには薄歯の鋸を用いていたことが看取できる。胴部の下端はやや尖り気味である。正面からみて

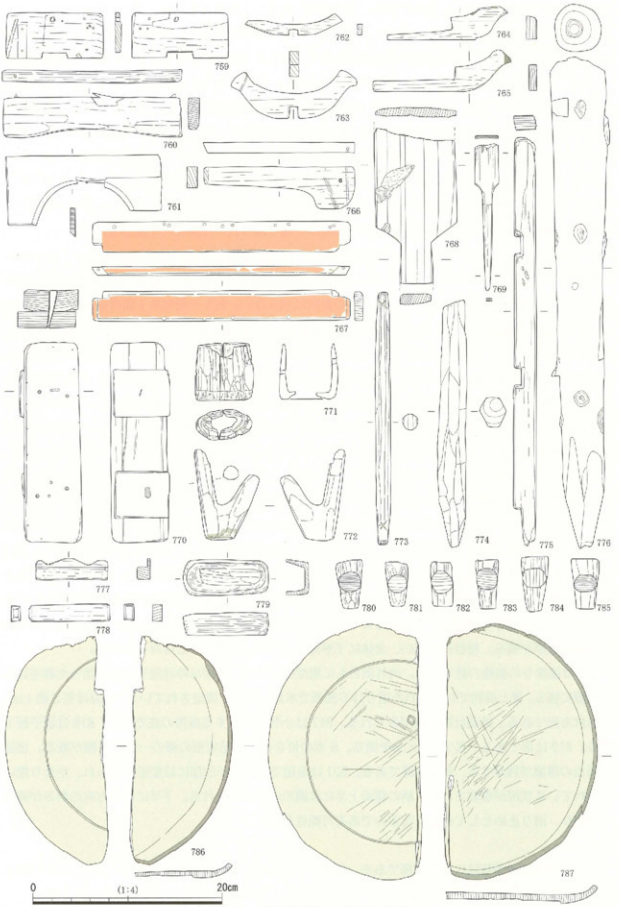


図 78　３調査区出土木製品（２）

左側の側面には木片が差し込まれており、腕を表現したものとも考えられる。797は細かい削りによって全体を立体的に成形している。部位ごとに見ていくと、頭頂部は細かい面取りによってやや丸みを帯び、顔面は目・鼻・口を表現する。鼻は周囲を削り込むことで高まりを作り出している。顎は尖り気味であり、頸部下方には段がめぐる。頭部背面には斜め上方から穿たれた直径約3㎜の穴がある。頭頂部にも窪みがあり、鳥帽子や冠を固定するためのものである可能性もある。高さは1寸2分を意図した可能性が高い。799は面取りした角柱状の材に目と口を刻んでいる。顔面はやや丸みを帯びる。頭部と胴部の区別は明瞭ではないが、胴部側は六角形に近い断面形を呈する。上下端面は周囲から切り込みを入れ、折り取ったままである。高さは4寸5分を意図した可能性が高い。800は顔面の一部が欠損する。目・鼻・口を表現し、頭部の下端を深く削り込むことで頸部を作り出す。正面からみて左側側面の下半に不明瞭ながらも墨痕が残る。胴部下端部はやや細く削られ、先端は丸く成形される。

801は鞘であったものを再利用し、舟形に成形する。先端は側面を面取りすることによって尖らせる。下部には1箇所に釘穴が残る。802～804は用途不明品である。いずれも板材上面の一部を鋸歯状に加工する点で共通した特徴をもつ。釘穴などの痕跡は残らない。805は板材の1箇所に切り込みを入れる。806・807は独楽である。806は上面に赤色と黒色の顔料を同心円状に交互に塗って文様とする。807は円錐状を呈し、高さがある。縦方向に細かい面取りを行うが、轆轤を用いた成形をしておらず、厳密にいえば、独楽ではない可能性も残す。808・809は木球である。いずれも形状は上下面が平坦でやや偏平である。整形は上下面端を面取りし、側面は2段に削る。やや不整ながらも、毬杖の球である可能性が高い。810は獎形の鍔形木製品である。中央の茎孔が長方形であることから、木刀などの模擬刀の鍔であると考えられる。右側には本来は小柄や笄を入れるための三角形の穿孔が表現されている。全体に成形はやや粗雑である。811は人形もしくは閉じた扇を模したような形である。裾部に逆V字の線刻がある。812は柄である。片側小口に長方形のほぞ穴が刳り込まれ、扁平な板材が欠損して残存する。中位がくびれ、輪鼓状を呈する。木刀などの模擬刀の柄である可能性が高い。また、残存する茎の大きさが先に報告した810の茎孔の法量と一致することから両者はセットであった可能性もある。813は鞘状木製品である。外面には栗形と返角が陽刻されるなど、忠実に鞘を模している。814・815は金箔を貼った製品の部材である。814は小型の箱物の側板と考えられる。外面には金箔が円弧を描いて残存している。金箔の小片が右隅にも残ることから波形の図柄であった可能性がある。815は用途不明品の外面に金箔が残る。柾目材を用い、全体に丁寧に成形する。木釘穴などはみられない。

816は漆塗りの蓋物の蓋である。内外面ともに黒漆塗である。内面は時計周りに漆を塗った刷毛目痕が明瞭に残る。蓋と曲物で付加された返りは6箇所で木釘を用いて固定されている。木釘は長さ約1㎝、断面は方形である。外面は擦過痕がみられる。817は小判形を呈する曲物の底である。818は羽子板である。819は扇である。長さ32.5㎝を測る。8本の骨を留める結束部の棒の一端には楔が残る。扇面に銀色の薄層が残存する。820は錐である。821は金槌である。小口部には変形がみられ、かなり使い込まれている状況が看取される。柄の側面上半には鍵形の線刻がされる。下半には横方向の刻みが連続しており、滑り止めとして付されたものである可能性もある。

⑪ 櫛

822～835は挽歯技法による横櫛である。種類は822～827・829の梳櫛と828・830～835の解櫛に分けられる。それらの解櫛のうち831～833は漆塗りである。漆塗りは背から棟部のみに残存しているが、本来は歯にも塗られていたと推測される。

平面形態はいずれも棟部が円弧状になり、肩部に角をもつ。断面形態は棟部が梳櫛と解櫛で異なり、解櫛は背部が平坦もしくは山形で、棟部が直線的なものが多数であるのに比して、梳櫛は棟部から背部にかけて曲線的なものが多数を占める。法量が判明したものは３点のみで、長さが 8.5 ～ 9.5 ㎝、幅 4.4 ～ 5.2 ㎝とそれぞれ異なる。

⑫ 下駄

下駄は溝 171 から１点、土坑 162 から 10 点出土し、そのうち全体の形状が判明する７点を図示した。なお、報告にあたっては、凡例に示したように、隣接する府警本部１期地点の調査報告における分類

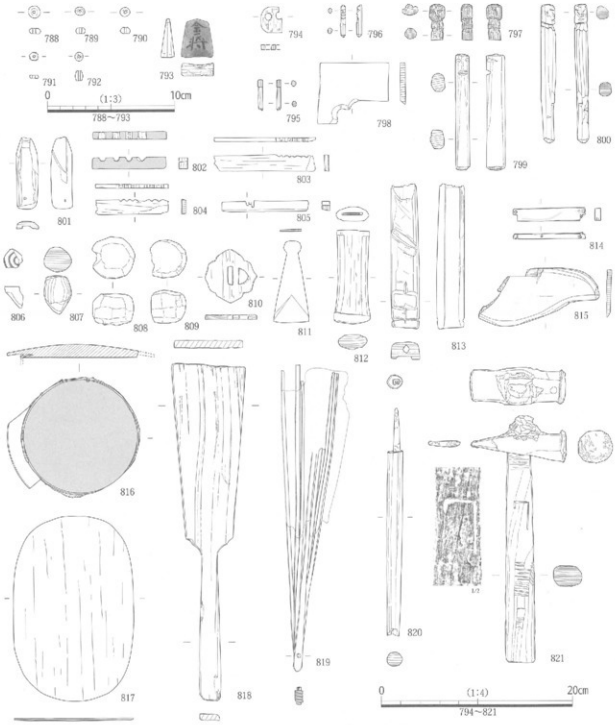


図 79　３調査区出土木製品（３）

に準拠する。(大文セ 2002)。

種類はすべて連歯下駄（Ⅰ類）である。838 のみが塗り下駄である。法量は長さが 21.0 ㎝、幅が 8.8 ㎝である。1 寸の長さを 3.025 ㎝とすると（岩田 1994）、計算上の長さは 6.94 寸、幅 2.91 寸であり、7 寸×3 寸を意図したものと推定される。これは府警 1 期地点の調査で出土した豊臣前期の塗り下駄の一群と同大同形、緒穴の位置も一致し、同規格の下駄であるといえる。調整は台裏部の両端共に丁寧な面取りを施し、歯部は四隅の角を取り滑らかである。このように台部の整形から細部の調整まで他の白木の下駄に比べて造作が丁寧である。839 は台長が 13.2 ㎝と小さく、法量から小児用とみられる。木取りは 839・840・842 が板目、836 ～ 838 が追柾目である。各緒穴の位置は、840・842 は台長が長いが、それに比べて前緒穴の位置は他のものより前寄りに穿たれ、前緒穴と後緒穴の長さも長くなる。後緒穴はいずれも後歯の前に穿たれる。左右後緒穴の長さは最も短い 838 が 5.6 ㎝、他は 6.0 ～ 6.4 ㎝でほとんど同長である。そのため台幅の狭い 840・842 は左右後緒穴が台端ぎりぎりに穿たれている。これらの緒穴は 836・838 が錐状の工具で円形に穿たれ、とくに 838 は丁寧である。その他の下駄の緒穴は四角形に近い円形で他の道具で穿たれている。842 は後歯がかなり使われたのか擦り減りが激しく、歯が残存しない。836・838 は台後部に線刻を有する。836 は「△」、838 は「○」が線刻される。841 は全体に傷みが激しく、詳細は不明である。

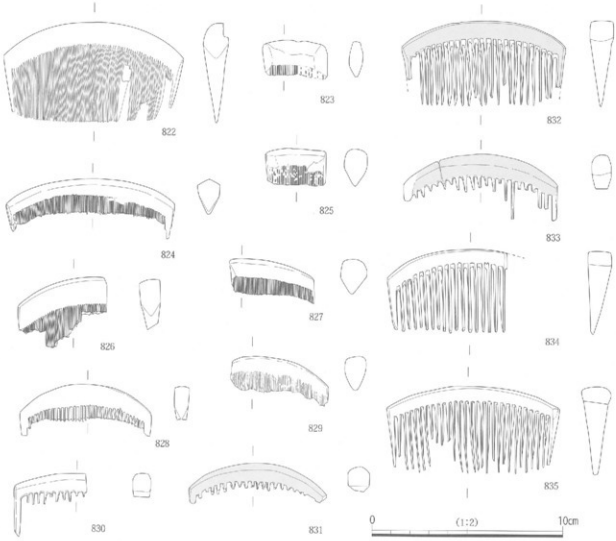


図 80　遺構 162 出土櫛

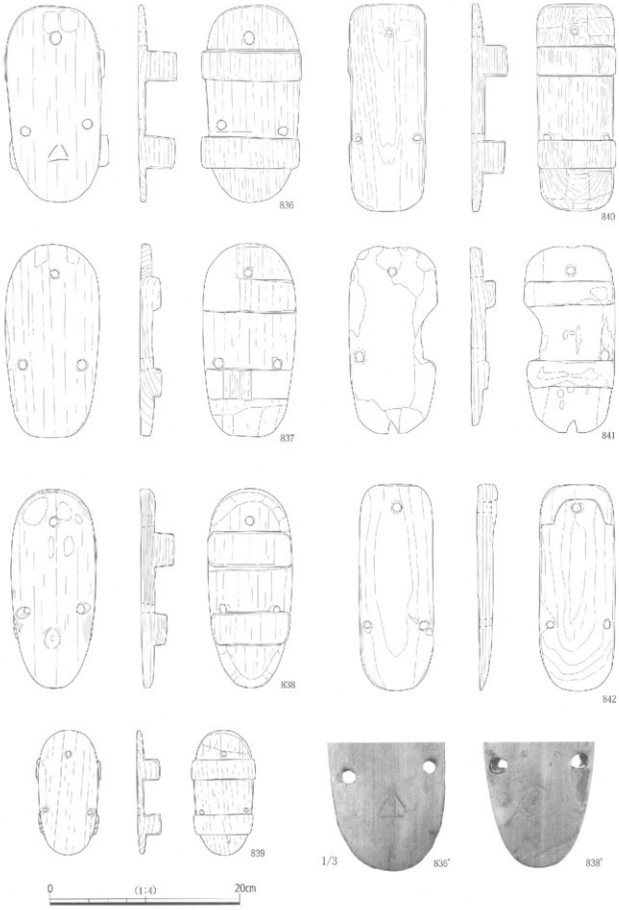


図81　遺構162・溝171出土下駄

（3）銭貨

3調査区からは遺構162を中心に95点の銭貨が出土している。その内訳は表9に記したとおりである。第8面検出の溝171から1点が出土した以外は、いずれも遺構162から出土したものであり、ここでは一括して報告を行う。なお、各銭貨の計測・軽量等に関しては基本的には隣接する調査地点である府警本部1期地区の調査報告時の方法を踏襲する（大文セ 2002）。

① 出土銭貨の種別

出土銭貨を銭種別に多いものから順にみると、洪武通寶が10点で最も多く、続いて無文銭が9点、開元通寶8点、皇宋通寶8点、元豊通寶6点、祥符通寶6点、祥符元寶5点、政和通寶3点、嘉祐通寶・熙寧元寶・至和元寶・大観通寶・天聖元寶が各2点である。これ以外は図84に記したように、嘉定通寶をはじめとして1点のみ出土した銭貨が14種ある。また、これに加えて銭名が判別できないものが16点出土している。

出土銭貨中では、開元通寶が唐銭で621年初鋳で最も古く、洪徳通寶が安南銭で1470年初鋳で最も新しい。大半は北宋銭もしくは北宋銭を模鋳したものであり、銭名が判読できない16点を除いた百分率でみると、北宋銭が61％、ついで明銭（洪武通寶）が13％、無文銭が11％、唐銭（開元通寶）が10％、南宋銭が4％、安南銭が1％となる。

銭貨には無文銭が目立つことに加えて、模鋳銭と考えられるものも多く含まれている。一覧表には府警1期調査の報告書で示した、直径に対する質量の比率（質量／直径）を指数として掲げている。この数値は小さければ小さいほど、直径に対して質量が小さいことを示しており、模鋳銭を見極めるための一つの目安となる。ここでは、個々の記述は行わないが、例えば849や879などではこの数値が極端に低く、単純にいえば非常に薄い銭貨ということになる。また、これらの銭貨はこの指数と呼応して銭文が不鮮明であったり、裏面では輪や郭が鋳出されず、平滑なままであることが看取される。

② さし銭

遺構162では、10点の銭貨が重なったさし銭の状態で出土している（写真10）。上方から出土状態を記していくと、開元通寶844（裏）・至道元寶881（裏）・開元通寶845（裏）・皇宋通寶868（表）・開元通寶846（裏）・皇宋通寶869（裏）・天聖元寶907（表）・祥符通寶894（表）・皇宋通寶870（表）・宣和通寶901（裏）の順である。

③ 府警1期調査地点（7B地区）出土銭貨との比較

すでに報告したように、今回の調査で出土した豊臣前期段階の銭貨は95点を数える。数量的には統計学的な検討に耐えうるものとはいえない。しかしながら、その多くが遺構162からまとまって出土したものであり、7B地区から出土した900点弱の豊臣前期の出土銭貨と共通する傾向を窺うことができる。図84のグラフには下段に7B地区で出土した豊臣前期の銭貨の出土数の順位を付した。7B地区では、洪武通寶・元豊通寶・無文銭・皇宋通寶・開元通寶・熙寧元寶の銭貨で全体の約6割を占める。今回の調査で出土した銭貨に関しても、これらの銭種は上位を占め全体の過半数を占めている。出土順位に関しても若干の前後はあるが、上位12位までの銭貨が漏れなく含まれ、酷似した傾向を示している。

写真10　さし銭（遺構162）

表9　豊臣前期出土銭貨一覧

遺物番号	新旧番号	調査区	遺構	種別	直径(mm)	孔径(mm)	厚さ(mm)	質量(g)	特徴等	原産/製加	製材番号	備考
843	210	3	建物162	開元通宝	23.88	6.41	1.22	3.15	完存	0.13	4398	西ヶ原
844	213	3	建物162	開元通宝	24.25	7.04	1.18	2.69	完存	0.11	4399	穿上部、さし跡明瞭で出土
845	215	3	建物162	開元通宝	24.33	6.95	1.16	2.92	完存	0.12	4399	穿上部、さし跡明瞭で出土
846	217	3	建物162	開元通宝	23.95	6.87	1.07	2.42	完存	0.10	4399	鉄銹、さし跡明瞭で出土
847	237	3	建物162	開元通宝	24.78	6.90	1.58	3.24	完存	0.13	4399	西ヶ原
848	250	3	建物162	開元通宝	24.12	6.83	1.18	3.17	完存	0.13	4399	
849	256	3	建物162	知正通宝	24.29	7.02	0.82	1.71	完存	0.07	4383	
850	230	3	建物162	嘉祐通宝	24.58	6.55	1.30	3.77	完存	0.13	4388	銹門、銹痕
851	193	3	建物162	宣和通宝	—	—	1.38	1.31	3/4欠		4385	銹し、銹痕
852	178	3	建物162	政和通宝	24.71	7.41	1.20	3.00	完存	0.12	4395	
853	200	3	建物162	政和通宝	24.07	7.32	1.13	3.00	完存	0.12	4397	銹塊
854	182	3	内装162	淳熙元宝	23.51	7.30	1.20	2.40	完存	0.11	4385	赤可
855	242	3	建物162	紹興元宝	23.87	6.11	1.28	3.15	完存	0.13	4391	銹塊
856	199	3	建物162	紹興元宝	23.68	6.15	0.86	2.33	完存	0.10	4397	
857	179	3	建物162	紹興通宝	22.05	6.23	0.90	1.93	完存	0.09	4385	穿管
858	202	3	建物162	元豊通宝	24.47	6.24	1.28	3.67	完存	0.15	4397	銹塊
859	225	3	建物162	元豊通宝	24.10	6.32	1.16	3.13	完存	0.13	4398	穿管
860	235	3	建物162	元豊通宝	23.86	6.85	1.20	3.22	完存	0.13	4399	
861	236	3	建物162	元豊通宝	24.33	7.09	1.10	2.93	完存	0.12	4380	
862	239	3	建物162	元豊通宝	24.54	6.51	0.89	3.19	完存	0.13	4396	
863	205	3	建物162	元祐通宝	24.95	6.78	1.17	2.93	完存	0.13	4397	銹塊
864	186	3	建物162	紹聖通宝	24.10	6.88	1.22	2.59	完存	0.11	4395	銹塊
865	187	3	建物162	聖宋通宝	24.56	6.83	1.19	3.27	完存	0.13	4395	銹塊
866	201	3	建物162	聖宋通宝	24.31	7.26	1.13	2.84	完存	0.12	4397	
867	204	3	建物162	元宋通宝	23.82	7.27	1.07	3.15	完存	0.13	4397	
868	216	3	建物162	聖宋通宝	23.73	6.41	1.02	2.41	完存	0.10	4399	銹塊、さし跡明瞭で出土
869	218	3	建物162	元祐通宝	24.49	6.88	1.19	3.39	完存	0.14	4399	さし跡明瞭で出土
870	221	3	建物162	聖宋通宝	24.25	7.44	1.25	3.34	完存	0.14	4399	さし跡明瞭で出土
871	229	3	建物162	元豊通宝	24.98	7.34	1.30	3.21	完存	0.13	4388	
872	260	3	溝171	開元通宝	24.62	5.29	1.25	2.84	完存	0.12	4384	銹塊
873	180	3	建物162	開元通宝	19.48	6.40	0.58	0.89	完存	0.05	4395	銹塊
874	181	3	建物162	開元通宝	22.27	6.34	1.20	1.72	完存	0.08	4395	銹塊
875	185	3	内装162	開元通宝	21.22	5.91	1.40	2.25	完存	0.11	4395	銹塊
876	203	3	建物162	開元通宝	22.47	6.12	1.29	2.83	完存	0.13	4397	
877	206	3	建物162	開元通宝	21.74	6.05	1.15	1.79	完存	0.08	4397	
878	226	3	建物162	開元通宝	24.35	6.02	1.42	3.02	完存	0.12	4387	
879	248	3	建物162	開元通宝	18.78	6.10	0.72	0.98	完存	0.05	4383	
880	312	3	建物162	開元通宝	18.73	7.09	0.81	0.72	完存	0.04	4389	
881	214	3	建物162	皇宋通宝	24.52	6.28	1.15	3.05	完存	0.12	4399	さし跡明瞭で出土
882	208	3	建物162	治平元宝	24.10	6.58	1.23	2.89	完存	0.12	4398	銹塊
883	234	3	建物162	熙寧元宝	24.21	6.11	1.14	1.68	1/2		4388	
884	191	3	建物162	開寧元宝	—	—	1.38	1.49	1/2		4395	銹し、銹痕
885	228	3	建物162	開元元宝	23.03	7.73	1.04	1.73	完存	0.08	4388	穿管
886	144	3	建物162	開元元宝	23.77	6.54	1.12	2.03	完存	0.12	4393	
887	247	3	建物162	開元元宝	23.06	6.11	1.13	2.22	完存	0.10	4394	
888	253	3	建物162	開元元宝	23.81	6.39	0.84	2.64	完存	0.11	4394	
889	257	3	建物162	開元元宝	24.29	6.25	1.12	2.79	完存	0.11	4383	
890	258	3	建物162	開元元宝	23.42	6.18	0.94	2.56	完存	0.11	4383	
891	183	3	建物162	開元通宝	—	—	1.01	2.06	完存		4395	銹塊、金箔
892	189	3	建物162	開元通宝	23.71	6.63	0.97	2.27	完存	0.10	4395	
893	196	3	建物162	開元通宝	22.70	6.06	1.09	2.01	完存	0.13	4395	
894	220	3	建物162	開元通宝	23.87	6.17	1.30	3.62	完存	0.15	4399	さし跡明瞭で出土
895	209	3	建物162	元和元宝	23.32	6.48	1.28	3.34	完存	0.14	4398	銹塊
896	231	3	建物162	開元元宝	23.67	6.31	1.24	3.05	完存	0.13	4388	穿管
897	224	3	建物162	開元通宝	—	6.79	1.06	2.16	完存		4398	銹形著しく通常の約1/3程度
898	227	3	建物162	開元通宝	24.57	6.46	1.05	2.53	完存	0.10	4387	
899	252	3	建物162	開元通宝	24.39	7.08	0.93	2.43	完存	0.10	4394	穿管
900	240	3	建物162	開元通宝	24.38	6.15	1.01	3.03	完存	0.12	4390	穿管
901	222	3	建物162	皇宋通宝	24.24	6.32	1.07	2.78	完存	0.11	4399	さし跡明瞭で出土
902	238	3	内装162	天禧元宝	24.51	6.84	1.12	2.95	完存	0.12	4389	
903	254	3	建物162	大観通宝	24.57	6.14	1.45	3.67	完存	0.15	4647	
904	211	3	建物162	元豊元宝	—	—	1.42	1.67	1/2		4399	
905	197	3	建物162	熙寧通宝	24.54	6.30	1.19	3.23	完存	0.13	4396	
906	176	3	建物162	元祐元宝	23.04	7.06	0.97	2.30	完存	0.10	4385	
907	219	3	建物162	紹聖元宝	23.80	6.09	1.12	3.23	完存	0.14	4399	さし跡明瞭で出土
908	311	3	建物162	無文	21.19	8.75	0.75	1.08	完存	0.05	4389	
909	310	3	建物162	無文	18.19	9.06	0.51	0.49	完存	0.03	4387	
910	317	3	建物162	無文	19.27	7.90	0.41	0.60	完存	0.03	4389	
911	313	3	建物162	無文			0.56	0.40	3/4	—	4390	
912	318	3	建物162	無文	17.59	8.56	0.47	0.50	完存	0.03	4385	
913	314	3	建物162	無文	16.43	9.66	0.53	0.42	完存	0.03	4389	
914	316	3	建物162	無文	16.94	10.06	0.48	0.27	3/4 欠	0.02	4390	
915	317	3	建物162	無文	17.12	10.29	0.51	0.37	完存	0.02	4391	
916	309	3	建物162	無文	16.61	10.09	0.64	0.36	完存	0.02	4385	
未報告	177	3	建物162	開元通宝	21.65	5.93	1.03	2.09	完存	0.10	4395	
未報告	184	3	建物162	○○元宝	23.89	6.05	1.42	4.35	完存	0.19	4395	
未報告	188	3	建物162	○○元宝			1.02	1.06	1/2		4395	
未報告	190	3	建物162	開元通宝	23.24	6.76	1.01	2.12	3/4 欠		4395	
未報告	197	3	建物162	○○元宝			0.75	0.61	1/4		4395	
未報告	194	3	建物162	○○元宝	—	—	0.83	0.81	1/2		4395	
未報告	195	3	建物162	○○通宝			1.06	1.25	1/2		4395	
未報告	198	3	建物162	○○○元	24.39	7.38	1.41	3.86	完存	0.16	4397	
未報告	207	3	建物162	○○元宝		—	0.88	0.65	1/4		4397	銹塊
未報告	212	3	建物162			—	1.51	0.59	1/2		4398	
未報告	233	3	建物162	○○元宝	23.26	6.51	1.02	2.42	完存	0.10	4385	
未報告	232	3	建物162	開元通宝	23.63	6.61	1.09	2.74	完存	0.12	4388	
未報告	233	3	建物162	○○通宝			1.07	1.06	1/4 欠		4388	
未報告	241	3	建物162	○○元宝	—	—	1.17	1.85	1/2		4390	銹塊
未報告	243	3	建物162	開元通宝			1.03	0.76	1/4		4391	
未報告	245	3	建物162	開元通宝	—	—	1.12	0.99	1/2		4392	
未報告	246	3	建物162	○○元○			1.23	1.32	1/2		4390	
未報告	249	3	建物162	○○元宝	23.89	7.51	0.89	2.62	完存	0.12	4393	
未報告	251	3	建物162	開元○○			0.98	1.14	1/2		4393	
未報告	255	3	建物162	○○通宝	21.08	6.11	0.92	1.77	完存	0.08	4383	
未報告	259	3	建物162		22.66	6.64	0.97	1.82	完存	0.08	4383	

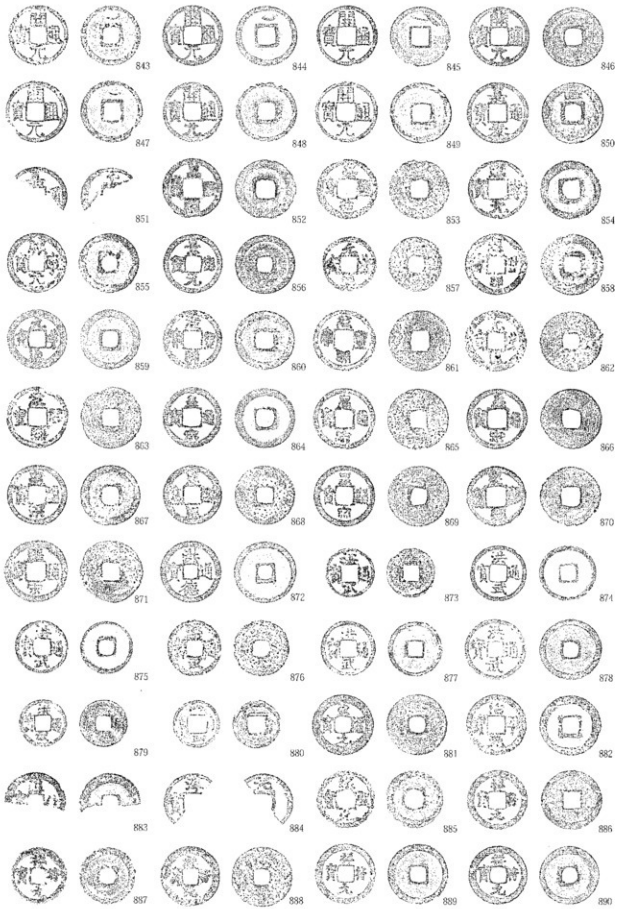


図 82　遺構 162 ほか出土銭貨（1）（2/3）

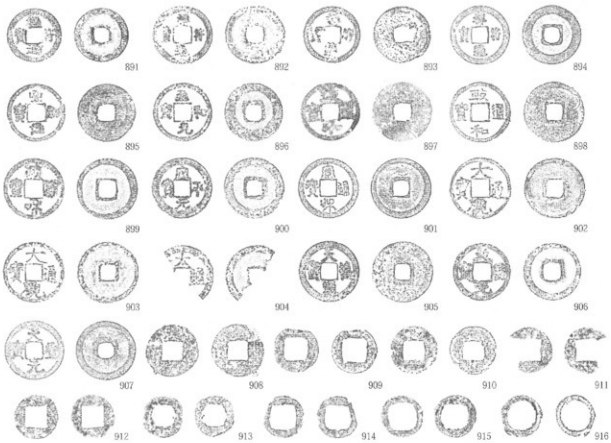


図83　遺構162ほか出土銭貨（２）（2/3）

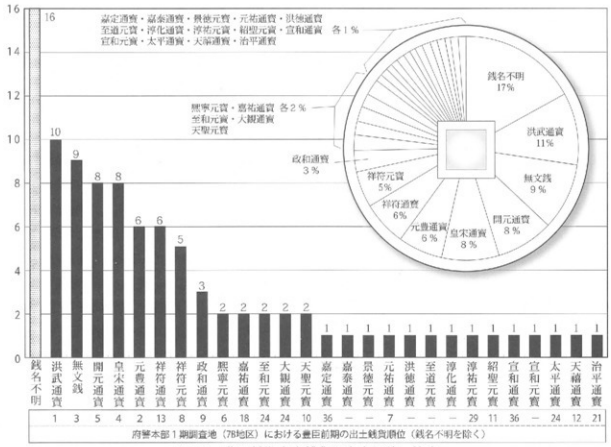


図84　豊臣前期出土銭貨の出土順位・比率

（4）金属製品

917・919 ～ 923 は刀装具である。917 は表目貫で、意匠は二匹狗図で材質は山金地である。彫法は容彫で陽根である。首輪は象嵌されていた可能性がある。919 ～ 921 は小柄である。919 は小縁の着かない棒小柄で、戸尻は一文字である。沈線によって３分割された区画に文様を線刻する。地紋は魚々子である。文様は一部で不鮮明となるが、右側の文様は北条氏の家紋である「三つ鱗」の可能性がある。920・921 はいずれも文様等を持たない棒小柄である。戸尻の形態は異なり、920 は一文字、921 は丸く納められている。922・923 は小柄から遊離した小刀である。922 は細片であり全容は不明である。923 は研ぎ減りが著しく、長さがかなり短くなっている。銘はみられない。918 は甲冑部品の小札である。上端を欠失するが、２列 14 個の穿孔がある四目の本小札である。924・925 は猪目透かしをもつ飾り金具で、いずれも銅地に塗金する。924 は魚々子の地紋の中に楓文が彫られている。裏面が三方から折り返されており、ベルト状のものの先端の飾り金具であると考えられる。925 は草文を透し彫りにした八双金具である。断面は弧状を呈し、２箇所に方形の釘穴がある。926 は花弁状に作り出された鉄製の座金である。927 は銅鈴である。本体は半円形の部品を縦方向に銀蠟付けする。中位には鏡による２条の沈線が巡る。928 は鉄製の小型の鋲、929 は鉄製の壺金である。930 は円環形の鉄製品である。武器や工具等の責め金具であろう。931 は真鍮製の小型の匙である。厚さは 0.3 ～ 0.5 ㎜で薄い。薬などの計量に用いられた匙であろうか。932 は鉄製の毛抜きである。933 ～ 936 は錠前である。933 は鉄製の鍵である。先端は円環状に作り出されるが、他方は欠損している。934・935 は錠前に差し込まれる部品で、いずれも鉄製である。両者ともに１枚の板バネをもつものであるが、935 は板バネにスリットが入れられている。936 は錠前の本体部分であるが、上部を欠損している。937 は真鍮製の鍔状の製品である。厚さは 0.5 ㎜で非常に薄い。中心に台形状を呈する茎孔状の刳り抜きがあり、周囲４箇所には不整な猪目透しがある。一方の面にのみ時雨鑢が施される。938 は鉄製の煙り止めである。942 ～ 952 は鉄釘である。鉄釘は総数 182 点が出土している。出土した鉄釘は長短の差はあるものの、多くは頭巻の角釘である。僅かではあるが、頭部を直角に折り曲げた折頭の角釘 946 も出土している。また、一部には未使用の釘 952 も含まれている。完存するものが少なく、厳密に法量を計測することができないが、942 ～ 944 は１寸、945・946 が１寸半、947 ～ 950 が２寸半、951 が３寸、952 が３寸半を意図して作られたものであると考えられる。939 ～ 941・953・954 は火箸もしくは火箸状の鉄製品である。941 は先端を欠損するが、上端の円環部に連結金具が残る。953 は銅製で、断面形が方形を呈し、先端が尖っている。木の柄を装着して使われた火箸であろうか。954 は上端を球状にし、下端を尖り気味にしたものである。火箸にしては短く、これも別の用途に用いられた製品である可能性を残す。939・940 は上端を円環状とし、その下方にねじりを加えた火箸である。両者はセットであった可能性もある。955 は鉄製の五徳である。956 は先端が扁平で尖り気味となる鉄製品である。下端が茎状を呈することから、何らかの工具であるとも考えられるが断言はできない。957 は残りが悪いが鉄鏃の可能性がある。959 は灰匙と考えられる。柄の部分は途中から細く作られており、元来はこの部分を茎として木製の柄が装着されていたものと考えられる。匙の部分はきわめて残りが悪いが、これは使用時の被熱に起因する可能性もある。960 は半円形を呈する覆輪である。

（5）骨製品

958 は骨製の耳掻きである。長さ 8.40 ㎝、幅 0.45 ㎝、厚さ 0.43 ㎝を測る。先端から 1.79 ㎝の位置に 1.9 ㎜の穿孔がある。ほぼ同形同大の耳掻きが府警本部１期地点の 7B 地区でも出土している。

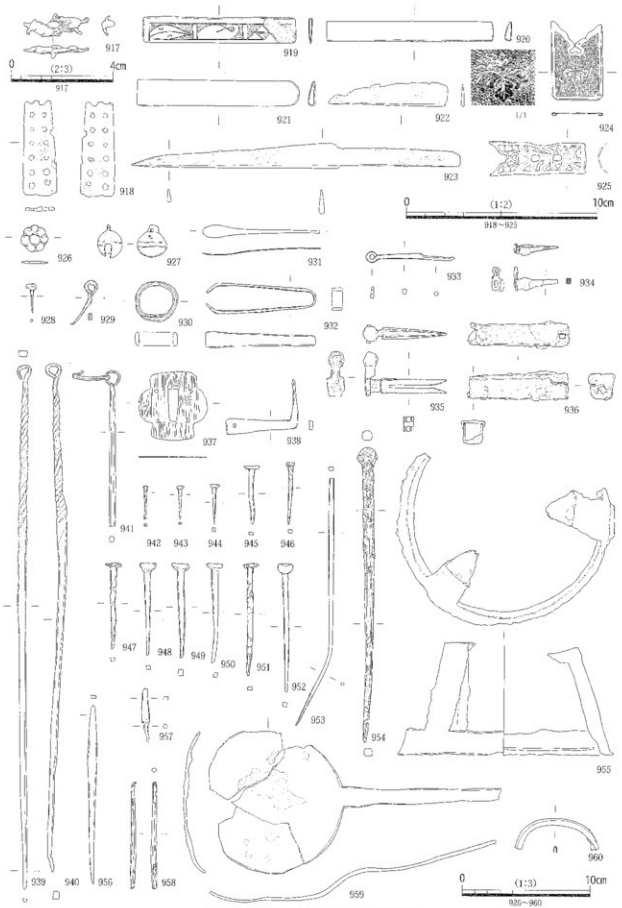


図85　３調査区出土金属・骨製品

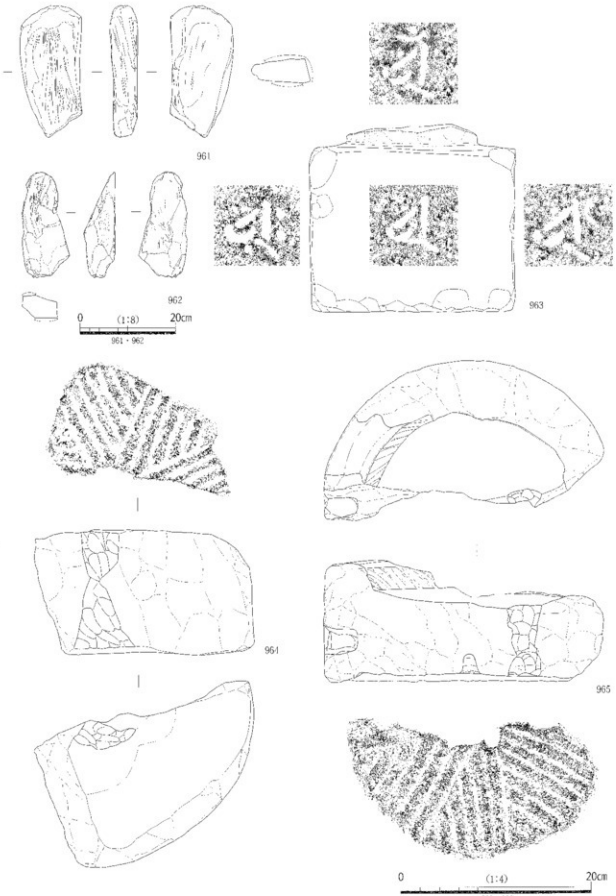


図 86　3調査区出土石製品

（６）石製品

961・962 は砥石である。

961 は長さ約 28 ㎝、幅約 13 ㎝、厚さ約 5 ㎝、秤量 3.36 ㎏を測る大型の砥石である。荒砥と考えられる。緑泥片岩製で周縁部分はさほど手を加えず、自然面をそのまま残す。表裏面と側面に使用痕が残る。側面の使用痕は平滑で緩やかに湾曲する。表面には幅約 1 ㎜の筋状の使用痕が平行して残る。962 は長さ約 22 ㎝、幅約 9 ㎝、厚さ約 6 ㎝、秤量 1.27 ㎏を測る。961 と比較すると小型であるが、同様に周縁部分はさほど手を加えず、自然面もしくは割り出した状態のままである。中砥から仕上げ砥である。緑泥片岩製か。表裏２面が使われており、一方は平滑であるが、他方は 961 同様に幅約 1 ㎜の筋状の使用痕が残る。

963 は花崗岩製の五輪塔である。地輪のみが残るが、上面に欠損した水輪の一部が残ることから、一石五輪塔であると考えられる。側面には各面のほぼ中央には「ア」・「アー」・「アン」・「アク」の梵字が順に刻まれている。周縁には細かいハツリ痕があり、水輪を打ち欠いて礎石などに転用されたものである可能性が高い。

964・965 は花崗岩製の石臼である。

964 は第７面で検出した礎石建物跡 192 の礎石に転用されていたものである。下臼であり、全体の約４分の１を残す。周囲は細かく打ち欠かれており、上下面は一部で旧状を留めるのみである。破断面には上下から臼状に穿たれた芯棒孔が確認できる。臼の目は８分画と考えられる。

965 は上臼である。全体の２分の１弱が残る。上面には上縁と窪みが作り出される。破断面には、下面中央付近に深さ約２㎝の窪みが彫られている。この窪みは中心から明らかに偏った位置にあり、芯棒受けではなく、ものくばりの先端部分であると考えられる。このほか、上下から臼状に彫りこんで貫通する供給口が確認できるほか、側面には挽き木を差し込む深さ約 3.5 ㎝のほぞ穴が彫られている。臼の目は残存部位では区画の大きさに差があり、展開して区画数を推定することができない。なお、この臼は破断面を含めて被火によって煤が付着している。

（７）その他の遺物

遺構 162 からはこれまでに報告してきた遺物以外に縄などが出土している。ここでは比較的残りのよい２点の縄を報告しておく。なお、下に掲げた図は縄をガラス板で押さえてスキャニングした画像を photoshop 上でコントラストを付けるなどして加工したものである。

966 は直径 2.7 ～ 3.0 ㎜の棕櫚縄である。２本縒りである。長さ約 30 ㎝を測り、一方の端部付近が括られた状態で出土した。

967 も２本縒りの棕櫚縄である。直径は 2.5 ～ 2.8 ㎜である。細かく断絶した縄が絡み合っているため、長さは不明である。966 と同様に一方の端部付近が括られた状態を呈している。

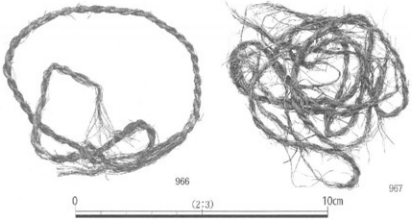


図 87　３調査区出土縄

3．1・2調査区の出土遺物

1・2調査区では堀83の掘削や後世の削平が著しく、井戸などの遺構がわずかに検出されたのみである。個々の遺構からの出土遺物はさほど多くはないので、ここでは一括して報告していくことにしたい。

（1）陶磁器

968は堀45最下層から出土した瀬戸丸皿である。高台見付に輪ドチの痕が残る。暗緑色の釉が厚く掛けられており、見込みには釉溜まりができている。969は井戸147から出土した瀬戸丸皿である。高台見付に輪ドチ痕が残る。

（2）木製品

① 漆器

970は井戸147から出土した漆器椀片である。塗色は外面が黒色、内面は赤色である。外面には文様が赤色で描かれる。971は井戸102から出土した漆器椀である。高台畳付の部分を欠損する。内外面ともに朱漆塗りで文様はない。高台見付部分は黒漆塗りである。972は井戸155から出土した。井戸155は堀83掘削時に人為的に埋め戻されたことはすでに報告した通りであるが、当該漆器椀はこの埋め戻し土中から出土したものである。高い高台をもつ漆器椀であり、口縁端部は欠損している。塗色は外面が黒色、内面は赤色である。外面には2箇所に松をモチーフにした文様が赤色で描かれている。

② その他の木製品

973・974は楔である。973が井戸155から、974が井戸147から出土した。いずれも扁平な角材の一端を斜めに削り落したものである。

975は井戸147から出土した曲物底板である。粗い柾目材を用いる。側面に釘穴等の痕跡はみられない。法量からみて柄杓である可能性もあるが、断言はできない。

976は堀45から出土した下駄である。最も一般的な連歯下駄でⅠ1a1類に分類される。木取りは板目であるが、芯材に近い部分を用いている。台部は長さ18.17㎝、幅8.04㎝を測る。平均的な下駄からすると、やや小振りである。台部の長さは、正確に6寸である。裏面は台部および歯の角を面取りする。上方からみて右側には歯の位置に対応して、上面から鉄釘が2本打ち込まれている。磨耗あるいは欠損した歯を別体で補った際のものと考えられる。これ以外に、歯の間に裏面から鉄釘が打ち込まれて、頭の部分は後方に折り曲げられている。鼻緒に関わるものである可能性もあるが、性格は不明である。緒穴は上面から焼鉄棒によって行われている。977は長さ約42㎝、幅約1.3㎝、厚さ0.9㎝を測る棒状木製品である。断面形は方形を呈するが、先端部は丸みを帯びる。柄杓の柄と考えられる。

978は井戸166の底面近くで出土した箱釣瓶である。井戸155と同様に堀83の掘削に伴って一気に埋め戻しが行われており、この釣瓶はこの時に埋没したものであると考えられる。土圧によって把手が折れているほか、側板も半解体状態で出土したが、全体としてはほぼ原形を留めている。平面形は正方形、側面形は逆台形を呈する。側板は対面する2枚の側縁に決り（しゃくり）をいれて組み合わせ、この部分を鉄釘で留めている。鉄釘は各辺ともに4～5箇所に打ち込まれているが、基本は4本で残る1本は後補と考えられる。底板は下面から13本の鉄釘で固定されている。把手は上方から釘で固定されている。また、把手の中央付近は縄掛けのために括れている。把手の括れ部および外面には使用による摩滅が顕著である。容量は約6.2ℓである。ほぼ同形同大の釣瓶が西ノ辻遺跡第9次調査の井戸6から出土している（東大阪市教委・東大阪市文協 1996）。

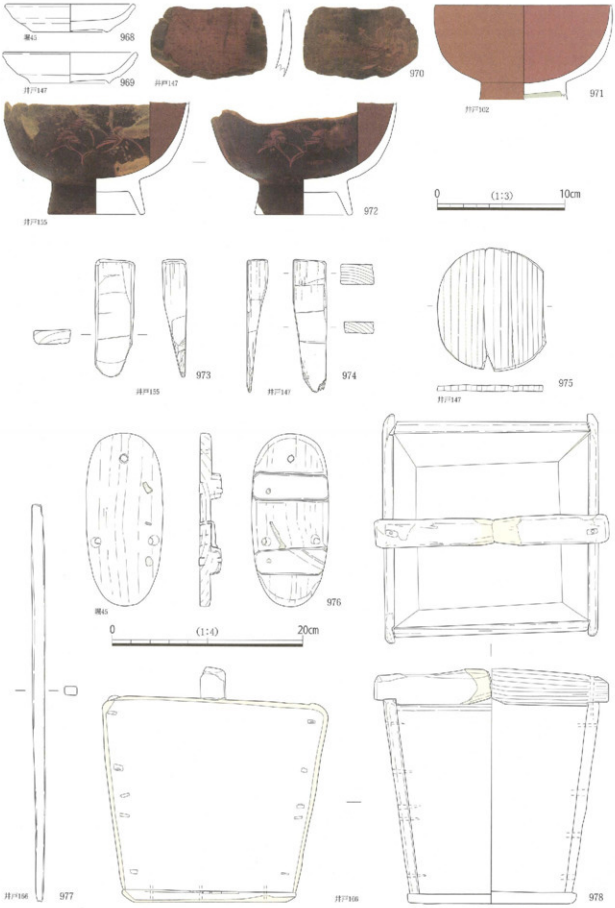


図 88　1・2 調査区 豊臣前期遺構 出土遺物

4．豊臣前期の瓦類

979 ～ 987 が井戸 102、988 が井戸 147、989 が井戸 166、990・991 が堀 45、その他が 3 調査区からの出土である。本書所収の三巴文軒丸瓦の実測図に共通することだが、基本的に丸瓦の頂点と瓦当の中心を結ぶ延長線上で測るが、巴の形を図に反映させるために、内区は巴頭の最も高い部分を一度は通る直径を実測した。ただし、軒丸瓦・軒平瓦ともに中心を欠いたものは、提示した拓本の線のところで計測した。軒瓦は別添の型式番号一覧表によっており、産地比定の記述は蛍光 X 線分析による胎土分析結果である。

979・984 は NM10D 型式で、左上の珠文外側に笵傷、右上の珠文周囲に木目が浮き出している。丸瓦部はコビキ A で、笵詰めした瓦当裏面に浅い溝を彫り、丸瓦部を挿し込んで内側をナデ付ける。大坂産（蛍光 X 線分析資料番号：軒丸 3・4）。

980 は NM07 型式で、丸瓦部は丸 07 型式だがコビキ A である。堀 83 出土の NM07K 型式はもっぱら金箔押瓦だが、980 には金箔は見られない。金箔押の NM07K 型式の丸瓦部は、丸 07 型式のコビキ B（瓦 312）であるのに比して古い様相である。

981 は NM02O 型式で、巴は丸みを帯び、巴頭から尾に向けて高さを減ずる立体的な巴文である。丸瓦部はコビキ A。大坂産。

982 は NM04C 型式で、巴は断面が低い台形で、離型剤として粗い離砂を用いる。丸瓦部はコビキ A。大坂産（蛍光 X 線分析資料番号：軒丸 2）。中央区和泉町瓦窯（市文協 2003）や神戸市有馬・湯山遺跡（神戸市教委 2000）から出土している。

983 は NM03I 型式で、巴頭が高く尾にいくほど高さを減ずる大柄な巴文である。丸瓦部はコビキ A。大坂産。985 は NH06G 型式で、側区が狭く、右端の唐草は子葉状を呈する。986・987 は NH04U 型式。中心飾は中葉がダイヤ形、側葉が Y 字形の三葉で、左右に巻きの強い唐草を三転させる。

このほか、井戸 102 からは NM10J 型式や鰹面戸瓦も検出された。

988 は NH15D 型式で、瓦当裏面から顎にかけて丸みをもつ。堀 83 出土の同型式は大半が金箔押瓦だが、本例は金箔をもたない。大坂産（蛍光 X 線分析資料番号：井戸軒平 2）。

989 は NH04V 型式で、堀 83 から出土した NH01I 型式の第 1 ～ 3 支葉の巻きと酷似する。NH01I 型式の唐草は四転だが、本例でも第 4 支葉の枝の一部が左端に残る。また中心飾三葉の左側葉の先端と思えるものも遺存する。本例は NH01I 型式の瓦 134 とは左右反対部位であるから断定はできないが、瓦笵の左端を切り詰めた可能性が高い。煤されているが、焼きが甘く、断面は外側白色、内側暗灰色を呈し、大坂産（蛍光 X 線分析資料番号：井戸軒平 2）である。

990 は NM17F 型式で、周縁部が高く、瓦当の地は薄い。

991 は NH16K 型式で、三葉の中心飾の左右に唐草が二転する。瓦当は芋継ぎである。

992 は圏線内に珠文を配した連珠文軒平瓦で平瓦凸面に瓦当部を貼り付けている。

993・994 は NM03M 型式で、内区は楕円形の頭と細い胴をもつ巴と小粒の珠文で文様構成されている。

995・996 は釘穴をもつ飾瓦で、幅 2.5 ㎝、高さ 1.3 ㎝ほどの帯状の圏線を残すのみで、中心の文様は不明である。笵を用いたものではなく、型紙を当ててヘラによる掻き取りとナデで成形したと考えられる。側面はスリヨセのため、内傾させて斜めにヘラ切りされている。このほか、3 調査区からは金箔押軒丸瓦 NM03B 型式（珠文数 16）が出土している。

997 は鬼瓦の陽刻された珠文である。

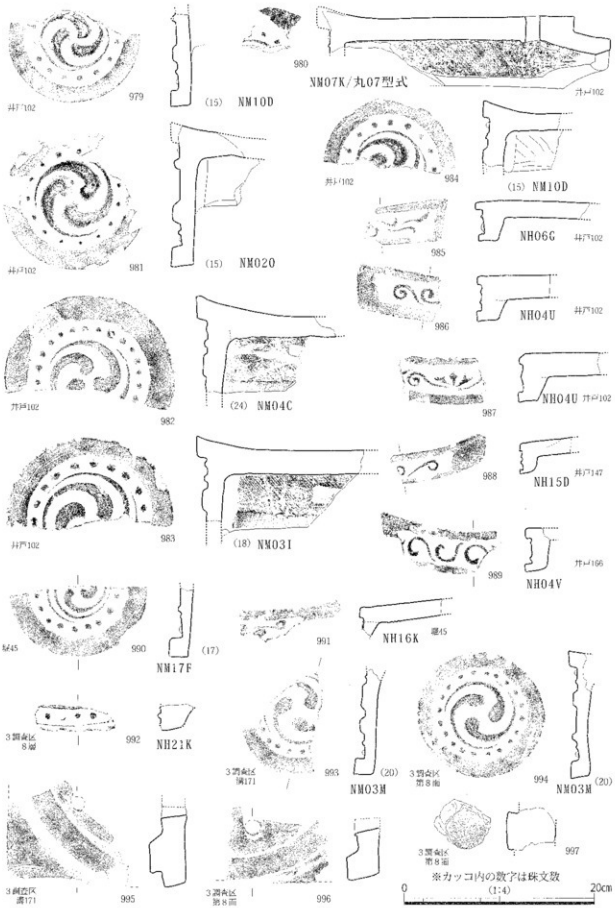


図89　豊臣前期遺構出土瓦